

R213.6-Sa25/v



1200500766432

R
213.6
SA25v



始



30.11.18

R
213.6
SA2511



增訂
武江乘表





武江年表卷九

文久元年 辛卯

革命の運命も亦七、美延二年を文久と改め、二月廿日、法衙行り

○圓光大師六百五十年の忌も亦弘覚大師と謚號を給けり去

年より遊び、小津波の寺院法會修り行り

○三月廿日、伏見寺をゆめ、○三月廿日、金師の文久

○二月廿二日、夜、小柄原所旅舎焼、同、喜多北品川宿旅舎焼亡也

○二月八日、大川筋、渡り、船を停られ、四橋の例、不音、前を垂り、永代を、新大を、

○二月廿八日、大川筋、渡り、船を停られ、四橋の例、不音、前を垂り、永代を、新大を、

○二月廿八日、大川筋、渡り、船を停られ、四橋の例、不音、前を垂り、永代を、新大を、

○二月廿八日、大川筋、渡り、船を停られ、四橋の例、不音、前を垂り、永代を、新大を、

增訂武江年表

緒言

一、古來、江戸地理の沿革より風俗の變遷及巷談異聞等を、年表體に編纂せしもの尠からず。中に就き齋藤月岑翁の武江年表は、其材料の豊富にして考證の正確なる點に於て、嶄然頭角を現はし、從來學者必携の書たるのみならず、爲政者及び俗間の資料として、頗る世に行はれたり。然れども月岑翁一家の見なれば、往々誤記脱漏あるを免れず。既に喜多村筠庭翁の武江年表補正^本、關根只誠翁の武江年表書入^本等あり。今以上の二書によりて補正すると共に、更に諸書を涉獵して増訂を加へたり。

一、武江年表正編^{自天正十八年至嘉永元年}八卷は、嘉永元年脱稿同三年の刊行にして、其續編^{自嘉永二年至明治六年}四卷は、明治十一年に稿成りしも、同年月岑翁

緒言

齋藤月岑翁略傳

月岑翁諱幸成幼名鏡三郎八世市左衛門幸孝の長子なり文政元年二月家督を繼ぎ名を市左衛門と改む。積果白雲堂松濤軒等の數號あり代々江戸神田雑子町に住し其里正たり幼より學を好み國學を上田八藏漢學を日尾荆山繪畫を谷口月窓に學びて出藍の譽あり父祖の遺志を繼ぎ著述する所頗る多し其刊行せしものは武江年表正續十二卷東都歲事記五卷聲曲類纂五卷等にして未刊の稿本は見聞私記六十卷恐惶記事五十卷積果漫筆三十卷睡餘操觚二十四卷扶桑探勝圖十卷百歲述略十卷武江震災紀略五卷江戸繪馬集三卷江戸開帳披索記一卷等なり何れも斯道有益の書として世に珍重せらる。明治十一年三月六日歿す享年七十有五法號栖心院釋月岑幸成居士淺草報恩寺池中法善寺に葬る辭世。

業平のうたをばかねて知りながらきのふけふとは思はざりけり
冥途にていざこととはむほとゝぎす又六どのゝみせはありやと

歿せしを以て、從來寫本にて傳はりしを、先年甫喜山氏我自刊我叢書に收載して刊行せしものなり。而して本書に明治初年の條を削除せしは、大政維新遷都のため、武江の書名に適合せざるを以てなり。

一、正續武江年表と増補訂正とを區別せんが爲に、訂正は記名の上、本文より一字下げとし、増補は〔〕を挿入して之を分てり。而して括弧中の筠補とあるは喜多村筠庭、只補は關根只誠、無補は予の増補する所なり。

一、卷首に月岑翁自筆武江年表稿本と月岑翁略傳とを掲げ、卷尾に件名索引を載せて、覽者の搜索に便ならしめたり。

大正元年十一月

朝倉無聲識

武江年表序

龍泉大阿之塞於豐城也、翁蔚紫氣騰誇斗牛之間、其威靈如此、而纒出於石函、則雌雄世離、嗚呼何顯晦無聊、可恠哉、雖然其至復相匹於延平之津、則其威可愈知矣、其靈可益見矣、由是觀之、嚮似可怪者、即是泉阿之威靈、取以傳于萬古而不磨滅、而顯晦之所關係、爲最大矣、豈翅泉阿、凡物之有匹、自有其數存焉、何暴憂其失得哉矣、友人齋藤月岑、劇職之暇、著書若干種、既行于世、今茲又著武江年表八卷、分爲雌雄、先取其雄四卷梓之、其爲書也、自慶元韓韃迄于今日、大之天災地妖、坊街之沿革、世態之遷渝、物之權輿、事之興廢、小之聞人之生率、神佛之啓竈、及風謠俗談、珍玩戲具、網羅不遺、擷撮尤勉、凡二百年來之事蹟、一往一來、隨求隨在、讀者憂其易終而更無繼、豈無繼哉、事務鞅掌、操觚不苟、退待來日耳、其至如泉阿復匹、金鱗捲沙、彩光射波、則其美可全見矣、其功可愈知矣、然則此編之雄鳴以待來日者、亦取以非雌雄相匹、傳于萬古而不折也與、其何憂之有、頃日剗闢竣工、發兌卜吉、仍舊貫乞

序、余亦不敢辭、便題蕪辭、以爲延平前導云、

嘉永二年屠維作噩良月上浣

荆山陣人源瑜

七十苦戰驅鯨鯨、紙扇籃與致太平、竊貽孫謀臣列國、日光高照海東城、

試神劍罷并收棺、二百年間不動兵、官家今日真無事、幾處高歌唱太平、

四月十七日作二首

右二絕句者、文化乙亥夏、日光宗廟御忌之辰、賜齋龜田翁之作、手親筆所以贈先考也、今取以弁於卷首云、

月岑誌

提要

一慶元より昌隆、昇平の化光世に被り、穀下の蕃昌日に倍せり、此故に遐陬僻境の人といへども、千里を遠しとせず、厥佳麗を看、厥廣大を仰ぐ、よつて嚮には父祖の名所圖會あつて縦觀の榮とし、次に余が歳事記を鐫して亦導引とす、再此輯をなし、村漢野嬢の爲に、東武繁華の梗槩を知らしむるの一助とす、

一此編に載る所は、中人以下の耳目に觸るところにして、地理の沿革或は坊間の風俗、事物の權輿に至るまで、獲るに隨て誌す、素より公邊の御事は伺ひ知るべきにあらず、たま／＼傳聞せる事も、憚多ければここに漏せり、

一慶元以來新地を撰ばれ、諸侯列臣の藩邸地を阻て所々に構へ、寺社民屋も地を賜りて新に創し、或は爵攸の變に罹りて、處を異にするの類擧て數ふべからず、故に見聞にしたがひて一二を記し、瑣細の事はここに漏せり、

一忠臣孝士貞婦烈女の類、恩賞を賜りしもの枚擧に遑あらず、姑く斯編に脱せり、

一詩士、墨客、伎藝の師、其他有名の輩歿卒の年月、他の書に見えたる所をもて一二を誌す、貴人公子は憚りて多くは漏しぬ、近世永訣の儔もまた遺漏多かるべし、凡此編に漏たるは、池永約が諸家人物志、青柳東里が同輩編、老樗軒が墓所一覽、古筆氏の思ひよる日等の書を見て知る

一東武の人著す所の新編の書は、牛に汗し棟に充べくして、輒く記し盡すべきにあらず、されば爰には江戸の事跡名所等にあづかるもの一二を撰て、新編上木の年序をしるす、

一時世の風俗を知らんとならば、慶長見聞集、落穂集、事跡合考よりして、昔々物語、塵塚談、譚海、一話一言、我衣、賤の緒環、後は昔物語、嬉遊笑覽、蜘蛛の糸卷、骨董集等の冊子あり、爰には聊其要を摘て記すのみ、

一文化中編輯せる大江戸春秋と題せる寫本一卷あり、作者不詳大凡斯編の體裁に肖たり、然れども載る所委しからずして、完備の物とは見えぬ、余が撰も又漏漏にして、五十歩百歩の譏りを免れず、亦彼書には童謡俗謳の類迄載たり、此書も俗事に涉るをもて要とすれど、巻帙浩繁ならん事を厭ひて、こゝに省けり、

一余固より淺聞眇見にして、恐らくは杜撰多かるべし、然れども數書を參考し、識者の鑒定を経て、精微を盡んとせば、幾許の年を歴るとも、全備の期あるべからざる事を願て、書房の求るに任せ、草稿の儘庸書に委、剗削に託して梨棗に壽す、庶幾は大方の君子、遺脱を補ひ誤謬を正し給らむ事を、

嘉永新元戊申霜月吉旦

東都神田散人

齋藤月岑幸成識

附言

東都市井の輩、事業の繁多なる、旬日の間の事といへども忘失事渺からず、故に東都の人といへども、この書に據りて往事を思ひ出さば、世務の一端ともなる事あらんか、其體裁裨官にわたるといへども、坊間に裨益あるの冊子なるべし、

此編全部八冊なり、天正十八年に始り嘉永元年に至る、淨書落成すといへども、未剗削の功終らず、發兌を急ぐが故、今年初帙四冊を公布す、後帙四冊續て發行すべし、

己酉孟冬

書肆 青藜閣誌

附言

前輯八卷を梓行せしより、嘉永以降の風俗世態も見聞に隨ひ、厥綱要を録しつれど、世營倥偬の際、綜緝淨書の暇なくして、年所を経たり、しかるに此ごろ適閑を得るが故に、かの草稿を採撫し、同好の輩に搜訪して、毎條其實を訂し記しつれたり、されど載る所街談衢話に據るところの俗事のみ、將た見聞博からざれば、搜討意の如くならず、又明治以來の事どもは、諸般の御政度土地の沿革、神宇梵刹閭閻の移轉、其他の事件多端にして、草稿回回となり、輒く前後を分ちて編纂の成る所にあらずれば、まづ其一端を擧て梓に行へり、然るに近年新聞志と目するもの數種を刊行して、世に弘るの輩ありて、世上の雜事異聞奇談風俗の淑慝をさへあらはして、連綿せる事世の知る所なれば、彼版本を得て厥梗概を知るに足るべし、

一武家屋敷の沿革又市井の號は、明治以來變化するもの多く、新開の町家も渺からず、こゝにしるす所は、明治已前は其頃の町名にして、今と異なるもの有と知るべし、

一諸州他縣神佛の啓籠は今なし、丁丑より以前開帳

ある頃は、大抵六十日を期として許可あれども、末に至り十日或は十五日の延期あり、一々誌んは煩はしければ、最初許可の日數而已舉たり、
一類曆略註關部河内守一徳本に、子の刻は明日に跨りて四刻迄を今夜とし、五刻より後八刻迄を明日の日とすとあり、彼是混雜する故、新曆御頒行以前の俗例に従ひ、幾日夜子の上刻下刻としるせり、
一近年世上の風俗の變化等の事に付て、騷人韻士の文藻も數多これあるべけれど、俗間に行ふべき冊子なればこゝに誌さず、

明治年著雍攝提格一月良辰

東京市井散人七十五翁

齋藤幸成誌

增訂武江年表卷之一

○天正十八年 庚寅

今年八月一日、台駕はじめて江戸の御城へ入らせ給へり、そのころは御城の邊、草沼汐入等の地にして田畑も多からず、農家寺院さへ所々に散在せしを、慶長に至り始めて山を裂地をならし、川を埋め溝を掘、士民の所居を定め給ひしより、萬世不易の大都會とはなれり、しかりもよりのかた、萬民干戈の危きを忘れ、鼓腹して嬉みを極め、泰平の御恩澤に浴し奉るのありがたき事、申も中々おろかなるべし、中古より八月一して佳節とす、わけて今年御打入八月一日なるゆゑ、毎年八朔の御祝儀五度の佳節と等しく、御嘉例となりしとぞ。○今年七月北條氏政一家滅亡、小田原落城あり○事跡合考に、御入國の後、不日に行徳の鹽を江戸へ運送の爲、彼地より船の通路を掘しめ給ふ、是今の、高橋の通なりといへり、天文より元龜のころは、行徳より小田原へ鹽の年貢を納しよし、彼地の口碑に殘れり。○八月平河

增訂武江年表卷之一 (天正十八)

天満宮、御城内梅林坂より御城の北平河口へ移さる、
○夏伊勢の與市といへる者、錢瓶橋の邊此時は未此に錢湯風呂一ツを立る、風呂錢永樂一錢なり、皆人珍らしきとして入る、慶長見聞集に出○圓満山廣徳寺今は下谷小田原に在しが、今年北條家滅亡の後江戸へ來り、今の昌平橋の沼地を開草庵を營む、此時の住持を希叟和尚といふ、後神○天正の頃關東に亂波風間といへる強盜あり、黨を結び陣中へも忍び入て盜をなす、諸人恐れたるが、今年より何れへか逃退て其噂絶たり、北條五代記に出
篤庭云、此條いたく誤れり、亂波とはそれらが總名にて、其中に風魔といへるが有しなり、これは軍中にめしつかひし間者、しのびのわざをなす者どもなり、されば北條五代記に、是等のものどもを國持大名衆扶持し玉ひぬ、氏直も亂波二百人扶持す、一の悪者あり、かれが名を風魔といふ、同類の中四頭あり、山海の兩賊強竊の二盜是なり、これを使ひて敵國を侵し、謀計調略するが爲めなり、天正の頃の

み有しものにはあらず、但かの風魔は氏直の時の者なれば、天正十八寅年小田原滅亡してうせたるなり、委しくは本書を見るべし、

○天正十九年 辛卯 正月閏

正月關八州の諸家、歳首の御賀として始て登城ありしと云○十一月關東諸社に、御寄附領の御朱印を給はる○赤坂一ツ木町屋出来る、○十二月關八州通用のために、大判小判を造しめ給ふ、此時代銀一枚凡金壹兩にあたるといふ○小田原の靈鳳山種徳寺、今年柁町へ移り、後赤坂一ツ木へ移る○【篤補】此年奥州九戸亂に依て御進發、

○文祿元年 壬辰 十二月八日改元

御城の西北の地、大御番組衆宅地を給はる、六組に分ちて、一番より六番までの名目あり、是より番町といふ○田島山誓願寺、天正十八年小田原より當國へ呼下し給ひ、今年本銀町の地に寺院を給ふ、慶長元年又須田町へ移され、明寺院多く江戸へ移させ給へり、また彼地の南農も次第に江戸へうつれり、吉原傾城町の開發人庄司甚右衛門は、北條家に仕へし者の子なり、父果て後小川原落去あり、其頃年十五歳にてありしが、家來の介抱にて江戸へ下り、所縁のものにちなみて居住しけるが、成長の後傾城町

開基の事はかり、官許を得て賑をひらけり、尙元和の件しるせり、又小田原の豪家増田太郎右衛門友嘉、明人に五體香といふ眼藥の方を授りしが、北條家亡びて後江戸に來り、本町四丁目に住して、彼處を售ふに、大に賑ありて行はる、今は他人の家に製せり、

益田が事、事跡合考杯によりて見れば、もと小田原にて豪家とも思はれず、

【篤補】此年太閤秀吉公朝鮮征代初る、

○文祿二年 癸巳 九月閏

天正十八年の後、品川へ寺地を給はりし日照山法禪寺、開山英譽、今年道三河岸へ移る、天和三年深川今の地へ移る○惺窩先生心阿上人、始て江戸へ下る、旅寓の室中に扁台命を得て貞觀政要を讀れし閑暇、四景我有解の文を作りて、東關の遊遊とすと、四景とは土峯、武野、隅田、筑波を云、其文は先生文集に見えたり、長ければ略す、惺窩和歌集、東に下る時、

たかなさけかくやは家をおくりゆかむ都の月の東路のそら

○天正の頃常陸國江戸崎といふ所に住る、諸岡一羽と云兵法の名人あり、土子泥介、岩間小態、根岸菟角と云て、名を得たる弟子三人あり、諸岡重病の時、菟

角のみ病人を見捨て逐電し、江戸へ來て微塵流と名付、一派を起して弟子多く隨へ、上見ぬ驚の勢ひをなす、一羽は三年過て病死したり、兩人の弟子菟角が事を聞て彌憤り、兩人の内江戸へ下りて菟角を討べしと議し、鬪をとりて小態に當りしかば、小態は江戸へ趣く、泥介は國に止り、鹿島の社に菟角調伏を祈る、

小態江戸へ下りて、文祿二年九月十五日、日本橋にて菟角に出會たり、官府より此事を聞き、刀脇差を預り、木刀の仕合をゆるし給ひしかば、兩人木刀を持て立合ける、菟角打負て、其場より逐電して行方を知らずとぞ、以上北條五代記の文を略す、曳尾庵が編の我衣に、千太が谷八幡宮の額に菟角と名書したる額ありしと記せり、今は見え、【正誤】小態菟角の出會、北條五代記畫上の書人になづみ、日本橋の上とす、案るに此時は未日本橋の懸らざる前なり、

菟庭云、小態といふ者菟角といへる者と戦ひし處、日本橋にあらず、御城の大手大橋のもと、いへれば今の常磐橋にや、此時に奉行衆橋の兩方に弓鎗を以て警固あり、小態は橋の西より出、菟角は東より出むから、豊後守といふ人を見て、菟角御城へ

向ひて鬪ふ、如何で勝を得んといへりとぞ、果して菟角は橋桁に押付られ、橋げた腰より下にありければ、川の中へ彼者さかさまに落たりと云、此事北條五代記作者の三浦氏、親しく見聞せし處なるよし、其書にいへり、是日本橋ならぬこと知べし、

○文祿三年 甲午

九月千住大橋を始て掛くる、此地の鎮守同所熊野權現別當圓藏院の記録に、伊奈備前守殿これを奉行す、中流急流にして橋柱支ゆる事あたはず、橋柱倒れて船を壓し、船中の人水に漂ふ、伊奈備前守權現に祈りて成就すといふ○今年米穀豐饒なり○小田原不老山壽松院、今年當地に移させられ、今の鍛冶橋の内に寺院を給はる、後年神田柳原の邊へ移り、又淺草へ移る、

○文祿四年 乙未

武藏小判成、光次と墨書す、武藏と駿河兩所にて造らせらる○小田原當知山本誓寺、江戸に移し給ひ、日比谷獵師町の邊に地を給はる、後馬喰町の邊へ移り、天和二年の後今の地へ移る○慶長見聞集云、舟町と四日市のあひにちひさき橋唯一ツあり、是は往復の橋なり、文祿四年夏のころ、

此橋のものにて錢瓶を掘出す、永樂錢うち交りてありしを官府へさげたり、夫より此橋を錢瓶橋といふとあり、しかれば船町并四日市町は、今の錢がめ橋のあたりに在し物なるべし、

○慶長元年 丙申 七月閏 十二月二十七日改元

一步并小判金始て通用、慶長金といふ

鶴庭云、或説に今年一分小判始て出来、これを慶長金といふとあり、然らば一步并小判にはあらず、小判とは一分金の小なればなり、

○六月十二日、京師畿内關東諸國大震、又氷毛降、毛長

○閏七月朝鮮人來聘、○同十二日大地震、月を逾て

止す、○駿河臺を開かる、○多田宗玄といふ人靈告を蒙りて、京都東山の邊より藥師像を持下り本庄に安ず、今の多田の藥師なり、○糺町常仙寺開基、寅藥師を安ず、

○慶長二年 丁酉

神田に光明山感應寺開創、開山日感上人なり、昨午地所拜領、今年寺を建る、今谷中に在、神田感

應寺といふ

○慶長三年 戊戌

松平西福寺、駿州より江戸駿河臺の下へ移る、後寛永十

至り今の淺草へ移つる、○八月三縁山増上寺、日比谷より今の地へうつる、其ころは今のヤヨス川の南、日比谷町の方にありしとぞ、海中に枝付の竹を並べ立て、魚の入るを待て取る、これをひやといふ、正字なし、今も海苔をとるに此ひやを用ふ、ひやかせきなすもの住居の地なれば、ひやかといへり、後芝口にうつされても、ひやかといふに有り、○猿江泉養寺開創、○十月金鳳山高林寺、駿河臺に於て開創あり、後年駒込土物店へ移る、

○慶長四年 己亥 三月閏

四月金剛山龍寶寺天神田臺に草創、寛永十二年淺草新堀にいたりて、新たに開創の寺院數ふるに違あらず、よりて大なるを選び、十にして一二を諱し、その餘は、こゝにはぶけり、

○慶長五年 庚子

小判に光次と墨書せしを極印に改らる、光次は徳樂の名乗なり、○六郷橋再掛る、長百廿、○始て京都に諸司代を置る、

鶴庭云、濃州關ヶ原御勝利の後、始て關東より京都所司代を差置る、奥平美作守昌これを勤む、

○池上本門寺大塔建立、翌年に、たり、全く成就す、

○慶長六年 辛丑 十一月閏

五月大小分判、挺銀の形制を定め給ふ、駿河江戸判大黒銀も此時より肇まる、○貞觀政要板成、孔子家語、武經七書板行せしめ給ふ、御治世以來の刻本、いに始れるなるべし、

無聲云、家康僧三要に命じて、慶長四年孔子家語を開版せしむ、これ其權輿なり、同年又六韜及三略の開版あり、貞觀政要は其翌年に成り、七書は慶長十一年に刊行す、皆活字版にして世に之を駿河版と稱す、

○安南始て奉書、寛永九年まで通路不絶、東埔塞始て奉書、寛永四年の後絶たるにや、呂宋始て奉書、慶長十八年迄、今年より寛永十一年まで三十三年の間、御朱印船として我國々商人、亞馬港、ノヒスハン、暹羅、安南、呂宋等の國々に、年毎に行ては商賣し、此外にも私に行て商ふ事年々不絶となり、以上草履、雜談所載、○十月十六日、大地震、房總の山を崩し海を埋丘と成、

又海上俄に潮引事、三十餘町干涸と成る、十七日潮大山の如く卷上流死影し、○十一月二日巳の刻、駿河町幸之丞家より火を出す、此大燒亡に江戸町一字も残らず、人多く死す、畢竟町中草葺放火事絶ず、此序に皆板葺になすべきよし、官府より命ぜられければ、町中ことごとく板葺に作る所に、瀧山彌次兵衛といふ者、諸人に秀で、家を作らんと工み、海道表棟より半分瓦にて葺、後半分をば杉にて葺たり、皆人沙汰しけるは、本町二丁目の瀧山彌次兵衛は、家を半分瓦にて葺たり、さても珍らしや奇特哉と、人ほうびして異名を半瓦彌次兵衛と云、是江戸瓦葺の始なり、以上慶長見聞集に出

○慶長七年 壬辰

太泥始て奉書、慶長十一年迄、草履雜談に出、○小石川無量山壽經寺、御菩提寺と成、傳通院と號し、殿堂僧坊等御建立あり、紫衣を給ふ、

○慶長八年 癸卯

今年江戸町割を命じ給ふ、慶長見聞集に、日本六十餘

州の人歩をよせ、神田の山を崩され、今駿河臺の南の入海四方三十餘町埋させ、在家を立させ給ふと云、是は大名小路の邊、八代洲河岸、道三河岸の邊、龜町の邊等に、町屋連りてありしとぞ、凡江城の邊、むかしは千代田、寶田、齊田、芝崎等の村なり、南傳馬町、小傳馬町は千代田村の内なり、大傳馬町は寶田村のうちなりしとぞ、千代田、寶田ともに今の龍の口大手の邊ならんといへり、福田村は本石町、銀町の邊也、櫻田村は今の櫻田御門の邊なりしが、御城御遺營の時、今の地へ移させられしよしなり、龜町は最古く、御打入の時開給ひしよし神書に、へり、赤坂一ツ木の町屋になりしは、天正九年の事なるよし或古記に見えたり、三河町は江戸御打入の朝、三河國より御小人を召れ、此所に旅宿の地を開かれ、こゝに居らしめ給ふ、尤時節を定め、かはるゝ本國より此所に交代せしが、後に町屋に改りしとぞ、古名を其儘に三河町と號すると云々、猿樂町といふは觀世大夫の屋敷ありしを、後外へ移されしよし神書にあり、

○平川は村名にして、平川といへる流あり、今の江戸川龍慶橋筋より、水道橋の上の方より、飯田町下魚板橋の所へわたり、一ツ橋の少し東南の流、白銀町、油町、濱町の方へ趣く、今の常盤橋も其川筋なりしといふ、平川の流を隔て、北の方、神田郷、芝崎、道場も、こゝに在し、今の淺草慶印寺、東漸寺など、芝崎にありしと云、其頃は今の御城内井御外廓の邊、寺社多かりしなり、平川、天満宮、山王社、築土明神(昔は田安明神と云)、靈山稻荷(今麻布法恩寺、今本所吉祥庵、今駒込吉祥寺)東福寺藥師(今麻布)東光院藥師(下谷)入法寺(今押上)源照寺(今赤坂)淨王寺(今一ツ木)金地院(今芝)青松寺(同)西遊寺(今四谷)正藏院(今牛込)祝言寺(今淺草)養玉院(今下谷)寶願寺(今淺草)法藏寺(今深川)其外にもありし、

○御城地廣がりしは、各代地を給はりて御城外へうつり、其後再び替地を給はりて、當時の所へうつりしなり、委しき事は往々古記に見えたり、○落種集云、町かた普請の儀は、只今の日本橋筋より道三河岸通り、堅堀をほられ候が始りて、夫より段々堅堀横堀ともに諸道へ、一里塚を築しめらる、三十六丁壹里の積りなり、道の左右へ松を栽しめられ、夏は木蔭に依り、冬は風を除きて旅人の神益となし給へり、○永樂錢の代りに、銚四文を當て用ふ、青木氏の説に、びた錢五十貫文金壹貫も賤ければ、武家のうれひもなかりしよしなり、○五臺山源空寺、湯島に開創、開山圓誓、○【篤補】此年朝鮮より使來りて和平を乞ふ、故に生捕の者を歸さしむ、

○慶長十年 乙巳

増上寺門前の老翁、吉夢を感じて和尚に告ぐ、翌日伽藍營構の台命を下し給ふ、夫より本堂回廊等御建立ありて大伽藍となる、方丈も此時御造營有しと云、事合考云、此本堂の惣柱横の木を以て造る、○大城御普請に付、柳町の馬場御用地になり、この邊の遊女屋ども元誓願寺前へうつる、○此時代追々に道橋多くなり、武家藩邸移轉多し、○南蠻よりタバコ蕃樹を渡す、長崎にて櫻馬場へはじめてタバコを栽る、一説天正中蠻人持渡るともいふ、

○慶長十一年 丙午

【無補】この春連歌師玄仍、神田柳原の流の邊にて、

出來て、其揚土をほり端に山の如く積上在之候を、諸國より集り來り候町人共願出候へば、町屋を割下され候に付、勝手次第に右の揚土を引取、地形を築立屋敷取を仕り、裏通りに先取垣などいたし置、追々家作をつくり引移り、始の頃は町屋願ひの者も多く無之所に、伊勢の國の者共數多來り、屋敷惣仕候由、其ごとく町屋出來候、已後表に懸り候暖簾、一町の内に半分はいせやと申書付見え候となり云々、事跡合考に、道三河岸、御入國の後村木町軒を並べてあり、後年武家屋敷となりて、東の外へ出されしもの今の材木町なりとあり、古町の事其餘見聞に及し事もあれど、繁きをいとひてこゝにりやくしはべる、

○この時日本橋をはじめて掛らる、見聞集云、大川なれば、川中へ兩方より石垣を築出し掛け給ふ、敷板の上三十七間四尺五寸、廣さ四間貳尺五寸なり、又云、この橋御普請の時分、日本國の人あつまりて掛たる橋なり、此橋の名を人間はかつて以て名付ず、天よりや降けん地よりや出けん、諸人一同に日本橋とよびぬる事、希代不思議と沙汰せりと云々、

○夏の頃台命ありて、九月芝愛宕權現社勸請なさしめらる、此時は草の假屋にてあり、○四月誓願寺鐘樓御建立此の時神田山幡隨意院、神田臺に草創、開山白田にあり、

○慶長九年 甲辰 八月間

二月日本橋をもと、定められ、東海道及越後陸奥等

「青柳の梢よりわく流れ哉」と吟じたり、○大城を築き給ふ、三月より始り九月に成就あり、正、肥後國より大石を獻れり、芝浦よりひかる、時、自ら異様、○暹羅へ御書并物どを出立して音頭を取、曳しめられしといふ、○暹羅へ御書并物ども賜る、彼國の使も常に來、船は其後年々渡來れり、占城并田彈へ御書被下、以上草履雜談にあり、草履云、田彈といふ國、○六十六州竹實を結で枯る、○本郷昌清寺三河稻荷、駿河臺より移し給ふ、○十二月八日、永樂錢御停止、銚ばかり用ふべき旨、日本橋へ高札を立らる、或十三年と

○慶長十二年 丁未 四月間

二月十三日より十六日まで、御城の邊にて觀世金春勸進能興行あり、
篤庭云、江戸御城御本丸と西御丸との間に興行す、詳く慶長見聞集に出づ、

○同二十日同所にて出雲の神子お國、勸進哥舞妓興行あり、見聞集に、おくに始出雲國小村三右衛門といふ人の煙草諸州へ弘まる、上下これを翫ぶ、始は葉を刺て紙に貼し、ふりを吸ひ、其後はきせるを用ひて紙に貼せず、きせるの製は眞鍮を用ひ、或は竹のラリを用ふ、又丈長きものを下部にもたせて、遊行せるも見○近衛關白信尹公御下向あり、此時梅若寺を木母寺と改給ひ額を給ふ、

こたへせば我いて、こし都島とりあつめても事とはましな来て見るにむさしの國の江戸からは北とひがしの角田川なり

○閏四月初朝鮮信使初來聘、正使呂祐吉、副使慶應、從事丁好寛○八月八日、客星現す、

○慶長十三年 戊申

【無補】是年新開の町割を命ぜられ、京坂及堺の商賈を呼下して屋敷を賜ふ、慶長日記には十六年六月二日の事とせり○林道春先生御儒者に命ぜらる、此時は先生駿州に在り【無補】永樂錢通用御停止にて薄錢を通用す、

○慶長十四年 己酉

三月四日、月の容方にして現る、是年代略に、方形月出満没如く春○四月

島津侯琉球を征して中山王尙寧を將ひ來らる、○八月阿蘭陀始て入貢奉書、唐船始て來○煙草御制禁、一説元和元年ともいふ○秋品川海道筋、西山際より海端まで、三十分間の道幅を廣げられ、往還自由をなさしめらる、

○慶長十五年 庚戌 二月間

芝愛宕權現、本社拜殿閣門石階等御建立國福寺もこの時の丙辰紀行に、始はわづかの祠なりしを、やうやく造りひろげて、今は大屋となりぬと云々○銀町に知足院御建立、舊名なり【無補】彌勒寺建立○七月十九日、勅して増上寺、十二世貞蓮社源譽上人へ、普光觀智國師の號を給ふ○八月琉球始て駿府并江戸御城へ入貢、王尙寧來聘、

○官醫吉田宗恂卒、五十三歳、其子宗達又良醫の聞えあり、大橋宗桂も宗恂が男なり、將基圖式一巻を著す

○慶長十六年 辛亥

正月三日、龍口蒲生侯御藩失火、其門に仙人羅漢の彫

物ありて美麗なりしが、此時焼たりとぞ○琉球聘使來○京其外耶蘇宗再發○龍徳山雲光院、阿茶局建立、馬喰の續なり○六月二十四日、加藤肥後寺清正卒○官醫養安院正琳卒、四十七歳、玉翁と號、山城國の人なり、曲直瀬道三の醫となり、後傳を嫡子正圓に譲て別荘に退居す

○慶長十七年 壬子 十月間

亞馬港臥亞はじめ奉書、元和七年迄、新伊西把彌亞始て奉書、其のちなし○七月二十四日、大霰降○大鳥逸兵衛并同類誅せらる、喧嘩を好み辻切をなすの悪黨なりしとぞ

○慶長十八年 癸丑

漢又刺亞始て奉書○六月七日、神田社地より、南傳馬町へ始めて御旅出あり○九月千葉家後胤國分庄兵衛正勝といふ人、先祖相傳の捺物を牛御前へ寄進す○十二月耶蘇宗の者淺草に於て誅せらる○強盜勾崎甚内同所に誅せらる、淺草元鳥越の邊、其頃の刑罰場なり、此所の橋を今も甚内橋といふ、八月十二日な

以今もまつりなすといふ、

篤庭云、凡御仕置ありし處を地ごとと呼り、糞町三丁目の裏なる地を地ごと谷と云、貞享江戸鹿子に、昔は成敗場にて人を殺したる所なれば名くと云へり、紫の一もとにも此谷のこと見えたり、淺草刑罪場のこと、事跡合考に、御入國前は本町四丁目なり、御入國後は淺草旅籠町あり、其後今戸橋の南木戸際、西方寺と云ふ寺の前、少し土高き處明地にて、十間、計の長さ幅二間計もあらん所に移されたり、又其後今の小塚原に移さる、西方寺は今俗だうてつと呼寺なり、此道心者罪人の爲めに晝夜念佛して居しが、死後西方寺に葬れり、故にしか呼るなり、合考又云、はたご町に刑罪場ありしとき、其の事に汲用たる井、後までもありし也、此所の橋を其頃の俗唱に地獄ばしと云へり、享保中より御藏前火除の爲めとして、淺草通り明地とせられし故、かのはたご町南木戸も、彼井の形残りて有しも、あとかた

なく成しなり、寶永正徳の頃まで、彼木戸かけに埋れたる井の形、丸く地上にあらはれたりしは、予も往返に見知りたることなりと云へり、橋は甚内橋に非ざるを思ふべし、甚内がこと古老云つたふ、彼召捕しとき瘡を病み居たり、これに依て今もこの疾ひのものを願をかくるに、往々しるしありと云、

○慶長十九年 甲寅

那波道圓姫路産、惺高先生の門人也、父に随つて始て江戸へ下る、此時廿九歳なり、廿九歳の時、肥州袋の招きにより肥州へ下り、其後數度江戸へ下り、往返の詩文あまたあり○八月二十八日未刻、大風、増上寺山門誓願寺山門倒れ、人家損ず、品川九品寺五重の塔倒る、文安三丙寅年成就せし所に、百六十九年を経て滅するよし、見聞集に見ゆ、こゝにいふ九品寺未詳、妙國寺にいしへ文安中に建たる五重の塔ありし由傳へたれば、同寺の標にも思はるれど、そのむすし青柳寺と號せし事はあれども、九品寺とも見えず、文明中萬里居士の梅花無盡藏にも、既に妙國寺五層の塔ともあり、尙考べし【正誤】極花無盡藏に妙國寺の名ある由記るは暗記の誤なり、品川に五層の塔のありし事は載せられたりども、寺號は見えず○羅山文集成、百五十五卷、刊行の書六十本なり、日本○九月南蠻人、阿蘭陀人來朝す、この時來りしヤンヤウスに給はりし地所ヤハス河岸也、ハチクランに給はりしが八官町なり

と、○十月慶長見聞集成、寫本十冊、編者三浦淨心は北條家へり、見聞集とのみ題して三十二冊あり、永享以來慶長寛永迄の筆記なり、其うち北條五代の事を抄録せるを、北條五代記と題して刊行し、其餘の抄録を慶長見聞集と題す、この慶長見聞集、〇【笥補】此年江戸御城御普請諸大名に被三仰付、

○慶長年間記事

左に記す所、始の六ヶ條は慶長見聞集を抄録す、

○江戸町に川多くありしかど、皆堀川にて、御城の堀をめぐり日本橋へ流る、川、是一筋本川なり、しかるに此川より北東は神田明神の氏子、西南は山王權現の氏子なり△江戸にいにしへより細き流た、一筋あり、此水神田山岸の柳原より出るなり、中此水御城堀のめぐりを流れて舟町へ落る、此流に橋五ツ渡せり、されども皆たな橋にて、名もなき橋どもなり、然も關東御うち入以後、から國の帝王より日本へ勅使わたり、數百人の唐人江戸へ來りたり、これらをもてなし給ふには、雉子にさざる好物なしとて、諸國より雉子を集め給ふ、此流の水上に鳥屋を作り、雉子を限りなく入置ぬ、其雉子屋のほとりに橋一ツ在けり、夫を雉

子橋と名付たり、其前の町屋を雉子町といふ△井の水へ鹽さし入、萬民是をなげく事を憐み給ひ、神田明神山岸の水を北東の町へ流し、山王山本の流れを西南の町へ流し、此二水を江戸町へあまねく與へ給ふ△虎の御門より愛宕の邊田地にして、畔に櫻の木千萬本もあり、櫻田といひ、田の中ながれをさくら川といひし、今の源助橋、其時のしるしとして残りたるとかや云々△江戸町繁昌故、勸進能毎月毎日怠る事なし、北條五代記に云、諸の大夫役者など扶持し、能怠る事なし、町には芝口東は淺草口、當所に舞臺をたておき、毎月毎日勸進能有て諸人見物し、萬歳樂の遊舞に壽命延年を喜びあへり△江戸町に大谷隼人といふもの、居風呂といふものをたくみ出す、

筈庭云、見聞集予が見し本には、すい風呂とあり、そのかみ湯風呂と云ひしは蒸風呂と聞ゆ、それに對して湯を沸したるを、すいふるといふなるべし、遺老物語の内、永祿已來出來たる物の中、すいふると有て、朝鮮物語、名古屋陣中より出來たりと見ゆ△見聞集に、舊跡は淺草觀世音、湯島天神、神田明神、

風呂屋湯女はやり出す、

見聞集に、天正の頃の銭湯の事を云て後に云、その頃は風呂呂不たんれんの人あまたありて、あつあつの湯の軍や、息が詰りて物もいはず、煙にて目もあつたぬなど、云て、小風呂の口に立ふさがり、ぬるき風呂を好みしが、今は町毎に風呂あり、びた十五銭廿銭づゝにて入るなす、湯女といひてなまめける女は、廿人廿人ならび居て、あかをかき髪をすいぐ、扱又其外にようしようたぐひなく、心さまいうにやさしき女房ども、湯茶といひて持来り戯れ、浮世がたりをなす云々とあり、落種集に云、風呂屋江戸所々にあり、朝よりわかし晩は七時に仕舞のうら風呂入人の垢を流し候湯女も、七つ切に仕舞、夫よりは身の支度を調へ、暮時に至り候へば、風呂の上り場を用たる格子の間に座敷に、さみせんをならし小歌やうのものなうたひ、客集めをせしなり、右の風呂や木挽町邊に○書籍を板に刻む事其始詳ならず、正治中摺字大乘經の事東鑑に見え、又元久三年法然上人造る所の選擇集を、印板に行ひし事も見えたり、されど、戦國の兵火に罹り多く亡び、天正の頃迄の板刻の書傳る事なく乏しかりしに、慶長頃東鑑等の書を刊行し、寛永の頃より庭訓、節用集など次第に梓行し、夫より彌盛りになり、今は年々に發兌の書幾萬部といふ限を知らず、實に泰平の御代の一盛事成べし、無聲云、本朝印版の起原は、神護景雲四年孝謙帝の勅願にかゝる、無垢淨光陀羅尼に發し、平安朝時代

に至りては佛書の開版頗る多し、漢籍の開版は鎌倉時代末に起り、室町時代に至りて五山の僧徒多く之を刊行せり、而して本朝選述書籍の開版は、室町時代より盛なれど、新作を直に刊行するに至りしは、慶長以後の事なり、なほ詳しくは日本古刻書史を参照すべし、

○好古日録云、俗に云箱挑灯は、豊臣公の時始て製す上下を藤葛を以て編たり、板を用るは慶長以後の事と云、天正以前の挑灯は籠に紙を粘して用ふ、男山安居の頭の屋に用る者其遺製なり、重箱は慶長年中重ある食籠にもとづきて、はじめて製造すとあり、挑灯は山東の骨董集にくはし、

釣庭云、箱挑灯といふもの昔にわらず、すべて貞幹の説しむごと多し、信すべからず、

○三味線始て本邦に渡りしは、永祿の頃にして、泉州堺の津へ渡り、替者中小路といふもの彈弘たりといふ、世上にて一般に弄べるは、元和寛永の頃なるべし

釣庭云、三味線行はれしは慶長頃は一斑と見えたり、然らばや、廣まりたらんは、猶文祿前と知るべし、考あれども事長ければこゝにはしるしがたし、○泉州堺の錢屋宗安、小西清兵衛等、明人に習ふておしろいを製す○喜遊笑覽云、慶長の頃の風を古畫ども見て考ふるに、男の頭つき鬢狭く、さかやき大に剃、或は半頭、若人は前がみ薄く残して中剃をしたり、何れも額は角を入れて抜たり、髻は脇後にして曲を丸く束ねたり、衣服は廣袖もあり、半身の服を上に着て其上に帯をしたるも多かり、この服はなちて着る時は、是羽織なるべし、丈は長さも短さもありて一様ならず、其中に左右の襟を帯の邊にてよせて、こはぜ杯にてとめるやうに見ゆるあり、革の羽折袴もあり、紋は大かた横筋のあはひ廣きに、小紋をその間に付たる多し、大形なる模様を色さしに染たるもあり、編笠は扁さも長さもさまじく、見ゆ、足袋は革たび、煙小紋無地色々にて、皆打紐を付、帯は幅大よそ鯨尺ばかり

りもやあらんと見ゆるを、前後に結たる處見えざるは、結めを下に挟みたるにや、武士は大小の下緒を帯に引通したり、下部の男は散髪なるも多し、いづれも膝まである服を着たり、服は無地又は横筋、また主の刀を持又鎗をもつ、女はよき人と見るが、鬢毛ふかそきして、下げ髪を衣の下に着込、上に衣かつぎしたり、帯は男の帯幅と同じ、常の女は前髪を眉の上になる程に切て、前さまに垂たり、髪たばは出さず、丸く束ねて襟の後にあり、首飾の類すべてなし、衣服はかつぎの衣模様さまじくなれど、くゝし染の間に花などあり上着横筋太く細く色くゝにて、其間色替りしたるが中に、小紋付たるも見ゆ、これは練緯今云鬘又染たるも有べし、供の女は頭にかぶり物なく、長柄の傘を擔ぎ、又は色くゝの絹を續合せたる袋を負たり、是も衣服は横筋なり、又女の笠は、市女笠の下にかつら布を二布合て縫たるを、後のかたに尻下まで下げたるあり、又手掛を笠の下頬の左右に、肩のうへまでさげ

たるも見ゆ、白き帽子をかぶりたるもあり、又男の肩衣幅狭くひだなく、小袖の如くかき合せて着、紋所の下に横筋を染たり、昔は武士は更也、總髪の色老人などには殊に多し、天和貞享の頃までも専ら有て、猶其後も往々見ゆ、又髻せず垂たるもあり云々、

元和元年 乙卯 六月間 七月十三日改元

太田姫稻荷社建立、が六月十一日、古田織部正卒、一説六年庚申とす○六月十五日、山王御祭禮、出し練物始て御城内へ入る、大傳馬町太鼓に鶴の出しも、此頃既にありしよし事跡合ふ、此地の天満宮も、春日の局より山王神主へ附屬ありて、當所に祀らるゝと云々○小石川白山權現社

勸請、其舊地は今云御殿跡の内なりしとぞ、後承應に至り今の地へ移る○【篤補】當年禁裡仙洞并武家及佛家等の法式を定めらる、

元和二年 丙辰

神田明神社、神田橋内より湯島へ移る、○築土明神、牛込御門外より今の所へうつる○二月足立郡前川村觀了寺本尊、行基并作の千手觀世音成りしが、十倍一

丈八尺の新佛を造り胎中に納む○三月庄司甚右衛門願ひに付、傾城町の場所一ヶ所に下し給ふ、其地は葺田町の末にて○十月神田川堀割并堤を築せらる○麻疹流行○朝鮮人來聘○羅山先生丙辰紀行成、此紀行にいふ、爰にしますとて、人多く參詣すと申ければ、大士の日人に誘れ余も參りけるに、男のいふやうに、男女群集する事、京の清水よりも多く見えける云々とあり、淺草寺觀世音をいふ也、今嘉永にいたりて三百三十餘年の昔なり、今時の繁昌萬倍なる事思ふべし、事跡合考に云、寛永の頃までは、今の並木町は松並木にてありし、門前より東叡山の岸際まで、一面に繁りし谷にて、一眠に見えけるが、見る内に繁花にはなりしと云ふ、又寛永の頃並木に櫻多くありて、遊觀のところがとせるといひつたへたり、

元和三年 丁巳

正月十四日、光明山天徳寺焼亡○神田山智恩寺幡隨意院、下谷池の端へうつる、萬治二年今○春日黒不動尊の後、在家より火起て、堂塔焼亡す、此時靈像煙中を飛へに立給ふと云々○朝鮮來貢記成、一冊、羅山先生編也、又寛永三年の編もあり○庄司甚右衛門小田原藩、初名甚内、官許を得て、遊女屋を一ツに集め、花街を葺屋町の末にいとなく、翌年十一月普請成りて、舗を開き商賣をはじめ、吉原町と號すその物語に云、此町繁昌する故、草の假屋を破り、西より東より北より南へ町割をなす、先本町と號し、京町、江

なり、右に和尙と號するといへるは、上色の遊女をいへり、又云、思案橋は今の思案橋なるべし、

【無補】七月淺草御藏搦土手を築く、

元和四年 戊午 三月間

四月淺草寺に御宮御建立あり、今の淡島明神の邊なりしといへり○日本橋御再興○御城の邊より失火、櫻田迄焼失○【無補】八月八日彗星出現、○十月寅の刻、長雲出、彗星出○目白不動堂御再建、十一面觀世音を安じて、東豊山新長谷寺とあらたむ、中興開山秀算僧正なり、

元和五年 己未

夏より冬に至りて、毎夜白氣東南に出、牛の角の如く長數十丈、又彗星東北にあつて火炎の如し○五月より八月まで大旱、五穀登らず、人馬多く死す○大坂御在番始○長谷川豊前と云もの、西久保八幡宮境内にて時の鐘草創、後延寶中芝切通しへ移る○九月十二日、惺窩先生卒、九十九歳也、門人林道春先生はいふも更なり、那波道圓、堀正意、菅原得菴、松永昌三、三宅寄齋等もつと、

戸町、伏見町、さい町、大坂町、墨町、新町などい名付、家居美々敷軒をならべ、板葺に作り、さて又本町を中にこめて、其めぐりに揚屋町と號し、幾筋とも敷しらず、横町をわり、能歌舞妓の舞臺を立をき、毎日ぶがくなして是を見せける、其外勸進舞、幽舞、獅子舞、角力、淨瑠璃、やちといふ、吉原開張の事にあつかりしもの皆壯年なり、甚右衛門は四十に越たるをもて、かくはいへり、とぞ、親仁橋も元吉原道路のため、願ひて掛たるなり、甚右衛門が傳洞房語等に出で、世人の知る所ゆへに、略す、同書に、遊女屋十七軒、揚屋廿四軒、町敷五町、方二町とあり、此時麻中文字に通を付して、街町といふとあり、思案橋わざとれ橋も、この頃の名なり、是は元吉原通ひせらるわ、う人等、吉原へ行くか行まじきと思案する意にて、しあん橋と名づけ、わざとれ橋といふは、其頃の方言にて、わざとれは今の俗言にマ、ヨといふに通せり、吉原へ遷るを決意して行意也、江戸惣鹿子に、捨格橋の文字を用ひたれど、編者の意にて、この文字をあてたるなり、但し其頃の思案橋は今のあらめ橋也、わざとれ橋は安永中よりこれなし、

篤庭云、見聞集卷七、そゝる物語にいへるは、庄司甚右衛門が事とは見え、其末文に、これに惑ひて、身を亡ぼすに至れる者多かりければ、とかく彼等を江戸に置べからずとの議にて、女の數を改め給ふに、和尙と號する遊女三十四人、其次に名を得たる遊女百餘人、皆悉く箱根相坂をこし西國へ流し給ふとあり、これ慶長中に一たび加様のことありしなり、落穂集にも、慶長五年以前葭原町の事をいへり、然れば甚右衛門は其後願ひて再興したる

○元和六年 庚申 十二月間

福聚山普門院、隅田川の邊より龜戸村へ移る○三月十四日、後藤^四光乗卒、九十○十一月二日、増上寺中興觀智國師入寂、七十○淺草御藏始て建○日本堤を築せらる、水除の爲に築せらる、所なり、日本六十餘州の諸侯御手傳にて出来候故に、し、名づくる共、或は日數六十餘日にて出候故とも云○【無補】朝鮮より金魚渡る、

○元和七年 辛酉

二月觀世太夫一代能興行、其場所未詳○九月二十二日、小堀遠州侯上京、發足の時友達より馬の餞とて、神奈川のやどりへ酒肴茶など送られし返事、

歸り來んとちぎるもあだし人心さだめなき世のさだめなき身に

篤庭云、此年東福門院御入内、小堀侯上京もこれに依てなり、

○十二月十三日、織田有樂齋卒、七十歳、住居の町を元敷奇活所遺稿、壬戌元日遇雪、雪隨三世事正紛々、閑座應

住居ありし故也、

○元和八年 壬戌

篤庭云、女歌舞妓やみて若衆歌舞妓となる、男かぶきと云ふ名目見えず、

○本所一ツ目より葛西まで掘通して、一三三四五の橋を掛、通路せしめ給ふは、元和より寛永の始の間の事なりといへり、落種集出、

○寛永元年 甲子 二月晦日改元

伊勢伊雜宮より、長官出口市頭、太神宮を江戸日本橋通三丁目へ祭る、同十年に至り、今の地へ徳師町遷座なし奉る○長盛法印靈夢を感じ、永代島に入幡宮を勸請す、同八年再興あり○目黒村不動堂御再建○伊西把彌亞使來○東叡山寛永寺御建立、開山慈眼大師なり、事務合考に、此地は藤堂家館の地を寄附ありし所に於て、藤堂家を略して上野とのみ唱へたりしが、永くこの地の名となれりと云り、小野照時社は今東漸院の邊にありしを、此時今の地に移さる、又比叡山坂本の名をうつして、入谷村の町を坂本町と號す【正誤】上野の地伊賀の上野に因てし、唱ふと記する非なり、永祿年中北條家の分限帳にも上野の名見えたり○道本山靈巖寺開創、此時は今雲巖島の地也、此海邊を平治して、○明石志賀之助寄相撲と號し、四ッ谷鹽町にて晴天六日興行す、江戸勸進角力の始めなるよ、古今相撲大全に見ゆ、

間東武春、諸葛青蓮開三隻眼、笑而不答當時人、

○十一月源通村卿關東御下向あり、御紀行を關東海道記としてあり、江戸を立給ふ江戸にて人にあひ侍りしに、富士にて歌はよみつやといひしかば、富士のれはみしやいかつと問ふひとに我こたふべきことの葉ぞなき

【篤補】當年日光御參詣あり、

○元和九年 癸亥 八月間

正月明の福建漳郡龍邑徐勳、淺草寺に觀音堂の三字を書して額を掲る○正月五日、智譽白道幡隨意上人寂、七十四歳、上人在世の時色々の奇特あり、諸人尊少手書の名號を望み受ける也、慶長年中神田の地に幡隨意院創立、檀林と成る

○芝増上寺山門御再建、

篤庭云、御上洛あり、増上寺山門は其頃被三仰付、御下向の時出來と云へり、

○十一月十六日、基師本因坊日海寂、六十四歳、算砂と號す、

○元和年間記事

女歌舞妓を禁ぜられ、男歌舞妓となる、女がぶきといふたるを稱して和尙といへり、男がぶきになりては、美少年を選て舞はしむ、

篤庭云、相撲大全誤り多し、取用ひがたし、明石志賀之助がときは、寛永にはあるべからず、其の故は延寶中の一枚摺の繪に、これが相撲の圖あり、又此ものと丸山仁太夫、京都にてすまふ取れる由物語りあり、使客傳にも見ゆ、彼仁太夫延寶頃のすまひ取なり、志賀之助相撲を、江戸勸進相撲の始めといへるは、非なること知るべし、若これを寛永のこととしても、いたくおくれたり、然にはあらじ、勸進すまふ上み方には、永祿以來文祿中盛りなり、四谷鹽町は某の寺社の地にか、さもなくば寛文元年にも法度みえたり、猶くはしくは嬉遊笑覽四の卷にいへり、

○二月十五日より中橋に於て、中村勘三郎歌舞妓芝居始て興行す、此時橋は上しとぞ、元和三年丁巳五月、徳永種三郎興行の前より、芝居見せもの、街にてありしと見えたり○十月十五日、小柄原熊野權現社頭の扉に、龍王の二字現る、三日にして自ら消たり、よつて別當源昌、龍王の

二字を山號とす、以上別當圓藏院 ○十二月朝鮮人來聘、正使通政大夫鄭崑、副使通訓大夫姜弘重、從事辛啓榮、

○寛永二年 乙丑

湯島に麟祥院創立、開山前妙心清川劉和尚也、この時は蝦忍山天澤寺と云、寛永十一年天澤山麟祥院と改む、春日の局御菩提所なり、局は寛永廿年癸卯九月十四日遁去あり、從二位麟祥院仁淵了義大姉と號し奉る ○南八丁堀一丁目に在し稻荷社は舊社なりしが、此邊次第に町屋建つゞきし故、今年の春攝社八幡宮のありし處へ社を移す、當時の所也、此所の橋 ○八月絹袖一端、大工のかねにて三丈二尺、幅一尺四寸、木綿一端同三丈四尺、幅一尺三寸に定らる ○【筠補】東叡山御草創の翌年、同所に御宮御建立あり、

○寛永三年 丙寅 四月間

龜戸天満宮鎮座、寛文にいたり今の所へ移し奉り、社頭 ○四月より八月迄、諸國旱魃 ○二條御城御在番始る、但御番衆組にあり ○耶蘇宗再發 ○九月上野に神祖御宮御建立、藤原家より御建立といへり、或書云、東叡山の ○十月吉原五町院號圓頓院と號せらる、今年なりといへり ○武藏志料に、の家々、全く普請成、り今年引越したる町なり ○諸家深秘録

○新羅より琉球へ渡りし西瓜の種、薩州へ始めて渡る、其角が編の類柑子に、西瓜は三十年來のはやり物とあれば、江戸にては萬治寛文の頃より行れしなるべし、

○寛永二年 戊辰

正月二日、京橋紀伊國屋又太夫といふもの、元來無筆なりしが、大師河原弘法大師の示現を蒙り、六字の名號を書す、よつて三月廿一日名號を書して、當寺に碑を立て、雪霜月盛居 ○正月廿日、柳營に於て御連歌會あり、是江城御連歌會の始りなりとぞ、 ○五月廿三日、入谷正覺寺開山巖育禪師寂、三州岡崎より來りし人なり、壽百 ○一刀流小野派劍術祖小野次郎右衛門卒去、勢州の人にして神上總に居られし時、伊藤一刀齋に學ぶ、後江戸に居し、外祖父の氏を繼て小野と改めらる ○十二月十日、官醫今大道路三卒、八十 ○所々辻斬行る ○十二月齋藤徳元醫師にて連、關東へ下り、馬喰町二丁目に居す、關東の記あり、其時の句、むさし野の雪ころはし、富士の雪 ○江戸にて句集を梓に行ふ事、この人に始れり ○【筠補】今年仙洞御造營あり ○【無補】武家方辻番始る、

○寛永六年 己巳 二月間

六月上旬より、目黒村不動尊諸願成就するよしにて、

を引て、寛永三年に二條の御城へ行幸あり、此時伊達政宗の家來美しき衣類を着ければ、諸國の人々にいはりし故、その時の人伊達人と云始しより、今にいたり風流なる人なれば、伊達ものと云ならはしけりあり、

鶴庭云、だてものといふ事、こゝにいへる説は附會なり、もとたてしき事より出たる詞なり、

○武藏志料に、寛永記を引て云、寛永三年十一月十日、鳥丸大納言光廣卿御下向の序、江戸須田町を通り給ひし頃、平親王の古墳あるを見給ひて、歸京の後勅勘の儀や、久しければ、勅免あらん事を奏聞ありて、同年十二月九日勅免ありしかば、神田の社内にまつりけると云々、按るに元和二年羅山先生の丙辰紀行に、神田社は平親王の靈を祭るよし記されたり、元和に記されたり、寛永以前に社地に祭りしなり、

○寛永四年 丁卯

三月源通村卿御下向あり、淺草瑞龍山興雲寺、龍岳和尚へ遺す、紫の色にしききて武藏の、草のゆかりの床なつのはな ○東叡山仁王門、常行堂、法花堂、二つ堂、經堂、多寶塔等御建立、此時諸堂 ○四月八日、芝愛宕山權現社火、再御遺營 ○八月洪水 ○大地震 ○十一月塔伽沙古來使の名を

俄に江戸中老若男女群集す ○七月廿七日、玉室澤庵の兩僧を流さる、澤庵は羽州上の山、玉室は奥州棚倉へ赴く、玉室の法嗣正隆、大徳寺に出世の儀によりて、玉室、江戸、澤庵の三師流をながさる、下野大田原より二師わかれ、奥羽の兩地に趣く、澤庵師一僧をもて別を告て曰、

天分南北兩鳧飛 何日舊栖同翼歸
聚散無常只如此 世情禽亦有二樞機
玉室韻を和して云、

草鞋竹杖與雲飛 舊院何時把手歸
水遠山長猶絶信 別離今日已忘機

八月十五日、澤庵最上に着す、最上川早瀬に月も流されてしばし浮世にすむかひもなし 澤庵思ひきやこよひの月を陸奥のあこやの松の蔭にみんとは 同二師流の事、くはしくは澤庵和尚年譜に見てしるべし、この時仙洞の御うたに、五月雨に澤の庵も玉の室もながれてのころにこり江の月

此ころ民間の狂歌に、

江戸味噌を二すりすりて一すりはみそかすばかりのころ江月 ○今年より武家かた辻番を置く、端々に於て辻斬あ

りし故とぞ、

○寛永七年 庚午

正月八日隅田川にて、

古塚のしるしの柳心あらばいざこといむ昔しるやと 狩野常信
○二月十四日、醫師甲斐徳本卒、百十七才といふ、いづれの
の間を専らに行めり、かひの徳本一服十六錢と呼
あるきけるとや、著述の醫書を梅花無盡蔵と云

篤庭云、或云徳本常に玉丹を一粒五錢づゝに賣り
たりとぞ、終る所を知らず、如何にしてそれが歿故
の日はしれたるにか、

○二月小湊誕生寺にありし布引祖師像、牛込幸國寺
へうつす○四月二日、身延久遠寺日遷、池上本門寺日
樹宗論、日樹信州飯田に配流○六月琉球人來聘○同
二十三日、大地震、毛降○八月山王社御造營○【無補】
十二月八日堀より出火、禰宜町、長谷川町、吉原町類
焼、洞房語洞房語○魚籃觀世音、三田の地に安置す、開山法譽上
人、豐前の國
より携へ來
る所といふ○十二月二十三日、大地震、戌刻光物飛行し
其音すさまじかりし、

○寛永八年 辛未 十月間

三月十九日、江戸中に灰降○同二十日、諸國甘露降○
四月二日、淺草寺炎上○去年より今年に至る、六十州
皮癬瘡を病む者多し○東叡山に大佛像丈六造立あり、
彌某侯、泥を粘して石の如くし、これを造らしめらる、後、
年地震に顛倒して碎した、後萬治の頃銅像にあらたむ○清水觀
音堂營建○八月大風、家屋を壊ち樹木を折る○十月
灰降○十月十三日、後藤氏五代徳乗卒、八十○十月十
七日、上野大石燈籠立、佐久間大講堂勝之と影
りたり、高一丈八尺餘○【無補】六
郷橋普請、

○寛永九年 壬申

諸家深秘録に云、今年より奥州仙臺の米穀始て江戸
へ廻る、今に江戸三分二は奥州米の由なり、其頃金一
兩にて七石四斗程なり○中村勘三郎が芝居、中橋よ
り禰宜町へ移る、今の人形
町なり○草廬雜談云、寛明日記寛永
九年の件に、黄金一兩に付銀六十匁替とあれば、國初
より六十匁の内外と見えたり○玉室澤庵二師、謫處
より召還し給ひ、七月廿七日江戸にいたり、神田の廣

徳寺に寓す、この冬澤庵は駒込堀氏に寄居す、翌年二
師を大徳に歸せしめ給ふ、澤庵師寛永十四年麻布に寓居あり
し頃は、所居を嗣して檢束庵といふ
○【無補】是年江戸地圖開版○【篤補】諸番諸組の母衣
指物具足等、御定番頭物頭へ仰渡さる、

○寛永十年 癸酉

上野忍が岡林道春先生別荘に、先聖殿を建ちらる、尾州
建立也、此所を櫻が峰と云、此さくらは羅山先生栽られし、公御
所なり、今の山王の山なり、事は驚味文集櫻峰記に詳なり○正月廿
一廿二日、諸國大地震、小田原は別けて強し、同二十
六日申刻大地震○武州忍の城御番城となりしが、今
年松平豆州侯へ給はり、御城番の面々江戸へ歸宅、地
を給はりし所を忍原亦忍町とよべり○四月より六月
まで洪水○南傳馬町三丁目の北川を埋め町屋とせら
る○都傳内芝居御免ありて興行す、其地
未詳○【篤補】二條
在番衆に組頭を付らる、

○寛永十一年 甲戌 七月間

正月十五日、増上寺了學上人、念佛三昧にして臨終し
給ふ、茶毘の後ち身骨悉く舍利となる○二月二日、御

城において御能芝居、町人總見をゆるされ、青銅を
賜る事、是より始りけるよし、或記に見えたり○三月
九日、將基師大橋宗桂卒、八十○三月十五日夜、白雲月
を貫く○王子權現社、芝神明宮、西久保八幡宮、目黒
不動堂等御造營あり、何れも御
再建なり○品川妙國寺本堂、五重
塔、二王門御再建○平塚明神社御建立、秋に至て成就
す○當年より山王御祭禮備り、大祭禮と成る○寶林
山養國寺、麴町代地として四ッ谷へ移る○七月琉球
人來聘、正使佐敷王子金武王
なり京二條まで來る○村山又三郎芝居、葺屋町に
於て始て興行、市村羽左衛
門が祖なり○八月八日、或高貴の御家の室
おさんの
御方と云蟲齒をなやみ玉ひ、終に今日終給へり、臨終に
遺言あつて、むしばを憂る者我を祈らば、應驗あるべ
しと誓ひ給ふ、飯倉善長寺に御墓あり、今も
靈驗を得るもの多しと云○明人安針鐵砲
の上
也、江戸日本橋安針町を給はり、又相州三浦逸見村を
領す、其妻妙満尼今年七月十六日終、逸見村淨土寺に
墳墓あり、安針が忌日は墓碑に鐫してなしとぞ、
無聲云、安針は明人に非ず、諸厄利亞(即英國)人な

り、本名をウイリアムアダムスといふ、慶長五年難風に遭ひ江戸に来る

○【筈補】今年西丸過半焼失、大番十二組に定る、

○寛永十二年 乙亥

正月二十五日寅卯刻、大地震、午未刻、又地震あり○駿府御在番始る○春鳥丸大納言光廣卿東御下向あり、御道の記を春の曙といふ、此時世は度々御下向ありて、久え、又源通村卿も御下向あり、

春ならぬ木の葉もうるふむさし野の末まてかゝる露の恵に

○安宅丸の御船、伊豆より来る、一説に寛永十一年とも云、しに、一年大風雨の時被りて伊豆へ走る、三時にて止め、又向兩國につなぐ、天和二年に此御船を解ひらきたまふ○三月天台龍寶寺并淨念寺、駿河臺より淺草へ移る○四月朝鮮人來聘、和田倉門の内馬場に、○六月十三日、大風、遠州豆州渡海の船八百艘破損す○七月天赤くして如焼○高輪如來寺開創、五智如來を安置す、木食但唱○八月茅場町藥師如來安置○八月四日、狩野山樂光頼卒、七十七○堺町天下一下り薩摩太夫、紫の幕を鼠木戸の上に

張、人形衣裳結構を盡し、又歌舞妓役者の衣類等も美を盡せしかば、彦作勘三郎も共に禁獄せらる○【筈補】當年武家の控仰出さる、二條在番衆に番頭兩人を付らる、駿府御城在番始る、

○寛永十三年 丙子

正月元日日蝕○高田へ馬場を築せらる○高田に入幡宮勸請す此時は機の小祠也、其後元禄中迄追々御遺蹟あり○大城御外廓惣堀、見附枳形等御普請あり、この時御城邊神社寺院所々へ移る、

黄葉集、寛永十三年江戸に侍りしに、大樹城廓修理の事ありければ、

人つたふ千曳の石も世のこゝみのおさまる春のためしにぞひく

鳥丸光廣卿

○南向茶話云、鶴町六七丁目地と、四ッ谷驛町の邊四方に谷あり、今年御外廓を造らせ給ふ時、御堀の堀土を以て東西の谷を埋、平地になりしが、舊名をもて四谷又坂町といふと、又田舎物がたりといふ草紙に、四谷といふは昔は原といひし也○御入國の時、今の鶴町兩側番町水田町に至り、水多淵八郎、高木九助兩人の下やしきとして被下置し、かとも御城近きゆへ市ヶ谷の臺此原を下し給ふ、表四百八十間に只四人さし置る、故、四谷と云り云々とあり、この御普請の時、京都より牛車來り、其牛車の置場として、市ヶ谷八幡宮の前にて、四丁餘の地

増訂武江年表卷之二

○寛永十四年 丁丑 三月間

三月天海僧正志願により、一切經二千卷を刊行せしめ給ふ、上野に於て事を司る、正保二○五月萩生元甫卒、淺草祝言寺へ葬す、徂徠の祖父なり○七月八日、星月を貫く○十月肥前島原に耶蘇宗の者蜂起す、翌年二月誅伐あり○【無補】江戸町々踊流行○江戸中風呂屋女、三人限りに命じ給ふ、此掟を破りしものを、吉原大門の外にて刑せらる、

○寛永十五年 戊寅

夏より來年二三月頃に至るまで、遠近の男女、伊勢宗廟へ詣ずる事夥し、近ごろいはゆるおかげ参りなり○東光山西福寺、神田臺より淺草新堀へ移る○十一月品川に萬松山東海寺御創立、開山禪庵和尚○今年以來、蠻國の貢を禁じ給ふと云ふ、

○寛永十六年 己卯 十一月間

を下し給はり、御用の事終りて後江戸に止められ、○井の頭辨才寛永十六年芝において、今の牛町を給はりしといふ○天社御建立○高割辻番所始る、或は五年ともいふ○四月四日、後藤六代榮乗卒、三歳○五月六月の間更に雨降らず西國北國は大雨、紀州其外、南海にて海鳴る事九ヶ度○【無補】七月米價暴騰、官倉廩を開て、一人に一斗二升(小判一兩に一石八斗がへ)宛を拂下げらる○新錢を鑄られ、寛永通寶、六月朔日より通用始る、是よりして本朝の銅錢ゆたかになれり、昇平の御恩澤ありがたき事にこそ、江戸にては淺草芝に於て鑄る、芝新錢座といふは、此時錢を鑄る所なり、鳴海平藏といふ人此事を司るといふ、其餘江州坂本、南都、信州松本、三州吉田、駿州足洗村、其外所々に鑄さしめらる、又其頃まで通用せし、奥州相馬、鑄出しの鑄錢を停止せしめ給ふとぞ、垂加翁云、古錢の世間に流落する、形弊へ文減し、完全なるもの跡し、今行る、寛永通寶、體質堅厚、輪廓周正、孔數が所謂銅を惜まらず、工を愛まざるものなりと云々、寛永錢近世まで度々鑄改られし度毎、大に形狀等の違ひあり、無佛齋貞幹が寛永錢譜に其圖を模し、その説を擧げて詳なり、此本梓に行はれざれば世に○十二月朝鮮人來聘、正使白龍任統、副使東實金世讓、稀なり○【筈補】御城外龍の口に評定所を設けらる、

増訂武江年表卷之一

【無補】五月阿蘭陀人來る○【同補】六月目黒原にてホウロク火矢打あり○駿府御城番、御書院番へ命ぜらる○高田西方寺開創、開山貞茂和尚、淺草にありし○【篤補】江戸御城御本丸御殿焼失、御天主御櫓は恙なし

○寛永十七年 庚辰

四月日光山二十五回御神忌、萬部修行有○四月より八月末に至り、天下牛多く死す○此頃何某侯に宮づかへせし伊丹右京といへる美少年、十六男色の意地によりて、今年四月同藩細野主膳といふ者を切害したれば、同月その日主君より命ぜられ、淺草慶養寺に於て自盡を給ふ、其時右京と男色の契りありし、同藩舟川采女といへる美少年十八も、爰に來りて俱に自害して失けるを、此頃世のかたりぐさとなりけるとな

右京辭世の歌、

春は花秋は月にとたはふれてながめし事も夢のまたゆめ

采女辭世の歌

もろともにいさゝは我もこゆるぎのいそぎてこえんしての山川

其顛末を誌したる藻屑物語といへる草紙一冊、慶養寺に傳へて在、作者は詳ならず、西鶴が編の男色大鑑にも其略を載たり、按るに、慶養寺此ときは、淺草西福寺の隣に中今の地へうつる、文化の始曲亭翁これ評を作り、を美の○六月あしと題して、先考の許へ送られたりしを、今に珍藏せり○六月呂宋國耶蘇宗の族、黒船一艘に乗、長崎へ漂着のもの六十餘人を誅せらる○九月六日、御殿山にて【補】この時御殿山御成、數寄屋美麗を極む

夕暮を惜みなしまん木の間よりはやさし登る海越の月 澤庵

【篤補】江戸御城十二月十三日御煤拂今年より始る、

○寛永十八年 辛巳

正月二十九日夜、桶町より出火、翌晦日夜へかけて鎮る、町數九十七町、武家かた百三十軒程、慶長以來の大火と聞えし○諸家系圖三百七十卷成就、林道春先生、び五山の僧侶修撰ありしとなり、略云○東叡山兩大師院々、巡行執事肇る、上野五條天神社へ、天満天神を合祭す○柏木村圓照寺藥師堂、春日局御再建○三崎村を鷹匠町と號す、元録六四年、又改○泉岳寺、櫻田より芝高輪へ

移さる○青松寺、貝塚より愛宕下へ移さる○七月台命ありて、羅山先生王子權現縁起撰述あり、繪は狩野

主馬の筆なり○秋米穀柑子類不熟○八月朔日、大風、數十艘の石船品川沖に沈む、後流人この所を根と號し、漁獵年五月五日、伊豆國根府川より、大石を積○八月、田島東覺寺廻したる船沈没せし處を根と號る共云○八月、田島東覺寺に仁王尊石像を置、寶徳代施主道恕三浦淨心作○そゝる物語印行、

○寛永十九年 壬午 九月閏

正月朔日、大雪○二月大雪○二月十九日、淺草寺焼亡此時木村市兵衛といふもの古輪馬を助く、此輪馬の事諸書に其説出たれば、いはいはす、但し此の火事は門前よりの失火なり○三月十三日、深雪○三月より七月に至り、天下大飢饉、米價貴躍し、死人多し、御救米錢を給はる○五月初旬參勤交代始る○夏殿下信尋公御下向あり、五月初旬御歸洛の日、澤庵師へ宗要を尋ね給ふ事曉に至る○三十三間堂始て淺草に建、基立人新兩替町弓師備後、天海古のため、御當地三十三間堂造營したき志願に付、僧正の執奏により、御金若干を給はり、其上諸家の施財なつてつひに成就す、本尊千手觀世音と八幡宮、外に矢崎いなりの神體は、僧止御寄附ありしところといふ○あづま物語梓行、

吉原細見記の始なり、

○寛永二十年 癸未

六月朝鮮人來聘、正使尹順之、副使趙綱、從事申竹堂、旅館本醫寺春徳二先生、本朝事○今年六月、羅山先生春齋子とともに山王祭りを看るの記あり、先生文集に見ゆ○羅山春齋二先生上京、癸未記行あり○八月永代嶋八幡宮祭禮始る○十月二日、天海僧正寂、齡百三十、三といふ、二月より毘沙門堂御門跡公海僧正御住職あり○十八年の冬、より今年まで、飢饉續けり○あづまめぐり板成、二卷、始書名云し由、其故は此時代鶴と椿の花を弄ぶ事行れし、は、文中に其事を擧たり、色とは椿の色、音とはうづらの音といふ意なるよし、柳亭翁の語なり、江戸の名所を記○【篤補】新御番四組始て仰付らる、士計の間御番といふ

○寛永年間記事

井上稻富兩家、大筒の町間を試られし所を、後築立て鐵砲洲といふ○不忍池辨才天は、寛永中天海僧正の基立にして、比叡山の麓竹生島を摸さる、所とぞ、水谷何某侯僧正と熟懇たるが故、淺草川御普請の手傳

人足をして、公用終りて後、此島を築しめらるゝ所なりといへり○西久保八幡宮御再建あり○佛日山東禪寺は、慶長中麻布靈南坂に開創ありしが、寛永中今の高輪の地に移さる、靈南上人開基の寺なれば、坂の名をしかよべり○寛永中、千日谷一行院開基本譽上人寂、始は永井信州侯の奴隷にして、晩年僧と云○海賊橋より松屋橋、彈正橋迄の川通り、八丁堀、寛永中船通用の爲に、長八丁に掘通されし所と云○目赤不動尊、動坂の草庵に在しを、堂地を今の所に下し給ふ○寛永の頃まで神田佐柄木町、雉子町の續きに、堀丹後守殿御屋敷あり、丹後殿前といふを略して丹前といふ、此邊風呂屋多く、美麗なる湯女もありて、こゝに遊びける若人等のさまを、歌舞妓に學びて丹前風といひし事、諸書に見えれば爰に略しつ、堀家の御やしき、寛永の末正保の頃、は、既に月田侯の御やしきに改りたり○寛永九年梓行の江戸繪圖あり、ひや町より先神明町迄皆海道なり、後に新地を築立ちれしなり、今の溜池の所には江戸水道の水上とあり、

前に記せる慶長の件と見合すべし、吉原町は、廓内に江戸町、すみ町、京町、新町、けん藏主町と有、承應二年の圖にも、思案橋は今の荒布橋と見えたり、今小網町にある思案橋は、昔、淺草御門内馬喰町邊、寺院、武家のみにて町屋なし、寺院は電光院、唯念寺、地藏院、み行寺、清水寺、本せん寺、大せう寺、せんかう寺、知足院、東神田の地等なり、知足院の例に遊行道場神田のやくしあり、東神田の地も武家方寺院のみ也、警願寺、法おん寺、しゆせう寺、今茅場町薬師堂の在る所に、長久寺、しんけう寺、道れん寺あり、同所向より南八丁堀迄、殊に寺院多かりし、増寺、慈眼寺、金藏寺、不動院、いれい寺、藥王寺、上行寺、りやう法寺、千日ほうせんじ、大正おん、弘そうじ、法とう院、妙こん寺、大かうじ、多門寺、玉せん寺、觀音寺、りん久寺、大そうじ、すい、こうじ、長りん寺、せうこんじ、永にんじ、玉法寺、大ふんじ、そうもんじ、海うんじ、りんせんじ、なんんじ、願戒寺、大向寺、法性寺、藥師堂、大せんじ、大せうじ、期性寺、法恩じ等なり○今の彈正橋向八丁ほりに、島田彈正殿屋敷あり、よつて橋の町名今と違へるはなべ町、今の日本橋しほ名にかゝり呼べり、町名今と違へるはなべ町、針店の邊、しほ町、室町一二丁、こゝへく町、今銀町と十間店、六十間河岸、大傳馬町、目四よこ町、今川橋邊、今川橋邊、大傳馬、ふき屋、青物町、今兩替町と駿河町、まき町、今堀留の續、大傳馬、ふき屋、吹町、ばんちやう町、今小網町、かさがら町、今小あみ町、大ふな町、今金、ねさまち、今長谷、をはり町、今和、ひや町、今芝、白船町也、

川町今新の邊、めつた町神田多丁の俗稱也、新小田原町三河丁の俗稱也、放し、しんなは町今の小傳馬上下丁の邊也、以後の圖にはしりなは、は、土俗の稱呼に、太兵衛町字田川丁、神田、同朋町、芝神明の前、大橋、今の常、後藤橋今吳服橋也、寛文迄の間、みとくじ、川島也、以上寺、院の號、町名文字詳ならざれば、原本に據りて假字のまゝに記す○江戸繪圖梓行する事は、寛永に始りしにや、其より以前のもの世に傳らず、此時代の圖は南は芝増上寺、芝口を限り、西は御堀端、麴町の入口、溜池を限り、北は小川町、神田川、淺草橋を限り、東は大川を限りて、載る所の方域狭し、承應明暦の圖、寛文頃より漸次に廣くなれり○世上通用の書翰の起頭に、一筆啓上致し候と書く事、此頃より始ると見えたり、女子の一筆と書出す事は、古き文にたまゝ之ありとなん、東海談、翁草等に見えたり○木村彌十郎高敬が續武家閑談云、挾箱は寛永の末に江戸にて出來す、其前は狭竹といふものを用ふ、是さへ慶長の頃津田長門守始めて製す、葛籠も稀にして、當番の諸士夜具を木綿袋に入、

是を番袋と名付もたせ遣はすと云々○摩薩小平太泉州の産、或紀州産と云、江戸に下り、中橋に於て操芝居を興行す、山先生、向陽讀耕の二子を誘引して、見物せられし事、先生文集にあり、まつ太夫が事、予が聲曲類纂に記しり○事跡合考に、淨瑠璃語、説經語、人形廻し等、悉く寛永元年以後、追々京大坂より下りたりしもの也といへり○飛彈踊り、ひんだ節、ほそり、片撥などいへる小唄行る、岡崎女郎衆といへる小唄、貴賤鶉を畜ひ梅花を弄ぶ事行るも、この時代より行れたり、折な、夏冬かけて用○中島淨雲といふ者、江戸にて求肥飴を製し始む○春臺獨語に云、寛永の頃風俗、男は冬革のうちかけ革の袴を美服とし、女は紫革の足袋をはくを能きけはひとせり、婦女の帯は金襴を美麗の限とし、黒地に梅櫻松を所々に織付て、是を鉢の木の帯と名付て珍重しける、廣さ僅に鯨尺の二寸計の紙を心として、綿など入るゝ事なし、四月より八月迄、婦女の禮服に、綿にて廣さ鯨尺の八分ばかり成を後に結びてたるゝを付帯といふ、今の下げ帯は昔の帯よ

りも廣し、中略、男女の衣服昔は極て質素なり、男子も女子も、十四五歳までは長き袖を着たるに、ひかしは鯨尺の七八寸を極りとせしに、貞享の頃より二尺計になり、夫よりやうやくますます長くなりて、近き頃は二尺四五寸になりぬと見ゆ、婦女の帯も、貞享元祿の頃よりも漸く廣くなりて、今は鯨尺にて八九寸に及ぶ、綿をしんとし、梅のごとし、男の肩衣といふものは、昔は麻の幅鯨尺の八尺計なりしに、貞享元祿の頃より幅一尺に及ぶ、寛永の頃迄は、婦女細き麻繩にて髪をつかねて、其上を黒き緒にて巻しに、其後麻繩を止て紙にてゆふ、越前の國より粉紙にて、元結紙といふものを造り出して、海内の婦女皆是を用ふ、夫より緒にて巻事も止ぬと、中略、江戸の婦女外に出るに、ひかしはさまゝとて、黒き緒にて頭面を包み、目ばかりあらはしける、其後綿にて頭面をつゝみしは、我二十あまり寛永の頃なりき、今はちいさき綿を頭上にあたりさけるのみにて、面をばうちさらし、はれやか成

顔にて道を行、中略、男は面をあらはすべきもの成に、此頃は編笠の肩の上迄かゝるをかぶるは珍らしからず、女のごとく帽子をかぶりて面をかかすもあり、常の頭巾に覆面のごとくある物をつくり付て、目計りをあらはして道を行もあり、亦此頃の男は、小袖の裏を紅にし、或は紅の肌衣を袖口長にして、腕をまとい計にしてひらめかするもの多く見ゆ、女はかへりて縹の裏白き裏などを着るめり、下略、是は寛永の頃より元祿の頃までの風俗を云れしなり、その頃婦女の縹笠、小袖の縫緒、六尺袖きま、頭巾、紫草の足袋等の事、山東の骨董集、奇跡考につまびらか也。 〇八水隨筆に云、世に素襖の袖を切て上下カシメにしたりは、松永彈正が始たるといふ事よく人の知る所也、麻上下の裾を切し事も遠からぬ事なり、裏付上下は、

小堀遠州茶の給仕する小姓に始て着せられしより弘まりて、今常服となれり、夏の肩衣に薄物を用る事は松平豆州侯より始る、縵子肩衣に裏を用ひし事、小堀遠州侯二男政尹にはじまるといへり、又老人雜話には、江村專齋編、肩衣半袴は、近衛龍山公に始れりといひ、鶴庭云、素襖の袖を切たる服は、松永に始ると云ふは非なり、足利廉苑の頃もはや見えたり、又下文に麻上下の裾を切しことも、云々といへるはいかにぞや、素襖の袖を切たるは、今の長上下袖も裾も切りたるが、今常の上下にあらずや、肩衣はもとよりふるくありしものなり、こゝに擧たる説ども皆ひがごととなり、

〇木綿足袋、今の製法の如くなるは、長岡三齋の母始て製し、茶事に出らるゝ時はかせられし由、老人雜話に見えたり、〇釜師名越彌五郎家昌、寛永中大西村長並堀淨甫等を連て江戸へ下向す、後京に歸りて終る、大西五郎左衛門淨清も此時江戸に下り、明暦三年御釜師となり、

後京に歸る、其子孫代々、江戸に住す、〇寛永の頃、大傳馬町の豪家、佐久間某が家の婢女たけといふもの、仁慈の志厚く、朝夕の飯米菜蔬、我食ふべき物を乞丐人に施し、其身は主家の残れると、又は流しの隅に網を釣てたまりし物を食し、常に稱名忘る事なし、しかるに武州比企郡に住る何がし行者、湯殿山へ參詣し、生身の大日如來を拜せん來を願ひしに、わが形容を看んとならば、江戸に趣きて、佐久間某が婢女たけを拜すべしといふ、靈夢の告を蒙り、彼家にいたり、竹女を拜す、其後竹女は念佛三昧にして大往生を遂たりといふ、其後佐久間の親ぞく馬込某より、大日如來の像を造らしめて、湯殿山黄金堂に納む、これを世にお竹大日如來と云、佐久間の墓は、増上寺塔中の心光院にありしが、彼寺者羽へうつりし頃、浅草の善徳寺へ引けたり、彼家の水盃は、今も心光院に收めてありといひ。 〇寛永の頃泡齋といふ狂僧、町小路をはしる、わらんべ集りて、氣違ひよはうさいよとはやせり、今以てかくいひて氣違の名目となれり、其泡齋はやされて躍るかたち、異形にして人の笑を

かさねしむ、後葛西の土人躍念佛とて、江戸大路を徘徊す、其さま物に狂ふがごとくにて、彼泡齋がさまに似たりとて、泡齋念佛ともよびけるよし、世事談にいへり、

篤庭云、世事談はうさいの説然るべし、但しはうさいは寛永以前よりいへる事なり、考へあれども長ければ記しがたし、無聲云、はうさいは慶長以前よりありて狂僧にあらず、はうさい念佛繪詞寛永頃のものに昔常陸國に貴き僧一人おはしける、其名をばはうさい坊とぞ申ける、我住む寺破損しければ、弟子あまた引つれ、太鼓かねの拍子をそろへ、躍念佛をくはだで、繁昌の所へ躍り出で、一錢半錢のくわんじんを得て、堂塔伽藍を建立し給ふとかや、されば末代に至つてはうさい念佛と名付け、太鼓かねをたゝきて面白くおどり云々とあるにて知るべし、

○正保元年 甲申 十二月十六日改元

正月二十四日、御彫物師吉岡豊前介重繼、七十、増上寺

體なり、

○五月十九日、琉球人來聘、正使金武王、國頭王子、○清朝順治元年より、明亡びて一統す○木挽町六丁目岡村長兵衛芝居始る、二代目より後山村長太夫座と改む、正徳四年に至り芝居断す、

篤庭云、山村芝居は、元祿十七年申二月六日書上げ山村座取立候年數之儀、私先祖小兵衛と申者、寛永十九年より狂言芝居取立仕候、當申年迄六十三年に罷成申候、尤も其已前より當所芝居御座候由承傳へ申候、右小兵衛より私迄五代相續狂言盡仕來申候、元祿十七年申二月六日、狂言座元長太夫と見えたり、岡村長兵衛といふこと見え、其上年も違へり、誤なるべし、

○十一月十八日、吉原開基人庄司甚右衛門死す、六十、九歳、今も深川雲光院に墓あり○十二月二十六日、明人吳完觀卒、二本板上行寺に墓あり、明朝の亂を避て來りし人なり○三十三間堂預り人、弓師備後より堺屋久

に涅槃石を彫○寛永年中鐵砲洲向千湯百間四方の地を、攝州佃村の漁人へ給りしが、今年二月漁家を建並べ、本國の名を以て佃島と號し、本國の産土神住吉明神を奉祀す○上野に慈眼大師堂御建立、此時は未慈眼大師の號なし ○青山仙壽院開創○二月町人の長刀、長脇差、羅紗の合羽等御停止あり、又伊勢大山參、布團を重ねて馬に乗る事を停給ふ、

篤庭云、昔時まうでの旅路、又田舎人よろしき婚姻には、つゝら馬にふとんを重ね敷て乗れり、されば小娘がうたふ手まり歌に、「お、さんどーのよめ入じよーらうあ、とかけ、つーづらふーとんばりしてしまさんこんさん、中のりさんからおふみがまいつた」云々と云ふことも、伊勢參りのことをも交へいへり、又松の葉の小歌、馬かたと云唄に、春はござせのおつゝら馬よ、あけ七歳のれんせんあし毛云々とあり、又今も神田祭の練もの、昔に並びて金うり吉次が行装つゝら馬を牽く、これそのかみの

右衛門へ交代す、久右衛門は最初堂を建たるものなり、鹿嶋久右衛門と號し今に相續せり、

○正保二年 乙酉 五月閏

三月十五日、月赤くして丹の如し○三月廿三日、田宮坊太郎國宗、遁世して空仁と號しけるが、二十一歳にて卒、復讐の談世の知る所也、墓は東叡山中製成院にあり ○鳥越熱田明神、淺草より山谷へ移る、此所によりし鳥越山源壽院も、此時新鳥越へ移る ○江戸にて始て瓦を焼く、寺嶋氏某、中氏彦六といふも ○十二月二日、長岡三齋卒、八十、師筆を取て夢の字を書して寂す、 ○十二月十一日、東海寺澤庵和尚寂、世壽七十三歳也、衆類に遺傳か請

○正保三年 丙戌

十月漢土兵亂未止ず、明の餘類平戸一官鄭芝龍と云、本國性爺の父也 邦へ援兵を請○冬牛込濟松寺開創、開山正傳禪師、開基素心尼なり ○金工平田氏祖道仁卒、慶長中朝鮮人より七寶流しの法を傳へし人也○大鳥居氏信祐、太宰府神廟に夢中發句を得、東都に下り龜戸村に宮居再興す、

○正保四年 丁亥

二月六日、小堀遠州侯卒、藤原政一、薩摩の號宗前、今年六十九歳也、紫野孤峯庵に葬す、古田織部の

門人、茶道目利の人、和歌は冷泉爲頼卿の御門人也、屋敷は駿河藩甲賀町なり。○四月十五日夜、月の暈四方、月影の如く、朧の月四つ現る。○四月二十日、官醫啓迪院岡本玄治法印卒、廣尾祥雲寺に葬す。○五月十三日、江戸大地震、上野大佛の像碎破す。○七月二十二日、氷降、大さ梅實のごとし。○九月十五日、刀劍目利木屋庄左衛門終、織田家に仕。○十一月十三日、台命により王子村に於て、へし人なり。○十一月十三日、馬場は東西四十三間、南北四十間、松平薩州君犬追物興行あり也、平塚明神の邊なりしといへり。○十一月、箕輪藥王寺後向石地藏尊建、林春齋犬追物がた。一巻編輯あり。四世春海法印遺立なり、普奥州街道にして、道路に建し所なりと云。

○正保年間記事

正保中、日向國霧島山の躑躅を、薩州より大坂へ登せ大坂より京に登す、其内富士山驕角と名付しものは大内に止め給ひ、面向、無三、唐松の三種は、明暦二年の頃武江に下す、夫より接足して諸州に分てり。○大橋を常盤橋と改められしは、正保の始頃なりと見ゆ。○十河ひたひと額をぬく事はやる、十河殿といふ武家の人の頭つきより、いひ出たる事とぞ、又此時代

叡山は東向に門あり、門前并寺後に僧正町といへるあり、

○慶安元年戊子 正月閏 二月十五日改元

慶安と改元ありしを、

改年の御慶安穩の天下哉 半井ト養

○春荒蘭山に亮朝院七面堂開基あり、寛文十一年、今の如く高田へうつさる。○谷中延命院七面宮勸請、開山日朝上人也、三澤の局身延七面を感得し、當社を創すと云。○四月十一日、天海僧正へ慈眼大師と諡號を給ふ。○日光山三十三回御忌、御法會法華八講あり、藤原爲景編、法華八講の記あり。○五月男色をむたひに申掛、若衆狂する事を禁ぜらる、此時何某鹿藏といへる美少年の事に付、騒動に及びし事昔く物語にいへり、男色の事此ときより止、寛文の頃にいりたり又行れしが、ことありて止たるよし同書にいへり、昔の方言に、男色を若道、衆若衆の道、野道とは野郎の道と云縮語にして、尤俗言なり。○九月太田姫稻荷社建立、若林と云人。○江戸中風呂屋の遊女御制禁あり、廿八日に出て寄附す。○【篤補】此年新番二組別に仰付られ、先年ともに

徒若黨類を好み、東海道名所記に、うは髭を松蟲の聲に捻り上て云々と云るは、松蟲の聲とは、りんとはねさせたるをいふ詞也とぞ。○世事談に云、此時代京室町髭の久吉、伽羅の油を賣始む、其後三條市中宇賀繩手の五十嵐是を製す、江戸にては芝の大好庵春蟲喜右衛門など始なりといふ、鬼尾庵の我衣には、寛文中室町羅油見世を出す、其少し前麹町へ若島主水といへる女形油見世を出す、これ油店の元祖なるべしとあり、いづれが先なるか未詳、寛永正保の頃は、前髪立の兒小性などは格別、上下ともに年若き男の髪に、油を付るはなまぬるき事としけるよし、落穂集に見えたり、其頃も若黨中間の頓聲には、此油。○寛永正保の頃、長崎より唐木の商人和泉屋半三郎といふもの江戸に來り、池の端に住し始めて古書籍の賣買をなし、後大書肆と成たり、是古本賣買のはじめなりとぞ。○或御家の所藏に、正保年中江戸圖の寫本あり、方域尤廣し、品川、澁谷、角筈、柏木、雜司谷、駒込にいたり、東は大川を限りとす、市中の圖は寛永の圖に等し、圖中淺草寺後、石川主殿侯御藩の隣に、卜齋が居あり、日本堤の西にだらけん塚といふあり、谷中三浦坂の邊、三浦龜之助殿御藩あり、東

都台六組と成、井戸新右衛門駿府御城定番となる、駿府定番の始なり。○【無補】淺草寺五重塔建立、

○慶安二年 己丑

日暮里諏訪明神社造營、是迄は織の草祠なりしと云。○大塚普門山大慈寺御開創。○三月四日、狩野主馬尚信卒、慶安三年四月七日。○麻疹流行す。○六月二十日、武州大地震、江戸中共云。○五月十三日、河越大霞降、重き二斤、小は四。○八月二十日、江戸大地震。○九月琉球人來聘、川王子也。日光山へ參詣す。○【篤補】今年日光へ御參詣、當六月參勤の大名衆は、月末に參勤可致旨仰出さる、

○慶安三年 庚寅 十月閏

二月山王權現社、御城内より麴町へ移る、一説には寛永七午年に移る。○男女伊勢宗廟へ參詣する事行る、今云むかひ。○三月廿三日夜、江戸大地震あり。○【只補】四月七日、畫家狩野尚信卒、年四十四、葬于池上本門寺。○四月十三日、俠客幡隨院長兵衛死、其傳人口に繪突すといへども、紛々として定かならず、墳墓は今も淺草源空寺に

あり、歌舞妓もの ○五月國々洪水 ○六月四日、諸國毛降、
年間を甲へり、
長四、○六月三日より淺草寺觀音堂御普請始る、○琉
球人來聘 ○由井賊起 ○八月七日、秩父郡邊大風雨、氷
降、大さ八九匁
より十匁位

○慶安四年 辛卯

東叡山御宮御造營、四月成就、藤堂家先に造られ ○三月十二
日、狩野山雪卒、六十三歳、蛇足軒 ○秋深川八幡宮にて、鶴ヶ岡
の法式をうつし、流鏑馬興行始る ○中村勘三郎芝居、
彌宜町より堺町へうつる ○十一月廿九日、由井の黨
類誅伐せらる ○十二月廿七日、谷中感應寺日長上人
寂、

○慶安年間記事

酒戦といふ事行る、慶安のはじめ大塚の地黄坊檜次、
池上の大蛇丸底深など、假名せし大酒の輩、黨を結
びて酒を呑し事あり、其顛末を記したる水鳥記とい
へる冊子あり、此書寛文三年に印行せり、池上氏所藏、蜂龍の蓋は
奇跡考に見えたり、又川崎稻荷新田底廣が子孫石
波孫左衛門が藏せる七合入の蓋
あり、中に程々舞の跡あり

事 ○この時代、毎年七月盆中にいたれば、市中の男女
踊りを催し、夜々賑へり ○淨瑠璃語薩摩太夫、杉山丹
後掾、虎屋源太夫、四郎與吉、あぶらや茂兵衛、鳥や次
郎吉、南北喜太夫等行る、

○承應元年 壬辰 十月八日改元

正月廿日の御具足餅、當年より十一日に成る ○十一
日曉雪降る、巳時晴る

羅山文集

餅登座上甲兜盤

時有寒花一發三盞一

鐵額銅頭變銀否

雪如二白馬一祭三盞尤一

○品川寺水月觀世音の堂を修造し、海照山品川寺と
いふ、此寺本尊は弘法大師安置有りしが、永祿十二年の兵火に焼れて
いふ、本尊武田方にとられ、甲州にありしを取つへし、今年九月中旬
住寺弘尊寺院を拜領し、堂を ○六月若衆歌舞妓御制禁あ
立るよし名所話に見えたり ○六月若衆歌舞妓御制禁あ
り、前髪を剃りて紫の帽子をかくる、玉島主水、小瀬作彌、
市彌、伊織杯云もの、殊に美少年にてありしといへり、

○八月廿八日夜、江戸大風雨、

○承應二年 癸巳 六月閏

今年玉川の上水を都下に通じて、衆庶の用に充てし

篤庭云、水鳥記酒戦の事は考へあれども、事繁けれ
ば録しがたし、蜂龍の盃、奇跡考に見えたりといへ
るはいかにぞや、奇跡考の圖は眞物にあらず、其由
は其説にもいへるをや、底廣が子孫云々とある廣
字は、深字の誤なるべし、

○寛永以來承應の頃まで、金銀兩替といふ事、駿河町
兩替町の外には、其筋の商人一軒もなく、金子一分二
分づゝか、錢或は少々の銀子にて、錢に替たき時は、
本郷、四谷、芝、淺草の果よりも、日本橋の南北の町へ
來りて、とゝのへたる事なり、是は室町并に通町南
北四町が間に、錢賣とて數百人、各三貫文づゝ肩にか
けて居て、少しき錢兩替を數十年の間いたしたる事
なり、青物町に兩替屋一軒見世を出して、錢錢を交へ
ず、九十六文本數の錢を、粒銀にても金子一分にて
も、自由に兩替せし故、扱も自在なる見世出たりと
て、江戸中この店へ來て兩替したり、是を見て江戸中
忽ち兩替屋の見世出たりとぞ、以上事跡合考に出、按るに爰
に云青物丁は、今云兩替町の

め給ふ、

△玉川上水は、遠く西の方甲州丹波山の幽谷に發し、
同國丹波村を過て武州多摩郡に至る、甲州一の瀬よ
り留津浦村迄七里餘、夫より羽村まで十三里、夫より
六郷迄十六里許にして、羽田浦より海に會す、凡四十
餘里
承應元年の春、玉川庄右衛門并清右衛門といへる者
承りて、羽村より江戸までの水道を考へ、同十一月水
上道掘割の儀を命ぜられければ、翌巳年初夏より仲
冬に至り、羽村より四谷大木戸迄掘渡し、虎御門まで
玉川の水を掛られしとぞ、其後諸方武家方市中に分
水して日用とす、赤坂御門外玉川稻荷社は、この玉
川庄右衛門勸請するところなり、
△神田上水を開れし事は、其始慥ならず、武徳編年集
成に、大久保某天正中に台命を受けて、水道を考へしよ
り、多摩川の清泉を小石川より引しめられしといへ
るは、則神田上水の事なるべし、沾涼が説には、江戸
繁昌につき此池水ばかりにては不足なる故、承應に
至り玉川を助水にかけられしかといへり、中古神田

上水御再修のとき、藤堂家より御手傳として、松尾忠左衛門一説甚七郎ともあり、掘わりの普請奉行たりしといへり、佛家奇人談には、此時備夫となりしと云、又堰より少し上の方に龍脚庵といへる庵室ありしも、芭蕉翁此地を愛して、舊址をとりむる、此事世上に傳ふるをもて按るに、翁は寛文十二年九月始て東武に下るといひ、又薙髪したるは一年置て延寶二年なりと、されば翁が俗體にて江戸にありしは僅に一年の餘なり、此頃御普請の事行れしなるべし、

篤庭云、こゝに引編年集成の説は妄なり、見聞集に、神田明神山岸の水を、北東の町へ流し、山王山本の流を西南の町へ流し、此二水を江戸町へ普く與へ賜ふとあり、神田上水と云ふ事は是なり、御入國以來、猪頭の池水を御公儀御入用を以て、上水道に被_レ仰付二町年寄承り相勤、玉川上水道は清右衛門、庄右衛門請負申候に付、水道端の村々へ、我儘不_レ申掛ため、又村々に水道へ不淨なる儀不_レ仕候爲め、寛文中玉川上水羽村と申處より、代々木千

駄ヶ谷村迄十三里程の間、水道兩端三間通づ、被_レ召上、水道南之方は喜多村彦兵衛、北之方は奈良屋市右衛門拜領被_レ仰付候に付、右三間二十三里程之場所、其節自分入用を以て、松杉の苗木植置申候云々、此書上げ事長ければ略す、
桃青が水道にかゝりたる事も其頃の日記にあり、こゝに云へるは非なり、

△神田上水は井の頭の池に發し、多摩郡、善福寺池、同郡、牛禮村、舊跡也、妙正寺池、郡多摩川の分水等の諸流中、荒井村の末に至り合して、神田上水の助水となる、今其地を落合村といふ、水流落合ふ、故の名なり、牟禮村より落合迄十二村を経て高田村に至り、目白臺の下にて二つに分れ、一流は餘水にして大洗堰より江戸川に落ち、一流は上水にして小日向を廻り、水府様御殿の中を東流す、すべて牟禮村より爰に至るの間、樋なくして流るゝを白堀と號す、其水流御茶水掛樋を傳ひ、小川町を経て神田に至る故に、神田上水の名あり、又一筋は神田橋ら

ち龍開橋より、本銀町、本町邊、南は京橋邊、東は本材木町通、兩國の邊、濱町等に至る、町數凡二百七十丁程に及ぶ、

△兩上水專通ぜざる前は、赤坂溜池の水を引、其餘所々の水溜の池水を、こゝかしこに引て用水としたりしかば、殊に不自由なりしに、此上水の出來て、萬民態に汲んで快樂の思ひをなす事、誠に御恩澤仰ぎても猶あまわりありとやいはむ、

○正月二日、牛込御門の内青山某の婢女菊といふもの、主家にて祕藏の皿を破りて害せられ、其靈魂祟りをなせし事、人口に膾炙すれども、未實否を知らず、多くは附會の談なるべし、

篤庭云、皿屋敷の談妄誕いふに足らず、或云番町皿やしきと云ふ事なりといへり、是また附會の説なり、播州皿屋敷と云淨るり杯もあり、もと小兒の戯れにいふ、皿かぞへの化ものより出たる事と聞ゆ、
○九月琉球人來聘、正使國頭王子○金彫工吉岡氏祖重次卒、十八

○新鳥越易行院に、俠客助六が墓と稱するもの有、西入淨心信士、承應二年巳二月十一日と鐫し、側に女の法名あり、近頃享和文化中、烏亭馬見出したるなり、歌舞妓芝居に預りしもの香花を控ぐ、

篤庭云、文化の頃俳優松本幸四郎が弟子染五郎、師にそむき大芝居に出る事ならずなりて有しに、焉馬より花川助六と云ふ名を付てもらひ、市谷八幡社地に芝居ありてそれに出たり、彼助六の墓に香花を手向させしなるべし、

○承應三年 甲午

淺草寺觀世音開帳、此時賽錢を金三百兩の入札に落し賣渡せしと云、當時平常の香花にも劣れり○今年町奴御穿鑿あり、夢の市郎兵衛、唐犬權兵衛などいへるなど、號して市中をわい、くわい、喧嘩を仕かけ諸人の妨せしもの也、六方組六方言葉等の事、醒世翁が奇跡考、柳亭翁の用捨箱等を見て其趣をのりし、この男伊達と號せし悪黨の事なり、六方組ふもの、正徳年中鶴町眞法寺にて腹切し時、辭世、
わんざくれふんばるべいかけふばかりあすはからすがかつかじるべい

これ則六方言葉なり、この時の町奴の名三十四人談海に見へたり、
○市村羽左衛門が芝居にて、放れ狂言を始む、放れ狂

言とは、女鬘を掛けて島原傾城買の體を仕組、髪切島原、坂田島原杯題號にせしより、芝居の總名を島原と云しとぞ、この頃上方より小唄三味線の藝者をよび下せり

竊庭云、羽左衛門芝居のみにあらず、京難波すべて昔は傾城買の狂言流行たり、夫故傾城何々といへる名題の狂言多く、淨るりも多くありて今にあまた残り、

○十一月十八日、狩野休伯長信卒、七十、

○承應年間記事

承應中、芝牛町より品川まで、浦傳ひ岸端石垣を命ぜられ、鈴が森まで築立らるゝと有、武藏志料出

○昔く物語に云、慶安の頃夏暑氣強き節、船にて涼みあるひは屋根船を拵へ出る、淺草川を乗廻してすゝむ、是船遊山の始りなり、翌年大身衆も出る故、供廻り多く大勢乗る故に涼しからず、又翌年大船出来四五間もあり、承應の頃船盛りなり、しかるに明暦の酉年の正月、江戸中の大火事後三四年船遊止む、萬治

の頃又々涼み船作り出し、諸人暑を凌ぐ、船従て大く成、間數多七八間の屋形船あり、後船の名をつけ、川一丸、關東丸、大關丸、山一丸、熊一丸、十間一丸、など名付る、辨當色々美を盡し、御旗本十人なれば鎗十本なり、簾の隠へ掛けならべ、是を武士のはゝとする云々、中古納涼看月の船、大かた三股を佳境とせる故、詩人も多く詩に作れり、牛井ト養狂歌集に、三股といふところにて、山もあり又船もあり川もあり數はひとふたみつまたの景

小身の人は、侍衆上下ともに上下又は袴ばかり着して、股立を取て歩行する人もあり、又は柿の三尺手拭にて鉢巻杯しける人もあり、中間は一寸出るにも高

端折して出る云々、昔く物かたり、此時世の風俗雜事くは略す○稻毛領中丸子村羽黒權現は、天正中の勸請なりといふ、承應の頃奥州會津の生にて、小歌三藏といふ道中の馬、中風を煩ひ、足なへて歩行叶はず、齒落て云分らず、終に非人と成、この所に來りしが、當社を新りて不思議の靈驗を得、落たる齒立地に生じ歩行自在となる、よつて當社に奉仕して香花を献り、又諸人へ神符などあたへれば、江戸井に近在の諸人參詣群集する事夥しかりしに、明暦三年江戸大火の後、自らにして參詣絶たりとぞ

八間町有、山王御旅所今の邊にあり、海賊橋邊より南八丁堀邊寺院、寛永の、數字ありしが、端々へ移りて其跡大抵武家に改れり、

○明暦元年 乙未 四月二十九日改元

梅翁句集に、年號改元の歳旦、明暦や梅のあらたにひらくるなり、いぶかし、

○明曆二年 丙申 四月間

正月二十三日夜、赤雲西に出る○正月水あびせの事、自己の屋敷にて、其家の者へあびする事は、苦しかるまじき旨を令ぜらる○淺草寺山門の仁王尊、この頃誕を垂るとして世に云ふらし、貴賤群集す○六月赤氣西方に見ゆる、竿の如くに二本あり○六月四日より觀世太夫勸進能興行、神田橋太田侯の裏○淺草に於て新錢座建○十月九日、吉原町を被三召上、右の代地として、貳萬四千三百坪の地を日本堤の邊千束の内にて下され、引料として金壹萬五千兩小間割十兩と云下さる、旨命ぜらる○十月十六日夜、吳服町より出火、北風強く、中橋南鍛冶町、横町邊類焼○十二月十六日、茶人金森雲州侯卒、名長近○【無補】本町二丁目和泉屋九左衛門吳服藏を宗知、これ江戸に於ける穴藏の濫觴なり、我衣に出

○明曆三年 丁酉

正月元日、四谷竹町火事、四日赤坂町火事、五日吉祥寺邊御中間町火事○正月十八日、乾大風、未刻より本

る、囚獄の罪人を火事の時放たる事、この時より始れるよしむさしあふみに見えたり

視吾堂集、江府回祿の後、假に小屋をしつらひみな人すむを見て、

よしといひあしとやいはむつづくにのこや世の中の暑さ冷しさ

小屋 吉川 惟 足

正月下旬、吉原町小屋掛を命ぜられ、事跡合考に、この時一寺の所、其頃荒地にて、六月今の地へ引うつり、新吉原町と號し、八月より商賣をはじむ、明曆三年正月開板の江戸繪圖み町、京町、新町の名ありて揚屋町の名なし、是は元吉原二丁四方の地を今の地にて五割増にして代地を給はりし故、すみ町の向ふへあらつて、揚屋町と名づけしといへり、元地の邊はこれより高砂町、住吉町、羅波町など、諸の名目などに○正月廿三日、羅山先生卒、七十五歳、墳墓は忍岡の別業に在し、元祿十一年の災後、牛込山伏町に移す○大火の後、江戸中町家瓦葺を禁ぜらる、

○明曆年間記事

東本願寺、神田明神の下加賀屋敷と唱ふる地の西にありしを、明曆中淺草今の地へ移さる、大火の後、其東今加賀原と唱ふる地は、本多肥後侯の御やしき、花房

郷五丁目裏本妙寺より出火、湯島、神田邊、淺草御門内町屋、通町筋、鎌倉河岸、京橋八丁堀、靈巖島、鐵砲洲、海手、佃島、深川に至る、巧庭云、御成御本丸御天主等炎上、西御丸蓋なし、翌十九日巳刻過、小石川傳通院前新鷹匠町より焼出し、牛込御門、田安御門、神田橋御門、常盤橋御門、吳服橋御門、八代洲河岸、大名小路、數奇屋橋御門等焼亡、又同日番町目つゞきより出火で、半藏御門の外、櫻田虎御門、愛宕下、増上寺門前札の辻海手迄焼亡、此類焼萬石以上の御屋敷五百餘宇、御旗本七百七十餘宇、但し組屋敷數をしらず、堂社三百五十餘宇、町屋四百町、片町八百町、焼死十萬七千四百六人といへり、依て本庄に二町四方の地を給ひ、非人をして死骸を船にて運ばしめ、塚に築て寺院を建て、國豐山無緣寺回向院と名づけしめ給ふ、去年十一月より當年正月に及ぶ迄、雨更に登揚して、職民の困苦甚しく、道路に悲泣す、正月廿三日より七日の間、火災に逢ふて飢饉に及ぶ輩へ、所々に於て粥を給はり、又町中へ銀子一萬貫目金にして十六萬兩間口一間に三兩一分と銀六匁八分つといふを下し給は

町の處は太田備中侯の御屋敷なり、其外此邊皆武家やしき多かりしなり、西本願寺、横山町の邊より築地へ移る○武藏燈といへる草紙に、明曆の大火の事、災後の事をいへる件に、白銀町より柳原迄町屋敷一通りのけられ、高さ二丈四尺に、石を以て東西十町あまりに土手を築せらる、日本橋の南萬町より、四日市迄の町屋敷を取りのけ、高さ四間に川端にそめて北を受け、東西二町半に疊上らる、又日本橋より京橋まで八町の間、町屋三ヶ所を取のけて、會所三十間づゝひろくなれり、是は町屋餘りにせきあひ、諸人いやが上に入込、やゝもすれば失火を出し、人をそこなふ事の度々に及ぶゆへ、土手を築たらば、江戸中ものものいかに成事ありとも、退足たやすき爲との御事なりと云々○○火災の前まで、日本橋通四丁目北の側、細き邊を五輪町といふ、此處に墓石を作る工居たるゆへなり○災後茅場町に在し茅商賣の者、兩國橋向へ移さる、其後元祿始の頃本所四ッ目へ移さる、よつて本所茅場町

といふ○此時武家の藩邸移轉多し、又寺院も所替わ
また有、吉祥寺は水道橋より駒込へ移る、水道橋舊名古
祥寺橋といへ
り、同寺表門の通りなるゆへなり、寛文より元
禄頃迄の江戸圖にも、本吉祥寺橋としるす、靈山寺、源空寺、海
禪寺いづれも湯島に在しが、大火後淺草へうつる、瑞
林寺、昌平橋外より谷中へ移る、報恩寺、八丁堀より
淺草へ、幡隨意院、日輪寺、今の辨慶、誓願寺、今の小柳神
橋の西也、誓願寺、丁の邊、神
田より淺草へ、聖徳寺、天嶽院、あさ草御門内より淺
草今の地へ移る○此時代今の如き美食を商ふもの更
になし、明暦災後金龍山の門前に、始て茶飯、豆腐汁、
煮染、大豆等をと、のへて、奈良茶と名づけて出せし
を、江戸中端々より金龍山のならちや喰ひにゆかん
とて、殊の外珍らしき事に興じたるとなり○淺草見
附前玉屋勘五兵衛、笹屋利兵衛といふ船宿にて、始て
猪牙船を製す、山谷通ひの輩これに乗る、又所々より
白き馬に乗りて、通ひしもありしなり、奇跡考其餘の草紙
に委し、はるの日
のいとゆふわけて柳たをるはたれ、ぞ、白き馬に
めしたるとのことよとうたひしも此ころの事なり、
筈庭云、猪牙船、こゝにいへるは江戸砂子の説な

り、又一説もあれど、いづれもひが事なり、ちよき
船悪所通ひに用ひそめし頃は、二挺立といへり、三
挺立もあり、これら御停止にて、今は船一挺なれど
も三挺の名は残れり、二挺も三挺も皆ちよき船に
て、もと漁獵の船なり、正徳四年八月、深川獵師共
願書を出す、そは此度ちよき船御停止に就てなり、
元來ちよき船と申は、獵船に御座候處、悪所通ひの
船に借し候もの所々に出來申候に付、悪所船の名
に罷成、獵師共家業之障に可相成旨、迷惑に奉
存候間、御訴申上候云々と見えたり、
○柴垣といふ小唄并踊はやる、選魂紙料にくはし、此頃狂歌
者夢にも一ツあ
はり手ひやうし○明暦四年山崎闇齋の遠遊紀行に、鈴が
森に舊より一石あり、これを轉すに其聲鈴の如し、近
頃人偷去とあり、承應の頃までもありしならん○箏
曲柳川檢校、八橋檢校行る、八橋は寛文の
末に終れり○明暦三年の
江戸圖、今大馬場町一丁目、あひもの町今小舟町二と
うら堀とめなり、あひもの町今小舟町二と
丁目なり、
あり、神田蠟燭町の續に幸若太夫とあり、

○萬治元年 戊戌 十二月間 七月廿五日改元

正月元日夜、市谷安養寺三世秀譽の夢に、白衣の老翁
顯れ、和歌を詠じ白狐となりて去る、よつて稻荷社を
建、しかりしより靈驗著しと、江戸砂子にいへり○正
月十日、本郷三丁目より出火、引續江戸中大半焼亡、
其方城○【無補】二月十日、お茶の水掘割成○三月木挽
町海手、赤坂、小日向等築地出來る、牛込御殿山は築地の西
也、小日向築地の時、
の山を引、田を埋地形
なならしけるといふ○四月十五日、狩野素川信政卒、五十
二歳、
外記○六月九日、猿若道順死、中村勘三郎
が元祖なり○夏三田の地に
會津侯御別莊の地を給はる、此地は渡邊綱が老後に
住し舊蹟なり、則綱塚と稱るも在て、松樹を植て遺蹟
を標せり、寛文十二年夏、弘文院林
恕之箕田園の記を作らる○狂言師鷺氏、寛永中花
子の狂言より名を擧しが、後遁世して道仲と號し、橋
場總泉寺鏡が池の邊に住す、一口の鐘を鑄て、其銘に
本堂再建の趣意を記し、又池の中に辨才天の小祠を
建たり、今年七月廿七日、七十餘歳にして終れり、洞房
評園
はし○八月江戸中髮結株、一町に一ヶ所づゝ八百八株

に定る、按るに江戸町數八百八町といふ事、此時代の
事也、寛永のあづまめぐりに、
八百八町の事を記せり、今は千七百餘町に及べり○
今年日本橋御普請始る○九月十三日、唐僧隱元禪師、
攝州普門寺より江府に來られし時、湯島麟祥院に七
十餘日逗留あり、貴賤群集す、十五の時、
時六○深川海福寺
開創、開山隱
元禪師○同淨心寺開創、開山日
義上人○日暮里經王寺開
創○春山崎闇齋翁江戸に遊、秋歸京す、遠遊紀行あり
○今戸村百姓九郎吉が男九郎助、畑中の道に在し稻
荷社を吉原へ移す、是を九郎助稻荷といふ○九月明
の軍師國姓爺鄭成功、本邦へ援兵を請ふ、名は芝鹿、又森
三十九歳なり、日本
の寛文六年に卒す○東海道名所記成、淺井了意作
寛文中版行○【筈補】
御切米御張紙始て出る、一書に承應元
年ともあり、定火消四組始て仰
付らる、

○萬治二年 己亥

正月二日より三月二十四日まで、火災百五度に及ぶ、
諸人安さこゝろなかりしとぞ、玉露叢に、正月十二日二
十一日、江戸大火とあり○
日本橋を掛改らる、或書に昔は鹿相の橋にて在りしが、此時始
て勾欄擬寶珠等出來しといへるは、い
あ

らん、寛永のあづまめぐりの圖にもぎほうしゆあり。○三月山崎闇齋翁再江戸に遊、八月歸京す、再遊紀行あり、其餘數度東遊あり。○四月二十一日、永田馬場山王權現社、今の地へ御造營、今日御遷宮あり、舊地は御堀端にして、産根侯の殿頭殿御屋敷にてありしを、災後社地とはなし給へり、朱舜水先生、明末の亂を避けて日本へ來る、舜水先生の事、安藤爲春文を載せ。○七月二日、大風雨、洪水、淺草御藏二後通水に浸ると詳なり。○九月深草元政法師母を誘引し、身延山に詣けるに江戸へ下る、

紀行身延行記といふ、
身延行記、萬治二年亥、九月五日池上へまうてたるに、上人谷中へ出給ふといへば、諸堂拜みてやがて江戸へ趣きぬ、たそがれに日本橋のもとにつく、二階なる所に月を見て、
日本橋邊日本秋 更無一事掛三心頭 今宵新見江城月 影滿扶桑六十州
せばき所に並居て、つれづれなる儘に唐のやまとの文、ころ心に見つゝ、はや幾日にかなりけん、或は詩作り歌よみて心をやるかたもあり、母は六日のおしたより、その館にのみ居給へば、雲井の餘所に思ひやるこゝろして、うしろめたく忘るゝ時なし、或時新發意ども旅宿の月といふ事をよまんとてよめる、

千とまでくまなき影も旅ころも袖のみ曇るむさしの、月うきながら結びなれにし草枕明る夜をしき武蔵野のつき月もまたこといひかはせずみ田川都こひしき夜半の寢覺に
○下谷永昌寺に下谷長者住居の所と云、の墓とてあり、上光院殿本譽玄安居士、萬治二年亥九月廿九日とあり、年號新らしければ疑しけれど、長者の子孫の墓にや○神田川掘割の事、仙臺侯へ命ぜられ、今年御普請始る、明年にいたり、大川より柳原通り、御茶の水下通り、駒込吉祥寺舊地側より牛込にいたり、御外廊御堀出來して、大川へ通路と成る、此堀土を以て石川小日向に按てあり、飯田町下の堀とめば江戸川の掘留なりしなり。○今年より本所深川鐵砲洲に地を築、道をひらき川を通し橋をわたし、武家屋敷に御定めあり、其後天和二年、回向院と今の沫雪豆腐店の通り町屋計残り、其外本所の武士地町屋は上りて元の田畑となり、元祿元年又昔の通り武士地町屋となれり。○十二月靈巖寺深川へ移る、其跡町屋となれり、此地に有し圓覺寺藥師堂橋。○十二月五日、吉原三浦屋の名妓高尾死、轉譽妙身信女

と云、山谷春慶院に墓あり、又回所西方寺にもありて、萬治三年とす尾十人あり、山東翁の奇跡考に其考あり、又柳亭翁の高尾考一冊あり、夫梓に上せず、

篤庭云、高尾考は大田南畝の著述、京傳の補考あり、猶さましく説あるなり、無聲云、種彦の著述は高尾年代記なり、刊本あり、なほ京山又雀庵の高尾考あり

○今年より江戸町に斯道多く出来る○【篤補】或云、今年兩國橋を造らるとあり、是は今年より造り始て、翌年落成したるなるべし、

○萬治三年 庚子

正月十四日十八日、大火有し由、玉露叢にいへり○谷中延命院七面宮再建○本所回向院建立成、明曆丁酉燒死の死骸を葬り一字を創し給ふ、信譽といふ道心者日夜愛に念佛を唱へ、塚上に銅像の彌陀を造り安置し、又山門を建る、當寺二世住職となれり、この山門元祿の火災に罹り今なし、因○兩國橋始て掛らにいふ、此時代にはこの邊をも牛島とよべり、
幅四間長凡九十六間、始は大橋と呼り、後に兩國と改めらるゝと云、一書に萬治三年に御普請始り、寛文元年に成就すともいふ、廣買といふ書に、今の兩國橋往古は少し川上に、りたるが、度々洪水に落て難儀せしに、川村蘭軒今の所を見立て、言上し掛けはりしに、此方、流失の憂少しとあり、

題兩國橋

鷲峯先生

紅梁新建枕三長流 人是陸行吾在舟

疑似三猛龍橫臥勢 總州爲尾武爲頭

○木挽町五丁目、森田太郎兵衛始て芝居興行す、後々勸業
○五月霖雨出水○九月二十五日、御將棋所二世大橋宗桂卒、二本橋上行寺に將墓駒形の石碑を立○むさしあぶみ二卷梓行、明曆大火の事を記せる書也
此書の事既に上にいへり、

【無補】是夏御室宮日光御社參として下向あり、富岡八幡宮に詣給ひ、天下安全の御祈念あり、永き代の榮久しき此島のめぐみたえせぬ神垣の内

○【篤補】日本國中の寺社へ御朱印二百十萬石程を附せらる、

○萬治年間記事

上野に金銅二丈二尺餘の大佛の像、明曆萬治の頃、木食淨雲再建す、其頃は彌佛也、元祿に○芝口日比谷稻荷社勸請○大久保法善寺七面宮勸請○明人陳元贊、彼國の亂を避けて本邦へ來り、江戸三田臺町永壽山國昌

寺に偶居す、其時浪人福野七郎右衛門、磯貝次郎左衛門、三浦與次右衛門等に語りけるは、明に人を捕ふる術あり、我其技を見るにしかく、なりといふ、三人此術を聞其態を工夫す、起倒流柔術の始也、元禄は寛文九日、八十五歳にして尾州に終れり、起倒流柔術福野氏より寺田氏某に傳り、寺田氏より瀧野真高に傳る、真高の門人比留川某又加藤長正に傳ふ、長正は安永中の人にして、門人千餘人に及べりとなり、

篤庭云、この事貝原氏が和事始に出て、これを柔術の始めなりといへるは誤なり、もとより其事はありて居合といへり、今は太刀を抜わざにのみあひといふ、是等のこと考あれど、事長ければこゝに記しがたし、

○萬治の頃駿州阿部川の邊より、酒樂といへる座頭江戸に下り、諸人の慰に紙帳の内に入て、鳴物八人の役を獨りしてなすよし、一代女といへる草紙にいへり、八人藝のはじめにや、

○寛文元年 辛丑 八月閏 五月五日改元 正月十九日の夜、光物南より北へ飛ぶ、其光物半町程

も行く間、一天晝のごとし○正月二十七日、鷹匠町より出火、大手の邊、鍛冶橋京橋の邊、木挽町まで、武家方町屋夥く焼亡○勸進相撲今年より毎年續て興行す○二月より伊勢宗廟へ男女參詣する事夥し○三月十日、林讀耕齋卒、三十八歳、名守勝、號函三、子羅髮して春徳と號す○四月年號改りし時、

馬ならばいほどはれんうしの年扱もはれたりくわんぶんぐわんれん 奇跡考に出づ、其角が父○六月今度小奈木川通新堀出来、東順のすさびなるべし○六月今度小奈木川通新堀出来、人改御番所深川口に建、後に中川口に移さる(正誤)此記誤なり、此時迄深川口今の萬年橋の傍に在し中川の口に移されしなり○秋五十年來の豊作と云○八月三谷領城買に趣く者、馬駕籠に乗る事を停らる

○十月二十八日、江戸大火ありし由談海に出、其場所詳ならず○十一月三日、淺草堀田某侯藩内、鹽焔藏より火、近邊武家寺院焼亡、

○寛文二年 壬寅 家々松飾、今年より七日に取拂、是迄は十日也○正月歌舞妓もの唐織衣裳用ふまじく、又馬駕籠に乗り他行する

事を停給ひ、又葺屋町の河岸に在し一錢茶屋といふものを停らる、

篤庭云、此一錢茶屋は、何の故に停められしか、其の後貞享ころの晝、堺町に茶筥に茶を立て、出す茶屋の圖見えたり、これ一服一錢の茶屋なり、

○正月二十八日、元祖古筆了佐卒、九十一歳、古筆畫監の家代々古筆なり、○三月二十四日、午刻大地震○五月六日より二十日まで、日月赤き事紅の如し○九月平岩仙挂江東吟藁成○九月二十三日、小荷駄馬口付の者乗るべからざる旨、江戸端々へ定杭建つ○九月麻布一本松に増上寺退隱の地出来る○【無補】是年神田柳原の町屋を本所に移さる○江戸名所記梓行、了意作、○市村座へ下りし右近源左衛門、海道下りの狂言を興行して世に行はる、

○寛文三年 癸卯

正月二十二日、後藤七代顯乘終、八歳○五月天下に令して殉死を止給ふ○六月十五日、淺草に熊谷安左衛

門稻荷社勸請○羅山文集刊行、百五十五卷、六十本○龜戸天満宮、今の地へ營建、樓門心字の池反橋等成、此年八月祭禮、神輿行列等の儀式、宰府の例に習ふて本所の地を巡行す、梅翁句集に、本所安樂寺の新らたに成たる時、新地にもかくなるもの、○本朝編年録を本朝通鑑と改め給ふ○八月十五日、龜塚濟海寺の開山念無和尚、伊皿子遺往寺、味を行して往生あり○今年より天和三年に至つて、龜戸村に錢を鑄さしめらる、平安方廣寺の銅佛を毀ちて鑄る、龜戸にて鑄あり、梅翁句集、江戸本所、新錢座にて、す、風や吹出す天下一貫文、

○寛文四年 甲辰 五月閏 富賀岡八幡宮修營○飯田町御堀船入に命ぜらる○けんどん蕎麥切始る、價八孔づ、○七月七日、連歌師里村玄俊卒、五十歳、○市村竹之丞、玉川主膳等座元にて芝居興行し、續狂言引幕大道具立等はじまる、

○寛文五年 乙巳

正月五日、連歌師里村法眼玄陣卒、七十歳○秋絹布の長さ二丈六尺に定らる○八月肴商人、生鯉の古きを新らしく見せて售ふまじき旨、市中へ令せらる○八月

京都の醫師立野春節江戸へ下る、紀行あり、鎌倉紀行を合して二蒙集と云、春節は儒學又有職の閑えあり、霜月關東へ兩御門跡御下向の時、隅田川にて

歸るさの關屋の里に宿もあれなすみだ川原のあかの詠に

道見 親 王

○諸家深秘録の要を摘て云、江戸 木挽町に大和慶庵と云醫あり、又同町に伊達三郎兵衛、長谷川助右衛門といふ浪人、彼慶庵に入魂し、人々の出入或は公事訴訟、男女の媒約等の肝煎して、謝物を受けるが、或諸侯の息女縁邊の事に付、偽をかまへよからぬたくみをなせしかば、其事露顯して寛文五年八月追放せらる、其頃よりして謀計をなす人を慶庵といひけると云々、焉云、慶庵の事詳しく、
嬉遊笑覽にいへり、

○寛文六年 丙午

三月廿六日、人形のごとき光物東方に飛ぶ、長二丈餘○不受不施の僧配流○東叡山鐘樓建、鐘也○中村勘三郎が芝居にて總踊をはじむ、其圖芝居年代記等○九月一日、林梅洞卒、二十四歳、名教、號梅洞、○芝金杉海手百餘間の

とて、今年十月十八日十念をうけ、われは鐘樓大臣と成て、衆生の疫病を拂んとて、劍をもて穴に入、諸人念佛の聲とともに土を投入て片時に埋む、又揚善は十月廿日に至つて念佛數返に及び、四十七歳にして眠るが如く往生す、江戸中衆て知りたる事故、衆語群集する事夥しかりしといへり、以上江戸名所記の文を略す

○寛文八年 戊申

正月二十八日、乾の方より巽の方に竿の如き白氣立、夜四時頃消る○二月朔日未上刻、牛込酒井家御下屋敷より出火、御簀笥町、御徒士町、市谷田町に至る、同日又市谷天龍寺内より出火、御納戸同心屋敷、御鷹匠同心屋敷、上淨瑠璃坂武家方、六番町へ飛火して、五番町、二番町、桃町一丁目より六丁目まで、櫻田邊諸侯御屋敷、愛宕山ならびに近邊武家方、新橋まで海邊に至る、又御茶の水より出火、駿河臺邊、神田橋、鎌倉河岸、日本橋まで焼亡、三方の火事一所になり、武家町屋夥く焼失せり、又同夜五時、四ツ谷竹町より出火、御大名屋敷類火、

○寛文八年 戊申
御庭云、此時類焼の輩に御切米御役料共に三分一、當春御借米出る、類焼の四百石以下の者に拜借金

地を網干場に拜領し、同十戌年九月町割ありて新網町といふ○【笥補】御旗本の諸役人に御役料を給る、

○寛文七年 丁未 二月閏

三月府中六所宮御再建○四月飛鳥井大納言御下向の時、角田川にて、

鳥の名の都忘れて隅田川早瀬はわかずうたふ船人 難波中將

○五月梶井宮隅田川御遊覽あり、

こといはん鳥だに住まていとしく都は遠き隅田川哉

○七月の末吉川惟足翁、神道の學をもて召出さる、惟足の翁は神路山に深く分け入て、正直の教をひろめ、其道をもて家を起せし人也、又歌をもよみて世に賞せらる、觀吾堂は其號也、觀吾堂集、本所の社地拜領の後、神垣に祈りて願ひ叶ひければ、

神垣のれがひもみちて老のなみ立ぬにつけて仰ぐ御代かな

あふぐなり本の所をもととして絶たるをつぐ世のまつりごと

其外三首あり、社地を給はりしは延寶中の事なり、社地とは意富比の神社なるべし、本所の地むかし本庄と書し、元禄元年本所の文字にあらためし由或書に見えたり、前の歌に本のところ○目黒直指院場譽寂す、道心者如西入定す、直指院の場譽とて木食の聖なたこなたに千體づ、安置す、目黒原に庵を結び、往來の人をして念佛をすいむ、寛文六年二月被岸會の時、明年十月廿日往生せん事を知りて、諸人に告ぐ、又如西といへる道心者ありて、世の中の無常を感じて發心し、妻子を捨直指の弟子となりけるが、師に先立て往生せん

仰出さる、御歩行組頭已下は返上に及ばざる旨也、

○二月二日、日輪二ツ出るが如く見る○同月四日辰下刻、鮫が橋より出火、御大名屋敷類焼、赤坂町より日が窪へ飛火して、三田寺町武家地、高繩臺太子堂迄焼亡、又同日下谷車坂より出火、下谷御徒士町、廣徳寺前、夫より本所へ飛火、一二の橋町屋焼亡○同月六日未上刻、小日向築地武家かたより出火、新鷹匠町牛込御門の内へ入、此筋焼て田安御門のうちに入、又柳原侯御屋敷より出火、本鷹匠町、飯田町、冬青樹坂邊まで焼亡、右三日の火事、武家屋敷三千百餘軒、町屋百二十七町餘、寺院百二十九宇、百姓屋敷百七十軒といふ○三月吉原廓内に新道をひらき、堺町伏見町と號す、伏見丁は年寄の古堀なり○三月町人帶刀する事を禁ぜらる○三月關東御下向の時、

月花も籠になして仰ぎ見る雪を雲間の富士ぞ名高き

飛鳥井權章公

○夏諸國早○四月より馬場先御門明く、是迄は明すの虎の御門と幸橋御門の間へ新橋を掛らる○新宿より半

里北、飯塚村に土中を穿ちて、金像五寸の觀世音を得たり、背に刻して弘長二年二月とあり、里人草堂を營て安置す、夕顔の觀世音是なり○十一月十三日、後藤八代即乗卒、三十歳或書に、寛文八年江戸に三十三番の觀音札所始りて、右往左往に男女歩行、後には此事を停と云々○昔々物語に云、むかしは開帳又は寺々にて、四十八夜千日萬日の回向杯とて人集する事なし、寛文申年に始るとあり、

【筈補】一季居の奉行人、二日替と定り來れども、來春より三月五日替りたるべしと仰出さる、又御番三分一休始まる、

○寛文九年 己酉 十月間

二月四日、淺草十王堂焼亡○三月三日、流星東に行くと、聲雷の如し○奉公人出替り二月二日なりしが、今年より三月五日と成る○龜戸天満宮社地に法性坊を勸請し社を營む○七月蝦夷人亂をなす、十月までに松前侯より平げらる○七月十八日、俳人石田未得卒、八十餘歳、淺草寺に葬○八月十一日、大地震○大師河原鹽濱開

發す、開發人佐々木久左衛門、寺井喜左衛門、叶榮雲、泉市右衛門等なり、

○寛文十年 庚戌

五月十二日、辰下刻より巳半刻まで、炭の如く成物降、手に取上て見れば砂のごとし○八月大風○了翁僧都、不忍辨才天社の脇に地を築立小堂を建、内外の書籍を收て、諸人にをしませして紐とかしむ、天和二年東叡山に學寮を建て、書籍をこれにうつす○本朝通鑑成、二百七十三卷、羅山靈峰二先生編輯

○寛文十一年 辛亥

了翁僧都、不忍湖中新に築く所の地へ、輪藏を建る○白金瑞聖寺開創、開山本庵師、黃髮觸頭也○七月後水尾法皇、龜戸天満宮へ御震筆の額を賜ふ○青山海藏寺開創○七月琉球人來、正使金武王子、日光山へ参詣す○八月廿九日、南大風雨、洪水、淺草、下谷、小日向其外低き所、人家床上へ水乗る、本所邊の家、軒端迄水にひたる、六郷橋杭五十間餘ながる○十二月十二日、晴天震動あり、晝四時ころ灰降○【筈補】大坂御番代七月になる、八月は洪水の時にて道中難義に及ぶ故なり、

○寛文十二年 壬子 六月間

二月二日、牛込淨瑠璃坂敵討あり、奥平源八といふもの、同姓単人一類を討ち遠流に處せらる、此こと江戸名所記、むらさきのひとともにあり、その頃の狂歌に、かたれき、淨るり坂の、かたき討さても其の後流されにけり、延寶○二月、勸進太神樂に宿貸す事を止られ、大佛を荷せ町中勸進いたすもの、并うでがう、高足駄の行人宿御穿鑿あり、うでがうは人倫訓蒙圖腕へ又をつらねきたる形、物買にて腕剛とあり

筈庭云、うでがうは頭香の類、香を手に焼て經を讀むなり、さるを物貫が腕に刀を貫きたるを見するをも、痛を忍ぶ事同じければ、擬へて腕がうと云へるなり、後世すねを切て膏藥をうれると同じ趣向なり、

○閏六月晦日、大橋流筆道祖大橋重政卒、相州鶴沼邑空、乘寺に葬す

○寛文年間記事

○七月十一日、狩野元俊秀信卒、八十、五歳
不忍辨才天の島へ石橋を渡して、參詣の通路とす、此島は寛永中に築く所にして、離れし島にて船ならでは行通ならざりし也○品川御殿山へ櫻苗を植

させらる○軍學者山鹿甚五左衛門、名は素行、浪人なり、寛文中律を犯し、古主淺野侯の邸に幽せられ、延寶三年に至り免し返さる、貞享乙丑九月、六十四歳にて終る、牛込宗參寺へ葬す、山鹿流十八部の書とて編輯あり○江戸にて代八車を作る、八人の力に代る故號るよし、世事談綺に云、神書には、大八といふもの小石川築地となりし頃、土を運ぶ事を仕出しければ、大八車とて今も用る事也と記り筈庭云、世事談綺、この下に今は大八と書とあり、元祿頃町方觸書にも大八とあれば、もとよりしか書しなり、扱右の説紳書の説、いづれもひがごとなり、江戸には牛にかくるも人の挽も、皆この車なり大八とは大八町のことにて、大津の八町をいふなり、こゝは雜車のある處なれば、それになぞらへてしか呼るなり、猶考へあれど長ければ略す、

○始て元結を製、葉の一本に、永坂六本木の手前、麻布へ下る坂の下にて、文七元結とて名物の元結を拵るよし、いへり、世事談に、文七といふは元結に拵る紙の印の名なりといへり、頼林子に、文七にふまるな庭のつづりといふ句見え、また文七と云元結、こぎの事をいへるは、紙の名を直に製し人の名に用ひしなるべし、其角が茅場町の住居の隣にて、元結を製したることも見ゆ○此時代男伊達、六方組等あり、深見十左衛門など其魁首なりしとぞ○この頃俳諧師、未得、未琢、加友、一貞

正友、蝶々子、吟市等なり、其餘多し○隆達節、隆達は泉州堺の僧なり、世に在しは元和寛永の頃なるべし、程過て其曲節江戸に行れし成べし、弄齋節、土手節、加賀節等の小唄流行○淨るり語り、櫻井丹波掾和泉大夫、虎屋全平おし、永閑、近江太夫、語齋、土佐掾、薩摩外記、長門掾、石見掾、肥前掾等なり、淨るり小唄の事は、予が聲曲類纂にいへり、○春鱒、殘魚釣の事、江戸に知る人なかりしに、寛文中上總國の船頭五大力仁兵衛といふ者、鐵砲洲に於て釣始たるよし、漁人道しるべ安永三年印本にいへり○この頃、俠客の額を披上る事行れしなり、浪花の宗因江戸に來りし時、深見十左衛門が額を見て、「名月や來て見よかしの額きは、是廣く披上たるゆへなり、唐犬びたひは唐犬權兵衛が額づきより出たり、但し權兵衛は承應のころにて少し古し、小佛小兵衛といへる、も此ころの男連なり、

篤庭云、此句洞房語圖に見えたり、其文の書やう深見十左衛門が發句と思はる、

○寛文十一年より十三年迄梓行せる、遠近道印が江戸圖有、分つ北は新堀、駒込、雜司谷、西は青山、澁谷

南は高輪に至る、日本橋南二丁目、經師加兵衛板とあり、郊外を加ふる事、これに始る歟、

増訂武江年表卷之二 畢

増訂武江年表卷之三

○延寶元年 癸丑 九月廿一日改元

【只補】正月廿七日、夕刻、鷹匠町より出火、大手邊、鍛冶橋、京橋通、木挽町迄延焼○牛島弘福寺開創開山鐵牛禪師なり翌年に至り諸堂造營成○淺草正直齋麥始○九月十七日、後藤九代程乘卒、七十○十月廿二日、連歌師里村玄祥卒○十一月芝金地院、五山十利諸山總祿に命じ給ふ○十一月芝増上寺大鐘成、推名伊藤吉寛、これを鑄ると云、○十一月廿日、片桐石州侯卒、六十九歳、號宗關、石州流茶道元祖なり、紫野高林庵に葬す、○勘三郎芝居にて大名題四天王を上げ、續狂言を興行す、元祖勘十郎切舞臺、頗る盛なり、只誠云荒事の始て荒事をなす、役金太郎なり、

○延寶二年 甲寅

二月淺草大圓寺十王堂再建○二月廿六日夜、幅一丈許の黒雲、東より西へ棚引、空中橋を渡すが如し○【只補】六月辻籠三百挺御免、九年七月に至り停止せ

らる○八月西久保八幡宮内時の鐘、芝切通しへ引、若松藤右衛門が持と成る○了翁僧都、白金瑞聖寺に經堂を建、藏典其餘一萬餘卷を收む○國々洪水○松尾忠右衛門、今年薙髮して風羅坊、深川に庵を結びて住す、芭蕉一株を栽、世人芭蕉庵といふ、○十月七日、狩野探幽法印卒、七十三歳、三田大乘寺に墓あり、存存の内建置し所也といふ、○同廿四日、三國筆海堂卒、名正眞、能書なり、谷中自性院に葬、

○延寶三年 乙卯 四月閏

春天下飢饉、倉廩を發して賤民を賑給し給ふ○二月六日、古筆了佐卒、篤庭云、了佐は寛文二年正月廿八日改せり、この二月六日は了佐にはあるべからず○三月芝金杉新堀、船入出来る、只誠云、春芝金杉より日ヶ是先年被り付し、江戶火災にて延引に成しなり、○閏四月十四日、古筆了雪卒、六十四歳、無人庵と號茶事に名あり、○九月木挽町、山村長太夫芝居にて、始て曾我續狂言を興行す、此時の名題勝鬃曾我といへり、春、室町殿の御酒宴の興に狂言盡しを催されし時、京屋萬太夫、村山又左衛門等預りて、出雲のおくに其外男女交りて曾我狂言を催しける事なれり、されば歌舞伎に曾我狂言をなす事は古し、

篤庭云、歌舞伎事始妄説多し、信ずべからず、村山

又兵衛といへるが始めにて、明暦二年丙申、四條河原中島にて興行す、正徳三年四條河原名題改帳に、村山平右衛門、又兵衛伴より平右衛門と云とあり、これにても推て知べし、

○延寶四年 丙辰

【只補】三月朔日より、回向院にて石山寺觀世音開帳
○七月四日五日風雨、關東洪水、○九月鐵砲洲築地にて、寶生太夫勸進能興行、一本に春と、この間度々雨降○
八月十七日、儒醫野間三竹、京師柳谷に卒、名子俊、號靜軒、本期靈夢を講ずるの始也と云ふ。○九月廿二日夜、子刻増上寺丈室失火、黒本尊安置の處焰火盛なりしが、一人身を躍して烟中に入、靈像を捧げて庭に移す、其者を看たるもの或は僧とし或は俗とし、所見各異なり、又左足踝少し缺損ず灰燼の中を尋て拾ひ獲たり、これを接てもとの如しと云々、以上淨土國篇の文を略す、只誠云、此事延寶五年の誤なり。○十一月七日、暮六半時、吉原江戸町二丁目より失火して、西北風烈しく一廓焼亡す、此火廓外へ焼出て、本所中の郷にいたり

て鎮る、此時遊女十二人焼死す、開帳の後始て、燒る三谷箕の輪邊假宅にて商賣す。○十二月廿六日江府に火災あるよし、和漢合運に出、其方城未詳。

○延寶五年 丁巳 十二月間

四月八日、下谷池のはた横田七郎右衛門子なき事を憂ひ、兼て雜司谷鬼子母神を祈りしに、其舅木村伊左衛門、小網町三又川にして今日鬼子母神像を感得す、其後七右衛門が妻男子を生ず、翌年此像を本所本佛寺に安置す○七月中旬より、江戸中町々踊はじまり、美麗を盡すゆへ御制禁あり、紫の一本に、延寶巳の年いせ踊○只誠云、此踊を伊勢踊と云、わが君を、いせ踊松坂いせ踊と云、今新大坂町を花町と唱ふる事は、昔西本願寺横山町二丁目の東側にありしころ、標の花を商ひし家多くありし所ゆへ、かく唱へ。【只補】四月土佐掾、虎屋永閑、人形遣小山次郎三郎等、二丸に於て上覽あり、○四月初、日輪赤き事朱のごとし○五月林春齋春勝卒、三歳○六月二十九日、俳人松江惟舟卒、七十四歳、名重頼、俗稱大文字屋治右衛門。○八月二十八日芝如來寺五智如來の大佛入佛供養あり、再建○閏八月六日、大風雨、深川、本所濱町、靈巖島、鐵砲洲、八丁堀海上漲り上て家を損し人溺る、兩國橋損し往來止る、谷中法恩寺本堂梁折れて半傾く、了翁僧部再建のちからを助く。東海道筋所々浩波あふれて民家を溺らす○十一月晦日、酉の刻より坤の方へ廣サ二尺餘、長二十間餘りに見る白氣あり、其根の星を長空星といふ、十二月に至り没す○扶桑拾葉集成、三卷○【只補】二條大坂在番御合力米、御金にて下さるべき旨被仰出、

○延寶六年 戊午

珂碩上人、奥澤村淨真寺九品佛開基○東海道驛路鈴五冊梓行、作者未詳○歌舞妓芝居座元、四代目市村竹之丞伎藝の擧高く、容貌も美麗なりしが、故ありて無常を悟り、菩提の門に入り、今年二十五歳、佐藤兵衛憲清

發心して、西行法師となる狂言をなごりとし、舞納の日剃髮して、舞臺より笈を脊おひ、諸國修行に出る、後に本所五ツ目自性院を再興し、常行念佛を修す、世に竹の丞寺といふ、享保三年十月十日に寂せり、年六十五、只誠云竹之丞發心は延寶七年三月なり。○十月六日、狩野右京時信卒、三十七歳○同月八日、古筆二代了榮卒、七十歳、二歳。

○延寶七年 己未

夏大雨、大川筋其外出水○【只補】五月二十九日夜、堺町大坂七太夫芝居より出火、十五ヶ町類焼○十一月三日、浪人平井權八品川に於て刑せらる、諸人の知る所、故爰にいはず、但し歌舞妓の狂言に、權八の長兵衛を取組て作りしをもて、同じ時代と云ふ人あり、長兵衛は慶安中の人にして、權八よりふるし。○十二月十二日、連歌師里村昌通卒、六十歳、五歳。

○延寶八年 庚申 八月間

正月八日、茨木春朔卒、地黃坊權次と號し、大酒の體をあつめ、小石川柳町祥雲寺に墓あり、て酒職を催したる人なり、谷中妙林寺、奇跡考、江戸名所圖會に委し。○三月十日、朝五半時より四半時過迄闇夜の如し○京因幡堂藥師江戸にて開帳○三月築地西本願寺御堂再建、成る、西本願寺今年舊地より築地にうつりて、三月本堂建立

○延寶年間記事

永代橋八幡宮は、江戸を離れて參詣の輩も稀なりし

かば、延寶のころ社より手前三三町のうち、酒肆茶亭をつくり、餘多の女をかへ、洲崎の茶屋と號しけるとなり、此の地は海中へ築出したる島にして、遠くは房總の群山、近くは金城芝浦を眺望し、佳景の所にてありしとぞ、そは延寶の江戸圖によりて明らかむべし、此頃別當水代寺は島を放れてあり、今の所と覺し、○水鳥記二冊刊行、樽次底深が酒職草紙、○南畝先生の假名世説に、延寶二年の編國町の沙汰と云草紙を引ていふ、鹽瀬饅頭、笹粽、金龍山の千代がせし米饅頭、淺草木の下おこし米、白山の彦右衛門がべらばう焼、ふの焼にしてこまをけてくろし、延寶元年八月のとき、其色黒、八丁堀の松屋せんべい、日本橋第一番高砂屋がちりめんさんぢう、桃町の助三ふのやき、兩國橋のちやらたらう、芝の三官飴、大佛大師堂の源五兵衛餅、其色黃にし、云々、南畝先生云、延寶の頃の江戸の名物こゝに盡せりと云々、爰にいへる高砂やは、室町一丁目今に残りて、商家の軒の上におり、○仰願寺と號し、小さな蠟燭を作りはじむ、淺草山谷仰願寺の住持、京はしなる感前や九、○此頃俳

諧に江戸談林風といふ口調は、田代松意、正友等より起りて盛に行れ、又前旬付といふ事始りて行れ、元祿八九年のころ又行れたり、○堺町に、近江の國出生にておよめとよべる大女、尺三寸、又甫春といふ小男を見せ物とす、用捨箱に出る、○瑞雲云、甫春は難波に在、○江戸繪圖は、延寶の圖分けにて委しく見ゆ、本所、深川を加ふるは、寛文延寶の圖より始りしなるべし、延寶八年梓の内浦大本坂巻の江戸圖二巻あり、淺草橋通り五町長紙屋市兵衛開板とあり、凡江戸分間の圖は、遠近道印に委しくなり、兒玉壽昌が補益分間圖是に次り、遠近道印とは假名にして、遠近導引といふ意なるべし、但し何人にも知らず、寛文の頃より寶永のころ迄、道印が換のものありて、分間は一五分間、一分十間、一分十五間、一分二十間、一分二十五間、一分三十間、一分三十分、一分四十間、一分四十分、一分四十五間、一分五十間、一分五十分、一分五十五間、一分六十間、一分六十分、一分六十五間、一分七十間、一分七十分、一分七十五間、一分八十分、一分八十五間、一分九十分、一分九十五間、一分一時間、一分一十五分、一分二十分、一分二十五分、一分三十分、一分三十五分、一分四十分、一分四十五分、一分五十分、一分五十五分、一分六十分、一分六十五分、一分七十分、一分七十五分、一分八十分、一分八十五分、一分九十分、一分九十五分、一分一時間、一分一十五分、一分二十分、一分二十五分、一分三十分、一分三十五分、一分四十分、一分四十五分、一分五十分、一分五十五分、一分六十分、一分六十五分、一分七十分、一分七十五分、一分八十分、一分八十五分、一分九十分、一分九十五分、一分一時間、一分一十五分、一分二十分、一分二十五分、一分三十分、一分三十五分、一分四十分、一分四十五分、一分五十分、一分五十五分、一分六十分、一分六十五分、一分七十分、一分七十五分、一分八十分、一分八十五分、一分九十分、一分九十五分、一分一時間、一分一十五分、一分二十分、一分二十五分、一分三十分、一分三十五分、一分四十分、一分四十五分、一分五十分、一分五十五分、一分六十分、一分六十五分、一分七十分、一分七十五分、一分八十分、一分八十五分、一分九十分、一分九十五分、一分一時間、一分一十五分、一分二十分、一分二十五分、一分三十分、一分三十五分、一分四十分、一分四十五分、一分五十分、一分五十五分、一分六十分、一分六十五分、一分七十分、一分七十五分、一分八十分、一分八十五分、一分九十分、一分九十五分、一分一時間、一分一十五分、一分二十分、一分二十五分、一分三十分、一分三十五分、一分四十分、一分四十五分、一分五十分、一分五十五分、一分六十分、一分六十五分、一分七十分、一分七十五分、一分八十分、一分八十五分、一分九十分、一分九十五分、一分一時間、一分一十五分、一分二十分、一分二十五分、一分三十分、一分三十五分、一分四十分、一分四十五分、○延寶の江戸圖に今と替りたるをいさゝか左に誌す、佐久間町に愛宕下在、新鷹匠町、下村松町、新石町二丁目、今通也、二本板にもあり、鼠穴、新小田原町、俗稱なり、こんにやく町、神田はた、はんきの河岸一ツ橋より、相生橋、今のさし、戸越橋、戸越より北八丁堀、彦二郎橋、今云道三橋也、天和四年新橋、戸越橋へ渡る、今彈正橋、彦二郎橋の圖にはえつちう橋とあり、久右衛門町、向柳原井今の芝濱、法恩寺、上野清水門外入口、しみづ丁の跡、向所門前に、東叡山入口、右に半天神黒門、

左に池に添ふて本知坊あり、池の端通路地なし、神田やくし上の門前西側に在、かみすき町、淺草田原今の神田旅籠町、金澤町邊一圓に加州侯御邸なり、此頃今の湯島横町の所ありしが、後此地一日明地と成、はたご丁は今の邊へ引る、加州侯御邸は本郷へ引れて、其跡御旗本やしき敷軒ありしが、後また町屋となりて金澤町といふ、加州侯御邸やしきありし所ゆへにかよるなるべし、今の昌平橋を假橋としるす、今の英町の處、本多野州侯藩邸なり、今の堀田原の處、堀田對州侯御藩邸なり、兩國橋際、今の同朋町續新地の處、植木溜とあり、新古柳橋無之、兩國橋手前南の方は、すべて矢の御藏也、あたけ丸御船は本所御船藏前通りより東のかた、横堀にあり、今の萬年橋は元番所の橋とあり、兩國橋南の方川中に、唐船と記して一艘の大船を畫り、考、回向院山門あり、吉原にけんどん町あり、吉原南の通り也、紫一本にはけんどん、八丁堀寺院引て武家屋敷のみなり、本阿彌店、鐵洲十軒町、小島町、江戸町、志水町、水上町、いづれも西本、將監殿橋今海賊、白金瑞聖寺境内に蓮葉の形したる物あり、其上より水の湧出る處を畫けり、芝井町先海手に錢座

あり、赤坂氷川社根津權現社ともに舊地にあり、音羽町邊田圃也、龜戸天満宮向錢座なり、深川に彌兵衛町、藤左衛門町、介左衛門町、新兵衛町、佐左衛門町等有、越中島は柳原越中侯御邸也、永代島八幡宮海にさし出てあり、靈巖寺後は直に入海にて、永代島に對せり、

○天和元年 辛酉 九月廿五日改元

二月高田にて護國寺開創、上野國八幡別當護國寺住持法、淺草川廣がる、○諸國飢饉、○山王神田の祭禮隔年にな、是迄は兩祭禮年、毎に出しなり、○日蓮上人四百年忌、法花宗寺、○十一月廿八日、丸山本妙寺より出火、本郷駒込燒亡、○十二月廿八日、川田が窪より出火して、四ツ谷、赤坂、麻布、三田、芝牛町に至る、○今年兩國橋御掛替あり、矢の倉南脇より本所一ツ目の橋際へ渡る假橋を設く、今爰を元兩國といふ、十五年の後、元祿九年に今の處へ經營あり、○【篤補】大阪御番代八月となる、

○天和二年 壬戌

二月六日、市谷にありし護本山天龍寺類火に逢、翌年

四谷へ移さる○三月廿八日、俳人西山宗因江戸に卒す、七十○三月俳人石田未琢卒、未得の○四月琉球人來聘正使名○四月十七日、明の朱舜水先生駒込に卒、年八十三常州久慈郡瑞龍山下に葬す○四月廿九日、狩野雪信卒四十歳○七月儒師木下順庵召出さる、稱平之允○七月二日、大雷、四十餘所へ墮○同三日、落合泰雲寺開山白翁道泰禪師寂す○七月諸職人淨瑠璃語の類天下一の號を停らる○同月屋形船の寸法御定あり○八月朝鮮人來聘、正使尹壯寛、副使李彦綱、從事朴慶俊、本誓寺を遊館とす○【只補】八月十二日、石川常右衛門こと小山田彌市郎、千住にて獄門○九月安宅丸御船を解ひらかせ給ふ○九月了翁僧都東叡山内に地を給はり、學寮を建て、不忍中島より藏經を移し、經堂を建る○青山權太原長禪寺に、古銅佛阿彌陀像を安置す、應永十四年、彫たり昔東本願寺の内にありしを、大坂城中へ移されしが、落城の後江戸へ持來り、今村某が入丁堀の屋敷にありしを、當寺依念和尚に約して、今年九月送る處也とぞ○十一月晦日、戸田

茂睡が男伊右衛門卒、其墓所淺草金龍寺に在、此所を手辭世の時、茂睡が追悼の歌人の知る所ゆへのせず○十二月廿八日、未下刻、駒込大圓寺より出火、本郷、上野、下谷池の端、筋違御門、神田の邊、日本橋まで、淺草御藏、同御門、馬喰町邊、矢の御倉、兩國橋燒落、本所、深川に至る、夜に入て鎮火す、此火事に遇ふて財寶を失へるもの、或は燒死怪我人等夥しく、天神の臺死人多く、道路に悲泣のさまを哀憫して、學寮の了翁僧都、四年來貯へ置れし、書籍の料一千二百兩の餘を貧人に施せり、の時池のはた仲丁勤學屋の市店土蔵に火入て、多年求め置ける内外の書籍一萬四千餘卷灰燼となりしといへり、深川の芭蕉庵念火に、まれ、薪も潮にひたり煙中ながれしといふは此時の事なるべし此火事後、本所士民の家を拂せられ、元の田圃と成る○湯島に町屋を拂せられ、櫻馬場となる、

○天和三年 癸亥 五月閏
正月元日、大雨洪水○正月車長持を禁せらる、火災の時となりし○二月六日、市谷出火○二月十六日、牛込出火○武者小路實蔭公御下向、彌生晦日都な立給ふとて

【只補】三月五日、田宮望太郎卒、三十四歳、上野白觀成院に葬あり○本郷筋廣小路成る○三月廿九日、駒込片町八百屋久兵衛

天和年間記事

の娘お七、火刑に行はる、今年十六歳といふ、其額末世人の知か書たる横額を、ゆしまの拜殿に掲げたるが、今にあり、このお七は谷中七面宮のまうし子なるゆへ、かく名づけし由也、墳墓は駒込圓乘寺にあり、近世歌舞妓の輩再建たる所なり、卯花園邊に、江戸谷中感應寺の祖師堂に、つけたる、在靈鷲山法華第一と云額、八百屋娘お七十一歳の筆跡也、延寶四年辰春二月と書有之、又同書に、お七火刑は天和二年三月としるせるは誤なり○【只補】春米相場一兩に付一石七斗也、三貫九百文替、七月に至り一兩に付一石六斗となる○夏江戸大旱久○六月六日兵藤平内卒、無嗣一素居士といふ、俗にいふ衆の平内なり、駒込海藏寺に墓あり、耳底記に、青山主膳といふ人の家士にたりとあり○雲光院、本誓寺、法禪寺、彌勒寺等、去年の災後東神田の邊より深川へ移る、馬喰町の北にありし願行寺、駒込へ移る○十二月五日、江戸燒、合運に出、方角未詳無聲云、十二月五日夜、外神田本多伯州侯より出火日本橋通四丁目まで延燒、燒失町數二十九ヶ町、

○下り竹齋物語梓行、齋藤徳元が作、或鳥丸光廣御作と云、正保慶安の頃の編也しな今年印行せる由也○紫の一本寫本成、戸田茂○【只補】定火消五組新規に増仰付らる、去冬大火類燒の輩に、當夏御借米を當正月下さる、又唐織ぬい箔模様等の衣裳御制禁仰出さる、二月六日御達○【只補】連雀町筋違御門内に在りし青物市

場を今の處へ代地を賜はり移さる、是火除のため也、

安宅丸の御船を解せられし時、兩國西河岸にありし御船廠を、彼大船を置れし川の東岸の地へ移させらる○大屋形船を停らる、東國丸、淺草橋大船、神田大船、熊一丸、座敷九間、山市丸、間、蓋所一間有し也分て大船なり、其餘樓船の名、紫の一本、江戸砂子拾遺等におり、事跡合考云、天和の頃小山田彌市郎といふもの、諸人の金銀を隠り奪ひ取、或は人をも殺しけるが、晝は町に隠れ、夜は川岸に繋ぎたる屋形船に忍びたりし故、盜賊に恨りあるものとて、大屋形并町駕籠を止給ふ、町中元祿中御免ありしひと、月を禁られしとぞ○狭客深見十左衛門遠流、其後十八年を歴て、寶永中歸郷を許さる○千川上水出來たるは、延寶天和の頃なるべし、板橋の西の方、練馬の南のかた、石神の池の方より、本郷、淺草、及び柳原筋にわけられし水流を千川上水といふ、享保七年に至り止給ふ、又同じ頃本庄の内綾瀬川の水流を業平橋筋に引て、又本庄中に掛らる、を白堀上水といふ、是も享保中停らる、其上水の川筋、今も業平橋の東北の方橋際より、葛西領世

繼村の方へ通りて、小川一流あり、是則其白堀上水の筋なり、以上事跡合考に出

筈庭云、今は業平橋の東北の方に橋なし、是かの白堀より横川へ通ふ入樋の所なるべし、

○神田永富町の地は佐竹家、皆川町は對州家御屋敷にてありしが、天和中佐竹家は下谷へ引けて、其跡町屋となり永富町と云、對州家は松平下總侯御屋敷となりしが、後寶永の頃町屋となり皆川町といふ、松下町代地の所も、元祿頃までは太田攝州侯、神尾某御邸にてありしなり○この頃土佐節淨るり流行す○天和中、淺草寺經藏へ、商人の荷物を入置さし所より失火して焼亡す、後再興ありしとぞ○紫の一本に、日本橋一丁目鹽瀬が饅頭、糍町ふのやきは助惣よりはじまりける、池のはたのねん安煎餅、本所馬場の葛煎餅、芝の陳三官唐飴、飯田町の壺屋が饅頭云々とあり、此時代のはやり物なるべし○此頃はやりし唄比丘尼の内、神田めつた町多町なり、より出る、永玄、お姫、おまつ、

○貞享元年 甲子 二月二十一日改元

正月晦日、服忌令御定○元三大師七百年忌○知足院を湯島へ移し給ふ、舊地は神田の東にあり○弘法大師八百五十年忌○四月二十日、古筆三代了祐卒、四十○東福寺七佛樂師、下谷より麻布坂へ移る○【只補】寄相撲寛永年中興行、後度々願候へ共御開濟無之の處、貞享元年八月、寺社奉行本多淡路守殿へ相願、勸進寄相撲御免被三仰付二候に付、深川八幡宮境内にて始て興行す○九月二十二日、官醫岡本玄琳卒、麻布詳雲寺に葬す○九月大風家屋を吹倒す○十二月圍碁師保井算哲、天文職に被三召出、算哲は天文に委く改曆の事を司り、貞享一層七卷、貞享曆法通書五卷を編述せり○甲子江戸鑑刊行、松會開板、武鑑板行の始といふ○來丑改曆頒行、但宣明曆を改給ふ所なり○【無補】六郷橋破損修覆、長百十一間幅四間半、一話一、言に出

○貞享二年 乙丑

二月二十二日、流星東南より西北へ飛、其光數百里を照す、暫く有て空に響あり雷の如し○春三田魚籃觀音開帳、淺井了意の時本尊を拜して、御縁あれば、この祭音を三田の山脇にて又もきよらんじはせし○五月伊

長傳といふが名とりにてありしとぞ、しゆすか羽二重の投頭巾をかぶるによつて、これを縞子鬘と名づけたり、又寶永の頃までありし、綿摘といひしも土妓にてありし○此時代北島雪山が書行る、一本北村氏とす、本の産にして、代々三立と號し加藤家の侍醫なり、加藤家の關國を細川家に封するゆへに、三立も又細川家に仕ふ、其父三立も學文をこの川、長崎に住し唐人に會す、雪山も幼より學文手習ひし、唐人より撥燈法を口授して能筆の聞えあり、黃蘗隱元師の書記獨立雪山と方外の友としたり、雪山の事不問と也、或とき獨立曰、いかに書ても筆力足らずと滑稽したるなり、雪山江戸に來り、黃蘗の僧と同伴して青海山海蔵寺に來る、後室町淨世小路に偶居す、時に延寶年中なるべし、門人五六輩あり、廣澤も其一人也、くはくは二老時傳にあり、二老とは雪山廣澤の二老なり、又近世時人傳にもいふ、その傳を舉たり

○池の端錦袋圓行る、勸學院の了齋僧部は、羽州の産なり、幼より佛業に歸し、一代藏經を築集せん事を發起し、難行を修しけるが、寛文二年に至り、去年手燈を燈せし一指桶事甚し、しるるに夢中肥前興福寺の開山如定禪師より、藥法を授り、領に平愈を得たり、錦の袋の内より取出して授られたり、とて錦袋圓と號す、後東三山に歸り、表七間裏行廿二間の市店をひらき、此藥をひききて志願成就の料に充、此藥神効ある事遠近に響渡る、是に隨て江戸井近在にても、似せ藥を調合して賣るもの幾人といふ事をしらず、美童を運て五十人余を養ひ、市中を徘徊して賣らしむ、或人これを了齋に告て云、是を助ずんば足下の業は行々廢るべし、若廢たらば、大願かけ救んが爲なり、若彼輩藥を賣て、妻子の便りともならば本意の一ツなりと、或人又曰、若彼が藥人に崇あらば、其料は足下に歸すべし、答曰、日月は未地に落す、仰て天に任すと、問答數回にして互に大笑し、とぞし

○貞享三年 丙寅 三月閏

正月一日、古筆四世了周卒○閏三月、利根川西を武藏とし、東を下總と定給ひ、葛飾郡二ヶ國に分る、兩國橋深川本所の地は、葛飾郡西葛西領にして、上代武藏國なりしが、より東中古下總に屬せり、今年昔のごとく武藏國に屬せしめ給へり○四月服忌令御改、元祿元年五月尙追加、又同四年九月追加、同七年正月御改あり○九月品川御殿成○九月小石川白山權現祭禮、始て本郷通りを渡す○九月大小神祇組と號したる惡黨を罪科に處せらる、神祇組とは黨を結ぶ誓言也、安齋、淺筆に仁木組とするは付會なり○【只補】小日向馬場出來、

○貞享四年 丁卯

三月十八日より、淺草寺觀世音開帳○同寺二王門外、金銅觀世音勢至像建立、願主上野國邑樂郡高瀬善兵衛直房伊勢丁成井善三郎親恩のため

立 ○江戸惣鹿子七冊梓行、作者藤田氏 ○七月二十二日より二十六日迄、本所に於て寶生太夫、勸進能興行 ○女用訓蒙圖彙板、此時代の風俗 ○三田實相寺貞女塚、念譽愛正信女、貞享四年丁卯十二月十二日とあり、靈巖島東邊勢屋某の娘よしと云、家に在て父母に孝あり、後高輪なる村田伊右衛門といふ者に嫁して貞操あり、不幸にして早く夫にわかれ、父母再嫁の事を進められたれば、ひそかに食を減じ、日をへて其年師走病に臥し、夫より食を断らて終る時、紅葉するなべての霜の後までも松の葉の色はかへせし、風調整はずといへ共、その貞操言外にあふる、三田に實相寺二ヶ寺あり、これは藤田家照山實相寺のたたり、

○貞享年間記事

貞享元祿の頃より、四ッ谷新屋敷へ武士屋敷追々に下さる ○貞享中洪水あり、六郷橋流る(説云、六郷橋の流れた四日十二日、兩度の雨に損じたるよし一話一言に見ゆ) 夫より掛る事なしといへり、武藏志料に、中古田中丘隅宿驛の爲なりとて、船渡しにせしよしといへり、同書云、中古江戸の三大橋とは、兩國、千住、六郷の橋をいひしよし、元祿の頃老人の物がたりあり ○駒込光源寺大觀音造立、江戸の町人丸屋吉兵衛寄進也、此時神田の運番町にも町屋敷を求めて當寺に寄附し、今に香花の料に宛つ〇聲云、吉兵衛は總問屋なり、當時の唄に、神に見ゆるは丸屋の船よしと ○千解通し江戸にて始る、いひしは、此吉兵衛が家の事なり ○大門通り釘屋喜兵衛といふもの、工夫にて出来しと

いふ ○此頃河村隨軒南新堀一丁目へ移る、鹽町へ入南角丁一圓に住居なり、河岸に土藏四棟、藏より川岸まで五間の通り道丸太矢來、土手に芝を伏せ、裏門南新川也、表門は濱町通りに開き、居室五葺土藏造なり、明曆災後町屋瓦葺御停止になりたれど、隨軒がやしき計りは御免ありといふ、隨軒は諸國の新田を開き、水理を考へ國々開發の事を司り其功少からず、元祿中 ○貞享の頃より、大森村新らたに召出され、新地を給はると云 ○貞享の頃より、江戸圖、淺草花川戸を船川戸とあり ○好古日録云、婦女の普く用る筭は、貞享年間御厨子所預り、故備前守はじめて工人に作らしむ、後纒に十數年にして、宇内に弘まりたりとあり、

笥庭云、こゝの説いとみだりなり、好古日録筭字を書たれど、是はかんざしなり、からがいは古くよりあり、今世用るかんざしは、御厨子所預若狭守紀宗直圖南老人と申、此人若かりし時、北野に開帳ありしとき、或る商人に教へて、釵に耳かき造りそへて賣らば、流行べしといはれければ、やがて作り出でしに、果して行はれたりといふこと、屋代氏其家にて親しく聞かれたりとぞ、圖南老人は寛永の初頃

生れし人なれば、若も頃は享保中なり、曳尾庵が我衣に、享保よりかんざしと名付る物、上は耳かき下は髪かき、銀にて作るとあるに叶へり、日録は誤りて書るなり、其上筭字杯書たるは、筭とをもへる歎笑ふべし、そをこゝに擧たるは、誤りを重たりと云ふべし、

○元祿元年 戊辰 九月晦日改元

當春本所の地へ、元の如く武士屋敷町屋をかへされ、繁昌の地と成る、此時より本の所へ歸りたるとて、本庄を本所と改るよし、前板の書に載たるは誤なり、吉川氏の歌を引て ○淺草靈山寺本所へ移る ○九月神田明神祭禮、神輿練物始て御城内へ入る ○十月三日、儒師西山健甫卒、名順泰、坂本養玉院に葬 ○【只補】此月中旬、本所時の鐘再興 ○十月十八日、連歌師里村昌程卒 ○十一月神田橋御門外に智足院を移され、御祈願所となり、乙亥年より改て筑波山護持院元祿寺と號す、此時湯島より移り諸堂に列し、新義僧に命ぜらる ○【笥補】二條大坂在番衆も御合方米、江戸御張紙直段にて被下へ、旨仰出さる、

○元祿二年 己巳 正月間
正月十二日、儒師今井弘齋卒、號魯齋、本郷喜福寺に葬す ○正月十六日頃日老人星現す、老人星は吉事の端なり、治平福壽を主とする星なりといふ ○五月十六日雨天、三十三間堂にて伊達家の臣福井淺右衛門、矢員五千三百六本を射て江戸の天下一と成る ○十月婚姻の時の水あびせ御制禁あり ○十月二十五日夜、異星異の方に出る ○十二月北村季吟翁并男湖春被三召出、歌學方の始なり、同七年法印に敍す ○江戸圖鑑綱目板行、畫工石川流宣俊之編圖一枚、本一册 ○再訂江戸總鹿子板七冊、松月堂不 ○【笥補】小譜請御役金上納始る、是より先は人足を出せり ○【只補】松平越州侯屋敷を淺草平右衛門町に移され、跡地橋町村松町となる、

○元祿三年 庚午

二月虎御門外太左衛門町より沙留まで、大工町より元材木町まで廣衢となる、長崎町の廣衢を廢、長崎丁のは南濱治町と桶丁の間、鐵砲洲築地海邊に屋宅を建しめ也、其跡南大工町となる 鐵砲洲築地海邊に屋宅を建しめらる、火災の時の爲なりとぞ ○四月十五日、不忍池邊荷葉庵に空無

上人萬日念佛會滿散、道俗群集し十念を受、手書の名號を乞ふ事夥し○五月谷中感應寺今天、丈六佛建立、願主末詳○十月淺草寺御別當傳法院と成○鷺峯文集百二○十二月十七日、金彫工横谷宗與終○東海道分間繪圖梓行、遠近道印撰、○十二月二十二日、昌平坂大聖殿上棟、是まで忍が岡にありしが、今年この所へう○【筈補】御番三分一休無用と仰出さる、

元祿四年 辛未 八月閏

正月湯島に大聖殿御普請成る、上野よりうつる、此地已前は林家の持にて馬場にてありし也、此度新たに十哲の神主を設られ、七十二賢并先儒の像は、畫工狩野洞雲はな畫く、二月に御遷座ありて、同十一日釋奠あり、豊島町は此時聖堂の地廣がりしは、今の所へ代地を給はりて移たる也○二月より相生橋を古名いもあ昌平橋と改らる、

碩大成殿新落

芝山

登々昌平坂、我々士山東、新度ニ新經始、後忽成ニ廟宮、功依ニ勝地、莊親登ニ清尊、畫棟麗輪奐、鑿畫蠶玲瓏、四配玉床下、雍容珠箔中、三才抵ニ太極、六經定ニ折衷、禮樂乎雅節、文教克磨礱、山知ニ仁有、樂川躬ニ道問、窮時否欲ニ浮海、栢々歸ニ魯門、豐祀誠知、在、吉國、推芳權、神明水降、監、國酢齊ニ乾坤、春入ニ舞雩節、化雨澤、黎元○四月麻疹流行○同九日、俳人一柳軒不卜卒、本所法恩寺に葬

元祿五年 壬申

○同十日、俳人福田露言卒、六十○四月碑文谷法華寺、谷中感應寺、市谷自證院、法華宗悲田派をあらためて天台宗となる、七月日蓮宗悲田派の僧伊豆島々へ流さる○今川橋通り小川始て掘割る○六月十八日、紀州根來開山覺鑊上人、來年五百五十年忌、興教大師と諡號を給ふ○七月官醫半井ト養、罪あつて伊豆三宅島へ流さる○八月湯島靈雲寺御建立あり、開山淨○十一月十九日、茶人清水動閑卒、弘福寺に葬○慈濟庵空無上人、勸化して造る所の金銅立像の六地藏尊、開眼ありて江戸六所に分つ、寺院號并縁起等東○俳優水木辰之助鎗踊所作行はる、五元集、辰之助に申遺す、すい、○骨董集に、印本大張子を引て、了意大徳晚年に及んで筆力ます、老健なり、元祿四年寂せられしとあるを、淺井了意が事とす、しむるに高屋柳亭翁の說に、此時了意といふ人二人あり、淺井了意は俗也、今一人の了意は僧なり、ともに著述の書ありしとなん、こゝにいふは何れの了意にや詳ならず、されど大とことあるを見れば、必ず僧の方なるべし、柳亭翁は筆記などもありしならんを、泉下の人となられて問ふよしなき、そはひなけれ○坊庭云、唯に問ふに及ばず、○【只補】深川永代其の著述大に相違せり、見て知らる、なや、○【只補】深川永代寺にて、相州箱根權現及曾我兄弟の像開帳、

正月元日、未申の時日蝕、七分○淺草寺觀音堂御造營

○大塚護國寺諸堂御建立○六月五日より、信州善光寺前立如來、回向院にて開帳、本田善光夫婦子息三人の像、此度開帳に付江戸にてつくら

○八月御菓子司大久保氏忠宣、父母と俱に鎌倉にあそび、扇が谷善光寺の境内にて、五寸ばかりありける那木の葉をとりて歸り、牛島長命寺に栽たりしが、次第に榮えて三丈餘に及ぶ、嘉永の今に至りても猶盛なり○九月淺草川諏訪町より聖天町まで、殺生禁斷の高札を建らる、

元祿六年 癸酉

春作州誕生寺法然上人自作像、江戸に出て開帳、其寺院未詳

○【只補】春不忍辨才天開帳○四月儒師鶴飼鍊齋卒、名眞福、稱金平、駒込龍光寺に葬○夏中、馬の物を云て世上に疾流行る事を告たるよしの妖言、一般の噂となりて、これを除く薬法の書物を梓行せしが、やがて此妖言を言ふらせし者どもを刑せられしと聞えし○五月鷹匠町を小川町、小石川餌差町を富坂町と改らる、只誠云、此改稱は、豐七年のことなり

六月二十八日、俳師其角三圍社邊に雨乞の句を吟ず、奇跡考に、舉一堂の記を引て、ことし天下旱魃にして田面水なし、其角雨乞の句を作り、須臾にして雨降るといへり、其草當社に傳へてあり

○【無補】七月七日、大風雨○七月新大橋成、兩國橋舊名を大橋といふ故、夫に對して新大橋といふ、元祿五年の冬、深川大橋なれば、りけるとき、初雪や、けりりたる橋の上、芭蕉、同じく橋成りし時、ありがたやいた、○八月二十九日、其角が父板本東順卒、二本橋上行寺に葬す、葬送の場にて、○【無補】是月淺草に初て柳橋を架す、

元祿七年 甲戌 五月閏

正月八日、狩野洞雲益信卒、上野護國院に葬す○四月二十九日、品川東海寺燒失、無程再○六月湯島靈雲寺、關八州真言律の本寺と成る○六月二十六日、杉山檢校信一寂、八十餘歳、彌○七月淺草大護院に新たに八幡宮を勸請せしめらる、一説に元祿五年とも云、當寺昔は文殊院と云、此頃大護院と改む、慶安四年十月十六日、羅山先生翠弟子を會して詩作ありしと云へる○八月正覺山月桂寺十刹に列す、文殊院は、則當寺の事なり○八月正覺山月桂寺十刹に列す、七十歳、號蓬雪、稱樞十郎、遠州侯次男にて茶事に名あり、深川淨心寺に葬○深川宜雲寺開創、世に云一○高田穴八幡宮社地に氷室明神を勸請す○江戸名所話板行、七○増上寺三

十二世貞譽上人、大僧正に任ず、是より代々大僧正なり。○十月七日、奥澤村淨真寺開基珂碩上人寂、七十。○十月十二日、芭蕉翁浪花に寂す。○十一月十五日、歌人山名玉山卒、名義豐、市谷谷。○同十六日、吉川惟足翁卒、七十。○十一月新吉原大門口へ高札を建らる、九十。

元祿八年 乙亥

○【只補】二月三日、武家屋敷地町人に貸置くこと停止せらる。○二月八日未刻大風、四谷傳馬町より出火、芝札の辻海邊まで焼亡。○三月儒師谷一齋卒、名松、號已谷寺に。○柳原柳森稻荷修營、境内構等成就。○五月官醫余語古庵卒、八十歳、駒込。○五月黃蘗隱元師に國師號を追贈し給ふ。○七月護國寺大僧正に任ず。○八月朔日、本所羅漢寺入佛供養あり、五百羅漢像を排列す、是松雲禪師禪師は大がた黄蘗の模刻なり自ら勸化して刻する所あり、諸堂諸堂は元祿金銀といふ、本郷に。○九月明の心越禪師寂、水戸紙園寺に葬す、蕨山の模刻なり。○九月より通用はじまる、元祿金銀とてこれを吹く。○十月中野に犬小屋を建らる。○十月十六日、東叡山二世公海僧正遷化、壽八十九。○十二月數寄屋橋

邊より出火、新橋まで焼亡、

元祿九年 丙子

永代橋始て掛る、百十間餘也、此橋のいらざる前は、船渡しにの幸橋を永代橋と云けるよし、或書に見えたり、永代。○正月十四日、官儒人見友元、野州市場に卒、名節、○四月牧野侯御室、洪鐘を鑄せしめられて、羅漢寺に納らる。○五月二十四日、上野中堂本尊藥師如來、江州志賀郡石津寺より遷させられ、同二十七日十二神日光月光像、出羽國山形立石寺より移させらる。○金銀宿座を定らる。○六月十九日、大地震。○十一月十六日、東叡山中凌雲院主慈海僧正遷化、これに世に慈海本といふ。○十二月十二日、水府侯儒臣平野雪蘭卒、谷中養泉寺に葬す、碑文は年山紀間に有、

元祿十年 丁丑 二月閏

五元集拾遺、大小の吟、大庭をしろくはく雷師走かな 其角。○正月十五日、北村湖春卒、五十餘歳、五元集、湖春をいたみて、泣てよむ短冊もあり花は夢 其角。

○正月法然上人に圓光大師の謚號を給ふ。○龜戸村にて銅錢を鑄さしめらる。○下谷五條天神今の所に建、昔は上野に在、明曆火災後瀬川時春が家に假初に鎮座ありしといへり、今年移されし瀬川昌徳の宅地也。○酒連上御定。○五月八日より新大橋に於て、寶生新之丞勸進能興行あり、寶生太夫助。○六月一朱金通用始る。○同月曆間屋十一人に定る。○七月より護國寺觀音堂、護持院大日堂御建立。○九月龜戸天滿宮神事の法式、白川吉田に便らず、太宰府の例に准ずべき旨勅許を蒙る。○十月十七日、大塚上ノ町より出火、善心寺、小日向、牛込田安御門、代官町まで焼亡す。○飯田町世繼稻荷の地、松平近鎮君の藩中の鎮守なりしが、災後此邊町屋と成、神主願にて翌年建立すといへり、延寶の江戸圖を見るに、坂の下ばかりを飯田町とししてあり。○

【只補】東叡山中堂瑠璃殿御建立、

元祿十一年 戊寅

正月十三日、畫人桃田柳榮卒、名守光、號幽香齋。○三月河村隨軒召出され俸祿を給はる、天和三亥年類柑子には、貞享甲子年に

あり大坂川々御普請を命ぜられ、功成江戸に歸りて平太夫と改たむ、安治川も此時成れり。○五月小石川御殿御造營、是を白山。○六月九日、醫師板垣宗愴卒、淺草寺に。○七月儒師岡井碧庵卒、名泰、號東阜、高輪東禪寺に葬す。○七月深川海手一萬坪を築立らる、洲崎と號、○誠云。○七月芝三田新堀白金御殿迄掘しめらる。○八月朔日、永代橋今日より往來成る。○八月東叡山根本中堂、文殊樓、二王門并山王社今の所へ御建立、二十八日中堂入佛あり、九月三日供養、五日より諸人參詣をゆるさる、江戸の貴賤一時に輻輳し、山内雖も立るの地もなかりしとなん、門前の町屋をひらき、廣小路とせられしも、この時なり、平水町、八軒町、六軒町、車坂町のうち、井に柳町黒門町等取拂せられ、神田と西の窪へ代地を給はる、南郭文集、東叡山瑠璃殿、

一旦經營結構新 入門何處避紅塵

玉樓金殿高多少 不庇貧民七尺身

○九月六日、瑠璃殿の勅額到着あり、此勅額は持明院基時原に中堂の壁横の丈尺少しも違ひなく量りて、其二重の棟を竹木を以て造り、棟間正面に榜題板を打、白紙を以て文字を施し試み、能くとのひたるを清書して觀覽に備ふ、御入筆ありて後彫刻し、漆塗落を施し、金具を調へて紫宸殿の前に修て、直に關東へ下し給ふと云々。○同日巳刻過、新橋南鍋町より出火、南風烈しく大名小

路、通町筋、神田、下谷、上野御本坊、淺草、山谷、千住、掃部宿に至る、凡三此時淺草三十三間堂焼けて、元祿十四年に至り深川に建、數寄屋河岸、鎌くら河岸八間の道幅十五間と成る○三島明神社坂本に有しが、東叡山中堂出來後、淺草田原町に移る○十二月十日、本石町二丁目より出火、日本橋、靈巖島、八丁堀、鐵砲洲佃島まで焼る、日本橋焼落て人多く死す○十二月晝工多賀湖湖滿せらる、四十六歳、吳服町一丁○十二月二十三日、儒師木下順庵卒、名貞幹、稱平之允、千束村に葬す

○元祿十二年 己卯 九月間

兩國横山町續矢の御藏、去年災後今年二月西門跡の東南の海岸へ移されしが、汐風にて御米ふけしゆへ、享保の始頃淺草御藏へ一所に移されしといふ矢の御藏跡は町屋廣小路となり、大つたは米澤町と成と云り、矢の御藏の地は寛永の圖には寺町とあり、承慶の圖には御藏やしきと記り、則矢の御藏なるべし、延寶の圖にはたしかに矢の御藏と記せり、其御藏四丁程も有しとなり、名勝志にはハッの御藏ありし故、ハの御藏といふよし、有し△武藏志料に云、御藏は柳原の末に在り、世に新柳橋といへるは僻事也、是に異説あり、兩國の南榮研堀に、いれる橋を、元柳橋といへるに對して、いへると思ふはわるし、此橋は難波橋といふ、此所はいにしへ兩國橋の所にありしゆへ、元兩國といふ故に、今に矢の庫へ行所に

廣小路あり、昔は廣小路の南の方に大溝あり、是昔の矢の庫の外垣の溝なり、元祿の古圖にて知られたり、此後矢の庫を引れて、その跡眞鍋氏の第宅と成る故に、今に至りて眞鍋河岸の名残れり、又今は其眞鍋氏も宅を移して、五庫の別荘となれり、眞鍋氏の支流僅に其故地に在るのみ、是久しからぬ事ながら、後明が若き時見し事の○二月祐天和尙生實大巖寺に住職○四月四日、日本橋邊より出火、筋違御門まで焼亡○四月四日、役の小角千年忌法事○八月十九日、大風○九月六日、河村隨軒卒、四谷天葬○【篤補】御旗本諸士へ御救金を給る○【只補】麻布新堀出來、

○元祿十三年 庚辰

二月下谷車坂より出火、淺草邊御藏前通り残らず焼亡○護國寺にて城州嵯峨清涼寺釋迦如來開帳、四月二下向ありし由なれば、五月より開帳始りしなるべし、日数は八十日の間也、此本尊江戸始ての開帳にして、貴賤群集夥しかりしとぞ、廻らばまはれふるまひ○永代島築地六萬坪成○八月十七日より、葛西飯塚村夕貌觀世音出現より卅三年目にて開帳○深川佐賀町今川町の邊にありし材木問屋、六萬坪に地を給はりて引移る、今の木場なり○水木辰之助、山村長太夫が芝居にて、七變化の所作をはじむ、

誠云山村座にあり○【篤補】當春御借米の高半分宛御金に下さる、但今年初の儀なり、

○元祿十四年 辛巳

正月元日、卯辰刻日蝕、分八或記云、永代橋の邊に大河内何某殿御屋敷ありしが、今年正月元日、玄關へ何の故とも知れず女の首級あり、人々驚しに、歳首に人の頭を得る事、武門の祥瑞なりとて是をまつり、堅牢地神に崇む、世人誤ておける、後には何もかも遊女高尾の社なりと云ふらしけり、今も永代橋の側に小祠あり○二月十九日、古筆五代了珉卒、七歳○二月天滿宮八百年御忌來年相當に付、龜戸社に於て詩歌連俳興行あり、五元集、其角の句に、松梅やあひむる年も八百所○三月京眞如堂太秦太子江戸にて開帳、其寺院、未詳○三月十四日、淺野家吉良家事ありし日なり、世人の知る所ゆへ爰に贅せず○三月麻布御殿初て出來○三十三間堂深川に移建立、五元集、三間堂、若草やきのふの筒見も木綿賣、其角○深川洲崎吉祥寺開創、辨才天を安置す、開基知足院、隆光僧正○飢饉によつて、本所法恩寺前に非人

小屋を建らる○十二月和人參、長谷川安清、香具屋信濃の二人へ高ひ御免あり○【篤補】當春御借米又前の如く御米計り下さる、

○元祿十五年 壬午 八月間

二月十一日、四谷鹽町より出火、青山、麻布邊、芝浦、品川に至る、この時麻布御殿、品川御殿、妙國寺五重塔、二王門焼亡、品川御殿御再建なし、妙國寺の塔もこれより絶しなるべし○二月十五日日本堤の上に傍示杭を立らる○春より葛西飯塚村夕貌觀世音、江戸并近在より參詣群集する事夥し、村長の家より、夢想の藥として出す、神效ありとて諸人これを求む、又江戸所々の寺院へも五七日づい、出て開帳せり、此堂地は寺に非ず村内の持也○天滿宮八百年御忌、西行上人五百年忌、宗祇法師二百年忌○四月高田水稲荷靈告、榎の控より靈泉を出す、眼疾を憂るもの洗ふて驗あり、水いなりの名は、此時より始しか○【只補】四月五日曉松平美濃守屋敷出火、○六月二十七日湯島靈雲寺開山淨巖和尚覺彦比丘寂、世壽六十四といふ、近世の碩徳と聞えし○閏八月二十一日、歌人北村正立卒、季吟の二男なり、谷中瑞林寺中玄妙院に葬○寺島村

百姓傳左衛門が娘、此地の叢中より不動尊の像を得たり、當所法泉寺に納む、新田義貞朝臣廟の中に籠られし守本尊なるよし、靈夢の告ありしゆへ、不動尊○貞徳翁五十年忌霜月十五日、靈夢の心を、帶解○十二月十四日、淺野家の義士四十七人本意を達す、事は人口をもちて、いにはず、

○元祿十六年 癸未

二月四日、淺野家四十七人自盡、泉岳寺へ葬す△頼柑子に、寒島の身はむしらる、行衛哉子、靈臨終に、梅てのむ茶屋もあるべし、死出の山、二句ともに、其角作なり、或家秘書、義士の事を記せるものあり、引用の書

赤城盟傳、赤城紀談、介石記、追加介石記、介淺記、新撰大石記、權花集、赤穂忠臣記、武家明鏡記、易水連珠錄、義人錄、室直清、忠士筆記(淺見安正)、山科の間書、忠義碑文(忠義碑の三字は二條右大臣綱平公御染筆、三宅九十郎傳明作)、楠石論、瑞光院記、義士考、義士傳、義士絶筆、蓬窓記、鐘秀記、義士文通、春蓬赤穂四十六士論、繪本忠臣藏、赤穂義臣傳(享保己亥片島武短)

○二月九日、儒師松田晚翠卒、落合泰雲寺に葬、了然尼の夫なり、○小柄原日慶寺再興○三月麻布赤坂邊焼亡○四月二十一日、石川備中守殿の臣梶川何某の子勝藏、十二歳にて深川三十三間堂に矢數を射る、幕方より翌日午刻迄、其矢數數壹萬二千二百本、通矢一萬十一

本を射る、更に勞れたる氣色なし、終て後主君の若殿來り給ひしかば、又百餘本を射たりしかば、即座に百石の恩祿を給へりとなん、村山三五兵衛と云○五月二十五日、西久保天徳寺門前、吉兵衛が妻三人の男子を生む三助、伴助、惣助と號、○十一月十日、儒師坂井伯元卒、龍光寺に葬○十一月二十一日、宵より電強く、夜八時地鳴る事雷の如し、大地震、戸障子たふれ、家は小船の大浪に動くが如く、地二三寸より所によりて五六尺程割れ、砂をもみ上あるひは水を吹出したる所もあり、石垣壞れ家藏潰れ、穴藏揺るげ死人夥しく、泣さけぶ聲街に響し、又所々毀たる家より失火あり、八時過津浪ありて房總人馬多く死す、内川一ぱい差引四度あり、此時より數度地震あり、相州小田原は分て夥しく、死亡の者凡二千三百人、小田原より品川迄壹萬五千人、房州十萬人、江戸三萬七千餘人内廿九日火災の時、兩國橋にて死、也し由ものに誌り、此時深川三十三間堂覆る、二十四日夜より雨ふり、明方に及てゆり止む、其後十二月迄震ふ事しばしなり、

國つ神千代の岩をもゆりすえてうごめ御代のためしにぞ引
中院 通茂 藤

○十一月廿九日、夜大風、本郷追分より出火して谷中まで焼、又小石川より出火して北風に成、上野、湯しま天神、聖堂、筋違橋、向柳原、淺草茅町、南は神田より傳馬町、小舟町、堀留、小網町、本所へ飛、回向院の邊、深川永代橋まで、兩國橋西の方焼落、明る五時鎮る、是を世に地震火事といふ○回向院一言觀音像山門に安置しけるが、十一月靈夢の告ありて樓上よりおろす、二十二日夜地震の時山門北へ倒れ、つゞいて二十九日の大火に諸堂焼たり、此時本尊を持退てつゞがなし、夫より諸人信心いやまして、參詣群集せしとぞ

一言觀音とは、たゞ一言祈誓して其念願叶ふといふ意也といへり○此火事に俳人北枝が家焼たり、「焼にけりされども櫻さかぬうち 支考」梅が香やまづ一番に焼見舞 牧童○【筠補】御役料三分一當春より始て御借米の節是を渡し賜る、

○元祿年間記事

元祿の始杉山檢校信都、江島辨才天の靈驗を得て、針術の妙を得、本所一つ目に地を給ひし頃、其地へ辨才

天の社を營む、今に至りて惣錄の持也○雜司が谷鬼子母神參詣群集する事始る、江戸町人伊勢屋武兵衛○白金覺林寺開創、加藤清正朝鮮王の連枝を連れ來りしが、兄は肥後國本妙寺開山と成り、弟は當山開基と成、日延上人と號○湯島百螺山風閣寺開創、當山派開創也、この時は湯島天満宮の下なり○江戸鹿子、江戸圖鑑等に載る此時代の名家、名物大略を左に擧る、

△儒者 八代洲河岸林弘文院春常、筋違橋内人見友元、同玄龜、林源二郎、坂井伯元、同伯隆、壺所町木下順庵、淺草津田伯榮、京橋深尾春庵、大傳馬町三丁目片山寛元、八代洲河岸伊庭春貞、辻春達、△神道 京橋吉川惟足、駿府惣社官内△手跡 岡三左衛門、西久保佐々木萬次郎、中村立長△古筆目利 本郷御弓町島山牛庵、谷中フヤ了仲、フヤ了眠△歌讀 牛島石出常軒、京橋清水宗川、日本橋井上一水、市谷田町茂山勾當△連歌師 里村昌隆、同昌隆、同昌純、同支祥、同仍春、石出常軒△俳諧師 本所芭蕉、本町一丁目河津山、石町四丁目才丸、山下丁工神、南小田原町蝶々子、通疊丁目調和、伊勢丁不卜幸入、同町其角、五郎兵衛町山夕、石町一丁目嵐雪、南傳馬町露言、伊勢町一品、本町三丁目立志、五郎兵衛町沾徳、堀江町林中子、△繪師 幸町狩野洞雲益信、新橋島屋町狩野養村常信、おが町狩野永叔主信、同丁狩野右京時信、鍛冶橋狩野探信守政、同狩野探雪守重、神田御弓町狩野左衛門昌信、狩野宮内友信、同外記秀信、本挽町二丁目狩野休圓清信、同所狩野内記是信、瀧山丁狩野春雪信之、同所狩野一學知信、八官町狩野求馬相

信、木挽町狩野内匠英信、狩野主膳△浮世繪師 橋町菱川吉兵衛、同
 吉左衛門、古山太郎兵衛、石川伊左衛門、杉村治兵衛、石川流宣、島井清
 信、菱川作之丞△淨瑠璃 堺町土佐操、葺屋町和泉太夫、葺右衛門町
 江戸半太夫、△説経座、堺町天満八太夫、靈巖島吾妻新四郎、堺町江戸
 孫四郎、無座太夫、吳服町虎屋永閑、人形町近江語齋、本大坂町肥前太
 夫、龍閑町江戸次郎右衛門、新乗物丁對馬五郎左衛門、無座説経太夫、
 因幡町村山金大夫、南鍋町大坂七郎太夫△上るり本屋 大傳馬町三
 丁目山本九左衛門、同所△屋三右衛門、長谷川町松會三四郎、通油町鶴
 屋喜右衛門、同所山形屋市郎右衛門△座敷獨狂言 日本橋三丁目杉
 村休閑、南八丁堀一丁目道具屋九右衛門、のしや惣兵衛△しかた咄
 長谷川町鹿野武左衛門、横山町三丁目休閑、中橋きやら小左衛門、四郎
 齋△けた物藝仕付 しま天神前水右衛門△大佛餅 芝田町つ
 るや△まんぢうや 茅場町鹽瀬山城守、日本橋南一丁目同、葺屋町
 えびすや、駒形布袋屋、同所えびすや△米まんぢう 金龍山ふもと
 や、同所つるや△ふいこ、燒、淺草文殊院前えびすや△櫻餅 芝田町
 三丁目きめや長左衛門△ちいらとら 純町鎌くらや△夢貳系櫻
 淺草すは町柳屋△龍索鮫 しま天神前△姫まんぢう 大傳馬
 町二丁目△駄のやき 麴町十一丁目助惣△ころてん 芝橋車
 屋△見領屋 堺町市川屋、おが丁きりや△同提重 堀江町若なや、
 本町、新橋、出雲丁△奈良茶 堺町祇園屋、目黒柏屋、駒形ひ物屋△
 手切そばきり 鈴木町丹波屋興作△箱飯 目黒なみや△食けん
 どん 金龍山、品川澤瀉や、同所△金屋、目黒△あさがほせんべい
 北八丁堀藤屋、清左衛門、その外しるしたれと繁ければ略す、

○前に載たる菱川が浮世繪はことに行れたり、宮川
 長春も此時代の浮世繪師にて、元祿寶永の頃行れた
 り○此時代俳諧冠り付始り世に行はる○箏曲岩崎檢
 按、豊橋勾當、安數川座頭等行る、花の都といふ座頭
 小唄三味線の上手なり○一蝶が作の朝妻船しの、
 め一名かやつり草、などいふ小唄流行、投節小うた上
 方よりはやり出す○幫簡髭の無休といひしも此頃な
 り○一節切の笛中古より盛に行れ、此時代専ら貴賤
 弄びたり○世事談に、楊弓はみやこ一中此道を得た
 り、一表二百本残らず的中したりといふ、元祿の頃芝
 に五郎、未碩といふ兩人のもの其頃の上手なり、百八
 拾四五の矢員、江戸中結改場の看板に記し、無双の上
 手といへり、頃年は百八拾四五は常の事にして、百九
 拾四五或は七八に及ぶ、しばらくの程に世人かくは
 上手に成れり下略中といへるは京師の人にして、今井一
 射禮運矢抄の注解へ追考を著せり、上るり語の都太夫一中の事にはあ
 らず、此頃より此道盛りに行れ、寛延の頃にはたりても結改場十三ヶ
 所を再訂惣馬子大全に載たり、今○葛西三十三所寺院觀世音
 はこの態少しく廢れたりと見ゆ

順禮所、元祿中淨清といふ沙門發起にて成就す○澤
 之丞帽子紫帽子の左右に錦行はる○小太夫鹿の子遺物流
 行○山東翁の説に、重箱に肴を盛る事、元祿の末の頃
 に止、寶永の頃より硯蓋に盛る事に成しなる可とい
 へり○吉原の遊女入朔に白無垢を着する事、元祿中
 江戸町壹丁目巴屋源右衛門が抱へ高橋といへる太夫
 その頃瘧をわづらひ居けるが、馴染の客來りし時、臥
 居ける白ひくの儘にして、揚屋入しける容の艶なり
 しより、是を真似て入朔には一般に白ひくを着る事
 になりし由、花街大全にいへり、思ふに昔の遊女に、米島丹
 後守出來島長門守孫名のり
 せ、八朔に白き衣裳を着したるや尙可考○本八町堀三丁目住
 紀伊國屋文左衛門、材木やにして世にいふ紀
 文大書也、併號千山と云、靈巖島住奈良
 屋茂左衛門、材木屋なり、世にいふ奈良
 ふ奈良茂大書なり、此兩人元祿中俄に大分限
 となりし人の子にて、花街雜劇に遊び種々の娛みを
 なし、巨萬の寶を費しける事、諸人の知る所ゆへこゝ
 に贅せず○江戸眞砂六十帖元祿中の事、
 を記せり、願人坊主元
 は馬喰町に住す、今は橋本町へ引移ると誌り○兵家

茶話にいふ、武江妻戀岡は、信田小太郎小山判官を殺
 したる所と云傳ふ、妻戀稻荷の攝社に小山判官が靈
 祠あり、又妻戀の坂下酒井小平次殿、藤枝若狭守殿屋
 敷境の所に、小山判官が塚に少し計り竹藪残りて、元
 祿の頃までありしが、崩れて今はなくなり侍ると
 云々○元祿中の豪家、神田佐久間町に住せし尾關庄
 次郎といふもの、唐佛の釋尊の立像を得て、牛島弘福
 寺へ寄付し本尊とす、其後故ありて下谷養玉院へ安
 置す、尾關代々の墓は養玉院に在、彼夫婦の像もあり
 とぞ○元祿中、江戸并諸國髮切はやる○元祿六年温
 清軒の江戸繪圖に、通二丁目三丁目の左右四ヶ所の
 明地、南傳馬町左右四ヶ所明地あり、芝新橋は假橋と
 記り、兩國橋は矢の御藏の南より一ツ目橋の際へ渡
 してあり、其事は天和元年
 の件に記せり水道橋は吉祥寺橋とあり、今
 の昌平橋は相生橋とあり、此橋向聖堂
 迄明地なり、村松町は筋違御
 門内御門の際にて速にありて看店と記せり、
 圖にも尙この所
 あり、昔のしあな橋は、今の如くあらめ橋とあり、しあ

ん橋の名は、今のごとく小網町壹丁目の先の橋をし
か記せり、今の山下御門を外ひッやとあり、同十三年の
昔は姫御門といへり、上野清水観音堂は、今の摺鉢山と唱
ふる所の山にあり、大塚護國寺の門前皆田圃なり○三
稻荷社内一疋の狐あり、側の茶店に煙有りて、参詣のもの菓子など
備ふるとき呼ぶときは狐、たちをあらはす、早稲酒や狐よび出す能が
其角

○寶永元年 甲申 三月晦日改元

二月二十七日、地震、四月まで度々震ふ○兩國橋と新
大橋の間に道を付らる 去年の大火事に、兩國へ
掛る人多く死するゆへ也 ○三月年
號改元ありし祥吟、

寶永の裕にかはれ米の霜

冠里公

○五月三日、本目流手跡元祖本目親信卒、小日向本法
寺に葬す ○
六月十五日より七月朔日二日、江戸近邊大雨、大川筋
其外大水、八月四日より山水出で、下總猿が股土手押
し崩し、田畑在家過半破壊して、死亡人數を知らず、
本所、深川、淺草、山谷、下谷邊屋宇をひたす、
筈庭云、關東洪水水休始て仰出さる、二條大坂在番

衆御合米、御金にて給るべしと仰出さる、

○六月廿三日、小堀政貴卒、遠州侯三男、稱十左衛門、兼道井
書をよくせられし、年六十六なり
○七月廿五日より九月朔日迄で、護國寺に於て、土佐
國五大山文殊菩薩開帳あり○八月俳人高井立志卒、
四十八歳、二○九月神田明神御建立あり○十一月聖堂
世の立志なり○九月神田明神御建立あり○十一月聖堂
御再建成、廿五日遷座、○今年兩國橋西詰に、始めて幾世餅の見
世を出し、名物となりしよし世事談
へり

○寶永二年 乙酉 四月間

三月より回向院にて、播州吳服の藥師如來開帳○同
月より護國寺にて、播州大澤山久安寺千手觀世音、一
千年目開帳○四月より永代寺にて、江州竹生島辨才
天、相州杉本觀世音并總州成田山不動開帳○五月江
戸川々浚あり○六月十五日、北村季吟翁卒、八十二歳、池
寺に葬す、石塔に鑿する所の歌あり、辭世には非ず、
花も見つ郭公をもまら出で此世後の世思ふ事なき ○七月より回
向院にて、洛東靈山齒阿彌陀開帳○同本所法恩寺に
て、京本國寺釋迦如來開帳○同永代寺にて、江州白髯
明神開帳○今年伊勢宗廟諸國より參詣多し、俗にお
かけ參

りといふ、和漢合運其の餘の書に出る所の文を略していふ、閏四月上
旬の頃、洛中洛外童男童女七八歳より十四五歳に至り、貧富を論ぜず
拔參りいたす事夥し、難波寧樂はさらにもいはず、畿内一時にいひ
はやらして諸人狂せるが如く、妻子從僕其主にいとまを乞ふ家を出
て參詣す、伊勢街道は往還莫大にして、鎌を立べき地もなし、凡參詣の
男女、一日に二三萬より四五萬人、或は六七萬人と云り、時に洛中有福
の族、神威を敬ひ奉り、或は米金錢或は布木綿の小袋、繻袴、菅笠等を
整へ、五條三條の橋詰に持出で、拔參の男女に與ふ、し々のみならず江
州諸所の城主、報恩の船を出され、又伊勢路の所々には、貧乏諸人の所
勢の宿旅籠等を設らる、又秋七八月に至ては、諸國遠國よりの參詣勝
て計べからず、京師には別て神靈をいふ事少からず、或數十里の所を
二三日に往還せし談あり、或は死せしものを葬りし後、其人つゝがな
く歸りし話あり、又は愛には破の太麻痺降し、かしこには伊勢にて降
し大豆を奪みて藏め置しに、忽太麻痺と變せしなどいひの、此時の
さまを委しく記して、寶永千載記と題せる草紙ありとなん、又本居大
人の玉勝間にも見えたり、しほしりに云、日蓮宗本願寺門徒などは、中
中さみして言にさへいひも出し侍らず、是は理を明らめ怪異に迷はざ
るにあらざり、あくまで己が宗に迷ひて、我執よりかくは言なし傳る、さ
れど淺ましき作り神異に信を發し、まどひ侍るものにはまし侍るべき
にや云々、この頃の狂狀、御代なれや古借錢と西の年ど、この家にもお
はらひ ○七月廿六日、官醫武田杏仙卒、長壽院と號す、品川
東海寺中少林院に葬
○十一月四日、夜寅刻より出火、吳服橋鍛冶橋の間、
南北六町東西三町許り、御武家方八ヶ所餘焼失、翌五
日巳上刻火鎮る○十二月青山善光寺谷中より移る、
今も谷中に善光寺坂
と云あり、是舊地なり ○【筈補】今年根津權現宮御造營遷
座あり、

○寶永三年 丙戌

正月三日、儒師神原玄輔卒、名希朝、號寒洲、稱小太
即、鮫河橋圓應寺に葬す ○正月
十四日、夜子刻、神田須田町より出火して、筋違見附、
土手町屋、神田町々、本町、石町通り、小傳馬町、油町、
大門通り、長谷川町、和泉町、富澤町邊、新大阪町、新
材木町邊、とうか堀に至る、翌十五日辰刻鎮る○正月
十八日、回向院に於て明曆三百年大火に死失せし輩、
五十年忌弔法事あり○二月廿日、夜亥刻、南鍛冶町よ
り出火、南北四町東西二町餘焼亡す○四月十四日、梨
子の本茂睡卒、戸田氏名恭光、號寒露軒、淺草金龍寺に葬す、辭世、
思ひ殘す事こそなけれ有てうき命のはてなけふ
ひて ○四月十七日、儒師栗山潛峯卒、名愿、稱源助、駒
込龍光寺に葬す ○六
月元字金吹替あり、是を寶字銀といふ、筈庭云、元
字銀なり ○七
月より根津權現社、當時の處へ御再興、十一月成就
す、舊地は今いふ團子坂の處にあり○七月廿二日、
大雷數ヶ所に落る○八月狩野松林惇信圖田植の額、
金王八幡宮へ掲る○九月十五日、亥下刻、大地震○十
一月九日、醫師荻生方庵卒、名教之、祖孫の父也
三田長松寺に葬す ○屋形船百
艘に極らる、其名目江戸砂子
拾遺にいへり ○十一月十六日、巳刻、四谷

竹町より出火、四丁半餘焼○同月廿日、夜子刻、和泉町後より出火、大坂町、住吉町、甚左衛門町、堺町、葺屋町兩座芝居、乗物町、長谷川町、此邊武家方等幅三町長十五町許り焼亡○【只補】是月淺草幸龍寺御建立、

○寶永四年 丁亥

正月豊島川端地藏堂、祐天僧正再建あり、專稱院と云白倉四郎左衛門施財の主なり○正月十五日、申中刻、濱町新同心町より出火、本所一の橋辨才天前より、中の郷業平天神の社邊、元小梅に至る、寅下刻消る○二月晦日、俳人板本其角卒、四十七歳、號寶晉齋、二本樓上行寺に葬す○三月八日大火ありし由正保録に記り、其場所○伊勢朝熊岳虚空藏菩薩回向院にて開帳○五月廿二日、東叡山勸學院了翁僧都寂○七月二日、下谷聖輪寺住持増譽法印寂、在俗の日は眞田某といふ、甲州流軍學に名有し人也○八月朔日、小石川立慶橋邊より出火、幅四五町長三十町程類焼す○九月四日、熊谷安左衛門卒、淺草本法寺に墓あり、碑の右に實相眞如月は長夜の闇を照す心な、はらへども淨世の雲の果もなし、曇らばくも、一月は有明○九月廿七日、儒師松浦交翠卒、六十四歳、名默、稱藤五郎、日暮

里南泉○十月十三日、俳人服部嵐雪卒、五十四歳、駒込常陸寺に葬す、辭世の句はちる風の上○十一月十六日、連歌師里村昌陸卒、六十歳○諸國銀札御停止あり○十一月二十日より、富士山の根がた須走り口焼る、天暗く雷聲地震夥しく、關東白灰降りて雪の如く地を埋む、西南頻りにいなびかりあり、白晝暗夜を多くに成、行燈挑灯をとまず、二十三日殊に甚しく、二十四日に至り天晴れ、皎日を拜して諸人安堵す、又二十五日二十六日再び天曇り砂降り、雷聲の如き響き地震あり、是より黒灰降、二十八日平常の如し、此時出來たる山を寶永山といふ、世人此頃咳嗽を憂ふ、此事折燒柴に見えたり、往昔富士山燒る例迄、今年の如く燒、貞觀元年三月廿四日より四月十八日迄、今年十月十日燒ると云々○十一月二十八日、清人王寧字卒、三田小山大○【筠補】御書院番衆駿河御城に在番の事をやめらる、

○寶永五年 戊子 正月閏

正月元日、大雨○閏正月三日、武藏、相模、三河國々砂降○三月地上に白毛を生ず○三月初元候臣岩田彦助

と云人、武州入間郡堀兼村、堀兼井の舊蹟久して處を失はん事を歎き、石欄を置傍に碑を建る○四月朔日、茶人山田宗偏卒、八十五歳、名周學、東本願寺地中善龍寺に葬す、子二人有、山田久作宗屋、生駒權平宗俊と云ふ

○四月俳人芳賀一品卒、三年とも云○五月十文錢始めて通用始る、表に寶永通寶、裏の輪に永久世用とあり、徑一寸二分重一匁、文字は小田原侯の臣にて、林祭酒の門人樋口彌門が○深川の沙門坊といふ、正元金銅六の地藏尊六體を造立す、今年より始めて江戸六所に安す、南品川品川寺、今年九月、寶永七年、八月成、四谷泰宗寺、九月成、巢鴨

眞正寺、正徳四年、四月成、同所永代寺、子七月成○冬より麻疹流行○十月二十四日、算術の師關新助孝和卒、號自由、關流祖也、牛込法輪寺に葬○築土明神本地佛觀世音開帳

○十一月十五日、深川八幡宮御造營遷宮○十二月三日、狩野隨川岑信卒す、七歳○十二月二十三日、後藤十代廉乘卒、八十歳○十二月谷中威應寺今の天の隣なる空

無の庵室に向齒會あり、此時渡邊幸庵百二十七歳にて上座なり、椅子による、妙心寺派の僧二人紫衣、俗人素襖袴にて着座す、長生殿裏春秋宮、不老門前日月廻、此の詩を書して床の間に掛けり、是上座の者

の古實なるよし、幸庵は本國海州生國駿河也、天正十年壬午に生る、仕官の比はさまざまの勤功あり、仕を辭して後便船して唐土にいたり、天然阿闍陀を治、其餘の諸州をめぐり、九十九歳の時歸朝し、寶永八年に卒、因に云、幸庵老人の説に、人八十にて米の守りとして書く事誤れり、堂上方に八十歳にて書る、也、八十の人と書て米なりといへり、

○寶永六年 己丑

正月十文錢通用止○去年十月二十日の後雨降らず、正月十一日夜に至り雨降る、折焚柴に○三月箔座酒運上御免○四月三日より七月三日まで、深川八幡宮開帳○六月寶字銀通用はじまる○七月より九月まで、回向院にて洛東淨花院泣不動尊開帳○九月多賀朝湖歸郷をゆるさる、後英一蝶と號す、深川長堀、町に住す○十二月二十四日俳人小澤得入卒、水船町坊正なり、淺草誓願寺に葬す○渡邊幸庵對話記成、杉本義興、編、寫本

○寶永七年 庚寅 八月閏

二月上野清水橋稻荷社、淺草駒形へ移る○三月二ツ寶銀御吹改○高輪大木戸石垣を築せられ、御高札場定る○湯しま圓満寺開創、開山木食義高上人なり、享三戌六月七日遷化、九十五歳なり○春回向院にて、稻毛藥師如來開帳○

三月十五日、角田川木母寺梅若丸七百三十三年忌、大念佛回向、按るに、縁起に演る貞元元年より七百廿五年にあたり○三月より五月に至るまで、永代寺に於て奥州岩城變眼の彌陀、并頼朝卿持尊笈實の觀世音、又足摩の不動尊開帳○三月より五月まで、深川心行寺にて菰包の阿彌陀、ならびに滿仲公軍陣の守佛千手觀世音、三日月不動尊、鎮守辨才天開帳○四月乾金并三ツ寶銀通用始り、貳朱判通用止○七月十一日、羅漢寺創立の松雲禪師寂、六十歳○七月より閏八月まで、市谷八幡宮境内に於て、嵯峨法輪寺虚空藏開帳○九月二十一日、芝口御門成就、はじめて諸人往來す、瑪庭云、享保年中、享保九年正月二十九日、火災にこの門焼失して後、再興なし○日比谷一丁目より三丁目まで、芝口一丁目二丁目三丁目と改らる○十月十日、亥刻池上本門寺焼亡、一本に十一日○十一月琉球人來聘、正使美里王子、豐見城王子○或隨筆に、今年青山火事とて大火ありし由しるせり○十一月青山梅窓院の舊鐘を鑄改んとせし時、住持法蓮社壽譽鏡的上人の夢に、龍女來り、我畜身にして佛果を得がたし

依て一面の鏡を携へ來れり、願くば是を加へて鐘を鑄給らば、解脱を得るの因縁ともなるべしと、云かと思へば夢覺て、後側に一面の鏡あり、上人奇異の思ひをなし、此鐘に加へて鑄改しむといへり○十二月十九日、未下刻、神田小柳町續き眞田家御中屋敷より出火、北西風烈しく、本町、石町、八丁堀、靈巖島海手に至る、長二十五町、幅三四町より七八町に至る、翌日辰刻鎮る○谷中七面坂七面大明神勸請、菊といへる女、此所告りて祭る所也とぞ

○寶永年間記事

寶永中靈夢によつて、南部領の内^に在し石像の閻魔王、江戸金地院境内に移す○寶永中疫病はやりし頃、駒込の百姓喜八といふもの、麥藁の蛇を作り、駒込富士の市に賣けるが、求歸りしもの疫癘の患をのがれしより、後富士參りの方物となれり、此時代近邊の童子髪を亂して詣けるとぞ○塵塚談に、薩摩芋の事日本には寶永元申年よりあり、薩州より種渡り來、長崎

増訂武江年表卷之四

○正徳元年 辛卯 五月七日改元

にて専ら種たる由なり、享保二十年乙卯、小石川養生所へ栽られ、元文にいたり弘れるよし記り、青本草盧甘はせ○鼻紙袋この時世より始る、瑪庭云、鼻紙袋は、そのかみよりあり○寶永中、武者小路中納言實蔭公關東御下向の時、富士を都にて月と花とは知る人に見せばや富士の雪のさかりを

正月四日、未刻、芝土器町本名飯倉町といふより出火、西北風に隨ひ、新堀芝肴店海手まで、武家町屋ともに類焼、酉刻鎮る○正月十九日、新和泉町より出火、乾風烈しく靈巖島にいたる、舊冬焼失の所、又十町計り焼る○正月二十五日、圓光大師五百年忌なり、東漸大師の盞號を給ふ○三月江州土山田村將軍像、淺草にて開帳○三月不忍池の邊より出火、西北風烈し、延焼萬家に及べり、折焚柴○三月十五日より五月まで、橋場總泉寺にて、梅若丸妙喜尼の七百三十三年忌として回向あり、木母寺縁起によれば七百廿五年なり○

増訂武江年表卷之三 畢

【無補】是月駒込富士山に曾我兄弟の社建立、願主市村竹之丞、松本小四郎、津打九平二等なり○四月羽田要島龍王院に、辨才天勸請、有馬家に在し○四月五日より六月二十日まで、永代寺にて房州清澄寺虚空藏菩

薩開帳 ○夏中より回向院にて、甲州八日市不動尊開帳、この時兩國橋東詰松屋三左衛門といふ左官、はじめて飛騨子とて製し商ふはじめは景勝園子といふ、高貴の人の名はわづらるべきよしにて制しけるより改る、壯子うすづくといへどもつづれり ○七月、長尾家の鋒先に比して名付しと、世事談論に見えたり ○七月、所々高札改る、新吉原大門口の高札を改らる ○八月、四ツ寶銀通用はじまる ○八月九日、大風 ○九月十八日、落合村泰雲寺了然尼寂、禪尼の道徳、普く人の知る所ゆへに略す ○今年、渡邊幸庵卒、百三十歳 ○三崎稻荷社にて今年より神道七夜待といふ事を行ひ始む、此事江府神社略記 ○十月朝、鮮人來聘、正使趙泰儀、副使任守幹、從事李邦彦なり、旅宿是迄本誓寺と成る、新井白石先生、室鳩巢先生韓人の事を司る、此時白石朝鮮人等と問答ありし筆談を、趙泰儀録して江國筆談といふ、寫本一冊あり、辛卯(正徳元年)十一月五日、在江戶時白石源 ○十一月二十八日、君美(新井筑後守)來訪館所と書はじめたり ○十一月二十八日、親鸞上人四百五十年忌法會 ○十二月五日、祐天上人増上寺住職に命ぜらる ○十二月十一日、申刻連雀町より出火、乾の風烈しく、通町、本銀町、本町、石町四丁目まで、西は御堀端まで、一石橋、日本橋焼落、靈巖島まで焼抜、同日夜寅刻火鎮る、按るに、此時連雀町は須田町橋にあり、

○正徳二年 壬辰

正月八日、儒師中邑篁溪卒、名顯言、稱新八、淺草八 ○正月十一日、月十四日共云、風外焉知禪師寂、駒込高林寺に葬す、○日本橋江戸橋の間廣小路と成る ○二月、白石先生、紅毛人の旅宿にいたりて問對の事あり ○二月八日、淺草より本所四ツ目まで焼亡、本所に御救小屋建つ ○三月品川往還荷物改所出來る、并草津と駿河にも同時に出來 ○七月二十四日、水戸府城師岡氏の室長山宵子卒、四十二歳、駒込大乗寺に葬す、烈女にし ○九月四ツ寶銀通用止 ○通一丁目吳服店白木の井、去歲鐵を入れ、數月を経て今年甘泉を獲たり、來聘の韓人朴同知漢齋銘を撰、今年十一月赤井得水寫して銅輪に鑄す、

○正徳三年 癸巳 九月間

正月二十七日、狩野養朴常信卒、七十八歳 ○三月二挺立三挺立の船を禁ぜらる ○四月木挽町山村長太夫芝居にて、助六の狂言始て興行す ○四月晦日、江戸中白き花降、又舍利の如き物ふる ○五月二日、儒師大高芝山卒、名季明、稱清介、○五月十九日の夜、螢尤嶺現す、戌時す、造谷長谷寺に葬

きてや、薄く成、月昇りし故光あひて見え侍らざりし、東より西に至てははてもなく見えし、鹽尻に出り ○十月二十二日、下谷より出火、下谷、淺草邊焼亡夥し、只誠云、辰の刻池の端茶屋より出火、大名小路まで延焼、焼失武家屋敷千三百六十三軒、橋十一箇所、焼死人二百十八人、長一里十八丁幅十二町 ○今年、深川三十三間堂焼亡、同六年再建あり ○【只補】是年一挺立遊山船百艘と定めらる、

○正徳四年 甲午

三月木挽町六丁目、山村長太夫芝居斷絶、この時佛後生丈島に讀せらる、かの島にて、釣鯉からし辭もなき涙かな、江戸眞砂六十帖に云、この時芝居一番切の追出しといふに成て、木月にて人よせに色々のはなしをして、人足を留る、あやめや平次とて大坂より來り、兩國の大木傳四郎といへる、齒磨店の口上いひける男、かぶき役者芳澤あやめの聲色を真似けるが、又紺屋にて山城屋といふ酒屋の下男、是も藤村半太夫が聲色をつひけるゆへ、平次がすいめに主人に暇を乞ひ、とも木月に立て聲色を遣ふ、聞人感心しけるよし、○五月新金銀御吹替、二年の事となし、或は云五年、一説に ○五月二日、品川東海寺中高源院怡溪和尚寂、石州流茶事 ○【只補】八月二日、畫家菱川師宣卒、七十歳 ○八月六日より十五日まで、増上寺山内常照院本尊一光三尊如來開帳 ○諸國飢饉 ○八月六日、醫師木下杏林卒、元高の父也、麻布善福寺に葬

○九月二十二日、根津權現祭禮、江戸町中より練物出る、廿一日なりしが、雨天成し故今日に延たり、今年にはじまり一年にして止たり、番數五十番、町數百五十四町なり、其時の番付は、曲亭漫筆といへる書に出たれば、こゝに略し、その道筋のみをしるす、惣門より茅町通、西川家西脇、神田明神裏門通り昌平橋へ入、神田橋通り護持院裏通り、元飯田町田安御門を入、竹橋を出、龍の口大名小路、治橋御門出、南町通りより通り町北へ、日本橋四日市土手通り御旅所、夫より日本橋を渡り通り町、筋違橋より上野通り石川家前、茅町より本社へ歸ありしとなん、

○正徳五年 乙未

三月二十一日、儒師深見訥亭卒、名直、一名永常、○三月生島幽軒八十歳にて尙齒會あり、列座の輩志賀隨翁、百六十歳、小森閑齋、百三十歳、古結宗見、百八歳、石寺宗壽、九十歳、下條七兵衛、九十歳、茶人谷口一雲、九十歳、岡本半之丞、八十歳、○四月日光山百年御神忌、御法會あり ○正徳より享保はじめまで、中橋廣小路にて、盆山夜に入所々より集り踊りををどる ○十月十七日、俳人調和卒、八十餘歳、西本願寺中に葬

葬 ○十二月晦日、夜半計りに龍の口邊より出火して、常盤橋御門内數寄屋橋御門内まで、中橋より芝口橋までの町屋、木挽町に至り、翌正月元日夕がた鎮火、

○正徳年間記事

角力取松風瀬兵衛能忠、三箇津大關となり、正徳二年雜司谷鬼子母神祠へ額を收む○俳人園女、富賀岡山内へ櫻樹三十六株を栽る、歌仙櫻と號す○染井植木屋伊兵衛、霧島躑躅を多く育す、前に記せる面南、無三、唐松に植しなり、享保の頃より百種の楓を集め、其圖を模刻し、また地錦抄、長生花林抄、本草花蔀繪等の編集あり、梓に上りて世に行はる○浮世繪師菱川師宣、正徳中七十餘歳にして終れり、誼云、懷月堂は竹といへり、また懷月堂、稱源七、この頃行はる、淺草藏前に住す○小舟町天王祭の時、山門の造り物大根注連等かざる事、正徳中より始り今にかはらず、小舟町天王の御旅町にありしを、正徳中疫病行れし時、小舟町馬場の御旅所より神輿を小舟町へかりて、疫病をはらひしより後、へし奉らざ、長く小舟町にうつしたりと土人の口碑に殘り、又藍○武江披砂云、小石川御殿跡齋守稻荷社は、寶永中和田倉御用屋敷に於て、大前氏住居の時、京都吉田家の雜掌、攝州芥川の齋守稻荷

を大前氏の鎮守として勸請す、正徳中御用屋敷一統引拂せられ、白山御殿へ替地を下されし時、稻荷社も白山へ移しけるが、奇瑞の事ありて信仰のもの増けるが、其後三さきへ引移しけるとなり○管籥は古來ありしかど、賣物とするははじめは、正徳の頃築地小笠原家の道具持仲右衛門といふ者作り出し、兩國橋東岸山本善兵衛見世にて賣始めしよし、世事談綺にいへり○【只補】此頃より根津門前町遊女屋出來す、

○享保元年 丙申 二月間 七月朔日改元

正月元日、去年除夜の大火前に記せり、今夕に至り鎮る、鳥喧垂の聲と、火消人部或は恐惑ふものと行ちがひ入亂れて、混雜甚しかりけるよし折焚柴の記にいへり、十一日又池の端より火發して、神田邊、本町、石町、日本橋、靈巖島迄延焼多く、獄舎もやけたるよし、折焚柴の記にも見えたり○同十八日淺草吹わけ所邊より出火して本所深川多く焼亡す○半藏御門、竹橋御門、清水御門、古來のごとく通路をゆるし給ふ○【無補】六月二日、晝家尾形光琳卒、六十○八月十五日、俳人山口素堂卒、

七十五歳、駒 ○十一月二十九日、夜光物飛ぶ○十二月二日、込屋淨院に葬十七日、儒師木下道圓卒、名元高、號菊所、麻布善福寺に葬す○折焚柴の記成、新井白石先、生編、寫本

○享保二年 丁酉

雅筵醉狂集、丁酉のとし發句、

屠蘇酒にはなはた酔や歳の春

正親町公通卿

○正月二十二日、未刻小石川馬場脇井出某殿より出火、湯しを神田護持院の莊嚴、神田橋御門内鍛冶橋御門まで、諸侯の藩邸數字、通町八丁堀築地まで、武家屋ども夥しく焼亡あり○災後護持院を小日向の末に移させられ、その跡并雉子橋外武家屋舖跡畷地となれり、瑪庭云、小日向の末護國寺に移さる○正月二十三日、俳人北藤浮世卒、四十八歳、小日向金剛寺に葬す○三月十一日、俳人下村堤亭卒、深川法南院に葬す○六月鐵砲洲船松町より、駒込富士權現へ花萬度をさぐる事、今年よりはじまる○七月鐵砲洲御米藏止○八月新金出來し故乾金通用止、三年限り○八月十六日、大風雨家屋を損す○十二月十二日、神田横

大工町より出火、日本橋北まで焼失○同二十八日、明がたより、牛込山伏町より出火、麴町四谷芝田町まで焼亡○十二月十日、田中丘隅卒、武州川崎の西小向村妙光寺と云、一年酒匂川の洪水を治て功あり、依て臣下の列に加へ給へりとぞ

○享保三年 戊戌 十月間

春より伊勢參宮はやり出して、諸國より群參する事夥し○二月十五日、深川本誓寺鼻缺地藏尊、今日よりはやり出して貴賤群集し、もろくの願ひをかくるよし、江戸砂子にいへり○【筈補】春御借米御張紙始て出る、○四月二十三日、儒師岡井黃陵卒、名孝祖、稱彦禪寺に○五月朔日、五郎兵衛町より出火、通町八丁堀邊築地まで焼亡○五月十五日、儒師酒泉竹軒卒、名弘、太夫、傳通院中○六月七日、日本堤傍示杭御立替あり○六月十八日、俳人甘雨亭介我卒、六十七歳、東本願寺に葬す○七月十五日、祐天上人目黒に寂、八十歳、享保中二世祐海上人、遺跡に寺を建て祐天寺といふ○八月二十六日、儒師三宅觀瀾卒、稱九十郎、駒込龍光寺に葬す○四代目市村竹之丞延寶中通世

し、本所に自澄院として一寺を開創し、誠阿と號し住しけるが、今年十月十日六十五歳にして大往生を遂たり○十月四日、狩野探信守政卒○十月兩替屋六百人に定る○閏十月、新金銀引替始る○十一月琉球人來聘、正使西○十二月五日、小石川白山社類焼○淺草寺内齋來王子○傳法院僧正より淺草餅の名を給はる。

○享保四年 己亥

正月元日、酉の時日蝕、二分○二月十三日、本町邊内外神田焼失、翌十四日に至りて漸く鎮る○二月二十二日、聖德太子千五百年御忌○三月十八日より五月二十八日まで、淺草寺觀世音開帳、貞享四年より三十三年目也○四月十三日、安藤東野卒、號東壁、稱仁右衛門、三十七歳なり、橋場福壽院に葬す。○江戸町火消いろは組はじまる○五月淺草寺本堂修復、十萬人構始る、同六年九月に、たつて成就す。○淺草御藏前第六天社、今年災に罹り今の地にうつる○九月朝鮮人來聘、正使供致中、副明彦等なり、旅宿東本願寺、此時韓人曲馬を乗る、使黃瑠、從事李を見て、徂徠先生詩を賦せり、先生の文集に出たり。○九月四日、通留の幸町茶碗屋より出火、本八丁堀邊類焼○十一月

新右衛門町本屋又七と云もの、品川宿の町人をかたらひ、御殿山の上り口に操芝居を取立る、長松八郎兵衛八日より三日の間興行せしが、其後ゆへありて止む。○十二月九日、俳人天野桃隣卒、號五無庵、新寺町、新光明寺に葬す。○【筠補】小普請組支配十人新規に仰付らる。

○享保五年 庚子

二月二十五日埼玉郡大相模大聖寺焼亡○三月二十七日、午半刻宿屋町より出火、南風烈しく、通り町日本橋邊、傳馬町馬喰町邊、神田邊和泉橋、下谷上野、坂本金杉箕の輪に至り鎮る○上野二王門御建立○七月二十三日、儒師中野篤謙卒、五十四歳、名職善、深川要津寺に葬す。○八月關東洪水○八月町火消の纏に、其組の方域を記したる、長七尺の吹流を下、又掟を記したる懸帳を副ゆ、此時代の張換灯は、瓜形にて赤くぬり纏を畫く。○八月十八日、儒師鶴飼稱齋卒、稱權平、金の男也。○九月四日、大風○九月二十一日、白山權現祭禮、産子町より出し練物を出す、中絶○今年冬冷泉中納言爲綱卿御參向あり、鳴島氏信遍御弟

子となられしとぞ○洞房語園成、寫本、庄司道嘉書編、板本は元文三年也、蝶師作と有。○【筠補】正徳元年より今年迄十ヶ年の間、御番改有て皆勤の輩段々御褒美金を下さる、又豆州下田湊廻船改御番所を浦賀に移さる。

○享保六年 辛丑 七月閏

正月八日、晝四時吳服町より出火、西北大風、通壹丁目より京橋本材木町、八丁堀、木挽町、鐵砲洲、築地靈巖島銀町まで焼る○二月三日、辰下刻三河町四丁目裏町より出火して、神田邊、下谷上野仁王門焼、淺草寺町三谷まで焼亡○二月四日、巳刻過牛込御納戸町より出火、小日向小石川邊一圓に焼る、白山の邊より三崎に至り、日暮里にて鎮る、此時傳通院へ逃入、焼死する者三百八拾餘人と云、一基の塚を立、常念佛あり。築土八幡宮白山社も此時焼る、傳通院災後、殿堂僧房洪鐘等悉く御再建あり○同寺前に在し御火消屋敷、小川町へ引るといへり○二月十五日、金彫工柳川政次卒、柳川の祖なり。

三月四日、水府侯御侍醫吉田林庵卒、八十七歳、谷中大雄は享保十年巳九月卒せり。○三月十三日、水府侯儒臣森尚謙卒、號龍○四月諸社の祭禮の時、屋臺と名づけたる物を出す事御停止あり○五月神田橋御門外に於て、古林見宜醫書講談始る、諸醫師○六月十二日、七日にす、茶人縣宗知卒○六月三日、儒師服部保庸卒、稱藤五郎、號真齋、若○七月二十一日、麴町八丁目匠某が妻四十四歳、食時目卒に痛舍利を出す、鶏鳴におよんで又一顆を出す、翌年壬寅六月朔日黄昏又一顆を出す、其夫小寶龜に奉ず、里中の人皆往て觀これを尊信す、徂徠先生此事を譏りて、舍利の記一篇をあらはせり、文集の中○秋關東洪水○十月金銀引替○十月湯島壹丁目渡邊九兵衛といふ者、石像の六地藏を六所に建立す、今橋場總泉寺にあるも其内なり。○十二月十日、三河町より出火、通町筋本材木町、坂本町、南茅場町、八丁堀、鐵砲洲、築地まで類焼○十二月二十七日、後藤氏十一代通乗卒、五十八歳○南留別志云、まみ穴といふ所は

古金を掘たる穴なり、まみはまぶの事なり、享保六年の頃黄金のやう成砂出たれど、いまだ年の足らぬなりとて掘らずなりぬ○芝永井町、岸町、富山町、増上寺の火除地となり、神田へ替地を給はる○あづま路記刊行、具原篤信○【篤補】五ヶ年の間に兩度類焼の輩へ拜借金被仰付、此已後瓦屋蟻がら葺等の拜借數度仰出さる事、繁ければしるさず○【篤補】諸國領地町歩、并百姓町人社人僧尼等の人數、領分限りに書出すべき旨仰付らる○【篤補】評定所腰掛に、直訴狀入るべき箱出る○【篤補】江戸にて本艸學問するもの出さしは、松岡より盛なり、享保六年辛丑二月、松岡玄達を京都より被召、旅宿小傳馬町三丁目糠屋七兵衛なり、七月三日御暇にて歸京、其ころ藥艸物産御吟味にて、諸國の人多く被仰付、大坂儒醫古林見宜、大坂藥種屋伏見屋市右衛門、平野屋九兵衛、堺の藥種屋小西彌左衛門等、二月より御當地逗留、七月歸郷、其外野呂玄次、夏井松玄、本賀徳運、これは藥艸見分に被遣、

又伊勢松坂院堂、紀州豆州へ採藥に被遣、是は旅宿本石町四丁目、又享保七年に、浪人阿部友之進、相州大山より八王子邊迄採藥被仰付○【篤補】採藥使記は、享和五年庚子、駒場御藥園御用屋敷の預り、植村左半次政勝台命を蒙り、其時より寶曆三年癸酉に至るまで、間斷なく三十餘年諸國を巡り、藥物はさらなり、奇事に至る迄書記して、九卷となして献上せり、
○享保七年 壬寅
二月十五日より八月十五日まで、一ッ橋御門外明地へ、諸人遊覽をゆるさる、事始る○三月青松寺前より増上寺裏門前廣小路と成る○三月十八日より七日の間、淺草寺觀世音開帳○五月十九日、儒師中根桂叢卒、名重玄、稱左内、本所同向院に葬す○六月市中手習師匠へ六諭行義を給はり、兒輩の手に書て與ふる様に命ぜらる、六諭は室鳩巢先生の釋する所にし、
て、官制ありて海内に頒ち給ふ○七月江戸中藥種問屋二十五人に定る、會所建○八月八日、儒師深見玄俗卒、七歳本姓高階、稱新右衛門、書を善す、淺草觀音堂、
施無畏の額を書し人なり、上野護國院に葬す○十月千川上水青

山三田の上水を止らる、安永九年のころ千川上水再度起りし
六年にい○十二月六日、神田新銀町より出火、西神田一圓に焼亡○小石川御藥園に養生所建、十二月より貧困の病者を停めて藥餌を與へ給ふ、此所の坂を編割坂といひしが、これより後土俗病人坂といふ、起立人傳通院前住居の醫師小川室船と云人なり○【篤補】當年日本古代の書品々御尋あり○【篤補】諸大名參勤交代の事、三月九月交代し、在府半年在國在邑一年半たるべき旨仰出さる、但先規は外様四月御譜代六月交代す、○【篤補】番町小川町駿河臺等、火消の組合被仰付○【只補】元四日市火除地廣小路となる、

○享保八年 癸卯

二月十六日、赤坂傳馬町より出火、西北風烈しく、芝西の久保迄焼る、武家方町屋類焼夥し○二月十五日より三日の間、中村勘三郎芝居百年の壽狂言、新發意太鼓猿若大名等を興行す○二月廿二日、佐々木玄龍卒、七十四歳、文山の兄能書なり、
増上寺中淨運院に葬す○二月二十九日、俳人志村無倫卒、六十歳○三月十九日、柿本人麿千年忌、國粹本社へ正

一位柿本大明○元祿銀、寶永銀、中銀、三ッ寶銀、四ッ寶銀神と證を給ふ○五月十四日、新井明卿卒、白石二男、稱傳藏、淺草通用止○五月十四日、新井明卿卒、報恩寺中高徳寺に葬す○六月儒師深井秋水卒、八十歳○七月二十六日、池上本門寺本堂再建、入拂供養、寶永年中焼亡の後也、
廿三世日潤上人再興○八月近在出水○音羽町九丁目青柳町家作取拂、この時隱賣女ありし、野となりて鳴や
音羽のくつは蟲○十月十日、湯島天満宮造營遷宮、此時より
土藏に成○十二月五日、牛込より出火、市谷御門内番町邊焼亡○十二月十日、狩野洞春福信卒○【篤補】今年より春夏の御借米其高の四分一宛下さるべき旨仰出さる、諸役人其役儀に應ぜざる小身の輩へは勤役の内御足高被下旨仰出さる○【只補】小石川に施藥院を建つ、

○享保九年 甲辰 四月間

正月十三日、英一蝶卒、七十一歳、二本橋水敬寺中願乘院に葬りも有とや月
す、辭世、まさからず浮世のわざの色と○正月二十九日、加賀町より出火、南は露月町東は木挽町まで焼る、芝口御門焼失して、この後御再建無し、木挽町御火消屋
敷四ッ谷へ引る○西久保八幡宮去年の災後

修造成、土藏造にあらたむ。○甲府御城番始る、甲府御城勤番として、小普請支配より番頭兩人、○三月日評な、本郷より出火、築地迄焼亡。○六月七日、狩野永叔主信卒、六十。○六月二十五日、東都毛降、長さ數十尺に餘るも多し、色白く馬の尾の細さがごとし。○八月御藏前札差百九人に定らる。○十一月二十一日、俳人三世の立志卒、常福寺に。○皇和通曆刊行、元中編。

○享保十年 乙巳

二月十四日、青山久保町より出火、赤坂、四谷、市谷、牛込、大塚、音羽、小石川巢鴨、駒込谷中、下谷金杉まで焼亡。○【只補】二月十八日亥刻、麻布鳥居坂上戸川内膳屋敷より出火、延焼品川に及ぶ、焼死怪我人多し。○二月五日、五百羅漢堂再建諸堂成就す、是象先和尚、元祿化ありし功。○四月十九日、俳人菊後亭秋色卒、辭世「見しも色のか」○五月十九日、官儒新井白石先生卒、六十九、九歳、名きつばた。○六月二十二日、古筆六代了音卒、五十二。○七月二十日、淨瑠璃語一寸見河東死、西本願寺中成勝寺へ葬。

す、近頃述たる碑に十三日と記せるは非也。○九月三日、奈良屋茂左衛門死、大盛小うたにいへる奈良茂大盛の事也。○十月大判御吹替、元祿此頃深川黒江町に居し、泰我と號す。○今年長壽の人、志賀隨翁、百七十。小出勘右衛門、百廿。伊藤市右衛門、百十。勘右衛門、百三。沼田伴藏、百一。水野備中守殿、九十九。柴田十右衛門、九十九。下條長兵衛、九十九。○【只補】下總國小金御狩あり。

○享保十一年 丙午

二月七日、俳人生玉琴風卒、號紫羅架、押上。○四月二十日、俳人園女卒、六十三歳、剃髮して知鏡といへ。○四月二十九日、儒師土肥黙翁卒、自觀居士と號す、市谷長延寺に葬。○今年五穀豐饒なり。○回向院にて往原郡邊、天照山大吉寺朝日如來開帳。○五月淺草小揚の理兵衛、元主人の老母に仕へて、奇特の事ありて褒賞を給はる、時人傳、年山。○六月三十日、俳人水間沾徳卒、六十二歳、號合親。○今年より十七年まで、深川十萬坪に於て鑄錢あり、元文元年五月にも、十一月十八日、大道寺友山翁尚齒會、志賀隨翁其餘六人の翁會するると云、姓名未詳。

【只補】小金御狩、犬御番始て御供に出づ、

○享保十二年 丁未 正月間

三月朔日、夜五半時光物東より西へ飛、雷の如く鳴る。○木挽町采女が原馬場出来る。○角田川木母寺、梅若丸七百五十年忌開帳、三月十五日。○春落穂集成、知足軒友九歳編、翌。○五月十二日、俳人高野百里卒、號雪堂、六十二年追加成る。○五月十二日、別當東江寺に葬す、辭世の句、死て置てす、しき月を見るぞかし、此句を石に鐫して立る、墨花堂佐文山の書なり、詩人惟馨は百里の男なり、壯歳にして明を失ひしが、寶曆七年七月六日、相州鎌倉圓覺寺中松濤館に終れり。○六月上旬より、本所香取太神宮境内へ、常陸國阿波大杉大明神飛移り給ふとして貴踐群集し、萬度家臺練物を出し、美麗なる揃の衣類を着して參詣す、程なく此事を停らる。○笠師定林卒、月日未詳。○十一月七日、新材木町、白子屋庄三郎養子又四郎妻くま、并手代忠八刑せらる、事世人の知る所なり。○十二月十日、表二番町より出火、麴町永田町、霞が關虎の御門、久保町、おたご下増上寺裏門、芝海手まで焼亡、是より麴町うら通り明地と成る。○十二月十四日、俳人志邑佳風卒、四十九歳、駒込大雄寺に葬す。

○享保十三年 戊申

正月五日、清水如水卒、七十二歳、淺草金龍寺に葬す、如水は横の細工をよくす、其傳江戸名所圖會に載たり、其子字平次、流と號し、老母に孝あり又父に似て細工に妙ありし由、雜談集といへる。草紙にあり、字平次は延享三年六月廿九日終れり。○同六月日狩野如川周信卒、六十九。○正月十六日、夜光り物飛ぶ。○正月十九日、官儒荻生徂徠先生卒、六十三歳、名茂卿、稱純右衛門、三田長松寺に葬す。○日暮里淨光寺寶山師、諸家の詩歌を求て八景を定む、井上通熙の序文あり、八景は、筑波茂陰、墨髮殘雪、前畦落雁、後岳夜鹿、隅田秋月、利根遠帆、後林祭酒。○二月十六日、猿樂町より出火、小川町一ツ橋御門、外武家方一圓類焼、家作業禁止。○三月芝愛宕山開帳。○四月二十四日、儒師板倉復軒卒、板倉帆丘の墓にあり。○番町、麴町、元山王、永田町、猿樂町、小川町、駿河臺、飯田町邊の家作業禁止を止らる。○七月三日、連歌師里村仍民卒、五十九。○七月吉原仲の町に燈籠を出す。角町中萬字屋の名妓玉菊といへるもの、享保十一年午三月二十九日死せり、今年三回忌にいたり、盆中霊をまつるとして、仲の町俊や虎文、揚屋町松屋八兵衛などいへる者此事をはじむ、始は切子どうろうにてありしが、小川破笠が奇巧より次第にたくみになりしといへり、ことし玉菊追善袖さうしといへる河東節の上るり、竹婦人作にて行れたり。

筥庭云、此燈籠玉菊が追善に始れりとは、普くいへることながら非なるべし、其考嬉遊笑覽にあり、開き見るべし、

○八月三十日夜より九月二日三日、北大風甚雨にして洪水溢れ、昌平橋、和泉橋、新し橋、柳橋二日の夕方流落る、三日朝兩國橋中程三十六間切流れ、新大橋西の方四十二間程切る、永代橋は普請の中にて古橋杭流る、下谷淺草の内低き所は軒端水にひたる、小石川龍慶橋其外小橋流れ、目白山崩れて上水の白堀埋る、筋違御門昌平橋の二橋流損によつて、神田祭禮十一月に延る、

筥庭云、昔江戸に鱈魚といふ魚なかりしが、享保十三年九月二日、江戸に大水出で、此魚長さ二尺計りなるもの多く、すなごりするをのこ此れを捕へしを、みな人見て怪しめり、それより後江戸近き川々に、常にこれあることとなりぬとかや、春臺の説あり、又岩永玄浩が日東魚譜にも云へり、

○十二月御茶水川端(幅カ)廣がる、當秋小石川小日向邊大水の節、水はき自由ならぬゆへなり○九月晦日、儒師伊藤好義齋卒、名邦達、泉寺に葬○十月四日、四谷日宗寺に鬼子母神像を安置す、日法上人作、鎌倉○江府神社略記刊行、荒井嘉

享保十四年 己酉 九月間

正月二十七日、國學者跡部光海卒、名良賢、稱宮内、七十一歳、青山玉窓寺に葬○二月十六日、飯田町坂上武家方より出火、屋敷より、田安御門外類焼の所御用地に成る○五月交趾國の鄭大威といふ者、廣南國の産大象渡す、去年六月長崎へ馳せ、於て驚る、今年四月廿一匹を大城へ牽來り、同月京都へ入、大内へ牽く、五月廿五日江戸へ着す、社は中野にありしが、宣延中に驚る、其骨今も中野寶泉寺にあり、この時京師にて繪神家の御歌あまたありし中に、世に賞美し奉りしといへるは、竹の葉をかふけたもの、まつやこし實をばむ鳥もまたぬ御代とて

烏丸光榮卿

この時中村三近が編の象の實、白梅園が象實珍記、又編者不知象志などいふ書印行せり、江戸の俳人仙鶴が句に、今やひく富士の裾野のり物をつむり、山王御祭禮の時、鶴町より大象の作○筥補】此年三月二十五日己巳穀雨の節にて、二十八日壬申寒氣は

げしく、此夜霜つよく降て、秩父のあたりは桑の葉皆枯たりとかや○【無補】四月二十一日、天一坊改行刑せらる○十一月廿三日、書家服部保考卒、號雲溪翁、稱徳雲寺、清助、若荷谷に葬す、

享保十五年 庚戌

正月江戸町火消四十七組を十組に定らる、目印將基の胸吹流し止てばれんを符る、この時小組四十七組なり、後に本組出來て四十八組となる、小幡止て追々小幡出來る大幡小まとひとともに銀箔なり○三月十八日、深見十左衛門事自休終、九十歳、本郷片町龍光寺に葬す○三月東醫寶鑑二十五冊刊行○四月赤坂氷川明神今井谷へ移され、社御建立あり、二十六日遷宮有○高田八幡宮破損によつて、喜多七太夫を請ふて、五月十五日より日敷五日の間、地内に於て勸化能興行、機敷金二分二朱、一人分銀○五月金札銀札先年の通り、通用御免○六月十六日、藤恕軒志賀隨翁卒、百八十三歳、天徳寺中不斷院に葬○八月二十九日、大風雨深川三十三間堂吹潰す、築地大水出る○十一月鍋かぶりといふ疾はやる、鼻より上黒くなる○冬より翌年春にいたり麻疹流行、牛洞をぬる○

足立郡見沼に新田を開かる、去る戊申年中下總に手賀沼を新田清といふ者、其選にあづかり其功を全せしが、今年も又命ありて弟鈴木文平胤秀と俱に此事を司り、多くの功を立たり、其頃見沼の新田に船を通せん事を望しければ免し給ひ、享保十六年足立藩玉の二郡の内に六所の地を給ひ、江戸神田川の邊にも邸地を給ひて、見沼川運漕主事に命ぜられたり、其所を運船やしきと云、其子孫弘化四年の件に記る小山田與清是なり、

筥庭云、去戊申九月の大水、郭北尤甚し、士民數十萬魚鼈となりて、死者萬餘人、國初已來これなき大災なり、近時興利の臣議して、瀦澤を潤して新田を作る、其水を他所に流す、地勢をしらず水の性に逆ふ、是水災ありし所以なり、何ぞこれを功とせん、高田某もそれに附たる者共なり、此事紫芝園漫筆下巻に出たり、

【筥補】諸大名參勤交代の事、來亥年より先規の如く、在府在國たるべしと仰出さる○【筥補】金銀錢の札遣ひ有之、所々先年御停止なりと雖も、向後札遣ひすべしと被仰出、御旗本五百石已下の輩へ、拜借金を仰付らる○【無補】十二月二十八日、土佐掾橋正勝操芝居木挽町にて興行免許、翌年四月一日より看板を

か、げ興行す、

○享保十六年 辛亥

正月八日、狩野榮川古信卒、三十一歳○四月十五日、西北大風、午下刻目白臺武家方より出火、其邊のこらざ不動堂も焼失、關口水道町改代町邊、中里赤城の社邊武家組屋敷、牛込市谷邊、逢坂上下御堀端まで類焼、同時麴町三丁目續番町へ飛火、半藏御門外より御堀端残らず、外櫻田霞が關邊諸侯藩邸、虎御門幸橋御門燒、愛宕社残り、久保町芝口通町筋神明宮前、鐵砲洲海邊に至り暮六時鎮る、武家町屋敷寺社夥しき延焼なり、
此大事より成○五月二十一日、官儒安見晚山卒、名元道、稱の門再興なし○七月十二日、茶人野田醉翁卒、名久忠、橋本水善福寺に葬す○八月十一日夜より十二日晝八時まで大風、十七日夜并九月二日大風雨○九月十七日、狩野永真憲信卒、十四歳○十月十三日日蓮上人四百五十年忌、諸寺院法會あり○【無補】十月吉原萬字屋又右衛門、京島原より遊女を下して大に流行す、是より吉原にて京坂の女

を抱る家多くなれり、○十一月十三日甘露降○十二月十九日、儒師吉田希賢卒、稱八二本願、承敬寺に葬す

○享保十七年 壬子 五月閏

正月十二日、儒師矢野拙齋卒、名義道、稱理平、品川海晏寺に葬○二月十二日、愛宕下青松寺より出火、新橋迄燒、同日小石川白山より出火、松平甲州侯邸にいたる○三月増上寺柵門内子聖權現勸請○三月二十八日、淺草本藏寺門前より出火、淺草下谷邊寺社町方多燒亡、此時御藏火除のため、屋敷、旗籠町、福宮町等の内町屋を召上られ、堀田原に營地を下し給ふ
 篤庭云、此時の火は常とかはりて、數多の處より先だち後れて出たり、先づ第一は西の御丸下より始まり、御所も一ヶ所燒たり、武家方町屋其數をしらず失せて、凡延焼二里餘となむ、大かた火は一つなるが、分れて數筋となるは常なり、然るにかく數十の所其場所を略す、別に記載しあればなりより起るは、此時八九十歳の人もしらざる所なりと語り傳へたり、
 ○神田明神樓門再建立、町々より神事能入用の三分の一を見積り、金三百兩を収む、其餘武家町人

より奇附なして建立す○淺草壽命院にて、上州新田醫王寺曦藥師開帳○岩船地藏尊目黒にて開帳○天下飢饉疫癘行る

○六月十三日、鯉屋杉風卒、八十六歳、西本願寺中成勝寺に葬す○七月廿三日、儒師平野金華卒、四十五歳、稱源右衛門、駒込大物店、文莊先生と號す○冬蹴鞠名人栗本光壽卒、八十歳、神田に居せり、鞠の空といふ香味壽が職方を專とする、な丹練したり、近世の妙足にして、今も光よし世事談にいへり○昔々物語成、新見入道法入編、寫本なり、慶長に世事談にいへり、和にいたり其男、恆足軒冬彦補正再刻し、今以て世に行はる○【篤補】萬石以下御家人、出羽、陸奥、信濃、越後、越前五ヶ國に知行所有之、布衣已上の御役人は、勤役の内ばかり、願次第御藏米と御引替可被下旨仰出さる、但取來る知行所は、其儘領知仕、定めを以上納し、山林等は地頭の取箇にすべき旨被仰付、西國四國中國邊、作毛蟲付損耗飢人等多き故、萬石以上の輩へ拜借金仰出され、御廻米等有之、萬石已下へも拜借金仰付らる、

○享保十八年 癸丑

春淺草寺奥山に櫻樹を栽○四月祭酒林信充、日暮里

諏訪臺に遊んで十二景の詩あり、十二景は筑波茂蔭、秩父田家、王子深林、平塚落雁、鶴臺秋月、染井夜雨、黒髮山殘雪、豐島川歸帆、中里晚鐘、西原晴嵐○富士行者身祿恂といふ者、俗體にして富士へ登る事三十三度、終に今年六月十七日山の七八合目にして絶死す、青山海藏寺に墓有
 ○三月より回向院にて、城州嵯峨釋迦如來開帳○去年より引續米價貴し○七月上旬より疫癘天下に行はる、十三日十四日大路往來絶たり、藁にて疫神の形を造り、これを送るとして鉦太鼓をならし、はやしつれて海邊に至る

篤庭云、此時江戸のみならず、海内均しくこれを憂へ、老幼ともに追れし者は、百人中一二人に過ぎず古へより未曾有のことなりしと云へり、

○飢饉に付御救を給はる○七月八日より、築土明神本地觀世音開帳、八月二十○八月六日、金彫工横谷宗珉卒、東本願寺中、等覺寺に葬○八月十九日、晝より夜に入るまで、大風家を潰す○川崎明長寺石觀音の靈龜石海中より上る○九月狩野即舉豐信、唐土の鞍置馬を畫たる額を、

浅草寺へ控く○江戸名勝志云、江戸の町人加賀屋長兵衛、故主へ忠義を盡し、御褒美として東叡山の傍にて百一坪の地を給ふ○十一月浅草熊谷稻荷社へ、巴御前の額が像なり○江戸眞砂六十帖の文を略して云、江市屋宗助といふ商人といへり○元禄中大火に竹木等の商ひなはじめ、又護持院の石垣受買等にて多くの利を得、又今年日本橋通川渡の事を承りて、次第に仕合よく大分限となり、米澤町に住せり、これが工夫せる格子を江市屋格子といふ、宗助五十歳計りにして子供に世なゆづり、落髪して百歳といへりと云々、

○享保十九年 甲寅

二月二十日、行徳高谷村の濱鯨二ツ流寄る、五尋、兩國橋邊廣場に出して看せ物とす○二月二十五日、儒師田中蘭陵卒、三十六歳、山○三月二十一日、弘法大師九百年忌、法堂を設く○四月二十四日、紀伊國屋文左衛門死す、所謂紀文大盡也、併賦千山と云、靈巖寺中淨等院に墓あり、晩年深川一の鳥居の側に居して終り○七月二十五日、世上へ毒の降るといふ噂して、井戸へ蓋をなす○八月十二日、官儒室鳩巢先生卒、七十八歳、通稱新助、護持院東農家、九十月十日、俳師桑岡貞佐卒、六十五歳、本所の後に葬す○十一月官醫望月三英、御薬法の七寶美髯丹を弘む○十二月本所に御米藏建○大坂豊竹肥前掾江戸へ下

り、是より義太夫節の淨瑠璃大に行はる、肥前掾は延享中芝居座元と成る、

○享保二十年 乙卯 三月間

二月四日、浅野家義士三十三回忌、浅野家の舊臣石碑を建る、銘文南條小兵衛撰なり○三月十九日、儒師山田麟嶼卒、名弘嗣、稱大作、谷中南仙寺に葬○三月本石町へ初て人參座を置く、町醫岩永玄浩、杉山養元和人參を製す、同木下得仙日光人參獨參湯を弘む○角瓶人丸山權太左衛門長崎にて終○船板の名號回向院にて開帳、合運○同所にて下總新北野開帳○東叡山に吉祥天宮建○五月七日、書家佐々木文山卒、七十七歳、増上寺、中淨運院に葬す○五月晦日、儒師鷹見爽鳩卒、四十六歳、新正源寺に葬○七月三日、黒雲天を覆ひ、大風瓦を飛し所々家屋を損す、龍巻なりといふ○秋深川八幡宮の境内に、俳師祇空を祇敬靈神として神に祭り、小祠を建る、吉田家に由緒ありし故也といふ、祇空終れる墓の側○十月麻布邊焼亡○青木崑陽稱文、台命を蒙りて甘藷を栽○關東豊作○十二月二十三日、細井廣澤卒、

七十八歳、等々力村満願寺に葬す、門人平林惇信、藤富之、烏石葛長、關忠恭、三井親和、藤益道其外數多あり、男を九皇知文といふ、

○享保間記事

目黒高幡寺開創、金毘羅權現社造營、或記、當社は開闢古興ありてより諸人も増しける也、寛延元しといへり、此時代再年八千九百四十坪境内寄附ありと云々○葛西半田稻荷社、平井聖天宮參詣多し○江戸中瓦葺御免あり○中野に桃樹を栽しめらる○染井植木屋伊兵衛、百種の楓を養ふ○武家がた繼上下享保の頃より始るよし、瀬田問答に見えたり、但し裏付上下はその以前より見えたりとぞ○神田明神社神事能は大永中より連綿たりしが、享保六丑年舞臺并道具を收し倉庫類焼せしよりこのかた絶たり、

篤庭云、神田社神事能のこと大に誤れり、事跡合考杯も誤説なり、享保三年戊戌九月十八日、喜多十太夫これを勤む、是より後絶たり、其故は此時も入用高金六百二兩と、銀三十九貫七十匁一分、外に太夫謝禮金五十兩なり、是にては不足とて、遂に止む事となれり、其以前も寶生杯不足を言て出ざりしなり、

△因に云、中古祭禮に屋臺と號したる物を出したり、博風造りの屋根、四本柱の上げ奥にて、惣體黒漆塗等なり、其中に人形草花等のあしらひあり、是を出しに添へて出したり、其費出しを合て三十四五兩を限りとす、今の出し一本の費にも足らず、物價の賤しく且質素なるを見るべし、この屋臺の外にも附祭と號し、聊のれり物をも出せしなり、屋臺は享保六年に御停止ありて、其後は出しばかりを出す、寶曆の頃より附祭數多出しが、質素にして踊臺の正面に、こしかけをしつらひ、女子二人ならびて腰をかけ、唄をうたひ三味せんを彈、樂のちりめんへ紅絹の裏つけたる手拭をかむる、踊子は其前にて踊る、笛太鼓は底抜日覆の内なり、摺鉦は日覆の上の方へ紐にて釣たり、男子唄三味線をなす時は、かならず扇獅子といふ物をかむる、これ安永頃までの風俗なりとて、天保中終りし太鼓打坂田重五郎のはなしなり、

篤庭云、屋臺のことは大に非なり、是は次第に大に作り、二間に三間程のみならず、牛二匹三匹に牽かせしものなり、内には人形あまたすゑ、岩樹作り花これに應じ、下の方に幕をはり、其の内にて鳴物の拍子するなり、このやたいには必ず名ある男を雇ひて乗らしむ、喧嘩杯の爲めなり、腕の喜左衛門といひしもの、神田の祭のやたいに乗りしが、野べの忠三といへる目あかしを、殺害せしこと杯あり、尤

ふるくよりあること、見えたり、今踊りやたいと云ふもの、これより變じたるなり、其もとは臺尻にて、難波にてだんじりといふ、それは牛車にはあらず、昔は祭禮などにも、かぶき芝居のまねびすることは、さる夥しき引ものにも、人形などかざりしなり、享保六年屋臺を御停止あり、

○此時代書家、岡林竹、細井廣澤、赤井得水、僧東湖、佐々木文山等尤行れたり○芝東禪寺住萬庵師號芙蓉と云、幼ふして宋元の體を刻意し、詩作に妙を得たり後徂徠及び南郭に學んで詩風を變ず、其集を江陵集といふ○享保中荷田春滿東都に下り、國學を教授す、元文中京へ歸る○此頃淺草寺境内に於て、靈全といふもの辻談義に戲言を交へ人の笑をとる、しかれどもいふ所佛道の本意にかなふこと少からず、志道軒はこの靈全を真似たるものなりといふ、塵塚談に出る○時計草異國より渡る○江戸中書狀飛脚として出來けるが、片便なりとて頓て止たり○浮世繪師、奥村文角政信、

芳月、西村重長、仙花、鳥居清信、同清倍、近藤助五郎清春、富川吟雪房信等行る○淨るり語、宮古路豊後掾、享保の末京都より下り一時に行はる、この時豐後掾が風俗を眞似て、髪は文金風とてまげの腰を突立元結多く、巻髪とて髪を毛を下より上へかき、上月代の際にて巻込で結たり、衣類と對尺の羽折を着し、長き紐を先に小さくむすび、下駄の齒に掛ける様にして、腰の物は落しさに差、是此時代の風俗也○巧庭云、此文金風といふ髪は結ぶりは、もと辰松風とてはやりしふりの少し變じたるなり○半太夫節、江戸半太夫は始説經を學び、事長ければしるしがたし○半太夫節、學び、後肥前の太夫に學び一家をなす、割髪、河東節、牛太夫門人也、享保年中の件に云、行はる○松島庄五郎、坂田兵四郎、小出金四郎等が小唄流行○大盡舞小うた流行、中村吉兵衛といへる歌舞妓役者の作なり、くはしくは聲曲類纂に云り○拳相撲流行、遊女玉菊など専らもてあそびしとなむ

○猶後のことなり、嬉遊笑覽を見て知るべし、
○栖原角兵衛といふ者、蝦夷より帆柱を多く切出す、早く朽る故久しからずして止む、大江戸春、秋に出る○品川入口、谷山稻荷社北には、享保の頃まで家居もなかりしが、

今は町並となれり、此社里民の家に在りしを、遊行上人行化の時、上人に乞ふて勸請せりとなり○大久保七面宮別當法善寺は、むかし櫻の名所にして、春毎貴賤此所に遊觀せり、春時山と號するものゆへなるべし、享保の頃は未櫻も残りしかど、遊觀の人は稀なりし由、崔下庵いへり○連雀町は筋違御門の内須田町の續に在しが、此所廣場となりて今の所へ引けたるは、享保のはじめ頃なるべし○享保の末横山町の住升屋作兵衛、本行徳村地先字に三千町と號する所に鹽濱を開發す、今加藤新田と云所なり、又神田なる儀兵衛といふもの開きし鹽濱を儀兵衛新田といふ○此初武相の界信濃坂に、夜毎に鳴物の音あり、笛鼓四五人のかけ聲にして、中に老人の聲一人あり、近在江戸よりも聞に行く人多し、方十間に響しとぞ、翌年春に至り止、大江戸春、秋に出

○元文元年 丙辰 五月七日改元
正月仁風一覽上梓公布あり○服忌令官板○正月九日

茶人片岡左内卒、或可匡、高輪、如來寺に葬す○京粟生野光明寺張子御影、回向院にて開帳○同眞如堂本尊、湯し社地にて開帳○五月文字金銀通用、六月引替始る、文金銀といふ○六月二十四日、岡林竹卒、物海と號、書を善す、淺草寺町宗安寺に葬す○七月下旬より、東の方に赤き星出る、頃なり○八月品川北番、大龍寺に、吳道子の筆南海補陀山鎮海寺立石觀世音像を寫して碑を立る、素人齋伯寫之、加藤氏造立○八月晦日、古筆了仲卒、八十一歳、谷中、臨江寺に葬す○十月小梅村にて錢を鑄させらる、昔小の字あり、今年錢、江にて錢あり○十二月江戸大雷、合運○十二月所々犬煩ひ多く死す○武藏野地名考梓行、稻毛領上菅生村百姓、田澤源太郎執筆

○一もとの日記梓行、輪編
○元文二年 丁巳 十一月閏
三月十六日より淺草寺觀世音開帳○三月二十九日、目白不動尊新長谷寺時の鐘供養、撞初めあり○四月二十五日、晝時外山の邊より龍卷出で、馬場下より早稲田町通を巻き、人家等損す○五月三日、下谷八軒町より失火、御徒士町邊上野廣小路池の端、東叡山慈眼

堂、其外坂本金杉箕の輪まで焼る○七月十九日、書家池永道雲卒、名英春、篆刻を善く、透草齋願寺に葬す○八月川口善光寺先に池魚に罹りしが、此節より再建の爲奉加をはじむ、男女老稚日毎に募縁の歌をうたひ、鉦をならし市中を群行して施財を募る、九月に至りて停止せらる、春臺先生この奉加の事を譏れるの文あり、則先生の文集に載たり、其文面白けれど、長ければ記さず○飛鳥山へ櫻樹を栽しめらる、同所へ碑立、鳴鳳卿文を撰す、金輪寺住職齋齋齋の建、顧より名づけられし由也○八月二十日、儒師宮重忍齋卒、稱甚左衛門、四、○龜戸又深川小奈木川にて鑄錢あり、小奈木川にて鑄る所のもの、表の輪或は背面に川の字あり○十月十日、夜五時星月を貫く、東より月中に入、リ南方に出づる十一月七日、世上一同に煙のやう成る物吹出し火事の如し、此節暖氣にして筭生じ櫻花咲○閏十一月十二日、二世英一蝶卒、通稱長八、深川關嶽寺に葬す○十二月十日、水府侯儒臣安積澹泊卒、號老牛居士、九十一歳なり、齊水先生の門人なり○薩摩芋此ごろより追々弘まる、寶曆に至りて上總下總其餘國々に

て作る、

○元文三年 戊午

二月朔日、夜五時頃光物飛ぶ○三月二十九日儒師飯田東溪卒、名隆興、淺草本藏寺に葬す○四月二十七日、書家岡秀竹卒、林竹の男、名義篤、稱權平淺草寺町宗安寺に葬す○五月富賀岡石鳥居建、銘文鳴鳳卿書未得水○五月五日、儒師入江太華卒、名駿、字千里、下谷常林寺に葬す○五月十日、儒師徳力恭軒卒、號有隣、日暮里南泉寺に葬す○關東凶作○七月十七日、俳人深川湖十卒、六十餘歳、一號老鼠山谷宗林寺に葬す○洞房語園梓行、庄司勝富作

○元文四年 己未

今年冷泉爲久卿御下向の折節、飛鳥山の櫻を獻りければ、折枝の色香見せずばあすか山○牛御前王子權現開帳○回向院にて二月堂本尊開帳○本所押上にて鐵錢を鑄、又平野新田にて鑄錢あり○三月四日、神田明神下より出火、柳原まで焼亡○十月此頃はやりし豊後節淨瑠璃を停らる○米穀拂底に付下直の御拂米あり○十月二十三日、儒師室勿軒卒、名洪讓、大塚御厩島に葬す○十二月晦

日、日暮里養福寺にて、自墮落先生戯れに葬式の眞似をなし、踊り狂ひて耳目を驚せり、同日四十歳にて終りしと見えたり、墳墓も同寺にあり、自墮落先生、通稱山崎不思庵、不量軒、捨樂齋、福速房等の狂説あり、性質氣隨にして仕官を辭し、常に酒を好み俳諧をよくして蕉門に遊べり、風俗文集二冊、不思庵勞四狂二〇【只補】是年深川山本町成、册刊行せり

○元文五年 庚申 七月間

回向院にて信州善光寺如來開帳○伊勢國府の阿彌陀、江戸にて開帳○三月十一日、南郭の二男恩卿、痘患に罹りて卒、十七歳、稱繁三郎といふ、東海寺中少林院に葬す、幼より神童の名あり、其の詩を集めて鐘情集と云ふ○七月朔日、書家篠崎東海卒、名維章、根岸善性寺に葬す○俳人清水超波卒、三十六歳、淺草稱念寺に葬す○九月一日、豊後節元祖宮古路豊後掾死○人馬といふ藝輕業を交へてなす者多し、閏七月停らる○十月二十六日、東湖禪師寂、小石川三百坂慈照院に葬す、能書の開えあり

○元文年間記事

小金井村多摩に、和州吉野常州櫻川の櫻の苗を栽添らる、始は寛水のむかし桶させ給ひし所なりし○武藏志料に云、が、延享の頃までも猶桶しめられしといふ

鈴が森八幡宮境地にある所の鳥石は、麻布雑色町の先古川と云所に數年在て鷹石と號す、今も所の名を鷹石と呼ぶ、元文の頃鳥石葛辰、己が名を世に知らせんと、此石を鈴が森に移し、からす石と改しなり、書家の虚名を好む故なりと云々○平林悖信が俗稱庄父は、鍵屋清左衛門とて室町の帳屋なり、清左衛門書を能くす、大福帳の上書して賣事昔はなかりしが、此清左衛門をはじめとす、其頃江戸中商家大方彼が上書を求し也、悖信は細井廣澤が門に入、能書の聞えあり○石疊の染模様はやる、市松形といふ、歌舞妓役者佐野川市松好みて着したるなり○舞子の花かんざしはやり出す、

○寛保元年 辛酉 三月三日改元

正月二十四日、書家寺澤友太夫政辰卒、七十一歳、號友齋、車坂大久寺に葬す○二月九日、後藤氏十二代壽乘卒、五十、其後寛延二年の頃より歳々年例とはなれり、徒流が説によりたりと見ゆ、こは誤りなり、寛延二年己巳のとしこれ始めなり、其時堺町中村座芝居にて、助六狂言に其體をうつし、殊更賑○三月吉原仲の町へ櫻を栽はしむ、其後寛延二年の頃より歳々年例とはなれり、徒流が説によりたりと見ゆ、こは誤りなり、寛延二年己巳のとしこれ始めなり、其時堺町中村座芝居にて、助六狂言に其體をうつし、殊更賑

はしかりしと也、其淨る○三月朔日、雲光院和尚要阿寂、堂
再建せし○永代寺にて鎌倉八幡宮開帳○七月十七日、
和尚なり○永代寺にて鎌倉八幡宮開帳○七月十七日、
儒師佐藤周軒卒、六本木深○七月廿四日、新井宣卿卒、
白石○十二月廿五日、捨像流劍術祖高木太左衛門卒、
男也○十二月廿五日、捨像流劍術祖高木太左衛門卒、
胸込高林寺に墓あり、辭世の歌形付てあり、「神佛な○補】我衣
りかたまりて何かせんになりに成るものになれ○補】我衣
著云、是年踊子停止せらる、ころび藝者の鼻祖なりと
あり、

○寛保二年 壬戌

正月下旬より、東方へ曉七時頃彗星出る、長一尺、
月六日、俳人早野巴人卒、六十○七月二十八日より雨
降續、八月朔日晝八半時より大風雨、夜通し止事な
し、近郊大水漲り出、本所深川人家を浸し、大川通り
水勢烈しく、兩國橋は御普請中にて杭を流し、永代
橋、新大橋損じ、隅田川土手切れ、葛西へ水押入、千住
土手切れる、五日又利根川堤切れ、次第に水かさ増り
溺死多し、官府よりは御助船を出されて救はれ、小屋
を建て食物を給はる、八日九日又大風雨にて水増り、

下旬に至りて引く、關東筋都て洪水にて御普請あり、
翌年亥五月刀禰上流以南修治告○兩國橋當四月より御普請
成の碑文、服元喬これを撰す○兩國橋當四月より御普請
中にて、往來船渡しになり、三年に及び延享元甲子五
月、元の如く御普請成る○十一月故實者木邑高敦卒、
芝泉岳寺

○寛保三年 癸亥 四月閏

二月朔日より、上野清水堂觀世音盛久守開帳○二月九
日より待乳山聖天宮開帳○同日より護國寺にて、河
内國葛井寺觀世音開帳○二月十五日より、穴八幡宮
内觀世音開帳○三月十五日より、茅場町藥師境内に
て、井の頭辨才天開帳、此頃友人豐芥子より、開帳記といふ一
年迄の開帳悉く集記せり、よつて其の儘、に記するが故、此の○飛
鳥山の花を押花といふものにして、最勝上人より冷
泉家爲村へ參らせられける時、かはりて折枝のむかしも思
花の春の色香○四月朔日より淺草西福寺にて、京清水圓
養院觀世音景清守開帳、西福寺辨才天開帳○同日より
王子權現同稻荷開帳○同日より日暮里淨光寺人丸明

神開帳○同日より六阿彌陀不殘開帳、行基菩薩千三
四月六日、醫師望月百里卒、號雷山又草庵、七十九歳、淺草
同時に百里二人あり、一人は俳師高、松院に葬す和歌を能せし人なり、
野百里雷堂と號す、混すべからず○閏四月朔日より、湯島

社内にて大坂天王寺聖德太子開帳○同日より市谷八
幡宮にて、野州東高野山醫王寺藥師如來開帳○同日
より池の妙音寺にて、比叡山坂本聖蓮寺祖師開帳○

六月二日、尾形乾山卒、八十三歳、號深省、稱新三郎、法橋光琳
り、茶事をよくす、の兄也、弟とするは非也、陶器に名あ
坂本善養寺に葬す○閏四月勸進比丘尼中宿を停らる、寛保
の頃、ある比丘尼八官町にて、櫻田邊の武士と俱に情死せり、しかりし
より比丘尼町中へ出る事を止給ひし由也、江戸眞砂六十帖に云、神田
より出るを上とし、早稲田下谷竹町本所あだけを下とす、宿は新和泉
町を上とし、八官町を中とし、其餘淺草門跡前、京橋太田やしき、同心町
所々へ出る、頭巾は黒縮緬加賀笠なり、正徳二年より俄に淺黄木綿の
頭巾になる、上の比丘尼は子びく尼二人つれる、全盛目をおどろかし
けると云ふ、

篤庭云、比丘尼の事御觸は、是より先寶永三亥年に
もありしなり、比丘尼情死の事、猶ふるくは吉原徒
然草に、源太郎といふ比丘尼、米屋のむすこと情死
したる由見ゆ、

○七月朔日より、淺草諏訪町諏訪明神開帳○同日よ

り飯田町世繼稻荷開帳○同日より市谷八幡宮にて、
三州鳳來寺日輪院不動尊開帳○十一月上旬より、夜
夜珍星西の方に現す、稲星と

○寛保年間記事

俳諧宗匠江戸に三十六人あり、夥しき事にて珍らし
とて、常仙といふ人の輯にて、千々の秋といふ俳書出
たり、今時宗匠と號する者、幾百人ありやはかるべか
らず、此道の衰たる歎將盛なるか知らず○宮寺の地
に、山猫となづけし茶屋女所々に多かりし、

増訂武江年表卷之四

增訂武江年表卷之五

○延享元年 甲子 二月十九日改元

二月朔日より湯島天満宮境内にて、下野岩船地藏開帳○同日より市谷八幡宮地主茶木稻荷社開帳○二月五日、夜子上刻、天中央より少し西の方へ、如此星現る、嘉瑞也といふ○二月より護國寺にて、武州御嶽山藏王權現開帳○同月より淺草寺内松尾明神開帳○二月十五日より三日の間、中村勘三郎芝居興行の初年より百廿一年の壽狂言興行○矢口新田神廟の碑を立、南郭文を撰す○四月三日、儒師山本順夫卒、名信柳島法性寺に葬す○駒込朝日山王宮營建○四月朔日、淺草光感寺常麻髮毛曼茶羅を拜せしむ○四月より護國寺にて上州碓氷郡松井田金剛寺十一面觀世音碓氷定光守木尊開帳○四月朔日より深川八幡地内に、伊勢白子子安觀世音開帳○四月朔日より深川八幡地内に、伊勢白子子安觀世音開帳○五月十三日より同院にて、伊勢白子子安觀世音開帳○夏より冬まで諸國風邪流行○六月十五日、神道學者岡田盤

齋卒、名正利、稱左近、七十八歳、淺草行安寺に葬す○七月朔日より同院にて、鎌倉高德院大佛腹籠彌陀開帳○七月より穴八幡宮内氷室明神開帳○七月朔日より芝神明宮内にて、箱根光明寺十一面觀世音後藤守木尊開帳○七月九日、書家山本惟命卒、稱忠左衛門、三田龍原寺に葬す○七月晦日、俳人中川宗瑞卒、稱隨院○七月海中魚多死、生簀の魚も同じく死せり○八月より目黒不動尊内にて、大磯切通し梅林寺身代地藏尊開帳○九月二十一日、山谷町本性寺自雲靈神忌日也、攝州川邊郡小浜の産、善兵衛と云人江戸に下り、新川の商家岡田某に奉公しけるが、正直なる故其家を繼しめて孫右衛門と改む、法花を信じて常に讀經唱題す、三十八疋をうれふる事甚しく、死後瘞を患ふる人を救んと誓ひて終る、よつて秋山自雲靈神と祭る○九月二十七日、金雕工土屋安親卒、七十五歳、通稱彌五、八入道して東齋といふ○釜師淨林卒、月日不詳

○延享二年 乙丑 十二月間

二月朔日より茅場町薬師境内にて、信州蓮池院諏訪本地勝軍不動尊開帳○二月五日、龜戸天満宮近隣の在家より火出て、元祖信祐が建立せし社頭以下一字も残らず焼亡せり○二月より澁谷長谷寺大像觀世音○同月六日より茅場町薬師内にて、相州金目山坂東七番目聖觀音開帳○八月十九日大風雨、芝海邊龍卷あり○九月十四日、大風家屋を損ず、淺草福井町銀杏八幡の銀杏古樹吹折る○十月十八日、儒師長澤東海卒、名丑、字元丁、深川法藏寺葬

○延享三年 丙寅

御首佛開帳○同十一日より同院にて、上州脇屋山正法寺觀世音開帳○二月十二日、朝五時過千駄谷より出火、青山残らず櫻田麻布三軒家、本村氷川社善福寺門前、廣尾白金村、三田伊皿子、白金瑞聖寺、猿町車町高輪、南北品川迄焼亡、武家町屋敷、しく焼亡す翌十三日鎮る、高輪如來寺に在ける、但唱が作丈六の仁王尊の石像、并地藏尊の石像も焼けて跡方なし、白金細川侯御やしきの邊伊皿子の邊は百三十年日にての類焼と云ふ○四月朔日より淺草實相寺にて、常陸小金井妙徳寺日蓮上人開帳○同日より同院にて、攝州茶碓山麓一心寺圓光大師引接彌陀如來開帳○同日より牛込圓福寺にて、相州妙傳寺星降の梅、日蓮上人像開帳○同日より御藏前八幡宮境内にて、信州兩界山建龍寺不動尊開帳○同月二日より、本所一ツ目大佛勸進所にて、南都東大寺二月堂觀世音彌陀如來開帳○四月より護國寺蟹清水出現薬師、自坊にて開帳○四月十八日、書家關口黃山卒、名忠貞、小日向金剛寺に葬○七月朔日より、伊勢朝熊岳金剛證寺虚空藏菩薩、同院にて開帳

二月朔日より、隅田川木母寺梅若丸守本尊、文殊菩薩開帳○同日より雜司ヶ谷本納寺にて、相州圓教寺休息日蓮上人開帳○二月二十九日夜、四時前築地本願寺脇武家方より出火して、この邊武家方一圓、南八丁堀本八丁堀、茅場町小網町大坂町、堺町葺屋町芝居兩座、村松町橋町此邊武家方、馬喰町濱町同朋町米澤町本所小泉町横網町松井町相生町龜澤町邊武家方、淺草より小塚原まで延焼、翌朔日夕七ツ時鎮る、淺草寺は舎のみ未焼ける○二月晦日、畫本所靈山寺横堀より出火、大風此邊の寺院多く焼亡○三月より、淺草寺内松壽院丈六辨才天腹籠像開帳○書家赤井得水卒、稱文次郎、伊勢町住○四月朔日より、増上寺常照院あか芝浦出現彌陀如來開帳

○同月より湯島天神内にて、常州鹿島護摩堂本尊五
 大明王開帳○下落合藥王院釋迦如來開帳○四月烏丸
 光榮公關東御下向、御道の記あり、うち出の濱の記と
 いふ、寫本○淺草池の妙音寺にて、駿河連永寺日蓮上
 人鏡影開帳○目黒不動尊境内にて、下總葛飾郡正覺
 寺不動尊開帳○牛込原町經王寺にて、京上烏羽實相
 寺雨祈日蓮上人像開帳○五月十八日より六月十八日
 迄、日延、淺草寺觀世音開帳○同二十六日より、御藏
 前大護院八幡宮本地愛染明王開帳○六月十四日、儒
 師藤江邦良卒、稱清、西久、保光明寺に葬す○七月朔日より、愛宕下地
 藏尊開帳○七月より、本所彌勒寺川上藥師如來開帳
 ○七月十八日、秋澤章弼、池田利春、紀伊國屋惣兵衛
 の三人、淺草川に網を打て一寸七分の不動尊の像を
 得たり、大同二年空海と彫たり、谷中妙林寺に安置す
 ○九月芝神明宮神主西東豊前守、天満宮眞筆聖像を
 拜せしむ○九月朔日より、谷中大圓寺にて大黒天開
 帳○十一月矢口新田社別當成就院、本堂方丈鐘樓と

の外とも焼亡○事跡合考寫本成、柏崎永、以著○江戸めぐり
 一冊梓行、水多安、勝子○江戸名勝志梓行、藤之原、著、三卷

○延享四年 丁卯

二月朔日より、淺草寺内梅園院子育仁王尊開帳○同
 日より、淺草新堀東漸寺藥師如來開帳○二月九日、外
 櫻田火事、諸侯の藩邸類焼凡十字と云○淺草八軒寺
 町本法寺にて、安房東條小松原鏡恩寺日蓮上人像開
 帳○牛込七軒寺町久成寺にて、駿河岩本日蓮上人像
 開帳○三月朔日より、谷中一乘寺子安鬼子母神開帳
 ○下谷法養寺にて、甲州嶽澤經王寺日蓮上人像開帳
 ○三月惡黨濱島庄兵衛并黨類刑せらる、世に日本左
 衛門と云、鶴庭云、庄兵衛は尾張の者なり、其時の書付あり、無聲
 云、庄兵衛は京都にて捕へられ、遠州見付にて刑せらる
 ○四月朔日、大霜降積る○同日より深川永代寺にて、
 大坂御城鎮守生玉明神開帳○同日より谷中妙法寺に
 て、中山日蓮上人像開帳○同日より二十日迄、押上春
 慶寺普賢菩薩開帳○三田寺町林泉寺にて、奥州賀美
 郡牛真似村往生寺圓光大師開帳○牛込神樂坂行元寺

○延享年間記事

觀世音不動尊開帳○小石川善雄寺手引地藏尊開帳○
 高輪正覺寺彌陀如來開帳○猿江意成院、辨天、社有、神田明
 神北隣に移る、後安永中元の、猿江にうつる○五月十七日、儒師菅野兼
 山卒、七十歳、名直養、谷中玉林寺に葬す○六月三日、俳人小川破笠卒、八十歳、
 宗有、稱平助、俳諧并に書をよくし、又餘物
 其外もろく、の細工に名あり、桶町に住せり○五月二十七日、俳
 人致曲庵逸志卒、七十三歳、淺草報恩
 寺、地中高徳寺に葬す○五月晦日、太宰春
 臺卒、八十八歳、稱彌右衛門、
 門、谷中天現寺に葬す○春川秀蝶、愛宕社へ祇園會
 細圖の額を掲ぐ○淺草大護院八幡宮修復助成の爲、
 三年の間晴天八日づゝの寄進能興行あり○七月朔日
 より回向院にて、羽州湯殿山注連寺大日如來開帳○
 同日より回向院にて、上總國小田喜大圓寺彌陀如來
 開帳○十月上旬より、諸國風邪流行○十月二十四日、
 俳人菊岡沾涼卒、六十餘歳、名房行、號米山、
 神田錦治町住、江戸砂子、世事談、あやにし
 き、俗諺志、其外著述多し、いづれも
 有益の書也、男政逸恒足軒と號す
 篤庭云、菊岡房行の孫は柳川直光が弟子にて、刀劍
 の飾具のほり物をなし、光之と名乗りて世に聞え
 たり、祖の名を繼で菊岡沾涼と號しぬ、

眞先稻荷社、延享三四年の頃より詣人多く繁榮せり
 ○谷中笠森稻荷參詣始○風閣守、當山派修驗、觸頭なり、湯島天神
 中坂より聖堂脇へ移る○延享二年の春、江戸の流行
 物を集めたる句集あり、時津風と題す、時々庵の門
 人反故齋果然といへる人の編也、書は寄合、書きなり、其内を撰て
 目次のみを左にしるす、
 △浮輪、遠景の山水を、△雜司谷會式飾物△同百度參△同
 風車△志道軒講釋△中野桃園△富が岡吹矢△丁字屋
 喜左衛門香具△女角力△紙屋五良兵衛△辻寶引△象
 股引△拳角力△大名儉純△豐道心△竹村煎餅△笠森
 稻荷△兩面帶△雷鶴之介相撲△芝缺切形△赤坂奴△
 正燈寺紅葉△薩摩芋、元文以來のものなれば此
 の時代に珍重せしもの、△回向院前
 淡雪△池の端槌屋、小間、△深川筑蕎麥、伊兵衛、△牡丹屋敷
 花二十日午込白と申、べし松下南花とあり、△海老藏蜻蛉賣△愛宕下植木市△淺
 草團十郎艾△湯島油揚△伊皿子麩△覆面頭巾△山下
 徹膝花屋と云暖簾あり、土妓の類歟、未考、

篤庭云、山下敵膝は賣色なり、名けて是れをけころと呼ぶは略呼にて、駭ころばしなり、此句一銚子足に恨とは、けころばしたるをいへり、こぼれはぎは脛のあらはるゝを云ふ、斯ばかりあらはなるを、など考へざる歟、但しあらはにはいざることをあるは、忌むことのありなどする時也、是は左にあらざるに思ひ得ざりしなり、其故は篇末にけころのこ

れ忍びけんどん也、既にこの本集發句に、藪入や二階へ二膳しのふ山といふ句あり、この事だにわかまへなくては、前の大名けんどんも何と心得済したるかいふかし、けんどんには其かみ食類のみにあらず、賣色にもこれあり、それらの事委しく嬉遊笑覽飲食部にいへり、披きみるべし、

△中村屋貨物 貸衣裳な △吉原燈籠 △釋迦坊主 未詳 △麒麟の助 經業 △瀬川帽子 △兼平櫻 △忍儉純 未詳

△鳥越 口習 △卷鬢 此時代の風俗也 △豊島屋酒 がしく △芝樂若 に焼や殿の黒 △廣澤石摺 △豊後節 △大名縫袖口 △神田の齋の者 △羽織長紐 △江戸川椎木 場矢 △狂言作者津打

篤庭云、忍をおしと讀みたるは何事ぞ、此はしのびけんどんなり、前にも大名儉純あり、けんどんは慳貪と書べし、今も口語にいふ意と同じ、何にまれ食物人の心に任せて、勧めざればしかいふ、器を清らに作りたるを大名けんどんと云、忍びけんどんは一箱の内へだて有て、汁次も加薬も其中に入、そばにまれうどんにまれ、この器に盛りて持運ぶ、こ

治兵衛 △熊野十二所 △涼琅大黒 新米や二にっりともあ の書師にて、日の出 △八人藝 △智恵筏 今も子供のもて遊 大黒を畫くに名あり △入 山狩野貴信、涼琅は水戸子瓜 △扇屋染 丸く四角扇紙六角菱などに形を交へ、其中加賀骨扇 △蕃椒地藏尊 三分法安寺、常樂院

△懷紙折 通り新石町 △狂歌坊 未詳

永代寺八幡宮開帳 ○二本榎承敬寺祖師開帳 ○淺草日輪寺、本所回向院の兩所に於て、奥州會津西光寺日限

て鷹匠に咎められて、一ふし二たかしやうさんになす能相とよまれし法師にはあらずや、

地蔵尊開帳 ○五月朝鮮人來聘、正使洪啓禧、副使南泰書、從事曹命榮、旅宿東本願寺なり ○八月十四日、書家馬場春水卒、號海堂、市谷長昌寺に葬す、馬庭云、春水馬場流の祖なり、丈助と稱す、七十餘歳にて、猶わひき時の手跡の艶あり、或人いかりして然るに、日書故也といひしとや ○閏十月二十一日、俳人堀内仙鶴卒、七十、四歳 ○十二月琉球人來聘、正使具志、佛、燒失、 ○奥澤村淨心寺

政より再度行る ○郡内微塵綺衣類はやる ○江戸節、土佐節、肥前節等の操芝居ありしが、次第に廢れ大坂の義太夫節となれり、

○寛延二年 己巳
正月二十三日、長雄流筆道祖長雄耕雲卒、六十二歳、稱半右衛門、麻布淨

○寛延元年 戊辰 十月閏 七月十八日改元
三月二日、夜谷中瑞林寺より出火、本堂塔頭以下燒亡
感應寺 今いふ天王寺 へ移り、本堂塔頭門前町屋燒亡 ○三月十八日より、魚籃觀世音開帳 ○同日より三田臺町泉福寺藥師開帳 ○同日より、魚籃下大信寺觀世音開帳 ○同月二十五日、官醫曲直瀬君端卒、六十三歳、安樂院と號す、麻布天眞寺に ○三月二十九日、南郭の長子溫卿卒、三十 ○四月初日より、目黒祐天寺彌陀如來靈寶開帳 ○同日より

正二月二十三日、長雄流筆道祖長雄耕雲卒、六十二歳、稱半右衛門、麻布淨
林寺 ○三月二十一日、儒師桂山義樹卒、號彩嵩、稱三郎兵衛、淺草新堀威光院に
葬す ○今年神佛啓籠肇りの月日詳ならず、開帳記によつて左に示るす ○深川洲崎辨才天、古川藥師如來、安養 品川寺水月觀音、三の輪真正寺觀世音、秋葉權現、四谷眞成院鹽踏地藏尊、淺草黒船町泉住院兩輪辨才天、淺草寺内日音院荒澤不動尊、同松壽院丈六辨才天腹籠本尊、池の妙音寺妙見菩薩、不忍池辨才天、文錢にて蛇のつた

ちを造りて納む、此年より茅町迄池谷中長運寺祖師鬼子母に板橋を渡し、六月廿三日より渡り、谷中長運寺祖師鬼子母神、三田寺町明王院弘法大師、同所願海寺不動尊、以上何れも自坊に居付の開帳なり○木母寺梅若丸廿七萬五千日供養○二月九日より回向院に於て、常陸國河内郡大徳村寶積寺子安辨才天開帳○四月朔日より五月晦日迄、回向院にて三河國山中檀林法藏寺出世觀世音開帳○五月十九日より六月三日迄、龜戸妙義山權現開帳○六月五日、羅漢寺中興象先和尚寂、三歳○五月四日、北村湖元卒、四谷日宗、寺に葬す○七月朔日より、回向院に於て、信州善光寺南門前西荊萱親子地藏尊開帳○當夏中より雨繁く降りて、七月も晴間なく、二十五日に至り大風雨あり、夫より雨降り續きて、八朔大風起り時々雨降、八月十三日の曉より北風大嵐となりて、牛込小日向出水、下谷淺草邊迄溢れ出、高田關口邊家を流し人を溺す、江戸川通り橋々押し流し、小石川通大水神田上水掛樋流れ、昌平橋筋遠橋其外神田川橋々流る、兩國橋大橋恙なし、本所深川水乗らず、九

月にいたり漸晴天となる○八月光物飛ぶ○雜司谷鬼子母神境内に、孝女くめといふもの、麥葉にて作たる角兵衛獅子を賣り始む、馬庭云、夢わらの角兵衛獅子のことはこの草紙の説、うけがたき事多ければ、この久米といふ女の作せめしといへるも如何あらん、但し大凡は此頃より出し手遊びなるべし、作り主のことはしるべからず、右の書名を○十一月十八日茶人望月宗竹卒、號五峰軒、澁橋に住○新著聞集十八冊刊行、中古世の中つめたる書なり、馬庭に○今年江の島辨才天本社にて開帳あり、江戸より參詣の輩多し、

寛延三年 庚午

二月十五日より、下谷高岩寺地藏尊開帳○高田威通寺毘沙門天開帳○三月十八日より晴天十五日、筋違橋御門外品地に於て、俗にいふ、加賀原觀世太夫勸進能興行あり○房州加茂村日蓮寺祖師、淺草にて開帳○四月八日より七月迄、芝泉岳寺釋迦如來開帳○日暮里本行寺に道灌丘碑を立、筑波山人石正翁文を撰す○四月二十三日、朝曇八ッ時過西北大風雨、大霰降る、本所邊凡三十及四十多位、龍巻とて家を潰す、小川町番町は十、矢位、筋違外動進能興行能卷にて家根を取らる、近在道中人馬

はやり出す、

馬庭云、一雪が新著聞集に、梅澁吉兵衛といふ者、胡椒頭巾といふことを始めて仕出す、大惡黨なり云々といへり、されど胡椒頭巾の名は、延寶年中に撰みし洛陽集に見えて、「スリ」が用るよしへり、然るに芝居役者伎藝故實に、宗十郎頭巾は故助高屋いまだ宗十郎といひし時、梅の由兵衛にて被りしより、今に其名を殘すといへり、いと忌はしき物なり、この事も猶委しく、嬉遊笑覽服飾の部に見えたり、

○寛延四年江戸圖に、天文臺神田佐久間町二丁目三丁目の北にあり、池の端築出し新地と記り、白山御殿を御藥園と有、風閣寺聖堂の南にあり、

寶曆元年 辛未 六月間 十一月三日改元

二月十八日より、護國寺觀世音開帳○三月十日、俳人石腸子卒、深川六間ほり、長慶寺に葬す○三月十八日より、淺草寺觀世音開帳、享保四年より三十三年にて、寺内神佛のこらず開帳あり、吉原玉屋内花紫といふ遊女、十二提灯へ鶴の丸の紋を付て

多く○五月より回向院にて、甲州信玄寺不動尊開帳○七月より淺草壽松院にて、越後西淨寺彌陀如來、弘智法印像開帳○七月七日、儒師中尾廣徳卒、稱正藏、西條、天徳寺に葬す○七月十七日、儒師井戸甘谷卒、稱助右衛門、名方懸、日暮里正運寺に葬す

寛延年間記事

延享四年三月の頃より、不忍池新に築地出來て、茶店楊弓場、講釋場等建つらね繁昌し、又寛延二年辨才天の島より、西茅町の裏へ板橋を四ッ折にして架す、水にうつりて八ッに見ゆ、依て八ッ橋といへり、然るに池の鯉多く死る由にて、頓て毀ち取らる○此時代より開帳場に、神佛によらず幟を立てる事始れり、馬庭云、代記、享保十六年五月、國姓爺三度目、天満のひい、き組より、操外題年芝居の表に幟を立てるといへり、や、ふるくより稀には有し也○江戸眞砂六十帖寫本成、元祿の頃の風俗を、しるせし書なり○享保二十年の江戸砂子拾遺、寛延四年の再訂總鹿子に、此時世の商物を載たれども、二書世に行る、故、こゝに抄出せず○傀儡師、江戸の方言に山猫といふ、一月に七八度づ、同じ所を廻りしが、此時代より絶たり○宗十郎頭巾

始て奉納す、これより十二てうちんの花紫とてその名高く、小唄にもつくりてうたひはやらしける。

篤庭云、花紫が十二挑灯奉納のことは、後は昔物語に、花火の十二てうちんも、出處は是なりといへれど非なり、萬治二年花火御注文、大小てうちん多く見えたり、又紫の一本にも、てうちん立傘とからくか花火の處にいへり、猶ふるくは北條五代記、三好孫太郎が指物、挑灯七つさしたりなど見えたり○例の後は昔物語の書名を引かず、説ばかりをこゝに注せるは宜しからず、

○三月二十一日より四月五日まで、木下川淨光寺藥師如來開帳○同二十二日より、平井村燈明寺にて、成田不動尊開帳○四月朔日より、淺草報恩寺親鸞上人遺物を拜せしむ○同日より淺草寺町正福院柳稻荷開帳○同日より回向院にて、甲州善光寺彌陀如來燈籠佛開帳○京都本滿寺祖師、谷中妙法寺にて開帳○芝金杉圓珠寺七面大明神開帳○大師河原平間寺大師開帳○待乳山聖天宮開帳○淺草寺町にて、佐渡

塚原根本寺祖師開帳○御藏前八幡宮開帳○四月朔日より、湯島社地にて秩父子權現開帳○同日より御藏前八幡宮にて、豆州加茂郡最勝院釋迦如來開帳○淺草寺内正福院にて、鎌倉永谷貞昌院天滿宮開帳○谷中妙林寺不動尊開帳○不忍辨才天にて、常陸水戸玉里妙圓寺不動尊開帳○六月三日、詩人益田鶴樓卒、伯隣、本町四丁目五靈香藥店のあるじ○八月四日、荷田在滿東なり、白石の門人にして一時に鳴る○八月四日、荷田在滿東都に卒、風稱東藏といふ、江戸において國學を教授す○九月晦日、俳人小澤卜尺卒、淺草報恩寺に葬す○十月十一日、儒師市野光業卒、字子輝、東本願寺に葬す○吉原に女藝者といふもの今年より始る、騷屋の歌仙といへるもの始なり、夫より追追に出來たりしよし、後は昔物語に出來たり○再訂江戸總鹿子名所大全梓行、編七冊○南向茶話寫本成、酒井氏忠昌著、江戸地理沿革の問答なり、明和二年の追考を合せて一部とす、

寶曆二年 壬申

正月四日、物産家丹羽正伯卒、丸山本妙寺に葬す○二月二日より、三圍稻荷明神開帳○二月二十二日より、中の郷如意輪寺聖德太子開帳○二月二十五日、天滿宮八百五

十年御忌○同日より湯島天滿宮、麴町平河天滿宮、小石川牛天神、巢鴨小原町天滿宮開帳、龜戸天滿宮は今年社建立成て、二月十九日より二十五日まで開帳○二月二十八日より、目黒不動尊開帳○三月朔日より、湯島社地にて伊豆八丈島爲朝明神開帳○四月朔日より、龜戸御嶽山權現、業平天神、南院、吾妻森吾妻權現、龜戸普門院正觀音、木母寺梅若の守本尊文殊菩薩、龜戸龍眼寺中嶽權現神明宮、右何れも自坊に於て開帳あり○四月朔日より、回向院にて、京知恩寺圓光大師利劍名號開帳○同日より牛込原町妙圓寺にて、房州小湊誕生寺祖師開帳○丸山淨心寺祖師、谷中本壽寺祖師開帳○四月より麻布光雲寺にて、大師河原清寶院地藏菩薩開帳○四月より、目黒高福院誕生八幡宮開帳○五月深川三十三間堂重修○六月二十二日より、池の端新地の茶屋五十九軒、其外家數餘多引拂せらる、多くの女をいへ置て、鬻なる事爲しゆみとぞ○七月朔日より、湯島社地下野那須野泉溪寺殺生石化度聖觀音開帳○同日より回

向院にて、武州羽生領不動が岡村總願寺不動尊八大童子開帳○七月十五日、儒師中西淡淵卒、四十二歳、名維増上寺地中瑞藏院に葬す○同月十八日、倭文字卒、二十歳、弓町伊勢屋平藏院の門に入て國學和文に名あり、深川本誓寺に葬す○七月墨院川干潟に大鳥下る、兩翼四尺餘づ、足の長さ三尺餘、其行方を知らず、大江戸春秋に出る○八月二日夜、永代橋の北の方に泣聲あり、何とも知れず、同書○七月護持院大破に付、江戸町々勸化を募る○八月十二日、山縣周南卒、六十六歳、稱少助、高井土常光寺白金へ引く、後明和二年松秀寺と改、遊行上人宿寺なり○十二月琉球人來聘、正使今歸仁王子、

寶曆三年 癸酉

正月四日五日八日大雪、九日十七日十八日雨、廿二日雪、廿四日大雪、卅日雨、二月朔日二日三日五日九日十日十三日十四日雨、十六日地震、十七日雨、十九日大雪、廿日朝迄、廿三日廿八日廿九日卅日雨、三月三日大風雨、曉七時より雷鳴大雹降六時晴、此春氣候如此、大江戸春秋出○二月朔日より、駒込不動尊開帳○同十

六日より、護國寺にて甲州萬力村歸命院信玄守本尊彌陀如來開帳○三月十六日、甲州身延山祖師開帳に付、江戸到着の日、迎ひの人数品川より日本橋迄つゞく、何町講中と書たる旗幟あまた立る、開帳講中此頃より賑へり、四月朔日より深川淨念寺にて開帳○三月十三日より九月晦日迄、薩摩外記座にてからくり人形芝居興行、座本小倉小四郎也○四月朔日より、湯島社地にて武州一の宮簗川明神開帳○同日より回向院にて、武州熊谷寺彌陀如來蓮生坊影開帳○四月より駒込願行寺善導大師開帳○四月十五日より、深川永代寺にて、奥州金花山辨才天大金開帳、龍甲細工の蜈蚣を納む、右開帳濟て、六月二日より十一日迄、木母寺にて開帳あり○四月より九月に至り麻疹流行、人多く死す○五月十二日、儒師松崎堯臣卒、號觀瀾、又白圭、麻布天眞寺に葬す○五月、歌舞妓芝居會我祭、今年より始る○六月廿一日、俳師松月堂法眼不角卒、九十二歳、立羽千鶴と云、築地門跡成勝寺に葬す、辭世、空せみはもとの裸に戻りけり○七月朔日より、淺草本法寺にて、相州龍の口祖師開帳○同日より

護國寺にて、相州會我中村見送山祐信院彌陀如來不動尊開帳○同日より八日、茅場町藥師境内にて、大坂天王寺南谷室泉尼寺聖德太子東御影正觀音開帳、靈岸島濱町提灯屋幸助、鷲の作○七月四日より、回向院にて總州大多喜觀音寺馬頭觀世音開帳○同十六日より、淺草權寺にて奥州衣川地藏院千手觀世音辨慶立往生像六尺二開帳分甲胃○八月廿一日、書家平林惇信卒、五十八歳、號靜齋、消日居、稱庄五郎、本所中之郷妙源寺に○十月谷中嶺玄寺に、會式櫻咲始む、享上人植る所なり、此年上人三十三回忌に當り、花咲き夫より年々かはらず○【只補】十二月三日、上野仁王門再建、同六年五月二日落成、

○寶曆四年 甲戌 二月閏

正月廿日、荻生叔達卒、名親、號北溪、祖傳の家弟、三田長松寺に葬す○閏二月より、穴八幡宮本地佛并に氷室明神開帳○同回向院にて、奥州會津高巖寺圓光大師開帳○閏二月三日より、御藏前八幡宮内にて、越後乙寶寺大日如來開帳○閏二月より、永代寺にて、筑波山本地觀世音開帳○護國寺觀世音開帳、什寶を拜せしむ○三月十六日、儒師

莊子謙卒、名允益、高輪妙福寺に葬す○四月朔日より、南都西大寺釋迦如來開帳○四月廿五日、儒師谷口千秋卒、稱多講、駒込瑞泰寺に葬す○五月三日、儒師土屋繩直卒、號采菴、淺草海禪寺に葬す○六月二十五日、俳人櫻井吏登卒、後の雪中○幡隨意院の了碩和尚、谷中三崎に普賢山法住寺開創、其地は溝口侯より御寄附なり、江戸中の男女地形の土砂を運び、日ならずして成就す、世俗新幡隨意院と云ふ○七月廿二日、浮世繪師羽川珍重卒、七十餘歳也、池のはた東圓寺に葬す、其傳、曲亭の燕石雜志に見えたり、辭世、たましひのちり際も今一葉かな○八月十五日夜、酉の刻月蝕、既○八月十七日、儒師石島正猗卒、筑波山人と號す、駒込養昌寺に葬す○十一月改曆頒行、寶曆こよみと云ふ○十一月十六日、儒師河口子深卒、號靜齋、稱三、八、麻布善覺寺、押上大雲寺に葬す、辭世、空さへてもと來し道を歸るなり○十一月廿四日、俳師自在庵祇德卒、稱世、空さへてもと來し道を歸るなり

○寶曆五年 乙亥

二月朔日より、谷中妙法寺にて、豆州玉澤法花寺祖師開帳○二月より護國寺にて、常州義笠不動尊開帳○三月朔日より晦日迄、牛御前社頭修覆成就に

付開扉、即談所も、修復あり○三月十三日より、下谷法養寺にて、池上本門寺旅立祖師開帳○同月十五日より十九日迄、回向院にて、明曆丁酉正月焼死溺死の輩、百年忌取越法事あり○三月十六日より、深川永代寺にて、信州戸隠明神九頭龍權現顯光、この時神樂を舞ふ神子美人といふ、踊子の事を俗におもふ開帳、女の聞えあり、其名をおもふんといふ説はこれより始れり、篤庭云、踊子は元文頃よりありとか、村松町橋町邊最も多かりしと云、武野俗談に、踊子におゑんといへるもの、其頃はやりし者なるよし見ゆ、されば此説は非也、男子にゑん次郎といふ事は、今も聞こ也、是は淺田榮次郎と云者のことを、山東京傳が艶次郎江戸うまれ浮氣蒲焼といへる草紙に作りしより、ゑん次郎といふこと、彌いひはやりたる也と云へり、女子にさるたぐひの諺あるは未だ聞かず、○同日より、淺草淨念寺大字利劍名號堅十二回、横三回、法忍和尚の筆朝日如來開帳○茅場町藥師内にて、相州大山の麓子易觀世音開帳○四月の頃より、下總古河思案橋の邊

より、弘法大師の利益にて、薬水涌出るといふ俗説を信じ、貴賤羣集し、此水を呑み或は身内へ灌ぐ、九月迄に彼地に旅舎千軒餘を列ねたり、又石に文字現れるものあり、翌年に至り止む、聲云、弘法水の事、觀子草、兼覺、南嶽遺著等に、寶曆六年とせり○四月朔日より、回向院にて小金東漸寺圓光大師開帳○四月より青山善光寺彌陀如來開帳○江之島上の宮辨才天開帳、江戸より參詣多し○八月十五夜、酉戌時月蝕、六分○冬、米價貴踊す○十月、儒師飛鳥圭洲卒、名淵、淺草天岳院に葬、

○寶曆六年 丙子 十一月閏

正月十四日、新材木町より出火、兩座芝居類焼○去年冬より、米價次第に登揚す○二月朔日より、牛込久成寺にて、上總國埴生郡妙宣寺日親誕生地經讀祖師開帳○回向院にて彼岸中、加賀白山神影、釋迦佛舍利開帳、唐筆泣虎の畫を掲る○三月中烈風吹續き、度々火災有○四月朔日より、回向院にて、安房國那古寺坂東三十三

で焼亡○本郷新町家、此頃迄圖にして、萌しものと唱へたる菜蔬を専らに作りたりしが、町屋に改り、後には料理茶屋を出し、女を抱へて酌を取らせける、世人大根畑とよびならはせり、

○寶曆七年 丁丑

三月朔日より、芝神明宮境内にて、近江多賀大社開帳○三月より、上野清水觀世音開帳、畫工雪仙齋尙徳、上野清水堂へ景清牢破の額を掲○三月十日より十五日、川口善光寺本尊彌陀如來開帳、本堂修覆今年成就せり○同十五日より、不忍辨才天開帳○三月より愛宕權現社地にて、武州高幡金剛寺火防不動尊長一丈餘開帳○四月朔日より、回向院にて、安房清澄寺能滿虚空藏菩薩開帳○四月朔日より、回向院にて、越後高田善導寺善導大師、圓光大師開帳○四月より、淺草九品寺沓踏地藏尊開帳○永代寺にて、京東山金蓮寺染殿地藏尊開帳○四月より五月迄霖雨、關東洪水奥州飢饉にて、江戸の米價も次第に登揚せり○七月關東中國洪

三觀世音開帳○四月六日より、目黒成就院銷藥師開帳○四月より、東門跡内にて、常陸國茨城郡稻田山西念寺寶物を拜せしむ○四月より、下谷本法寺にて、下總平賀本土寺、白毫光顯祖師開帳○市谷八幡境内にて、鎌倉鶴ヶ岡我覺院弘法大師八幡大菩薩開帳○六月東叡山仁王門御再建成○六月畫工黒川龜玉卒、五十五、白山中丁心光寺に葬、○六月廿五日、俳人雨夜庵龜成卒、鳥、男を松蘿といふ、○七月下谷玉泉寺にて、佐渡一谷妙照寺祖師開帳○十月谷中修性院の庭、今年より開き、毎春遊觀の所となる、發起高田氏、庭作岡崎斗、碑を立て左の句を、○閏十一月廿日、儒師小出二山卒、名寬之、稱義平、深川六間堀要津寺に葬す、○十一月廿三日、八代洲河岸より出火、大風にして諸侯藩邸數字焼亡、山下町、加賀町、惣十郎町、尾張町邊、出雲町、金六町邊、汐留木挽町三十間堀、仙臺侯奥平侯御藩邸迄、同日朝五ツ時過、築地武家方より出火して、西本願寺地内十四五ヶ寺、南小田原町海手迄焼亡○同日晝前、青山權田原より出火して、麻布邊二本榎三田の邊ま

水○八月三日、谷中法住寺開基了碩和尚寂○八月十五日、下谷坂本小野照崎明神祭禮、出し練物等出す、其の後中絶す○八月十四日、官儒土肥允仲卒、名元成、號四郎、市谷長延寺に葬す、○九月二十三日より、深川八幡宮境内にて、大藏氏勸進能興行○田村元雄始て湯島において物産會を催す、翌年又神田に會合あり○巧題云、平賀源内物産のこと、は田村の門人なるべし、物類品隨は此會によりて出來しなり、○眞先稻荷社流行出て、田樂茶屋數軒出來て繁昌す○十月二十日、金彫工柳川直政卒、六十六、十一月二十八日、儒師桃東園卒、名道隆、牛島弘福寺に葬す、○十二月二十六日、淺草黒船町より出火して、大火に及ぶ、御藏は恙なし、

○寶曆八年 戊寅

二月八日より、木下川樂師如來開帳○二月より護國寺にて、下野出流山千手觀世音開帳○二月十五日より回向院にて、常陸鹿島本地正觀世音開帳○同寺にて、常陸海老島新善光寺彌陀如來開帳○三月朔日より晦日迄、淺草報恩寺にて、河内八尾御坊大信寺寶物

を拜せしむ○淺草善立寺にて、佐渡國御船實相寺朝日祖師開帳○牛込原町惠光寺にて、駿州沼津妙海寺祖師開帳○麻布承教寺にて、鎌倉松葉谷妙法寺祖師開帳○湯島社地にて、比叡山坂本來迎寺彌陀如來開帳○廣尾天現寺毘沙門天開帳○市谷八幡宮内にて、遠州濱松大福寺藥師如來開帳の作なり○赤坂鈴降稻荷開帳○愛宕下眞福寺藥師、麴町九丁目寅藥師開帳○三月十日、夜四ツ半時、靈巖島より出火、大川端迄燒、七ツ時鎮火○六月一日、連歌師里村昌迪卒、五十五歳○八月より、鮫洲海晏寺觀世音開帳○九月二十日より二十九日迄、雷鳴雹降○古曆便覽再刻、京師になる、慶長元年より安永五年迄、大小開月○十一月深川靈雲院御開創、開山放光本堂山門圓珠稻荷社、其外悉く成就す、惜ひ哉寶曆十年二月六日の屋敷にて、災に亡ぶ、此地は柳原侯下ありし也。

○寶曆九年 己卯 七月間

二月十日より、回向院にて、出羽湯殿山本道寺大日如來開帳○二月諸所に度々火災あり○三月十三日より、

り、淺草慶印寺にて、京妙滿寺祖師開帳、三十二枚繼村曼の繪、當寺に在○二月十七日、俳人岩本乾什卒、満足軒千歳しを拜せしむ○雪解つ八十年の作り物、外に三句有、河東節上るりの文句を多く作りし竹城人といへるは、此乾什なるよし世に傳へて、印行の書にも往々し記せり、おのれが聲曲類纂にも亦誤してし、この頃花街の坊正竹島氏の語に、竹城人といへるは彼家の祖にして、竹島正明と號し、俳諧を乾什に學んで竹城人と號、此頃乾什の世○三月十五日より、東本願寺座敷にて、越後高田本誓寺寶物川越の名號等を拜せしむ○三月川崎明長寺石觀音開帳○芝金杉圓珠寺にて、千住日慶寺鬼子母神清正所持開帳○四月八日より、本所彌勒寺藥師如來開帳○同日より下谷法養寺にて、鎌倉比企谷妙本寺祖師開帳○四月十五日より二十八日迄、龜戸妙義山權現開帳○淺草閻魔堂又多田藥師内にて、奥州柳津虛空藏菩薩、寶頭盧尊者開帳○米穀豐饒なり○六月二十一日、服部南郭卒、七十七歳、名元喬、稱小右衛門、品川東海寺塔頭少林院に葬す、男惟良惟恭は父に先て卒す○七月朔日より、麻布善福寺親鸞上人了海上人像開帳○同日淺草玉泉寺にて、相州星降天拜祖師開帳、星降妙純寺、龍の口三段折の太刀あり○武州大相模大聖寺不動尊、自坊にて開帳有○八月

金銀札新規御停止あり○八月十五日、高田穴八幡祭禮、出しねり物を出し、其後明和四年迄續く○九月十六日、駒込神明宮祭禮、産子町々より出しねり物を出す、その、ち○平賀鳩溪、湯島に物産の會を催す、同十二年、中絶す○九月晦日、法忍和尚駒込圓乘寺に寂す、廿三歳、幼雅より說法をなす、世に今弘法といへり、下總國羽生郡尾崎常樂寺の職たるを興し、諸州を廻りて念佛を進む、歸依の遺俗傳し、京九品寺の住職となりしが、後當寺に寂せり、其阿上人得阿彌陀佛と號し、近年の碩徳也といへり、寶曆五年亥三月五日より四月五日迄、淺草淨念寺にて大字六字の名號をおがませける、一字大さ二間位、惣丈十二間餘、幅三間なり○秋白隠禪師深川臨川寺において講説あり、諸國の大衆都鄙の良賤、日毎に群集し其徳を仰ぐ、禪師は東海道原の年十二月十一日化寂あり、八十四歳といふ、同宿松隆寺は其舊跡なり、神機獨妙禪師と諡す。

○寶曆十年 庚辰

正月二日、目黒祐天寺二世祐海上人寂、名愚蒙、號拈蓮社信阿○二月四日、夜八ツ時赤坂今井谷より失火して、麻布邊、日が窪、雑色、十番綱坂、三田寺町、伊皿子聖坂より田町、品川海手に至る○同月六日戌刻、神田旅籠町壹丁目明石屋といへる足袋屋より出火、乾大風、佐久間町

邊はいふに及ばず、淺草邊、兩國橋、馬喰町、本町、日本橋、江戸橋邊、靈巖島、新川邊、深川へ飛、洲崎木場の邊迄燒亡、三十三間堂燒失、永代橋新大橋も燒る、七日巳刻鎮火○同日芝神明前太好庵の向湯屋より出火、濱松町片門前、金杉芝田町邊、本芝海濱迄燒亡○三月十五日より四月六日まで、六阿彌陀不殘開帳、行基善薩千五十年忌○市谷八幡宮甲冑神像開帳○王子稻荷社地にて、越後高田春日山兼信守本尊毘沙門天開帳○三月二十日より、回向院にて、美濃國稻岡誕生寺圓光大師開帳○麴町心法寺にて、總州佐倉松林寺千手觀世音開帳○四月より八月迄旱天○四月二十八日、英一蜂卒、深川法禪寺中○五月二日、書家狼溪平震卒、本元町三念、南龍院に葬す○九月十九日、成島鳳卿卒、名信通、字歸徳、稱有筑寺に葬す○九月十九日、成島鳳卿卒、七十二歳、本所本法寺に葬す○十一月十日、儒師稻葉迂齋卒、七十七歳、名正義、稱十左衛門、駒込龍光寺に葬す、男を數齋といふ

○寶曆十一年 辛巳

正月廿五日、圓光大師五百五十年忌○二月朔日より、

茅場町薬師内にて、信州高井郡金胎寺不動尊出山釋迦如來開帳○三月朔日より、淺草善立寺にて、甲州遠光寺日蓮上人像開帳○三月十二日より、木下川薬師如來本堂修葺出來に付開帳○同月十五日より、本所法恩寺にて、京本國寺釋迦佛立像開帳○四月朔日より、回向院一言觀世音開帳○同日より洲崎辨才天開帳○四月八日より十七日迄、新鳥越念佛院中將姫忌、二十五菩薩供養○四月青山善光寺阿彌陀如來開帳○三田八幡宮開帳、綱が金札として靈巖島圓覺寺橋本稻荷社靈寶に出せり○淺草唯念寺にて、下野國高田阿彌陀如來善光寺一體分身開帳○青山久保高德寺十一面觀世音開帳○千駄谷八幡宮にて、武州入間郡山口村來迎寺秀衡守本尊車還三尊彌陀如來開帳○四月十五日より、相州江の島岩屋辨才天開帳、江戸より參詣多し○五月俳諧師慶紀逸卒、六十八歳、谷中龍泉寺に葬す、辭世、此年て始ておめにいゝるとは彌陀に向て申わけなし○六月金彫工大津尋甫卒、四十二歳、稱門、八左衛門○八月十七日、

堺町中の芝居座より失火、堺町葺屋町類焼、中村勘三郎請中なりし○九月三日、官儒中村蘭林卒、谷中玉林寺に葬、名明遠、稱深藏○九月廿四日、金彫工杉浦乘意卒、六十歳○十一月廿七日、儒師井上蘭臺卒、名通照、稱嘉謨、落合泰雲寺に葬○十一月二日、俳人松木淡淡浪花に卒、八十八歳○十一月廿八日、親鸞上人五百年忌○目黒村長泉律院開創、堂宇落成す、三條山前大支和尚、淨土律の寺を創せんと志願にて、入寂の後遺弟子如百計千慮して、川越蓮馨寺主教意上人力を勤せ終に成就す、この時住職普寂徳門和尚遺徳の聞えあり、徳門師樂狀記一卷梓行あり○十二月五日、金彫工稻川直光卒、稱文四郎、東本願寺地中に葬、○巧庭云、此文四郎は、柳川直政の弟子にて、直克と云り、光字は誤れり

○寶曆十二年 壬午 四月閏

二月日本橋南町々焼亡○四月より、東本願寺にて、常陸國水戸磐船山願入寺寶物を拜せしむ○同月より、深川淨心寺にて、甲州小室妙法寺祖師開帳○同日より回向院にて、上總國千田村稱念寺齒吹彌陀如來開帳○同月より、淺草西福寺鎮守辨才天寶物開帳○麻布一本松大法寺大黒天傳教大師の作三面開帳○高輪如來寺にて、多摩郡日原村一石山十一面觀世音開帳○高輪庚申堂

開帳○足立郡島根安穩寺日蓮上人、牛込宗柏寺にて開帳○昨年山王御祭禮延引、今年六月執行有○七月より永代寺にて、成田不動尊開帳○伊皿子長應寺にて、越中黒瀬谷本法寺海中出現法花經、紺地金泥大曼荼羅等拜せしむ○谷中大行寺にて、下總國大野法蓮寺日蓮上人像開帳○牛込圓福寺にて、豆州加殿妙國寺日蓮上人開帳○淺草新寺町宗安寺七重觀世音開帳○淺草榎寺負イ笈佛阿彌陀如來開帳○十月三日、書家船田耕山卒、名雅通、稱甲四郎、わせた建勝寺に葬す○十月龜戸龍眼寺に殖髮の太子を安置す、荏原郡清原清谷寺に在し像也、

○寶曆十三年 癸未

二月十五日より、龜戸龍眼寺殖髮聖德太子開帳○二月より、深川玄信寺阿彌陀如來開帳○二月廿五日より三月廿六日迄、龜戸天滿宮社頭建立成就に付開帳○三月九日より、押上大雲寺觀世音開帳○三月廿三日より、回向院にて、上州大同山聖德太子開帳○同廿八日より、深川淨心寺にて、堀の内妙法寺祖師開帳○

四月朔日より、芝如來寺にて、河内壺井八幡宮開帳○四月七日、瀧山町より出火、數寄屋橋御門前迄焼亡○六月十五日、山谷熱田明神祭禮、産子町々より出し練物を出す、其後は休む○六月廿一日、畫家狩野祐清英信卒、號如滴齋、四十七歳、深川淨心寺に葬す○長崎より傳しと號し、生年によりて灸治にいひ日を選びしとして、一枚摺を賣歩行、篤庭云、禁灸日、今に世人の用ふるはこれなるべし唯一時のみにあらず、大に人を惑はす事なり、中井竹山が草茅危言に、昔大坂古林の元祖見宜は名醫の譽あり、或人灸の忌日并に禁穴の事を聞たるが、然りやと問ければ、如何にも其の事ありと云、其人覺へ易き事ならば、教へ玉へと乞ふ、見宜襟を正して、其傳授は年中にて灸すまじき日は正月元日、身の内に灸すまじき處は眼玉なりといへり、卓見といふべし、一技にても妙を得たる人は、見る處の超邁天理明らかなる事斯の如し、

○六月俳優萩野八重桐船に乗中洲に遊、醉興の餘り

蜆を取らんとて川へ下り立、深みへ落入溺死す、平賀鳩溪根なし草といへる草紙をつくり、其事をのぶ○八月廣東人參商賣を止め給ふ○九月朔日、日他九曆面に脱せりと云○九月神田明神祭禮、昨年より延び當月執行○十月神田佐久間町一丁目岡田治助、朝鮮人參座に命ぜらる○十二月十九日、書家篠田行休卒、名興貞、號金溪陳人、小日向金剛寺に葬す○古今相撲大全梓行、木村政勝著○志道軒傳梓行、風來山人戲筆

○寶曆年間記事

日暮里笠森稻荷三崎社の外也、新たに勸請す○増上寺塔頭心光院、赤羽根川端へ移る○目黒幡籠寺境内窟出來る○寶曆中、淺間山の上人本願に依て、江戸并近在合せて弘法大師八十八箇所參始る、大進夜話○杉森稻荷祭、寶曆九年迄隔年、産子の町より花出し練物神輿を渡しけるが、其後中絶す○小野照崎明神祭、隔年神輿出し練物を出しけるが、寶曆七丑年より中絶す○寶曆末より矢口新田社に參詣多し、社地に矢を賣始、詣人

求て守とす○根岸圓光寺庭中、藤の花盛の頃貴賤遊觀多し○婦女菅笠廢り、青き紙にて張たる日傘行る○夏合羽、夏火事羽織漸く始る○土佐節淨瑠璃廢れ、江戸節、河東節、大坂の義太夫節、京の蘭八節、正傳節等の淨るり行る○ト者平澤左内、相學者神屋登、軍書講釋師深井志道軒、其傳次、滋野瑞龍軒、成田壽仙等行る、壽仙は○此頃大屋形船六七十艘ありしよし、塵塚談にいへり○旦那のねつた膏藥と呼て、市中へ藥を賣る者あり○浮世繪師鈴木春信、石川豊信、秀徳と號、六父にして、馬喰町の産店、ぬいや七兵衛といへり、鳥居清倍、山本義信、七郎平、鬼玉其外多し○好事の輩古錢を集る事行はる○此時代、世上の風俗をのべたる假名本行れ、數多梓行しけるを撰て、評判記を作り千石篩と題す、其内蜀山人の水灌論を別て賞せり○慶紀逸武玉川といふ俳書十六篇をあらはし、人の笑柄とす、川柳が柳樽も是より出たりと云○山本靜觀坊といふ者、下手談義といふ草紙をあらはして世に行る、載るところ戲文なれども、教戒の

しが、如何なりしか、思ふに其徒これを建るを口實にして、金錢を集る手段なりしが、思ふやうならず

にやみたるなるべし、之に立願する人もあるよし、

○寶曆三年の頃より、大文字屋の大かぼちやと云重

謠行る、吉原京町大文字屋市兵衛、ちち見ぐるしく、其頭かぼちやうたひて人を笑はせけること、替人かぼちやと異名しける故、自らかく文字屋かぼちやの謠は、假名世説を引に及ばず先にあまた見えたり、且假名世説は、文寶が淨書して刻する時、添ごとを加へて、紙數を足したるなり○寄合茶屋、淺草並

木藤屋、深川西之宮行はる○操芝居盛に行れたり、寶

曆の始豊竹肥前掾終りしかど、東次が芝居になりて

尙繁昌し、また福内鬼外稱平買淨瑠璃あまた作り出せ

り、何れも佳作也、明和七年に作れる矢口渡の上○寶曆中、

西村重長が繪本江戸みやげ圖中、兩國涼の圖に水茶

屋葭簀の屋根なし、見世毎に行燈を置いて御涼所と記

せり、吉原五十軒編笠茶屋に編笠釣るしてあり、歩行

の女子帽子をかむる、淺草廿軒茶屋のあんどう、

屋花屋などとあり○婦女の衣類丁子茶の色を好み、

花簪はやる、朱塗の櫛旭の櫛象牙の笄も行れたり○硝

意を用ふ、此人の著書十三部程あり、著述目録に出たり、墳墓は同向院に在り、此下手談義行れしは、他人の作にてこれをなじり、返答下手談義、下手談義隨聞集、辻談義など、云草紙も出たり○芝三田俗稱賤妓文つと云者歌を詠、ちりづの腰にまじはる松蟲も三角巧庭云、三田のはきためお松が事は、馬文耕が武野俗談に出たり、此女こいろさしやさしきものにて、よき人うけ出して件ひぬといへり○我衣に曳尾庵云、御厩河岸を上りて左の方、北番場川端に石工有、それが家の前に男女の石像あり、是は寶曆の頭龜戸に錢座ありて、其家の夫婦の石像なりといふ、後年零落して、誂へたる子孫もなくなりしにや取に來らず、其儘雨露に晒れしを、文化の半庇を覆て賽錢筒を出したり、夫婦石と號して、何事をか立願する人多しと云々、

子は外國のものなるを、蘭人持渡り、中古長崎にて製する事を得、京大坂に傳へしを、近頃東都に其職人多く出来て、萬の器を製し活業とする者あまたあり、曳尾庵云く、ビイドロは蘭語にあらざ、ホルトガルの辭なりと、筠庭云、びたん、びいどろ、其外古くより、ふ蘭語の如き、この國人通じたりと見ゆ、さて貞徳が發句、やざりや興行の端書ありて、びいどろ流しといへる句は、異國のびいどろを粉にして、細工に用ひしなるべし、こゝにて此を製す。○横山町一丁目鐵屋喜兵衛と云もの工夫して、田舎に用る稻こぎの齒、是迄竹にて有りしを鐵に作りあらたむ。○圖書集成一萬卷、康熙帝の自撰也、寶曆十四年舶來して官庫へおさめらるゝよし、安齋漫筆にかくあれば改元以前なるべし、

○明和元年 甲申 六月十三日改元 十二月間

場町藥師内にて、奥州安達原人肌藥師如來開帳○回向院にて、武州橋樹郡山口觀世音開帳○目黒不動尊内にて、相州大山麓子安地藏尊開帳○三田春日明神開帳○回向院にて、伊勢山田入門寺彌陀如來吉利支丹退治、轉體得、開帳○淺草報恩寺にて、奥州南部本誓寺親鸞上人寶物を拜せしむ。○二月二十日、夕七ツ時、神田新銀町より出火、北風烈しく、蠟燭町、多町、堅大工町、新石町、鍋町、鍛冶町西側、皆川町、永富町、松下町、鎌倉町三河町一丁目、本銀町一丁目、本石町、本町一丁目、一石橋迄焼、同夜八ツ時過、鍛冶橋内へ飛火、同御門焼、明六ツ時鎮る、韓人逗留のうちにありし、○二月中旬、平賀鳩溪源、火洗布を工夫し、創て製し出し香敷に作る、銀葉雲母にまざり、質和らかにして火氣やらやく通る故に、香氣おだやかなりとぞ、今年三月紅毛人東都に來る、官儒青木草廬先生對語の序を得て、紅毛人に見せけるに大に驚、此品紅毛天竺を始、世界の國々にも織法を知らずと賞美しけるとぞ、後その香敷を

公に奉り、官府より長崎へ贈り給ひける、十一月長崎より清人の呈狀來たれり、また清人より馬乘羽織を望けれど、大なるものは織得ず、大抵三四寸に限りしと見ゆ、

火洗布隔火包紙之銘

火洗之布自古有名彼妄造說憶度意量木皮斯調鼠毛南荒或果誣理謂傳者妄洋溟造物寧可推窮陽中有陰陰中有陽入火不化柔能制剛昔彼西戎今我東方織成素縷週以銀鑲一片隔火百炷觀香書堂清供繡房風情

明和甲申秋八月 大日本讀岐

鳩溪平賀國倫創製□□

筠庭云、越の人鈴木牧之が雪譜に、鳩溪火洗布を創めて製し、火洗布考を著はして、本朝未曾有の奇巧にはこれり、歿後其の術傳はらず、好事家憾とす、しかるに我國火洗布をつくる料の石を産す、我驛中に稻荷屋喜右衛門と云ふ者、萬慮を費して竟に

火洗布を織出せり、又近村に黒田玄鶴と云ふ醫師も、同じく工夫して其術を得、各秘して人に傳へず其説を聞くに、力を盡さば一丈已上なるも織得べし、平賀は五六尺に過ずといへり、玄鶴が源内に勝りたることは、火洗紙火洗墨の二種を作る、火洗墨を以て火洗紙に物をかき、烈火のやくに火氣さむれば字も紙も元の如し、然れども其實用をいへば、いづれ火災の憑にはなしがたし、何となれば火と共になりて、人有て出さざれば、俱に碎て形を失ふ唯灰とならざるのみといへり、惜むべしこの兩人も、術を傳へずして歿したれば、火洗布再び世に絶たるに似たり、されど其石綿あれば、又工夫する人あるべし、

○今年五月より明和九年九月迄に、目黒村太鼓橋普請成、享保の末、木食某願主にて掛たるを再修せる所にして、江戸所所の石工寄附する所也、願主は岡崎町森田屋茂兵衛といふものなり○六月龜戸聖廟の傍に、俳人太申連歌舎を建る、太申は三十間堀の村木にて、和泉屋勘介といひしもの也、其傳記は昔物語、名家略傳等あり、

筠庭云、太申は異なる事をなして、名を售たる者なることは人の知る所なり、龜戸天満宮境内にて、彼がおかしきことは、赤と青との鬼の木像の彩色剥たれば、寄進して塗直せしに、虎の皮のたふさぎの其斑文の中に、太申の文字を加へたり、其以前にや太申小紋といふ染形をはやらせんとて、多く染めさせたることに、おかしき話ありき、

○六月の頃より、深川権藏大御番頭大久保豊州侯下やしき稻荷社参詣群集す、詣る人蕎麥切を備ふ、八月下旬にいたり詣人止む○深川三十三間堂再建、寶曆十建立○七月九日より十月十日迄、護國寺にて秩父三十四番札所觀音惣開帳○秋加茂真淵翁濱町へ家を移し庭を野邊又畑に作りてあがた居となづく、九月十三夜、ほろぎの鳴やあがたのわが宿に○十月二十二日、淨るり語元祖宮本豊前太夫死、四十九歳、淺草、十一月琉球人來、正使讀谷山王子、つれとよへり其歌歌珠球談に載たるを一ツ二ツ

九月十三夜、肥後國松浦といふ所にして、故郷の事を思ひ出して、秋毎に見しを友とて故郷の空なつかしく見つる月かけ
不二
人とはばいかかたらんことの業に及ばぬふじの雪のしろたへ
觀の心を
波風もなままる君が御代なれば道とほちの日の木の里

○十一月二十八日、俳人活井舊室卒、七十二歳、西門跡○十二月朝鮮種人參賣弘御免○十二月町火消の内、御曲輪近邊十三組へ、龍吐水を渡し給はる、其の餘の組は此の後次第に出來り○十二月廿三日、夜五半時、神田關口町より出火して、神田町々類焼、七ツ時鎮る○閏十二月十七日、明六時淺草田町より出火し、大川端聖天町迄類焼せり、
○明和二年 乙酉

二月日暮里妙隆寺太神宮本地釋迦鬼子母神祖師開帳
○谷中正運寺祖師開帳○三月七日、講釋師深井志道軒終、名榮山、號無一堂と云、もとは知足院の僧也、街籠郡に感潤して、財を失ひ、後淺草花川戸澤長屋といふ所に住、淺草寺境内に於て軍書を講ず、其間に戯言を交へ、聞人をして絶倒せしむ、一座に僧と女あれば必讀る事甚し、日々多くの錢を得るといへども、すべて酒にかへて翌日の貯へをなす、在世の日自ら肖像を畫て梓に上せ、戲言を書つて人に興ふ、元なし草と云草紙一冊を著す、今年八十四歳

にして終れり、淺草寺中金剛院に葬す、一男一女あり、男を三之介といふ、譯名を志道軒三之助と稱しけるとなり、志道軒が歌とて聞しは、辭世思ふ事あるもうれしき我身さへ心のこまの世につながられて、東よりぬつと生れた月日さへ西へとんく我もとんく、
筠庭云、塵塚談に、これより先淺草寺境内に、靈全と云者辻談義に戯言をまじへ、人の笑を取る、然れども佛意を本とす、志道軒はこれを真似たるものなりと云へり△神田白龍子は、専ら諸大名旗本に招れたる者なり、是は享保頃にて少し先輩なり、銀杏和尚などは、前に引たる俳諧時津風に出づ、又風來が戯作の草紙に、よこれ銀杏が辯舌には、蘇秦張儀も閉口すべしとやら書たり、然らば此時代大かた同じかるべし、
又同時に、滋野瑞龍軒といふ講釋師も共に行れし也、其男甚藏父の名を繼て舌耕せり○四月日光山御神忌萬部御法會○龜戸村にて鐵錢を鑄さしめらる○六月より平井滿右衛門といふ者、深川洲崎の東に汐除土手長十七町餘、高一丈二尺敷六間馬踏貳間を築立、新に二十萬坪餘の地を開き、翌戊午七月二十四日より

鹽を焼始む、この所を平井新田といふ、江戸より見物の人夥かりしが、安永にいたり間もなく止たり、此所の所と成て、大紋屋といふ○秋髪切はやる○七月朔日より、料理屋も出來て行れたり○秋髪切はやる○七月朔日より、回向院にて、武州府中深大寺厄除元三大師開帳○同日より永代寺にて、駿州富士裾野厚原曾我八幡宮時致神像、玉渡明神前、開帳○同五日より回向院にて、梅田村不動尊開帳○七月より、三田春林寺齒吹阿彌陀如來開帳○八月三日、大風雨、深川邊其餘床上へ水乗る○八月十六日、二朱判吉兵衛死、八十餘歳○芝浦より一丈餘の魚上る、後兩國橋畔にて見せ物とす、色白く鱗なし鮫の類なり、名をマンボウと云、筠庭云、まんぼう日本橋魚市場に○九月五夕銀通用始る○九月七日、儒師岡井峰州卒、名孝先、稱部太夫、高輪東齋寺に葬す○九月雨降續き、神田明神祭禮九月二十三日に渡る、神輿渡る所の町々横町の締切、神主願ひに依て、當年より柵を結ふことに成れり○十月二十五日、儒師木村蓬萊卒、名貞實、字若起、日暮里源江寺に葬す○十一月神田今川橋北左右火除土手再興○十二月神田

佐久間町に醫學館建、多紀氏立○十二月四日、晝時目白臺より出火、夕七時頃鎮る、類焼多し○十二月二十九日書家關思恭卒、六十九歳、號鳳岡、稱源、内、小石川稱名寺に葬す、

○明和三年 丙戌

二月朔日より、永代寺にて、三州伊賀村八幡宮本地薬師如來開帳○二月二十日より、御藏前花徳院にて、三州碧海郡上重原村遍照院弘法大師開帳○二月二十九日、堺町鬘付油の店音羽より失火して、兩座の芝居類焼し、大風にて焼廣がり、囚獄の邊に至る○三月十二日、下谷溝口家より出火、車坂下まで焼亡せり○四月初日より、目黒不動尊にて、下野國岩船山地藏尊開帳○同日より、祐天寺彌陀如來、祐天僧正像開帳○同日より、澁谷金王八幡宮開帳○大久保法善寺七面明神開帳○四月朔日より、回向院にて、大和藤原喜光寺天満宮本地十一面觀世音開帳○高田穴八幡本地佛開帳○谷中宗林寺舟守彌三郎守本尊、鬼子母神祖師天満宮開帳○幡が谷莊嚴寺不動尊開帳○芝愛宕社地にて、武州多摩

郡國分寺薬師日光光菩薩開帳○七月六日洪水、小日向小石川本所の邊分て水嵩増れり○靈巖島埋立地成る、俗に葦蕪島といふ○七月朔日より、回向院にて川崎眞福寺薬師如來開帳○同日より回向院にて、神奈川觀福寺浦島大神守佛觀世音龜に乗、靈寶に、玉手箱あり、開帳○同日より、淺草寺内松壽院、丈六辨才天腹籠本尊開帳、八月一○同日より、淺草寺境内にて、紀州加太淡島明神本地虚空藏菩薩開帳○護國寺にて、駿河富士山宗心寺來迎三尊佛開帳○淺草榎寺にて、上州甘樂郡白井源空寺薬師如來、圓光大師開帳○龜戸龍眼寺庭中池邊に、數株の萩を栽たり、是より毎年盛の頃貴賤遊覽の地と成る、善阿彌翁師の説に、此時代迄當寺の邊に盜賊徘徊し、るを、寺主惡名を敷て、萩を栽て、萩寺と呼しめしといへりし、或るや否をしらす、筈庭云、萩寺壽阿彌が説開傳へしことあるなるべし、本所石原邊の小路に、そのかみ「どつさり」横町と異名呼る所あり、遠きことにもあらずと老人いへり、これも盜賊出て、人をおびやかしかける意なり

と、

○十一月六日、俳人柳前齋蒼孤卒、五十五歳、駒込徳性寺に日により五千句興行せしより五千堂と號、葬す、管神奉納獨吟、一

○明和四年 丁亥 九月間

正月元日、未の八刻より申刻迄日蝕、二分○四月初日より、永代寺にて、江州竹生島辨才天西國札所觀世音開帳○同日より、深川洲崎辨才天開帳○同日より、回向院蘘苞辨才天開帳○四月より、目黒高幢寺鎮護權現金毘羅、權現也、辨才天開帳○四月より谷中本光寺祖師開帳○猿町雉子宮寶塔寺元三大師開帳○相州江の島下の宮辨才天開帳、江戸より參詣多し○關東川々御凌あり○四月九日、駒形町より出火、淺草寺風雷神門焼る二神像金龍山の類は恙なし○眞先神明宮の地に、高辻大納言家長卿御所持ありし、管神の像をもて勸請あり○四月十二日、儒師赤松太庚卒、名弘、稱良平、○六月八日儒師服部仲英卒、名雄、南郭の養子なり、○七月二十二日、儒師大藪錢塘卒、名良興、稱久右衛門、淺草眞相寺に葬、○七月二十四日、神陰流劔

術師長沼四郎左衛門國郷卒、八十歳、三田、功運寺に葬、○八月三日、畫人渡邊湊水卒、四十八歳、名從、稱基藏、麻布善福寺に葬す、男を玄對と云、ともに畫を善くす、文政中卒す、○八月十五日、高田穴八幡宮祭禮、産子町々より出し練物を出す、神輿神樂坂の御旅所へ渡しまいらす、以來中○十一月晦日、儒師赤松沙鷗卒、名善邦、太史の父也、麻布善福寺に葬す、秋髮切行る○十二月五夕銀の事、相庭によらず金壹兩に十二枚の通用と成る○十二月書家飯田百川卒、名親濤、稱源四郎、西久保青龍寺に葬、廣澤の門人也しが、後董其昌を學ぶ、近世畫帖を善する事、此人より始るといふ、

○明和五年 戊子

正月二十七日、英一蝶が養子一舟卒、稱彌三郎、名信種、號寺中顯乘、東宮翁、二本橋承教院に葬す、○二月二十日より、王子權現王子稻荷明神開帳○二月三都にて淨土宗の怪しき法儀を行ひしものを刑せらる、俗におくら門徒といひしは、これなり○巧庭云、おくら門徒は平秩東作之を告て、御褒美下されたるは去年十二月頃の事に、彼が自ら歸したる庫裏門徒の記一卷あり、其の邪法の事委敷いへり、○三月千駄が谷聖輪寺如意輪觀世音開帳○三月十六日より、永代寺にて京大原野春日明神開帳○三月二十日より、三田八幡宮開帳、靈寶に金札、くれみ○回向院にて、尾州野間の

内海大御堂地藏尊開帳○三月大師河原村百姓太郎左衛門、砂糖を製し弘む、製法傳授を受ける者多し、紀州名所圖書館なる雜貨屋何某製法を傳へて、始て在田郡小豆島村の田畑に甘蔗をうゑてこれを製しける、今諸國に製するもの彼が傳を受ざる者なしといへり、製法の事平賀鴻漢の物類品識にいへり、この時代まで砂糖に限り舶來の物とのみ心得たりしよし、摩羅談にいへり、今は一般に物行る○四月朔日より、真間弘法寺祖師開帳○四月六日、曉八ッ時吉原江戸町貳丁目より出火、大風にて廓残らず、五十軒道まで焼亡す、明暦丁西の奥後、當所へ移りはやけず、今年年中のこらず焼たり、九郎介船荷社のみつ、がなしが悉く假宅を並木町、今月橋崎、山谷、新島越へ出して、百日の間商賣せり、○六月眞鍮錢通用始る、四文錢也、龜戸○六月長崎にて龍腦和製を命ぜられ三都に售ふ○六月九日、鳥越明神祭禮神輿を渡、産子町々より出し練物を出す○六月十六日、夜四ッ時過大雨大雷、八ッ時竹橋○九月十八日歌人村田春郷卒、三十歳、春海の兄なり、
深川本誓寺に葬す。

○明和六年 己丑

正月五日、書家高願齋卒、名玄融、牛込原、町經王寺に葬す。○三月より淺草玉泉寺にて、下總會谷安國寺祖師開帳○谷中本誓寺にて、下總野呂妙興寺祖師開帳○三月十五日より、

龜戸天満宮内にて、越後高田春日明神本地觀世音并に不動尊開帳○三月より護國寺にて、大和子島寺大峯拜伏役行者開帳○押上春慶寺普賢菩薩開帳○四月朔日、永代寺、四國琴彈山の寫阿彌陀如來天地不動尊等自坊にて開帳○同八日より、湯島社地にて、和泉石津大社笑姿開帳、式内の神と云、社人石津連と云、この時巫女二と云、鈴木春信館繪に多く畫けり○馬庭云、半日開話には、このまびすの開帳二月四日よりとあるは非なるにや、巫女はふり袖の上にはちやを替たりと、や、神樂かこの美○淺草閻魔堂にて、足立郡千葉山十連寺閻魔王圓光大師開帳○四月七日より、回向院にて、川口善光寺阿彌陀如來開扉○淺草寺境内にて、奥州二本松鏡石寺、安達原鬼神退、治東光坊安佛、觀世音開帳○四月十八日より六月八日迄、淺草寺觀世音開帳○五月朔日より、淺草榎寺にて、常陸鹿島廣德寺鹿島本地赤童子開帳○同日より御藏前十王堂にて、相州町屋村梅雲寺三寶荒神開帳○七月二十一日、歌人村田春道卒、春海の父なり、深川本誓寺に葬す。○七月下旬より八月月上旬迄、珍星現す、長數丈箆の如し、稲星といふ、乳星也と云。○八月二十六日、未

晦日、加茂眞淵翁江戸に終る、七十三歳、品川東海寺中少林院に葬す。

刻より大風雨、雷鳴あり人家を傷損す、深川三十三間堂倒る○七月二十四日、算術師岡部稠榮卒、稱左大夫、牛込長源寺に葬す。○九月十日、小石川氷川明神祭禮、産子町々より出し練りものを出す、其後、休む。○十月風邪流行す、貴殿煩はし、大家にては薬を手桶に入れては、こび、下部に興ふる程のことなりし。○十月十二日、官儒青木崑陽先生卒、七十二歳、號草廬、稱文藏と云、薩摩宇作り始られの碑文左に寫せり。

正面甘藷先生墓とあり、右の方に如此篇す、

享保二十年青木敦書、蒙命種ニ甘藷ニ因人呼子日ニ甘藷先生ニ甘藷流傳使ニ天下無ニ餓人ニ是予願也、今作ニ壽塚ニ書石曰ニ甘藷先生墓、

左の方に云、

君諱敦書、字厚甫、源姓、青木氏號ニ昆陽、元祿十一年戊寅五月十二日生、明和六年己丑十月十二日終、壽七十二、葬子下目黒村別野南、君爲儒營ニ葬地于此故也、

○十月二十六日、金彫工濱野政隨終、七十四歳、稱太郎兵衛。○十月

增訂武江年表卷之五

增訂武江年表卷之六

○明和七年 庚寅 六月閏

三月十一日より、湯島天満宮開帳○同十月より御藏前八幡宮にて、京北野社司所藏菅神真筆像本地觀世音開帳○淺草稱念寺にて、三州明顯寺柳御堂聖德太子三尊佛等開帳○四月朔日より、麻布善福寺にて、越後高田井波蘭瑞泉寺觀鸞上人寶物等拜せしむ○同日より深川玄信寺にて、奥州會津大用密寺釋迦如來開帳○茅場町藥師如來開帳○深川淨心寺にて、身延山奥院祖師鬼子母神開帳○四月十二日より十八日迄、深川大佛勸進所にて、二月堂觀世音并寶物開帳○永代寺にて、鎌倉あら井焰魔王本地地藏開帳○五月より八月迄、諸國大旱、近在稻に蟲つき、江戸も蟲飛歩行、俗に此蟲貴し、間月神奈川の調三千噸餘死、海は貴し、野菜物着の價より苦難と云もの出て魚ごとく死す○六月上旬、星月を貫らく○【無補】六月十五日、浮世繪師鈴木春信卒、五十○麻布

永坂光照寺彌陀如來開帳○六月十九日より八月中旬迄、回向院にて、嵯峨清涼寺釋迦如來開帳○同日より一ツ目八幡宮御旅所にて、總州布施辨才天開帳○青山善光寺にて、鎌倉杉本寺觀世音開帳○今年嵯峨の釋迦開帳有しより思ひ起して、山岡明阿彌君釋迦文佛肖像考一卷編輯あり、寫本にて行る○閏六月朔日より、御藏前十五堂にて、武州松山觀音寺毘沙門天開帳○七月二十八日、夜乾の空赤き事丹の如し、又幡雲出る○八月十一日より、回向院にて、京都伏見東福寺塔頭海藏院毘沙門天開帳○八月十一日、夜靈巖寺本堂燒亡○八月二十一日より、回向院にて、高野山十遍名號彌陀如來開帳○八月より築地本願寺にて、甲州轟村萬福寺杉御坊聖德太子開帳○十一月市谷長延寺にて、雲州釋迦嶽雲右衛門大關と成り、雷電爲右衛門一世一度の相撲興行○十一月四日、官醫望月三英卒、鹿門山人と號、○此冬犬多く死す○十一月二十六日、書家小笠原一甫卒、名長和、稱理左衛門、牛込大信寺に葬す、

○【寫補】此頃とんだ茶釜といふ諺はやる、或云、明和七年二月、上野山下の茶屋女林屋お筆、もとは吉原四ツ目屋の大隅といひし妓なるよし、人みな見にゆく、名づけて茶がま女といふ、錦繪に出る、又云、笠森お仙他に走りて、跡に老父出居るを、戯にいへること、かや、二説何れか是なる、思ふに延享二年の春の時津風といふ發句集は、江戸の名物を集めたるなり、其中に「爐開きや二階にとんだ茶釜かな」といふ句見えたらば、前説はうけがたし、

○明和八年 辛卯

正月二十日、麻布より芝邊迄燒亡○正月四日、儒師宮城龍門卒、名維翰、高田芝國寺に葬す○正月二十八日、書家上田素鏡卒、號國古堂、淺草、永見寺に葬す○二月、村松町より出火、兩國邊皆燒亡、淺草御藏前筋、眞先稻荷の邊にいたる○二月十日より、上野清水堂千手觀世音開帳○同二十日より、王子稻荷明神開帳○三月初旬より、伊勢參宮流行所謂け參り也、畿内近國を始とし、次第に諸國に移りて、五月上旬一日に廿四五萬人に及ぶといへり○蜀庭云、銅鉢が勢多唐巴詩も此時の作也參

宮道中の事種々いへり○三月八日より、木下川藥師如來開帳○同五日より、御藏前花徳院にて、武州比企郡慈光寺坂東九番觀世音愛染明王開帳○同十一日より、回向院にて、明曆大火燒死溺死輩四萬日回向修行○同十五日より、下谷五條天神并天満宮開帳○同二十一日より、不忍池辨才天開帳○三月二十九日、歌うたひ富士田楓江死、吉次と云、近世の上手な、四月朔日より、淺草本法寺にて、房州東條小松原鏡恩寺祖師開帳○同日より不忍辨才天内にて、鎌倉極樂寺釋迦如來開帳○本所五之橋自性院にて、信州川東南照寺彌陀如來開帳○四月朔日より、淺草寺内にて、上總望海郡大久保村大日寺大日如來熊野權現開帳○戸崎町無量院にて、奥州桑折無能寺彌陀如來無能上人像開帳○淺草寺町源空寺文殊菩薩開帳○四月江戸雪降る○四月八日、物産家後藤梨春卒、七十五歳、稱太仲、梧陰庵と號す、著述の書多し、芝青の紀行○四月二十三日、曉寅刻吉原揚屋町より出火、廓中燒亡此時も九郎助稻荷の社殘る、今戸橋場邊兩國邊へ、假宅を補理て商賣せり○五月二日地震

○五月十七日、光物飛ぶ○五月より三股新地築立始る、安永元年の○六月二日大地震○五匁銀通用止○東埔塞瓜の小さき、唐茄子と號してはやり出す○藥研堀といへるは、米澤町一丁目二丁目三丁目の地先に在し入堀なりしが、今年六月より十一月迄に埋立、其頃町屋と成、藥研堀埋立地と號す、塙庭云、この入堀の中程らひの尼常に居たれば、此橋を俗に尼がはしと呼びとぞ、又此埋立地に其時大坂下りの曲馬出て、見物多く大評判なりしとぞ○七月朔日より、淺草境内にて、鎌倉貞昌院天滿宮開帳○七日朔日より、回向院にて、大和當麻誕生寺彌陀如来開帳、二十五菩薩來迎會修行あり○【無補】七月二十八日、祐天寺に於て累百年忌執行○八月大風、人家多く倒れ、廻船もやひ切れて永代橋へ當り、大橋前にて止る、又一艘佃島と石川島の間へ吹上、人夫を以て出す、塙庭云、あたるのみに非ず、永代橋を突破りたるにこそ、兩國橋左右の欄干を吹倒す、又三千七百兩にて出来しといふ、東本願寺御堂も壊れ、死者數を知らずといひ傳ふ、八月朔日大風、翌二日の變○九月神田明神祭禮延引、安永八年より出る○秋永代寺に築山泉水をこしらへ高野山をうつす、其頃

近邊度々出火有し中に、河岸に積置たる杉の葉より出火して、本所小梅迄焼け、靈巖寺本堂も焼たり、是高野山の形を寫し、女人を詣しめける祟なるよし噂せり、此説理にあらず、高野山を造たるは永代寺の庭中なるべし、近邊の町屋のもの、知る所にはあらざるべし○神田佐柄木町酒店山川十右衛門、觀世音像三十三體を造らしめ、淺草下谷の寺院三十三所に安置して、順禮の所とす○【補】十月俄正月とて祝ふ事あり○【補】是年不忍池へ木にて造れる龜をはなし、絲を出し是をよやつる、山下龜屋の寄進なり、

○明和年間記事

△儒家 宇佐美惠助水松崎才藏、海井上文平、井上源藏東井上仲、岡井郡太夫、州△詩文、瀧彌八齋細井甚三郎、洲宮瀬三右衛門、明須知文平、葛坡山人、千葉茂右衛門、三浦左兵衛、大内忠太夫、△書家 三井孫兵衛和澤田文二郎、江松下君嶽、石屋代與左衛門、伊藤善藏、岷陵山人、小河保壽、細井九阜、△和歌 加茂真淵、藤原宇萬伎、荷田御風、蒼生女、稻生魚

産、△物産 田村元雄、平賀鳩溪、後藤梨春、△畫家 狩野榮川院、鈴木鄰松、吉田蘭香、佐脇嵩之、三輪花信齋、諸葛藍、文靜齋といふ、花鳥上手、門人に劉安生あり△俳諧 蓼太、存義、買明、沽山、田社、寶馬、露十△浮世繪師 勝川春章、門人數多あり一筆齋文調、磯田湖龍齋、柳文朝、小松屋百龜等行る、○三井親和が篆書行れしより、親和染として篆字のかすれたる形を染物とする事行る、又婦女の衣類表は無地にして、裏に模様を付ることはやる○細身の脇差はやる、武家にも細身刀を用ひしもありしが、天明より止む○土平といふ飴賣はやる、谷中笠森稻荷境内の茶屋鍵屋のおせん、淺草奥山銀杏木の下楊枝店柳屋のおふぢ、美女の聞えあり、春信の餘畫に多し○曲亭云、明和二年の頃、唐山の彩色摺にならひて、板木師金六といふもの板摺某にかたらし、板木へ見當を付る事を工夫し、始て四五遍の彩色摺を製し出せしが、程なく所々にて摺出す事となりぬと云云、蜀山翁云、此説非也、見當を付る彩色摺は、延享元年江見屋吉右衛門工夫を始とすといへり、筈庭云、彩色摺のはじめは紅繪なり、四五遍の彩色

にてありしは、延享元年奥村文角が畫など見ゆ、かかれば蜀山の説かなへり、さて此處其よき方の説を細注とし、惡しき誤説を本文としたるはいかにぞや、若其誤説をもしるさばそれを擧て、さてこれを非としたる説を、本文にかくべきなり、其上この年間のくだりにはしるすべきに非ず、馬琴が誤説を信じて、明和の條にしるせるなり、

○明和二年の頃、大坂人形遣吉田文三郎同文吾杯下りし頃、彼が風を見習ひて、羽織の丈再長きを好けるが、程なく短く成れり○琴曲生田檢校行はる○富士田楓江、萩江露友等が長唄新内節淨瑠璃行る、塙庭云、楓江より後安永頃なり、歌舞伎に用る下り、○二挺鼓はやる○朝たといふ鳴物、このころ専ら世に行はる○柿色筒袖衣類、竹の子笠の先尖りたる鮮の弘慶子といふ藥賣市街をあるく○大晦日の夜、扇賣の聲かしさしかりしが、此時代より次第に止みたり○曳尾庵云、明和安永の頃、鼠除猫の繪かゝんとて市中を歩行しは、常州の者にて名を雲友といふ、又蜀山人の一語一言に、天明寛政の頃白仙といふもの、年六十にちかき坊主也、出羽の秋田

に猫の宮あり、顔の事ありて猫と虎とを畫きて、社に一枚づゝ奉納すといふ自ら猫つきと稱して猫と虎とな畫して筆を持て都下をうろたへあるき、猫書ふといひし也、呼入れて畫しむれば、僅の價を取て畫く、その猫は風遊しといふ云々とあり、いづれか先なる未詳

篤庭云、猫の繪かきのこと二説を擧るに、一説を小注したる心得がたし、且何れか先なるを詳かにせざる由いへるも、同く心得ぬことなり、此の兩説各異にて、時も人もことなれば、前後は自ら明なり、白仙は雲友の二の舞したるものと知るべし、○平賀鳩溪、紅毛のエレキテルを工夫し、日本にて製し始む【無補】此年間白鼠上方より流行り來る、初は眼の色赤かりしが、後には黒きもの來る、

○安永元年 壬辰 十一月二十五日改元
二月初午、淺草寺西宮稻荷神輿を渡す、其後、休む○二月二十八日、江戸天火坤より長へ飛ぶ○二月二十九日、乾より西南の風烈しく、土烟天を覆ひ日光朦朧たり、午の刻目黒行人坂大圓寺寺は本堂開、山堂のこるより出火して、永峯町通り、白金在町、麻布邊一圓、三田新網町邊、狸穴、飯倉市兵衛町なだれ、靈南坂一筋は西久保、櫻田、霞

が關、虎御門、日比谷御門、馬場先御門、櫻田御門、和田倉御門、常磐橋御門、神田橋御門等燒亡、右道筋御門内諸侯藩邸灰燼と成る、日本橋南は通三四町目西側、元四日市町、萬町、西河岸邊より南傳馬町、中橋を限り上槇町迄、北は本町石町邊、東西神田町々武家方共一圓、小川町入口、駿河臺、昌平橋筋違橋御門、外神田町々、神田社、聖堂、湯島天神社、同所近邊一圓、上野仁王門、山王社、下寺不殘、車坂下谷邊、廣小路、御徒町、三味線堀、坂本、入谷、金杉、箕輪、小塚原、吉原町、千住、大橋向掃部宿、淺草筋は下谷廣德寺前通、新堀、阿部川町、鳥越邊、本願寺御堂、淺草寺、本堂、傳法院并寺中、馬道、田町、新鳥越、橋場に至る、又同日暮六時、本郷丸山田町より出火して、森川宿、追分、駒込、白山、傾城が窪入口迄、うなぎ繩手、土物店、千太木入口、根津谷中感應寺、芋坂根岸に至る、翌日未刻此所にて止る、又翌晦日巳刻北風にかはり、或東風に成、常磐橋外の火、大傳馬町邊、馬喰町二丁目迄、濱町邊、堺町、葺屋町兩座

の芝居操芝居四座、小網町、大坂町、田所町、難波町、住吉町邊、伊勢町駿河町室町邊、日本橋中橋京橋にいたる、未刻雙方の火鎮り、此時大雨降風鎮る、此火事

長六里幅一里、大小名藩邸寺院神社町屋の類夥しく、燒死怪我人其數を知らず、上野仁王門此時再度の燒亡也、感應寺五重塔も此とき燒る、麻布一本松やけて後に残管たり○吉原町假宅、今月橋場山の宿兩國深川八幡前御町へ出る、芳町の折籠町假宅へ出る○大火後行人坂大圓寺再建無し、其後へ或人五百羅漢の石像を遺立す○雪中庵臺太橋山町に住たりしが、此火事に逃れて深川六間堀要津寺中の庵にいたり、緋櫻を忘れて背き柳のなといふ句をなし、見舞にきた○三月五日より、不忍辨天にて、京真如堂鎮守稻荷明神開帳○同十日より、牛の御前王子權現開帳○同十九日、暮方天火西より東北へ飛ぶ○四月八日より、小日向大日坂妙足院大日如來開帳○魚籃觀世音開帳○四月より五月迄、諸國疫病行る○四月、四谷内藤新宿驛舎再興御免あり、甲州道中人馬繼立の所となりて繁昌せり、篤庭云、内藤新宿の事、御免の仰下りしは、二月二十四日なり、四月十四日、新宿遊女町見世開なり、新宿は享保五年故あつて廢せられたり、其事くだ

くだしければ言はず、夫より五十三年を経て、明和九年願出るもの有て、又古來の通りハタゴヤ五十

二軒、飯盛女百五十人出來たりとぞ、
○【篤補】四月中旬、鯨の片身なるが神奈川海より上るといふ○大川中洲新地築立成就す、町屋は安永四年に至て全く成れり、其地は新大橋より南の方、酒井家白須家菅六百七十七坪餘、茶屋九十三軒有、其内四季座と云しは、北東の隅の料理屋にて殊に大風也とぞ、湯屋は三軒あり、其餘の家數知るべからず、安永四年より天明八年迄十四年の間也、この間中洲のみ賑ひ、兩國橋前後の地至て淋くなりしが、寛政已來元のことし、朱樂菅江が編の六歳、名道賢、稱甚誠、淺草警願寺中稱名院に葬す、初代英一、蝶年の門人にして始は一水と云へり、蓋谷はこれが門也○八月朔日二日、大風雨家屋を吹潰す、當春類燒の小屋吹倒るゝもの多く、賤民の困苦甚し○八月五日、儒師村士淡齋卒、名宗、稱彌左衛門、駒込大圓寺に葬す○八月金彫工大森英昌卒、六十歳○八月十七日、大風雨再度小屋を覆す、本所深川出水床上迄乗る、大船永代橋を損す、篤庭云、八月朔日二日の大風雨、又十七日の大風雨に吹潰されたる民屋、御府内は數しれず、伊奈氏支配の關東筋土民の家、四千餘軒といふ○八月二十七日、土佐

左京少進光芳卒、七十〇【筈補】八月駿河國より兩頭の龜出る、これは七月六日、武州荏原郡石河村の百姓孫左衛門といへるが捕得しなり〇九月貳朱銀通用始る〇十一月朔日、夜九時頃上野御本坊失火〇【無補】十一月改元の時落首、年號は安永永くとかはれども、諸色高くて今に明和九〇此冬初鷹といふ人、日暮里舟繫松に碑を建、北海入江貞文を撰す〇再校増補江戸砂子梓行、枯涼が男恒足軒井門人冬池校訂す

○安永二年 癸巳 二月閏

二月十五日、儒師深見有隣卒、稱新兵衛、又久大夫、支岱の三月五日より、牛島長命寺辨才天開帳〇三月より、回向院境内一言觀音開帳〇同高輪庚申堂青面金剛開帳〇三月十日、上野凌雲院失火〇四月より、洲崎辨才天開帳〇同月より、眞先稻荷明神開帳〇四月午の日、築地小田原町浪除稻荷祭、町々出し練物等出す、其後休む〇三月末頃より、疫病行れ人多く死す、江戸中にて三月凡十九萬人疫死とい、御救として朝鮮人參を給はる、

筈庭云、疫病は去年の冬より引續きてなり、品川新宿の内計り、死するもの八百餘人と云、江戸町々へ一町につき人參五兩づゝ下さる、

八月初、赤坂裏傳馬町名主五兵衛梓千太郎、放埒にて役義を人にゆづり、近邊氷川の花街に徘徊せしが、病死せしを其友より集り、日頃彼が好みし事なればとて、祇園拍子にて葬送しけるとぞ、

〇四月より相州江の島上の宮辨才天開帳、江戸より參詣多し〇五月醫學館再建、諸醫師より年々寄附銀有〇五月十九日、儒師坪井青城卒、名敏來、淺草正覺寺に葬す〇葛西東漸寺日限觀世音開帳、故ありて中〇七月朔日より、湯島社地にて、攝州四天王寺聖德太子開帳、六月廿六日江戸着のとき迎の旗〇冬嚴寒川々の氷厚く、通船自由ならざる由にて諸物の價甚貴かりし、これによつて正月門飾の松竹商ふ事なく、名にしあふ兩國川も氷閉て、通船絶し日も有し由、後見草にいへり〇十二月朔日、神田明神社假殿にて祭禮の式執行、當年祭禮の年にて有しが、去年災に罹り本社假造營いまだ成らず、産子の町

町れり物も間におはざる故、今日假殿にて其式のみあり、○安永の始其後安永六年迄假殿にて執行ひ、同入亥年九月本祭あり、○の頃、繪の實を作りたる跡の如に、多きを食して死す〇墓所一覽に、畫りといふ噂一般になりて、そば更に賣れることなし〇人宋紫石今年終り、東本願寺中徳本寺へ葬る由記せり、然るに、殿島扁額縮本に、安永七年戊戌五月、宋紫石六十三歳にて孔雀を畫たる額を載たり、よつて徳本寺へ至りて尋しに、石碑あり忌日儘ならず、又同寺中宗恩寺に其家の墓碑あれども、ともに詳ならず

○安永三年 甲午

正月二十日、狩野洞庭興信卒〇二月八日より、川口善光寺彌陀如來開帳、瑪庭云、二月十一日より四月十一日迄〇三月五日、下槇町より出火、大風にて數町類焼すと云〇三月十四日、中將姫千年忌〇三月十八日、建部涼袋卒、五十六歳、牛島弘福寺に葬す、畫并俳諧を善くす、寒葉齋と號す

筈庭云、涼袋とあるは誤なり、建部綾岱もと眞淵に従ひしかど、其説を非として、詞草小菀杯の書を著したり、固より俳諧をよくし、世に片歌を起さんとて、片歌道のはじめ、同二夜問答、其の他何くれと著述したれども、終に行はれず、又繪をよくして、寒葉齋畫譜を著はす、加藤千蔭の跋文あり、千蔭も畫を此人に學びしにや、先生とたゞへたり、されど千

蔭は畫をよくせず、綾岱が畫は唐繪の流なり、又戲作もあり、西山物語、本朝水滸傳などの類なり、上方の人誰やらの隨筆に、謝蕪村と此人の事をいひて、蕪村はものしらぬ不學のもの、放蕩にて家産をやぶり、俳諧師となれり、畫も綾足に及ばず杯いへりしかど、蕪村が畫は時好に叶ひて世に稱せられ、綾足は不遇にて用ひられず、恨みなるべし、

〇同日より、魚籃觀世音開帳〇四月朔日より六月二十一日迄、大師河原平間寺弘法大師、中瀬稻荷、回向院にて開帳〇同月四日より六月八日迄、本所表町本久寺祖師開帳〇四月八日より五月十八日迄、木下川藥師如來開帳〇永代寺内丈六觀世音腹籠佛開帳〇四月十八日より六月八日迄、淺草寺觀世音開帳〇西門跡御對面所にて、信州埴科郡白鳥山康樂寺圓光大師御影、親鸞上人木像開帳〇二本榎廣岳院にて、仙臺往生寺變牛濟度圓光大師開帳〇六阿彌陀末木觀世音開帳、西が原昌林寺〇同三番西が原無量寺觀世音開帳〇四月十

八日より六月八日迄、淺草寺内日音院雨寶童子、松壽院おたふく辨才天腹籠像開帳○淺草池の妙音寺辨才天開帳○【筠補】四月頃、兩國に放屁男見世物に出づ、霧降咲男と云ふ、大評判、平賀鳩溪放屁論と云草子を作る、咲男は錦畫にも出づ○五月十六日より、龜戸天満宮開扉○六月六日、大雷三十七ヶ所に落る○六月廿三日、大風雨家屋を損じ樹木を倒す○小石川傳通院山内福聚院大黒天、夏の頃より江戸中へ講中を結んで、甲子の參詣今年より始る○七月朔日より、護國寺本尊如意輪觀世音開帳○同日より、小石川大塚大慈寺觀世音開帳○七月十五日、古筆了延卒、七十○八月十五日、市谷八幡宮祭禮、神輿を渡し出し練物等出る○八月、淨るり語元祖鶴賀新内死、六十○【筠補】八月頃より毎月十日、淺草日輪寺に於て能狂言有、見物多し○九月朔日より、市谷八幡宮内茶の木稻荷開帳○九月醫學館講堂成就す○九月廿日、眞土山聖天宮祭禮、神輿を渡し、産子の町より出し練物を出す、其後

休む、
 筠庭云、聖天は佛なり、神輿とは如何、又書中總て氏子を産子と云ふもわろし、産土神をうぶすなと云、産とばかりはいかゞ、氏子といふこともとより今いふ氏子は義なきことなり、此書などは俗にいふ處をもて、しかいふべきなり、氏子の事嬉遊笑覽祭會部を見るべし、事長ければこゝにはいはず、
 ○九月二十一日、小石川白山權現祭禮神輿を渡し、産子町々より出しねり物を出す○九月深川鑄錢座止○大川橋始て掛る、俗に吾妻橋といふ、十月十七日渡り始め○十月二十二日、儒師鶴孟一卒、稱左膳、伊血子、長應寺に葬す○【筠補】この冬寒氣つよく、兩國川氷りて已刻まで舟の往來絶し事あり、駿河は暖國なるにより、氷は六七十年も見し人なかりしに、今年は御城堀氷とちたりとなむ○畫人鳥山石燕豊房、鳥山彦といへる繪本二卷をあらはす、フキボカシの彩色摺を工夫せしは、此本を始とする由、安間貞翁の話也、石燕は周信の門人なり○又此時代橋の

張江といへる繪師、もとは縫箔師なりしが、摺込の彩色を工夫し、職人部類といへる繪本をあらはし、其外俳諧の點式など製して行れしが、やがて廢れたり○投扇の戲行れ、貴賤是を弄べり、

○安永四年 乙未 十一月間

三月十七日より、回向院にて、京清水圓養院景清守千本尊手觀世音、毘沙門天、勝軍地藏尊開帳○同廿九日より、澁谷長谷寺にて、京音羽山清水寺奥院千手觀世音毗沙門天地藏尊二開帳○大井來福寺櫻樹を栽繼く○四月朔日より、神田上水源大盛寺井頭辨才天開帳○津久戸明神八幡宮開扉○四月芝切通し時の鐘再興○龜戸聖廟に樓門建、屋上に四神有○大川中洲築立地へ家居建續、町名を三股富永町と號し、川邊に葦簀圍ひの茶店をかけ並べ、夏月納涼殊に繁く、絃歌晝夜に喧し、

六如庵詩鈔、中津泛舟、

繁華休說湧金門、行樂此中雜二具論、烟暖四時花世界、月清萬頃水乾坤、垂楊岸岸樓臺出、遊舫人人歌笑喧、輸二却杭州二綠二底事、恨無三蘇白關三詞源、

中津納涼、同伊藤士善、
 日落江天關暑收、趁涼輕柯向三中洲、燈棚夾岸花相映、蟬聲臥波橋欲淨、風管數聲風簾隔、星河一帶水悠悠、銀鬪倒盡人難醉、白鈴挑滿滿秋秋、

中津漫興、
 十里清湖鏡裡天、繁華懶客動留連、驚鴻沙外芙蓉雨、楊柳橋頭鬪翠烟、祇見黃金爭買笑、誰知白髮暗催年、笙歌眼底鐘長滿、自是來舟非二去船

○四月より、目黒明王院にて、鎗倉杉本寺觀世音、同岩殿寺觀世音、同寶戒寺觀世音、鎌倉二十四番の内一番地藏菩薩開帳○【無補】五月より六月迄、日々雨ふる、其時の落首に、ふるはづだ兩清水に井の頭天水桶に井筒源五郎○七月より、回向院にて、伊豆三島長圓寺富士山本地阿彌陀如來開帳○七月より、回向院にて、相州箱根塔峯阿彌陀寺彈誓上人本地法國光明佛開帳○七月より、市谷柳町高德院觀世音開帳○八月十三日より晦日まで、深川八幡宮開帳○同廿二日より、護國寺山内にて、秩父三十四番觀世音不殘開帳○八月茅場町藥師境内にて、相州萩野法界寺朝日如

來開帳○九月朔日より、音羽町九丁目田中八幡宮開帳○同日より三十日迄、飯田町世繼稻荷天満宮開帳○九月十九日より、牛込赤城明神開扉○投壺の技行る、京よりはやりしと見えたり、大内熊耳の門人田江南と云る人、投壺の禮を研尋し其法を傳ふ、投壺指押、投壺矢勢圖解等梓行せり○紀伊國屋文左衛門山千が實子文右衛門、築地飯田町に住し織に暮しけるが、俳諧を好み龜山と號す、後雞髮して明西といふ、今年六十餘歳にて終る、紀文が子孫是焉庭云、紀文は放埒ものながら、名の聞えたる者なれば記しすべし、然らばそれが跡に筆ついでに、子孫の事も絶たる由などは書くべくや、其れを何ぞや、この明西が事を一條に取○十二月二十二日、儒師松崎觀海卒、名維時、稱才藏、○薩州より來りし鼈猪マアラといふ獸、神田紺屋町田村元雄が家に在しが、後淺草寺境内にて見世物とす、猪の大きにて脊に長さ骨數百本あり、怒る時は此骨逆立て恐ろしき響をなす、

短小なり、脊の長骨數百といふは甚誤れり、頭は小く體は圓し、刺毛象牙の様に光あり、末の尖りたる處黒みあり、逆立つときガラ／＼と鳴ると云ふ、この見世物恐らくは偽物なるべし、其頃安永元年八月豪猪を薩州より執政田沼主殿頭へ獻ず、上覽にも入りしとなり、そを程もなく見せ物にすべき様なし、

○安永五年 丙申

正月五日、儒師村士一齋卒、名宗章、號玉水、稱行藏、四十八歳、駒込大圓寺に葬す○正月二十八日より、柳島法性寺妙見宮開帳○二月風邪流行○三月末より秋の始まで、麻疹流行人多く死す○三月二十三日、物産家田村元雄卒、名元善、淺草眞龍寺に葬す○四月二十八日、詩人大内熊耳卒、八十歳、名承裕、稱忠太夫、下谷廣徳寺に葬す、男を聞室といふ○五月六日より八月八日迄、回向院にて、伊勢白子觀音寺子安觀世音開帳○五月朔日より、矢口新田明神本地十一面觀世音開帳○同日より永代寺にて、六郷羽田辨才天開帳○【筈補】此夏游治の少年、木綿のひとへ物をはれとし好む、藍がへしといふ染なり、大丸

屋にのみこれあり、模様剣先嘉房菊、これは本町壹丁目奈良屋の隠居が仇名なり、其好みにて出來たる菊の小紋なり○【同補】夏より堺町樂屋新道に女の力持出る、もとは大根島の娼妓なりとぞ、力婦傳と云ふ草紙出る○七月朔日より、永代寺飛來八幡宮開帳○七月二十九日、荻生道濟卒、七十四歳、號金谷、祖傳の男なり○八月九日、儒師宇佐美瀧水卒、名惠、字子迪、稱德助、四谷南寺丁戒行寺に葬○柳橋若竹屋と云船宿の妻、一産に三女を生ず、名を梅松さくといふ、さくは小唄に作りて街頭に歌ひけるとなり○品川の邊にて、石地藏經を讀む聲聞ゆるとて、皆人聞に行しが、地藏尊の雨覆を放して見るに、後の方に蜂の巢ありて、多くの蜂の聲讀經の様に聞えし也、我衣に出○九月十三日、東叡山瑠璃殿并諸堂御修復新始○十一月二十七日、書家伊藤益道卒、名守稱善藏、坂本善玉院に葬す○十二月十日、夜二更のころ新座郡東明寺吹上觀世音本堂焼亡、本尊火中に埋れたれども恙なし○十二月二十三日、儒師伊東渤海卒、名晃、淺草萬隆寺に葬す

正月二十一日、曉青山御手大工町焼○淺草報恩寺、親鸞上人持物の什寶を拜せしむ○三月二十日より六月朔日まで、淺草寺觀世音并境内神佛總開帳あり、開基より千百五十年に及ぶと云、佛人寺町百庵の筆記にいふ、淺草妙音院の境内に、山岡明阿先生住給ひけるを訪ひ、塔石開帳ありしを拜す、此所を中谷と云、今は中田といふ

石枕おもき思ひのか那しのみ今はなかつ田の里とこそきけ 百庵かへし

世のさがないまは何ともいは枕おもき思ひもなかつたにの里 明阿

○三月二十五日より、湯島天満宮本社建立成就に付開帳○三月目白新長谷寺境内觀世音開帳○淺草唯念寺稱念寺、溜池澄泉寺にて七日づつ、下野高田天拜一光三尊佛開帳○四月朔日より、回向院開山護念佛、備中千體佛感心、阿彌陀如來、境内蘂苞辨才天、一言觀世音開帳○同日より青山善光寺一光三尊彌陀佛開帳○澁谷長谷寺二丈六尺觀世音腹籠の像、其外古佛靈寶開帳○四月より、下谷寺町蓮城寺祖師日親上人、開帳○橋場不動院不動尊良辨、開帳○四月八日より、龜戸社内花園明神開帳○中野法仙寺不動尊開帳○芝金杉正傳寺

○安永六年 丁酉

にて、牛込寺町久成寺船守祖師開帳○下谷五條天神
 天満宮開帳○愛宕山圓福寺にて、出羽湯殿山黄金堂
 玄良坊佐久間おたけ大日如來開帳○麴町平河天神内
 にて、北澤淡島明神虚空藏菩薩開帳○六月より本郷
 丸山興善寺祖師開帳○六月十一日、儒師稻垣長章卒、
號白蓮、稱茂右衛門、白山妙清寺に葬す○夏より伊豆大島焼始め、南海へ火
 燃出る、品川沖にて夜々火光天に映ずるを見る○八
 月十五日より、回向院にて、江州粟津義仲寺木曾義仲
 朝臣守本尊朝日彌陀如來、芭蕉翁像開帳、

篤庭云、桃青が事を芭蕉翁と謂しは、もと其門人等
 が稱呼なるを、さらぬ俗人等事を辨へず、専ら翁と
 いへるはいとをかし、桃青は何ほどの人にて、かく
 今世にも重んぜらるゝか、解しがたきことなり、彼
 が發句よき句も多けれども、今聞えたる句どもの
 内にも、放屁の如きもあれど、みな盡く金玉と思へ
 るはいとつたなし、彼が正風體を唱へざりし前、古
 風の頃の句を見べし、上のやうなる發句さらにな

し、宗因等が才に比れば大に劣りたり、況や貞室以
 上をや、若其の人を後の世にあらしめば、其代の風
 情はよむべからず、昔の人はつとめて物をも廣く
 見わたし、一句をもよみ出るものは、手もよくかき
 たり、

○八月二十五日、書家高山北溟卒、名尙賢、稱平助、淺草誓願寺に葬○此
 秋魚獵なし、相州小田原の海中へ大魚來る、其丈四五
 十間横八九間、脊中に鯛の類付て有、名をメウガサメ
 といふ、いかなる大船をも覆へすといへり、其頃漁人
 恐れて海へ出る事なし○【無補】九月兩國橋見世物の
 狼、檻より出て市中をさわがす○十月目白不動尊内
 にて、武州多摩郡谷保天神開帳、別當安樂寺○十月甲州身
 延山七面宮より出火、參詣の者怪我人多く、江戸より
 も駕にて迎に出たる者多く、九死一生の體にて歸府
 せしも有しとぞ、聲云、此事街談錄に安永五年十一月十一日夜の事とせり○【篤補】當年
 繪草紙鱗形屋新板、戀川春町の畫作、又喜三二作大に
 行はる、桃太郎後日咄、花見歸鳴呼怪哉など殊に評判

あり○【無補】是年愛宕下藥師堂の水茶屋、櫻川おせ
 んといふ美婦名高し、世人仙臺路考といふ、

○安永七年 戊戌 七月間

二月朔日より、淺草本法寺にて、佐渡國塚原根本寺祖
 師開帳○二月十二日、俄に大風起り本石町より出火、
 靈巖島深川迄延焼○小傳馬町千代田稻荷開扉、靈寶
 數多出して拜せしむ○淺野家の義士堀部安兵衛が後
 家、縁組といひし計にて嫁せざる内夫切腹す、十六歳の時なり、薙髮して妙海と號し、龜
 戸村の庵室に居たりしが、老後泉岳寺の門前に住し
 て、義士の菩提を弔ひ居たりしが、今年二月二十五日
 九十歳にして終れり○三月三日、儒師南宮太湫卒、
名岳、稱彌六、牛島弘福寺に葬す○三月二十五日より、麴町平川天満宮開
 帳○烏森稻荷明神、春日明神別當快長院開帳○三月上野清
 水堂觀世音本堂造立に付開帳○三田春日明神開帳○
 相撲興行の日數、昔は晴天八日成しが、今年三月二十
 八日より、深川八幡宮境内において興行ありしより、
 十日と成し由我衣に見えたり○四月朔日より、牛込

圓福寺にて、京本滿寺祖師開帳○同日より護國寺に
 て、甲州大聖院不動尊新羅三郎像、武田信玄像開帳○【篤補】安齋隨
 筆、安永七年五月晦日、江戸にて大晦日と稱し、節分
 の如く豆を打、厄拂ひの乞食出、六月朔日を元日と稱
 して門松を立雜煮を食し、屠蘇をのみ鏡餅を設け、町
 家にては商をやめ、戸を立よせ簾をかけ、買人來れば
 雜煮を出し酒を進む、寶船の畫をうる者も出たり、江
 戸中如く此したるには非ざれども、此事をなすもの多
 し、もと若狭よりはやり出て、諸國に傳へけるとぞ、
 彼國の土民山中にて異人に逢ひしが、如此すれば疫
 病を除くと教へし故、行ひ始めたりといふとあり、此
 正月を學ぶことは、古くは寛文七年にあり、夫より後
 は寶曆九年にもあり、嬉遊笑覽にいへり○六月朔日
 より、御藏前八幡宮にて、駿州富士裾野會我八幡宮會
 我兄弟の像、荒人神、玉渡明神、虎師前也開帳○同日より、御船
 藏前中央寺大日如來開帳○同日より閏七月十七日ま
 で、回向院にて、信州善光寺彌陀如來開帳、此時開帳繁昌して諸人

翠をなす、曉七時頃より樟の先に提灯多くともしつれて、高聲に念佛を唱へて参詣するもの多し、平賀鳩溪島亭馬が求によりて工夫をなしたりといふ、又江津三郎、古澤甚平といふもの細工にて、飛んだ靈寶と號し、あらゆる物を見立て、佛菩薩などの顔に作りたる見せもの、鬼娘といへる見せものなど、いづれも見物多く賑ひしとぞ、

篤庭云、此時鬼娘は、橋向にも似せもの出来て、是もはやる、飛んだ靈寶略縁起は馬馬述、このみせものはやりて、兩國に三ヶ所、山下に二ヶ所出来たり平賀源内が作、實生源氏金玉櫻といふ淨るりに、兩國鬼娘のみせ物を作りたり、この開帳の朝参りは、頓に禁ぜられたり、

○六月朔日より、御船藏前南部大佛勸進所出世大黒天開帳○六月十六日、俳人小栗百萬卒、西本願寺中覺證寺に葬す○六月二十三日より、多田薬師内にて、武州十條村真光寺正觀世音、光智法印像開扉○高輪如來寺にて、常陸國鹿島郡子生神宮寺辨才天開帳○七月朔日より、芝愛宕社地にて、千住勝専寺鷲大明神開帳○牛込七軒町多門院三身毘沙門天開帳○三田寺町慈眼寺絲引正觀世音中將姫蓮絲にて織給ふ所なり開帳○七月朔日より、湯島社地に

て、武州埼玉郡野島地藏尊開帳、淨山寺篤庭云、此時野島地藏へ奉公人となれば、諸願成就すといひて、請狀をあげて奉公人となると、半日閑話にいへり、
○【篤補】閏七月十七日頃、菩提樹の實ふる、是善光寺如來の奇瑞なりと云ふ、水草の實馬糞に雜りて有しとなり、風來山人菩提樹辨を作り板行したり○七月四日、書家山本蘭洲卒、名智光、稱左兵衛、本所法恩寺に葬す○七月八日、北割下水花巖寺薬師如來開帳○七月十六日より、淺草清水寺千手觀世音本堂建立成就に付開扉○七月淺草寺中壽命院妙見宮本堂建立入佛に付開扉○七月二十八日より、淺草寺中智光院にて、信州善光寺越村往生寺菫萱感得彌陀如來、聖德太子御作といふ菫萱影親子地藏尊開帳○下落合村藥王院釋迦如來開帳○八月二十五日、龜戸天満宮祭禮、神輿行列古例の如く、又産子町々出し練物等出て賑ひ大方ならず、中絶○七月二十八日、儒師鹿島探春卒、名守房、號東郊齋、四久保天徳寺に葬す

○安永八年 己亥

正月十四日、夜青山熊野權現別當淨性院自火○三月根津權現境内にて、御旅所御本地觀世音開帳○川崎平間寺厄除弘法大師本堂修復成就に付開扉○眞土山聖天宮西の麓に辨天の池あり、池中に石投げ婆々と號し、丈四尺餘の老龜の立像あり、兒童石を投げれば傾に投返すといひ傳へけるが、一年火災に罹り、池も埋れ石像も土中に埋れ、四十年來知る人なし、今年春下總國八日市場の百姓平山忠左衛門といふもの江戸に來り、此所を借りて酒樓を營み、池を掘改め三條に橋を架して三橋亭と號し、又美麗の女に機を織らしめて客に見せけるとぞ、此時かの石像を掘出すと、談て首を缺たりしを山上に移して今に在り、春衣姿の像にやあらんといひ○四月初日二日、大に寒し、三日大雹降○四月八日より、淺草本法寺にて、新會妙顯寺祖師釋迦如來開帳○同日より回向院にて、伊勢朝熊岳金剛證寺虛空藏菩薩開帳○押上最教寺蒙古退治旗曼荼羅を拜せしむ○下谷徳大寺摩利支天開帳○四月八日より、淺草権寺西覺鎮守熊野本地彌陀如來、開山觀智國師繪掛本尊開帳○四月より七月迄百日の間、相州江の島本宮岩屋辨才天開帳、江戸より參詣多し○目黒不動尊内にて、信州水内郡石堂村萱堂寂照房作地藏菩薩別當四光寺開帳○愛宕山内にて、淺

間山虚空藏菩薩、井中段鬼神堂地藏菩薩開帳別當延命寺○五月十六日より廿九日迄、御船藏前勸進所にて、南都東大寺二月堂觀世音菩薩開帳○六月八日より、茅場町薬師内にて、武州下新座村東明寺吹上觀世音開帳○湯島天神社地にて、多摩郡谷古田領新里徳性寺薬師如來、不動尊開帳○八月より、深川八幡宮本地愛染明王開帳○小石川無量院に、小野の小町の墓として在、和州より移したる由なり、今年小町の九百年忌に當り、八月八日に法事修行有、小町の詳忌は三月某の日なりとに憶かならず、忌日○八月廿五日、大風雨洪水、和泉橋落、をば何に記したる歟○八月廿五日、大風雨洪水、和泉橋落、小日向水道町邊往來水五尺ほど出る○日白下水道掛樋の岸二十間程崩る、諸人薩州侯品川の前邸へ、琉球産の筍を始めて植らる、諸人これを珍賞す、世に孟宗笋と稱す○焉庭云、孟宗竹を植られしなり、世に賞せしは○【無補】八月右京大夫殿、深川下屋敷前の橋中頃絶たるを、先規の通りかけ渡して石島橋といふ○九月二日、俳人梅鄰庵五璉卒、七十六歳、小石川一音寺に葬す○九月より十二月迄、小網町より甚左衛門町へ渡るわ

ざくれ橋を壊ち、此處の堀を埋らる○九月十五日、牛御前祭禮神輿を渡し、産子町々より出しねり物を出しけるが、其後中絶す○去年暮より、伊豆大島焼出、夜毎西南鳴動して、江戸迄も響渡れり○十月朔日夜より二日迄、灰雪の如く降る、大隅國櫻島焼たりしが其の灰江戸迄も降しといふ○十一月二十三日、俳人笠家左籬卒、六十六歳、上の山、下啓運寺に葬す○葛西柴又村題經寺、九世日、敬の時、今年堂宇を修理せしに、本堂の棟上より、今の帝釋天の板本尊を得てこれをまつる、是當寺に傳へて先年失ひしかば、これより庚申の日、本尊也、この日庚申に當りしを縁日として詣人多し○今年不詳書家鳥石葛辰京都に於て卒、八十歳、字君岳、號白、玉齋、廣澤の門人なり○十二月十八日、平賀鳩溪卒、名國倫、博源内、號風來山人、橋場總泉寺に葬、一書に安永九十年二月とも云ふ

筠庭云、平賀源内いかなる故有てか、米屋の倅を殺害したりとのみは、人の知れる所なり、詳なることは聞えず、昔日友人山崎氏の許にて、其子細の書付を見しことありしかど、今記憶せず、此書付所持の人あるべし、發狂せしもの、やうに思はれたり、さ

れば天然の終りにはあらじ、

○安永九年 庚子

正月八日、書家爰山叡麓卒、名秀、叡山流の祖、也、下谷長福寺に葬す○二月十五日、書家山本昌信卒、稱菊治、三田、龍原寺に葬す○三月行基菩薩七十年供養、六阿彌陀如來不殘開帳回向○三月朔日より、湯島社地にて、上野世良田感徳山惣持寺十一面觀世音開帳○麻布善福寺冠纓聖徳太子開帳、親鸞上人筆八字名號を拜せしむ○千駄が谷八幡宮神功皇后春日明神開帳○三月朔日より、市谷柳町光徳院千手觀世音開帳○同日より、池の端妙音寺祖師開帳○三月十五日より、青山善光寺にて、攝津難波堀江一光三尊佛開帳、和光○三月十六日より、永代寺にて、葛飾郡吉川延命寺地藏尊開帳○四月朔日より、回向院にて、目黒祐天寺阿彌陀如來、祐天大僧正眞影開帳○四月朔日より、淺草西福寺無量壽佛、諸什物、觀世音開帳○四月朔日より、極樂水光圓寺元木藥師開帳○四月十五日より、龜有村祥雲寺聖觀世音菩薩、深川寺町惠然寺にて

開帳○目白不動尊開帳○淺草天王橋西の橋始て掛る四月十六日より、羅漢寺三市堂建立、八月の頃成就、秩父坂東、西國の寫、百觀世音安置供養あり、道俗參詣多し○四月房州南浦異國船漂着、南京船、長二十八間、七十八人乗といふ○五月高田寶泉寺に、石を積て富士山を築、今月成就す○或書に五月開運星出ると有○五月十四日、書家篠田定考卒、號明浦、丸、山本妙寺○六月三日、大雷雨○六月二十四日、儒師松宮觀山卒、名俊仍、稱主幹、大塚光源院に葬す、眞杉靈神と號す○六月大雨降續き、二十六日より江戸近在、利根川荒川戸田川洪水、村々人家を流し、永代橋新大橋落る、助船を以此難を救せらる、七月より米價貴し、巧庵云、人に難義のこの年だんのおとといふこと、童謡にもうたへり○【筠補】七月時分、金星といふがあらはると評判す、其星を見るに、金星といふは心宿、銀星といふは太白星にて、異なるにあらず、一時の妄言也○七月朔日より、回向院にて、丹後天橋立成相寺聖觀世音、對王丸身代地藏尊開帳○九月十五日、儒師林東溟卒、名義、稱、牛島、弘福寺に葬す○十月十五日、山岡明阿君京

都に卒、名俊明、稱左次右衛門、今年六十九歳にて卒去あり、辭世百とせのなつばはも何のうつつかは思へば蝶の夢さへもなし

○武藏志料寫本成、明阿君の著撰にて、今年正月稿成し由文中にれたり、但し全備の物とは見えず、又茂暉が作の紫一本の後編とてあらはされし業のゆかりと題せし書あり、寫本にて世に稀なり、

○安永年間記事

堀の内妙法寺祖師、追日參詣人群集す○安永始の頃、王子駒込谷中邊、西國寫觀世音札所巡りを定む○江戸に二十五箇所圓光大師巡拜所を定む、愚編歲筆、記に詳也○安永十年、俳人提亭の撰たる種おろしと云句集に載る所の、其時代のはやり物商物目錄左に略記す△菓子

△輕燒、警願寺前、馬道正直、駒形正直、新吉原釣瓶、深川洲命寺、雜司、芝口春日野、深川八幡宮二軒茶屋

△船切、麹町ひや、楊枝茶釜五倍子酒中花、内柳屋、芝谷藏の内

△料理茶屋、深川竹市、同洲崎升屋、鹽濱大紋、△しつぱく、神外、△料理茶屋、芝口春日野、深川八幡宮二軒茶屋

△田樂、眞崎の、△餠、目黒桐屋、雜、大橋新地、樂庵、△甲子屋、△餠、司ヶ谷川口屋、△生簀、鯉、四太郎、須崎大黒、△麩の焼、橋屋惣助、△隅田川、諸白、山屋、△麩、伊、屋孫四郎、△麩、中ばし、△蕎麥切、豆腐、△あは雪

所おこし、御くら、△餠、中ばし、△蕎麥切、豆腐、△あは雪、なら茶、回向院前、△煎餅、てりふり、町翁、吉原、△淺草餅、淺草寺、車坂下、△煎餅、てりふり、町翁、吉原、△淺草餅、淺草寺

△いくよ併爾此外あまたあり、末に花鳥の名所、釣の名所をも記せり○相撲取谷風棍之助、小野川喜三郎釋迦嶽雲右衛門等行る、安永の頃は、大つた深川永代寺にて勸進角力興行あり○狂歌師、平秩東作、蜀山人、手柄岡持、唐衣橋洲○軍談師、馬谷、落し話、石井魯石行る、

△蜀山人は晩年の號なり、此處などには書くべからず、四方赤良とするべきなり、其上橋洲岡持はふるき人なり、烏亭焉馬子に語りけるは、ねぼけぬしは其かみ眞黒になりて、水あびてゐられしを、われいざなひて橋洲ぬしへつれて行りといひき、又かくかぞへていへるに、菅江湖鯉鮒ぬし杯言はざるも非なり、皆古き人なり、今思ふに朱樂菅江のあけら赤良に似たり、菅江は橋洲にひとしき頃なり、されども聊の遅速なり、△因に云、其かみ四方が赤味噌賞せられて、四方の赤といひけるよりの號に

て、花押に四方が店の印をとりて用ひたる、其印扇の地紙の形に、中に三ツ巴の紋あれば、晩年蜀山の號は蜀の三巴といふことにやと、おのれ南畝に問しに、否さにあらず、蜀山は銅の異名なりと答へられし、然らば赤良の赤の意なり、
△落し咄中興は焉馬なり、未だ其頃は短き咄しにても古風なり、焉馬が發會はいつも咄ありき、向島にて新作の咄の會をせしより、打續きてこれあり、彼自作の太平樂の巻物は、諸方へ持行て自らよみたり、今の如き長き咄は、宗叔より始めり、
○浮世繪師、鳥居清長、彩色摺繪本春信の頃より次第に巧に成しを、清長が工夫より殊に美麗に成たり 尙左堂、春潮、戀川春町、倉橋、歌川豊春、一龍、等行る○俳人松露庵鳥醉、四時游觀録といふ兩面摺をあらはす、江戸花曆是に始るか○淺草寺境内石地藏尊因果地藏といふ、流行、其後奥山三途川姥像祈願の者多し○眞先稻荷境内茶店の婆々、油揚を持っておいで〜と呼ぶ時狐出て食ふ、皆人は是を見る、聖云、安永四年なり○婦女の鬢さし始る○

箱入温石始る○裸人形腰折れといふもの造り始む小石川傳通院大黒天はやり出しける頃、門前の表町角に辰巳屋惣兵衛といへるもの、田樂菜飯の店を出して行はる、この惣兵衛生質強きをふせき弱きを助け、頗る俵祖のものなりしが、若年より神樂やうの眞似をして道化踊をなし、山王神田いづれの祭禮にも出て踊る、或は女のつづらなをぶり小原女となり、巫女の眞似をなしてをどり、或は諸侯藩中の鎮守の祭に強て召れけれど、金銀は給はれどもうけず、文化の牛の頃神田祭禮の時、七十餘歳にて出しの上に登りて踊りしをこのれも看たり、其頃七十餘歳にして終り、(再按るに惣兵衛は文政四年十月終り、小石川慈照院に葬す、)南畝先生文化元年秋長崎へ赴きし時、商船の清人程赤城にあはれし、かの辰巳屋の翁と瓜を二ツに割たる如く、而能似たりしとつたられしとぞ、辰巳屋が遺像に南畝先生の贊あり、おまつりと神樂の堂に辰巳屋がわね木娘や花さか

○安永中(巧云安永四年)鳥山檢校遊里に赴、遊女瀬川を身受し、巨萬の金銀を費せり、此の檢校諸人に金銀を貸して高利を食りけるゆゑ、つひに罪科に處せられしと○山王神田祭禮の時花萬度をかつぎ出る事を止られしかば、地車を添へて曳萬度と號す○安永中越後の産にて友世といへる大女の力持、所々へ見せ物に出たり○【篤補】此年安永四年因果地藏はやり出す、

○天明元年 辛丑 四月十三日改元 五月間 正月八日、新材木町和國餅の店より出火、兩芝居その外類焼、靈巖島にいたる巧庭云、和國餅今はなし、杉森稻荷の新道入口にて橋の向ひにあり、よりて

此橋を俗に和國橋といへり○二月朔日より、淺草妙音寺にて、鎌倉名越谷長勝寺祖師開帳○二月朔日、淨瑠璃語元祖常磐津文字太夫死、廣尾詳雲寺に葬す○二月十五日より回向院にて下總小金普化宗本寺、一月寺釋迦如來不動尊開帳、尺八笛三管神少からず○巧庭云、一月寺到着の日、あまたの虚無僧二行に列したり、見物多く出る、開帳も諸人聚集す○三月十一日迄多田齋師内にて、同十四日、信州善光寺回國如來御印文内拜○三月十八日、淺草三社權現祭禮久しく絶たりしが、今年神輿乗船、産子の町々より出し練物を出す、其後久し○四月八日より、回向院にて、山城嵯峨二尊院彌陀釋迦圓光大師開帳○淺草本法寺にて、下總國平賀本土寺祖師開帳○茅場町薬師内にて、和州大峯天の河辨才天開帳○古川薬師如來藤土彌陀釋迦開帳○鮫が橋崇源寺にて、甲斐國郡内小見見村西方寺十一面觀世音開帳○目白不動尊境内にて、武藏惣社住吉和州三神開帳、勝呂大宮司○六月五日、淺草第六天祭禮、神輿出し練物出る○六月十四日、儒師井上蘭澤卒、名邊、稱新右衛門白山妙清寺に葬○六月十八日、四谷天王稻荷祭禮、神輿を渡し出

し練物出る○秋關東洪水、江戸橋々損ず○七月朔日より、回向院にて、奥州外濱百澤寺岩本山三社本地彌陀如來、觀世音菩薩、藥師如來開帳○同日より淺草玉泉寺にて、武州八王子本立寺祖師開帳○四ッ谷南寺町眞成院鹽踏觀世音開帳○東叡山護國院常念佛堂五萬日回向○下谷徳大寺にて、中山法華經寺祖師開帳○七月朔日より、湯島社地にて、北野社司内安置天満宮開帳○八月より、淺草寺荒澤不動尊開帳○九月晦日、子刻吉原伏見町一本江戸町より出火、一町餘焼る、此度は假宅なし○十月十三日、日蓮上人五百年忌、法華宗寺院法筵を設く○十月十四日、目黒長泉院開基徳門律師寂諱普寂、號道光、七十五齡○十月二十日より十一月五日迄、淺草寺觀世音開帳○隅田川兩岸一覽二卷板行成、軸物を刊行する事其類少し、鶴岡蘆水の筆にして東江山人の跋あり、この蘆水は翠松齋と號し、下谷金杉に住し、長壽を保ちて文政の末にも尚存在せし○ちかき頃より、淺草稱往院の寺中道光庵にて、蕎麥を製し始めるが、都下に賞して日々群集し、さながら貨食舗のごとし、よつて本寺より停られたり、

三月十一日より、永代寺にて、鶴が岡八幡宮本地愛染明王、賴朝公髻觀世音開帳、此時境内へ出し巫女のおすてといふに、○三月七日、三井親和卒八十三歳、號龍淵、稱孫兵衛、出たり○三月十五日より、淺草寺念佛堂にて、美濃谷川寺町増○三月十五日より、淺草寺念佛堂にて、美濃谷汲華嚴寺十一面觀世音開帳○同日より回向院にて、奥州金華山辨才天開帳○芝金杉正傳寺にて、中山智泉院鬼子母神開帳○茅場町藥師内にて、北澤淡島明神開帳○三月廿二日、金彫工尾崎直政卒稱孫左、衛門○三月二十九日、儒師片山兼山卒名世稱、稱冬藏、五十三歳、三田妙福寺に葬す○四月三日、儒師後藤芝山卒六十歳、稱彌兵衛、名世鈞○五月四日、細井九阜卒名知文、稱文三郎、一號澤雄、道入、廣澤の男也、等々力村滿願寺に葬す○六月三日、戲作者伊庭可笑卒四谷理性寺へ葬す、稱猪與、八〇○六月天文屋敷、牛込藥店より淺草へ移る、牛込の前は神田佐久間○七月朔日より、回向院にて、武州比企郡三保谷村養竹院千手觀世音弘法大師作開帳○七月十四日夜九時、十五日朝大地震、

諸人戶外へ出る、この間少しの地震は算へがたし、此節相州大山の邊、この外つよく、屋上より石を落し、山鳴て恐ろしかりし、又小田原はわきて甚かりしとぞ、
 筑庭云、七月の初めより、小地震は日毎にあり、今十四日子刻頃、物音つよくゆり出し、人々寢入頃なれば、殊に驚くこと甚し、明る日は空くも残暑つよく、日暮を待かね端のして涼居たるに、俄にゆり出し壁をふるひ、瓦落ち戸障子打ち倒れ、あやしき小家は見るまに倒るゝも多かり、地ひゞわれて氷紋の如し、八十年前元祿十六年大地震以後、かく甚しき事あらずと、百年近き老人語りぬといへり、
 ○七月十五日より、下谷正法院内にて、上州館林光明寺延喜四年利根川より阿彌陀如來開帳、出現、善光寺同體也○十月三十日、俳人馬場存義卒號有無庵、淺草、暫願寺に葬す○十一月二十九日、俳人谷口樓川卒本願寺中○今年より護國寺山内を切ひらき、西三十三所寫觀音堂建立、江戸中動化を募りて是を營む、文政頃より次第に破壊に及びて、今は跡かたなし惜むべし、

○天明三年 癸卯

正月二十六日、浪花の狂歌師芙蓉花江戸に卒、平の屋清ふ、淺草西○二月二日、俳人二世沾涼卒八十五歳、増上寺福寺に葬す○二月二日大地震○二月より、吾妻森吾妻權現開帳○二月二十日、龜戸普門院觀世音開帳○二月二十八日、俳人阜月平砂卒三田常林寺に葬す○三月十四日より、下谷正法院稻荷、并本地十一面觀世音開帳○同十五日より、淺草誓願寺齒吹彌陀如來開帳○三月十五日より、回向院にて、鎌倉永谷貞昌院天満宮、法性坊本地觀世音開帳○青山善光寺彌陀如來開帳○淺草報恩寺親鸞上人遺物を拜せしむ○三月十八日より六月八日迄、淺草寺觀世音開帳、寛延四年より三十三年目なり、地中靈佛不壞開帳、本堂仁王門破損修復あり
 ○同日より駒形堂にて、下總國東三井寺地藏菩薩開帳○三月より淺草本法寺にて、駿河岩本實相寺祖師開帳○三月二十三日、南品川大火○同二十五日、靈巖島火事○四月八日、深川邊大火○同日淺草寺門前出火○四月朔日より、湯島圓満寺十一面觀世音五大尊開帳○同日より、淺草寺町柳稻荷本地十一面觀世

音開帳○同日より淺草日輪寺にて、奥州會津西光寺日限地藏尊開帳○同日より、下谷五條天神天滿宮開帳○四月八日より、芝愛宕權現境内にて、下總國米倉山等妙寺十一面觀世音開帳○六月十五日より、湯島社内にて、小日向茗荷谷明照寺地藏尊、聖德太子、不動尊開帳○春より霖雨、晴天は稀也○六月十六日より大雨降續、十七日別て大雨、千住淺草小石川邊出水、大川端柳橋墮る、小日向大洗堰石垣崩れ、神田上水切る○信州淺間山火坑大に燒、江戸にては七月六日夕七時半時より、西北の方鳴動し、翌七日猶甚し、天開く夜の如く、六日の夜より關東筋毛灰を降らす事夥し、竹木の枝積雪の如し、八日にいたり快晴と成る、△淺間山燒出せしは、春の頃より常に倍しけるが、別て強く燒出したるは、六月二十九日の頃にして、望月宿の邊より見るに、烟立雲の如く空一面に覆ひ、炎は稲光の様に見えて恐しかりしが、七月四日頃より毎日雷の如く山鳴り次第に強く、六日夕方より青色の灰降、夜中より翌七日の朝、大に降鳴る音強く、晝過になり、掛目廿九より四十分位迄の軽石の如き小石降り、更に歩行ならず、七時頃より灰降出し、暫時閑夜の如く人顔も見え分らず、内にては火を燈し、さりがたき用

事あれば、米俵をいくつもかされて頭にかぶり往來せり、然るに二時計り過て空晴ると見えしが、又淺間のかたに空へ火の玉飛上り、暫らくありて小石降り鳴音強く、戸障子はづれ寝騒る事あらず、雷強く鳴り、安中は三四ヶ所へ落る、空へ向ひて鐵砲を放ち、太鼓を打て雷除をなす、八日朝四時間夜の如く、夫より少し晴往來も見えし、藤岡邊にて灰八九寸位積り、高時邊一尺四五寸富岡邊同斷、吉井邊にて一坪の所量りしに二石あり、淺間近きに隨ひ大石降砂も多し、松井田にて三尺計り、輕井澤香掛道分板鼻の邊迄、二抱へ計の石降り人家を潰したり、故に人思ひくく、に家を捨て退き、遠くのがれて命を全ふせしもあり、小田井大笹の邊は、猪熊など出て人馬をくらへり、獵師鐵砲にて追退く、七日夕我妻邊の山より大蛇も出たり、又九日巳の時、利根川の上吾妻川一時ばかりに水少しに成しが、暫時泥水山の如く押懸人家跡形なし、中瀬八丁河岸の邊りへ、樹木家屋人馬の死骸流れ寄る事夥しく、其外の川々、燒石打込水は熱湯の如く、上州一圓の民も二三日晝夜途方にくれたり、信州より上州熊谷邊迄遠近違あれども、四五年の間作物ならず、此間の難にふれて死するもの凡三萬五千餘人といふ、小田井宿は格別の險なし、西風強くして追分宿へ吹懸し事といへり、昔天治元年七月にもかくの如き事ありし由中右記に見えたり、又元祿十六年十二月にも、此山燒たれども、此年の如くにはあざざりしにや、江戸にては硫黄の香ある川水中川より行徳へ通じ、伊豆の海邊迄悉く濁る、依て芝浦築地鐵砲洲の邊にては、今にも津浪起るとて、大に騒動し、佃島の男女まで残らず雜具を運びて、陸地に居る事凡二日なり、

篤庭云、上野安中驛泥土に埋み破滅せしかば、領主

板倉侯重代の器物を沾却し國中を治めらる、其器物の價二萬兩と云、今より見れば廉價なるべし、○此頃麻綿價貴し○夏より秋迄霖雨、冷氣にして帷子を着る日少し、大かた袴衣補入衣を着る日多かりし○七月十日より、芝愛宕地内にて、本所五ツ目自性院延命地藏尊慈覺大師作開帳○七月晦日、古筆八代了泉卒、三歳○葛西半田稻荷社修復勸化御免にて、江戸中の船宿へ施財を募る○關東奥川筋飢饉、

篤庭云、奥州筋飢饉なり、川字は誤れり、これは他國に聞しより夥しき事にて、津輕領など窮民離散し、富家ある方へ行けるを、粥杯の施行も日々増しければ、糧盡てことはれども、次第に入込しかば、後には村堺に積多を出し、飢民の手を取て外へ遣しける、山野道路に死骸充滿して、目もあてられぬ有様といへり、猶種々のこと共書きつくすべからず、人肉をも多く食へりとぞ、○八月十五日、亥の刻月蝕四分半、良夜の宴もこれにてははりしなるべし

九月十一日、書家小河保壽卒七十歳、號中齋又鶴巢主、神樂坂善國寺に葬す○九月十五日、神田明神祭禮の時、神主願により神輿を十番と十一番の間へ渡す事當年より始る、是迄は三十六番が、遷奠深夜に及びける故、今年よりかくの如くに成る○同日より龜戸妙義山權現開扉○【篤補】十月八日、牛込神樂坂行元寺境内にて、親の仇討ありき、此事を豊竹肥前座にて、淨るり狂言に作る、松平一學知行所、下總相馬郡早尾村、名主八右衛門組下百姓富吉、心願の意趣左に申上候といふ書付懐中す、敵の首を切落したる者は此富吉、討れたるものは同村百姓其内と云ふものなり、富吉本年二、當時劍道指南戸ヶ崎熊太郎召仕初太郎と云ふ、其内當時御手先淺井小右衛門組二宮丈右衛門本年四○十月二十八日、曉八時小傳馬町一丁目より出火、大風にして大傳馬町通、旅籠町田所町長谷川町堀江町小網町一丁目邊、堺町葺屋町邊、本船町小田原町室町鐵砲町、其外數町燒亡、同日午刻鎮る○十一月書家松山天姥卒、名敬和、稱源藏、駒込順行寺に葬す○十二月二十日、巳の刻過淺草鳥越

より出火、本所横網へ飛び、堅川通御船藏後通り、深川六間堀本誓寺靈巖寺淨心寺猪の堀迄焼る。○十二月二十二日、暮六半時増上寺方丈焼失。○秋の角力冬に延て、寒中に興行する事今年より始る、巧庭云、冬の角力きて、日数後れたるより、遂にやくなりたる也。

○天明四年 甲辰 正月閏

正月三日夜、青山麻布邊大火、同夜四谷新宿焼亡。○舊冬二十七日頃より、正月三日頃に、いたり替星坤の方に顯る。○閏正月二十三日、曉八半時神田鍛冶町二丁目より出火、鍋町西横町白壁町堅大工町新石町一丁目塗師町焼亡。○二月初午、鳥森稻荷祭出し練物出る。○二月より四月二十一日迄、中の郷如意輪寺聖徳太子開帳。○二月小川町三崎稻荷明神開帳。○三月十五日より五月五日迄、回向院にて相州關本最乗寺道了權現開帳。○葛西花又村正覺寺鷲大明神開帳。○三月廿一日、弘法大師九百五十年忌。○川崎平間寺弘法大師開扉。○護國寺護持院弘法大師遠忌に付什物開扉。○永代

寺にて、山城宇治平等院縣社本地如意輪觀世音開帳。○牛込圓福寺にて、中山法華經寺本堂祖師日法上人作、開帳。○淺草本法寺にて、佐渡雜太郎北濱村妙宣寺祖師開帳。○龜戸天滿宮開扉。○四月より千駄谷鬼子母神開帳。○四月より深川靈雲院にて、京泉涌寺釋迦如來肉院也。○四月より深川靈雲院にて、京泉涌寺釋迦如來肉院也。○四月十六日、丑下刻吉原水道尻より出火、廓中焼亡。假宅、向兩國回向院前淺草並木駒形黒船町等なり。○四月二十四日、高芙蓉卒。六十三歳、家刻の上手なり。○諸國飢饉時疫行れ人多死す。聲云、米價騰貴して、一兩に三斗二三升なり。○五月二日萩原宗固卒。八十二歳、花岡と號す、御先隊の騎士なり、鳥丸光榮公の御門人にて和歌をよくくす、晩年に至り四谷荒木横町に居して卒せり、四谷本性寺に葬す。○六月五日、古實者伊勢貞丈卒。七十歳、誠安齋、四久保大養寺に葬す。○六月十六日、儒師井上金峯卒。五十三歳、名純郷、稱、文平、芝青松寺に葬す。○八月十六日、國學者荷田御風卒。五十七歳、稱東藏、淺草金龍寺に葬す。○九月十五日より十月十四日迄、千住慈眼寺にて、野島淨山寺地藏尊開扉。○九月十八日、後藤氏十三代延乘卒。六十歳、四十一歳より五年の間、仙臺にて角錢を鑄らる。○十一月桐長桐

芝居櫓を改し時、馬揃と云狂言をなす、天冠侍衣大口の衣にて唄ひ舞ふ、是昔の女舞の遺風也といふ。○巧庭云、此の狂言の天冠は笠屋三勝が用ひたる物とぞ、狂言作者並木五瓶が所藏となれりと云ふ。○十一月、東本願寺本堂再建棟上。○十二月六日、夜太白星歳星を犯す。○同月十一日、月五車星の名也を犯す。○十二月二十六日、夜戌下刻八代洲川岸より出火、西北風烈しく大名小路新橋敷寄屋橋弓町紺屋町邊、八官町の邊、尾張町より木挽町芝居、仙臺侯御藩邸の邊、北は京橋邊迄鐵砲洲築地海手、西本願寺南小田原町邊迄類焼、翌二十七日申刻源助町邊にて火鎮る、大小名藩邸町屋にいたる迄夥しき焼亡也。○十二月二十五日、儒師井子柔卒。號信齋、淺草天龍寺に葬す。○十二月二十八日、夜赤坂氷川門前より出火、麻布長坂邊まで焼る。

○天明五年 乙巳

二月十五日より、回向院にて、鎌倉稱名寺不動尊開帳。○同日より回向院にて、豆州八丈島爲朝明神本地地藏菩薩開帳。○三月より洲崎辨才天開帳。○同八日より江之島下の宮辨才天開帳、江戸より參詣多し。○淺草妙音寺にて、二の江妙勝寺祖師開帳。○三月二十三日、儒師清田君錦卒。六十七歳、號孔雀樓、清田君錦は播州記さるるは如。○三月十八日、福王雪岑卒、衛門也、二號白鳳といふ、英家の畫を學び、寶曆の頃より能の圖を畫するもの、卷物掛幅等數多なり、深川心行寺に葬す。○五月二十一日小川泰山卒。名信成、稱藤吉郎、相州の人、五六歳書を讀み十歳書を解て卒、小石川光岳寺に葬す。○五月二十三日、曆學者大場景明卒、稱大二郎、駒込、浮世繪師石川秀範豊信卒、捨妙寺に葬す。○同二十五日、浮世繪師石川秀範豊信卒、馬喰町旅舎のや七兵衛といふ、狂歌師六樹園飯盛の父也、淺草權寺に葬す。○六月朔日より九月朔日迄、回向院にて嵯峨清涼寺釋迦如來開帳、當年暑季殊來聚集する事夥しかりしとぞ、○六月十五日より、湯島社内○巧云、開帳終て淺草に旅宿す。○六月十五日より、湯島社内にて、武州野島地藏尊開帳。○同日より七月二十四日迄、本所一ツ目八幡宮旅所にて、上州館林茂林寺十一面觀世音開帳、守端が分福茶釜を見する。○七月十日、儒師大鹽菴渚卒。名良、稱、與右衛門、六十九歳、稱隨院中智自院に葬す。○夏より秋迄旱凶作。○三股中洲へ築出し地出來、又兩國橋向築出し新地、川岸長八十四間南の方十三間餘あり、本所一ツ目より逆井迄川渡の土を以築る、所也、寛政元年に至て元の如く

川と成る○八月十日、加藤枝直翁卒、本所回向院に葬す、○九月十日より、深川靈雲院にて、水戸祇園寺心越禪師大明將來天妃船玉神關羽像開帳、并關羽所持の金印玄徳所持の五爪目鏡等出、○九月東本願寺御堂再建成就遷佛あり○【無補】是月稻葉小僧新助刑せらる○十月十九日、儒師久保忠齋卒、名仲通、稱二郎右衛門、五十六歳也、千太が谷瑞剛寺に葬す、

○天明六年 丙午 十月閏

正月元日丙午にて、午一刻より未一刻迄日蝕皆既、闇夜の如し、菊庭云、曆面とは違ひて、八分計の日蝕なりしと也○【篤補】正月半頃より日毎に風あらく、物のかはくこと火にてあぶるが如しといへり○正月二十二日、晝九時、湯島天神裏門前牡丹長家より出火、西北風烈しく、三組町妻戀社、神田明神門前并風閣寺、旅籠町邊内外、神田より通町筋本町通日本橋迄、東は小田原町、堀江町、小網町、堺町、葺屋町兩座芝居、并近邊、大傳馬町、小傳馬町、馬喰町、濱町、深川へ飛火、熊井町、相川町、大島町邊、八幡宮一ノ島居、仲町邊焼亡、翌二十三日曉鎮る、聖堂、神

田明神は本社計り残る○同二十三日風烈しく、午刻西久保大養寺門前より出火、赤羽飯倉町迄焼失、寺院は光明寺、心光院其外焼亡す、夫より飛火して田町海岸迄焼る、申中刻鎮る、幅三町長十五町といふ○同二十四日夜、神奈川宿三百軒の餘焼る○同二十七日午刻、本所四ツ目より出火、釜屋堀迄焼る○其夜平川御門外失火あり○二月二日、荷田春満の女養生卒、五歳、國學に長じ和歌をよみ、○二月六日、午刻過小石川蓮華寺くす、淺草金龍寺に葬す○二月六日、午刻過小石川蓮華寺前指谷町一丁目より出火、乾風強く丸山邊御弓町、本郷元町、御茶水春日町類焼、夜五時頃鎮る○回向院にて、上總國千田村稱念寺齒吹彌陀如來開帳○谷中延命院七面明神開帳○二月廿三日、相州箱根山鳴動し、廿四日の頃地震甚だしく、兩日百度計震ひしと云○三月より、護國寺觀世音開帳○三月十五日、夜中雪降り櫻の花に積る○三月廿二日、淨瑠璃語元祖鶴賀若狭掾死、七十歳、稱庄兵衛、制髮して鶴翁○早春より四月の半迄雨なく、日々烈風にして、諸人火災の備のみにて安

きこゝろなし○五月の頃より雨繁く、隔日の様なりしが、七月十二日より別て大雨降續き、山水あふれて洪水と成れり、十三日十四日より半込小日向出水、石切橋邊武家柳町時町家潰れ、江戸川水勢すさまじく、橋の流たるも有、神田上水掛橋危く大勢の人夫を以て防がしむ、後には橋の上登尺程水乗りしが十七日十八日頃より少しづつ減じたり、自白下山崩れ上水樋つぶれ、水道一月の餘絶たり、昌平橋邊橋危く、和泉橋は假橋放流れたり、十五日より大川千住出水、小塚原は水五尺もあるべし、千住大橋往來留り、掃部宿軒迄水あり、本所深川は家屋を流す、平井受地邊水一丈三尺と云、大川橋兩國橋危く、十六日往來留る、十七日晝新大橋中の間四間流失、永代橋廿間程流失、隅田堤三間程貳ヶ所押切、男女江戸へ向け兩國橋を渡り逃來り、淺草邊は船にて往來せり、吉原は床へ水上る、雜司谷大水にて怪我人多し、四谷牛込邊は高さ所なれども、一兩日水た、河で難免せり、其餘石垣土手の崩れしは數ふるに、いとまあらず、官府よりは助船を出し危難を救しめられ、十八日兩國西廣小路へ御教小屋を建てられ、淺草を救せらる、十九日より晴天となり、廿日より水少しづつ落り、本所深川へ船渡しになる、關八州近在近國の洪水は、ことに甚しく、筆紙に盡しがたしとぞ、此水久しかりしとぞ、

篤庭云、御入國後洪水も度々ありしかども、寛保二

戊年を殊に大なる事にいひしが、今年の水勢は夫より四五尺も深しといへり、今は聊の物までも流れ失ひ、人々困苦甚し、

○夏より冬にいたり諸國飢饉、諸人困窮す○七月中旬、江戸中燈し油賣切る○淺草心月院門前なる與市

といふもの、菜菔の根を以割麥の如く製して食とし、又葛の如く製して食物にも糊にも用ふる工夫をなし、官許を得て九月末より在々諸州迄も賣弘む○青山權太原は、鮫ヶ橋上り口涯(崖カ)に權太僧都何某といへる古き碑あり、略してこの處を權太原といふ、曆應二年乙卯八月九日とありとぞ、此碑を安鎮大權現と崇む、今年何としてか參詣人多かりしとぞ、

○天明七年 丁未

正月十六日、俳人木丹卒、四十九歳、廣徳寺、中圓照院に葬す○正月十七日晝八時青山より出火、西南大風、權太原鮫が橋千太谷邊迄類焼○二月角觥人釋迦嶽雲右衛門十三回忌の時其弟眞鶴崎右衛門、深川永代寺八幡宮の後に、雲右衛門が身の丈に等しき碑を立る、高七尺五寸、天愚孔平文を撰す○二月八日、醫師山田圖南卒、五十餘歳、名正參、稱宗俊、詩作、に名あり、谷中南泉寺に葬す○二月廿九日、俳人珠來居士卒、名師光、號百花主人、芝青松寺に葬す○五月屠龍翁高嵩谷、淺草寺觀音堂へ賴政猪早太鶴退治の圖を畫たる額を納む、横二間、整九尺もあるべし、此額に付て色々の評判あり、甲冑其外故實を失ひたる由いふ人あれど、

古畫を潤色せる所にして、人物の活動普通の畫匠の及ぶ所にあらず。○五月に至り米穀次第に乏しく、其價貴踊し、市中の春米屋も售ふ事ならずして門戸を閉す、廿日より廿九日迄、雜人米肆酒店其餘米穀を貯へたる家々を打毀す事夥し、此時一人の大若衆有て、ともに家作器械を打毀す、其働き飛鳥のごとし、しかも美童にて有しとぞ。官府より厳しく制し給ひ、町町にても竹柵を構へ、警護嚴重になりしかば、暫時に鎮れり、

筠庭云、天明元子年以來、打つゝきたる七年の凶作なれば、寒苦にも馴ぬれば、都鄙もろともに様々の物を調へ食ひし故、過ぎし卯年の如く、餓死する事もなかりしかど、其日暮しの者は、百文に三合の米は賣らざるより、百計已に盡ぬなど聞えたり、

○五月賤民へ御救として金子を賜り、六月米大豆下直を以て賣しめらる。○八月十三日、曆學者小澤蘭江卒、名政敏、稱多門、駒込浩妙寺に葬す。○八月廿日、書家伊藤長秋卒、字萬年、號匡山、寺に葬す。○八月廿二日、谷中感應寺地内に於て、東叡山の鐘を鑄改む、同月廿八日暮六ツ時始て撞く。○九

月七日、俳諧師雪中庵蓼太卒、七十歳、大島氏、名陽齋、空庵居士と號す、深川要津寺に葬す。○九月十二日、井の水毒ありといふ妖言ひろまる。○十一月九日、曉卯刻過吉原角町より出火して、廓中残らず焼亡、花川戸迄類焼す、富永町高輪等なり、三めぐりの鳥居の足がみじかくてのが上られば見えぬ假宅(蜀山人)○野庭云、こゝにも蜀山人と書たり、且此時の假宅の歌にはあらぬなるべし。○神田明神祭禮十一月に延る、再延引して十二月三日に渡る、晝時より雨降る、

○天明八年 戊申

正月元日大雪降。○正月廣東人參賣買御停止なりしをゆるし給ふ。○四月朔日より、深川淨心寺にて、身延山祖師開帳。○同十五日より淺草店にて、池上旅立祖師開帳。○四月十一日、夜戌刻光物飛ぶ晝の如し。○五月八日、儒師大江維翰卒、京師の大江資衡の子也、芝天徳寺に葬す。○六月十二日、二代目英一蜂卒、西門野眞光寺に葬す。○七月十六日、書家植榴季梁卒、名棟、號然々居士、淺草滿泉寺に葬す。○八月廿一日、書家關敬明卒、號東山、稱新藏、日向稱名寺に葬す。○十二月寺院に命じ給ひ、淺間山燒、奥州飢饉、疫病、關東出水、京都大火焼死溺死等、此禍

に罹りしものゝ爲に、施餓鬼を修せしめらる、江戸は本所同院小松川仲澤院なり、京都大火といふは、今年正月晦日、洛東園栗辻より出火して、洛中洛外大内迄御炎上あり、この大火の事を委曲に誌して花紅葉都囃と題せる板本三卷あり、又大典禪師平安禪師の記をあらはさる。○【筠補】此頃修行者木魚をたゞき、光明真言を唱へ歩行くもの多し、これは上州天災の節死るものゝ爲に、唐銅の百観音建立すとなり、

○天明年間記事

天明の頃名家△儒家 金峯、旭山、芝山、北海、鶴鳴、瓶山△詩人 西野、僧六如名慈周△書家 其寧、東江、親和、汝嶺、韓天壽、牛山△和歌 千蔭、春海、自寛、重明、諸島、林△畫家 宋紫石、嵩谷、嵩溪、芙蓉、山興、秋山櫻井氏△俳諧 蓼太、完來、妍齋、珠來、得器、金羅、貫阿、玄武、祇尹、白雄△狂歌 四方赤良蜀山人、朱樂菅江、元の木阿彌、大屋裏住、宿屋飯盛、鹿津部真顔、錢屋金持、きゝら錦鷄△戲作者 通笑、喜三二、戀川春町狂歌井浮世繪芝全交、萬象亭二代目風來山人、唐來三和、右六人を戲作者の六家撰といへり、其外可笑、七珍萬寶、萬

の唐丸、觀水堂丈阿、芝蘭、樹下石上など、あまたあり△江戸淨瑠璃作者 紀の上太郎、萬象亭二代目松貫四、容揚黛、玉泉堂、鬼眼、辨治、焉馬其外多し△琴曲 山田檢校、筠庭云、山興は氏を一字に櫻とも書たる落款もあるは如何にぞや、秋山は山興が女なり、▲鹿津部は鹿杖とけり、金持は金持の誤りなるべし、▲金雞なり、錦の字にあらず▲參和なり、三は非なり、▲琴曲、此頃は山田松黒にや、其弟子游松、松青あり、游松後に山田檢校となる、松青は其後松黒檢校となりぬ、師家を繼たるは是なり、△八人藝 川島哥命行はる、弟子に哥遊あり。○天明の頃地口の變態にて、語路といふ言葉はやる。○天明時代のやはり物を集て、江戸名物鹿子と題せる草紙あり、合筆の畫又發句有、同五年梓行○無聲云、江戸名物鹿子は享保後十八年の刊行にして、同時代の名物を集めたるものなり、此書認し此條下に記載せしものなるべし、よろしく享保年間の條下に改むべし、其目錄一二を記す、

△鹽瀬饅頭△木町色紙豆腐△味噌屋元結△本郷龜室△歌比丘尼鬘△油町紅繪△白木吳服△本町益田目薬五疊香△破笠塗物△清水夏大根種△動化僧△赤坂左たばこ△淺草茶釜△芝三官給△横山町花産織△彌左衛門町薄雲せんべい△淺草糞市△こんく坊△吉原朝日のみだ△さん茶女郎△目黒給△駒込富士團扇△麹町助惣やき△てうし藤△罷重兵衛が館△赤坂錦△長坂元給△松井源左衛門居合△佃島藤△吉原太神樂△徳町歌△湯島唐人祭のれりもの△淺草柳△屋挽伍倍子△兩國の幾世餅其餘あれどもこゝに略す。○料理茶屋行れしは、葛西太郎、牛御前の門前、平岩の所なり、大黒屋孫四郎、同所秋葉

武藏屋權三郎、同所参斗、甲子屋、嶮、四季庵、中洲、新地、二軒茶屋、
 永代寺、山内、百川、いせ町、升屋宗助、深川、洲崎、此升やといへるは江戸料理
山内、裏川岸、洲崎、屋の魁首にして尤大庵な
り、あるは宗助升徳と號す、難髪して祝阿彌と云、京丸山の茶亭に何阿
彌といへるに倣るなるべし、庵丁に名を得たる者にしてしかも好事也、
其家の經營美を盡し、數寄屋二三ヶ所、鞠場まで構たり、貴人公子もこ
こに遊び給ひ、或君より望陀覽といへる文字を贈物にしたる扁額を給
ひぬ、其頃の富商も皆こゝに遊びけるとぞ、寛政の始津派にかゝりて
其所だになくなれり、此類のめい、かゝして、殘りてありしを、近き頃
俵屋何某に與へし人ありとぞ、望陀覽は望陀郡を覽るの意歟、同時庵
丁に名高きは、權屋三郎兵衛此升や宗助也、三郎兵衛は中洲に出て天明
二年終
れり。

筈庭云、麥斗はもと麥飯ばかりと云ふことにて、麥
 計庵といひしが、計の字草書に斗とかく故、頓て斗
 の字となりしよし、後昔は物語にいへり、又云、祝
 阿彌は駿河淺間の坊主になれりとぞ、

○六如庵詩鈔に、洲崎茶樓を賦したる詩あり、安永天明の頃の作なり
 しが、程なく烏有となりぬいたむべし、

洲崎茶樓宮目

高樓瀨、海氣清哉、時復斜陽渡眼來、青茶風生鷺、綠雨、白沙湖走
 作、晴雷、西山突兀排、天立、南垞、森茫吞、澤開、指、點、虛、無、情、漫
 切、欲、鞭、鯨、背、一、問、蓬、萊、。

○此時カゲマ屋、芳町、木挽町、湯島天神内、麴町ぬし町代地、神田花
 房町、芝神明前、市谷八幡宮内、勸進比丘尼、芝八官町、神田横大工町

著す○神田佐柄木町山東といへる料理屋にて、シツガ料理をなし行
 る、しつぱく料理は都て寶曆明和の頃より世に行れしかば、浪花の禿
 掃子しつぱく料理趣向帳といへる草紙をあらはし、明和八年梓に行へ
 り○天明中狂歌殊に行れたり、此時世の狂歌を集めて、萬載集、徳和歌
 後萬載集、才藻集、萬葉集などいふものを始として、其後の集數を知ら
 ず各世に行
 れたり

筈庭云、北女閨起源に徒流云、水道尻の事、紀文が
 揚屋町尾張屋方に掘抜をさせ、其呼井戸の留りな
 れば、水道尻といふとぞと、實々敷書きたるは大な
 る非なり、水道尻の名は元吉原よりありたり、繪圖
 面にまた明なり、又云、昔より吉原に掘ぬき井戸と
 いへるはなく、五十年前享保の末、五、揚屋町揚屋
 清十郎此事を深く歎き、箕輪なる秋葉權現に祈り
 て、我場所へ井戸を掘らせしに、望の如く掘り得て
 名水を得たり、此忝さに箕輪の秋葉へも井を一つ
 ほりて奉納す、清水湧出す、清十郎が井なき前は、
 橋場玉姫いなり、又北馬道德音院の大井戸を汲み
 しとかや、

増訂武江年表卷之六

増訂武江年表卷之七 (寛政元)

より出る、是に續て淺草田原町、同三島門前、新大橋河岸等なり○ケ
 口といへる茶屋女、下谷廣小路御數寄屋町、同提灯店、佛店、廣徳寺前
 堀田原邊、其外諸所にありし折寛政以來これなし、
 ○下谷正燈寺庭中楓樹數株ありて、毎秋斜陽を惜む
 の名所にてありしなり、昔は紅葉見といへば、當寺の
 事と心得たる程にて有しとなり○掘貫井の事昔は更
 になし、中古より其始りたれど武家にはこれなし、
 其價凡金三四百兩を費しける故、市中には大商家な
 らでは掘らざりしが、天明の頃にや大坂より井戸掘
 工來り、簡易の法を以て速に掘り價も又下直なり、近
 頃は江戸中掘抜井多くなり、町毎に大かたこれあり、
 △元祿の江戸鹿子に、桶町に讓の井といへる有、かくれなき冷水なり、
 日本橋より始め新橋のあたり迄、夏月の炎暑のなりは此井を汲て、茶
 碗一ツを青銅一錢に替て商賣する者多し、中頃富家の主掘抜の井を穿
 て清水の人に賣り、是を以て子孫にゆづる故に、世人稱して讓の井と
 いふと記せり、これらにても掘井のすくなかりし事を知るべし、又元
 祿の頃吉原に井なし、砂利場田園のあたりより汲たりしを、紀伊國屋
 文左衛門揚屋町尾張屋清十郎方にて、始て掘ぬき井をほらせしが、其價
 數百金を費せるを時の人美談とせり、此水清冷なりしを呼井戸にして
 中の町の末に呼井戸を掘ける、樋の留りなる故水道尻といへり○天
 明の始より京丸丸批把葉湯賣歩行○撫牛行る○女藝者振袖の衣類を

増訂武江年表卷之七

寛政元年 己酉 正月廿五日改元 六月間

天明七八年のころより、碑文谷法華寺の仁王尊諸願
 成就するよしにて、貴賤男女參詣する事あり、次第に
 群集夥かりしが、十二年ばかりにして絶たり、祈願の者
て籠る、又日○二月甘露降○米穀豐饒なり○永代寺に
參等もありし
 成田山不動尊開帳あり、奉納物あまたあり、參詣群集
 す○淺草寺觀音堂修覆○五月十九日、儒師入江北海
 卒、名貞、稱與右衛門○閏六月十七日より、目白長谷寺に
下谷常林寺に葬す
 て、竹生島辨才天觀世音開帳○七月七日、狂歌師平秩
 東作卒、内藤密烟神屋金右衛門○七月七日、狂歌并浮世繪
と云、市谷善慶寺に葬す○八月八日、大
 師戀川春町卒、通稱倉橋壽平、草さうし畫作も○八月八日、大
 風雨家屋を損す、深川邊大水○八月市谷光徳院にて、
 川口錫杖寺地藏尊開帳○角舩人谷風梶之助、小野川
 喜三郎横綱免許、又九紋龍といへる角力取行る○十

月より始り、大川筋其外川々御普請、中洲築地取拂せられ、翌年にいたり元の水面となる、

篤庭云、浅草川の洲を浚ひ、隅田川土手普請の土となる、土持人足かよひの爲め假橋かゝる、中洲取拂の時、

屋根舟もやいたも今は御用船ちつゝんは止みつちつて行

○十二月二十一日、夕より夜へかけて再甘露降○深川寺町法乘院不動尊流行出し祈願の者多し○本所松代町木藏火除と成、其代地深川高橋戸田采女正殿御屋敷の地をたまはる○神佛の開帳年々に盛にして數ヶ所ありしかど、寛政より享和迄の間委しく誌せる物を見ず、尙穿鑿して次編に詳なるべし、

○寛政二年 庚戌

正月二十一日、本所松代町より出火、砂村百姓屋迄焼る○三月九日、晝人劉安生卒、號壽山、麻布曹溪寺に葬す○三月十一日、下谷稻荷社祭禮、産子町々より出し練物出る、本祭は産子の諸侯より長柄鎧の警固を出さる、事舊例也、其後中絶せり○永代寺にて京都大佛の

○寛政三年 辛亥

正月十五日、儒師平澤旭山卒、五十九歳、名元愷、稱五助、深川法禪寺に葬す○【篤補】二月上旬、元濱町にて狗の子角あるもの生る、耳の上の指ほどの物ありしなり、公に訴へ出る○三月十五日より五十日の間、浅草寺觀世音開帳、一説に三月十五日より【篤補】此頃所々押込體の盜賊有之由、町限り申合召捕候ても、不_レ及_二打殺_一可_二訴出_一旨、四月六日御觸あり○【篤補】四月十七日、町法御改數ヶ條官版の冊子、江戸中地主家持に相渡る○市井の法令を改られ、坊間の費用を減じ積金始る、翌年六月新橋柳原向也向へ町會所并糶藏を創建あり、是米價貴踊るとき或は不時の災變の砌、賤民を救給はらんが爲の御仁惠也○京師の手島塔庵が弟子中澤道二京西陣糸屋隱居、久兵衛江戸に來りて、茅場町なる醫師前田一貫が宅にて心學を講じけるが次第に聽衆集りける故、神田相生町向の片町に參前舎を建て講談の所とす、道二翁道話といへる書數篇梓に鏤て世に行はる參前舎は今に相續し、講談絶ゆる事なし○五月十五日、夜

内辨才天開帳、この間境内見せ物に壬生狂言を出す、世に行れて兩國に於ても見せ物とし、翳簡の輩も酒宴の興にこれを學べり、巧庭云、此時壬生狂言は大に流行りて、兩國の見世物にも真似て是もはやりしが、辨天の開帳は流行らず○神奈川浦島寺觀世音、江戸にて開帳、其手箱を見せたり○八月十四日、狩野榮川院典信卒、六十歳

【篤補】八月二十日大風雨、深川出水所々家を吹流す、○八月二十三日、前句付點者川柳卒、淺草新堀龍寶寺に葬す、川柳は同寺門前の坊正にして柄井八右衛門といふ、俳諧の一體に俗談を旨として狂句を作る、其集を柳橋と號し數篇を撰ぶ、今に其流たえず、今の練亭川柳五世に及び、柳橋の後輯年々に梓行せり、按ずるに寶曆の頃武玉川といへる俳諧の句集あり、専ら俗情を述る、川柳もこれより一變せしものと○九月六日、儒師山中天水卒、三十二歳、名恕之、稱○十一月二十七日、夜大地震、○十一月琉球人來聘、正使

宜灣王子
蒲原の間に富士を見て詠る、
宜灣王子
かぎりなき山を幾重かながめきてそれぞとるき雪の富士の根
篤庭云、琉球人江戸着の日見物多く怪我人あり、

○十二月二日三日夜、甘露降○瀬田問答成天明よりこの瀬田問答の書なり、
○琉球談刊行森島中良著、又朝○磁器燒繼屋始る、

九ツ時分大雨雹交る、

巧庭云、此節二つ目近邊裏長屋壊らず風に敗られ、柳原には日數立たる死人落て
○深川洲崎の後鹽濱、松平豆州侯御下邸と成る○六月加茂縣主季鷹、佃島住吉の社前へ碑を立る、祭神の事動請の事を述べて、其次に云、元祿七年川上正吉俗稱大坂屋伊兵衛といふ者、往々船の濫りがはしきを歎き、其賣買の商人を十組に分ちて、往來の船わづらひならしめむ爲に、萬世にも動なき堤を定め、はた洋中のあちらしま風濤々のまが事あらせじと、正保の頃氏子どもにはかりて、御社をおこそかに祝奉
れる也げり云々とありて末に歌あり

櫻木のいや繼々にかたり繼いひつたへゆかむいさをしぞこれ
篤庭云、此碑の條いかにぞや、元祿中十租出來しその事をいひつ、又正保のむかしを述、此略文にては一向に心得られず、

○醫學館日講始る巧庭云、醫學館初より有之し、寄附銀差出すに不_レ及_二旨、十一月御觸あり○堺町河岸にて駝鳥を見せ物とす、黒く大なる鳥也、石を食ひ又堅炭に火を起したるを食す

○八月六日大風雨、小田原邊より江戸迄海邊高潮上る、
篤庭云、八月六日、大雨、夜に入て大嵐、深川大水、廻船三艘相川町の河岸に吹上らる、海邊橋落る、洲崎邊家流れ人死あり、行徳船橋邊までも人多く死

す、大川筋大水、新大橋の杭二本抜たり、利根川筋堤切れて東葛西大水、の大あらし諸國おなじ、日本橋西河岸なども往來道に水上る、同月二十日朝曇り晝より晴、暮より雲起り海鳴り、夫より大風雨、人みないねず、明七ツ時より風雨止む、

○町火消纏、箔を改白漆塗となる○八月十七日、麻布本村氷川明神祭禮出し練物等出る、其後○八月二十日暮前より雲出海鳴り、暮過より大風雨明七時止む○九月四日大嵐、昨夜中より大雨南風烈く、八月より強し、巳刻高潮深川洲崎へ漲りて、あはれむべし入船町久右衛門町壹丁目貳丁目と唱へし、吉祥寺門前に建つらねたる町家、住居の人数と共に、一時に海へ流れ行方を知らず、辨才天社損じ拜殿別當所其外流失、其かへしの浪行徳船橋鹽濱一圓につぶれ、民家流失す、其外諸方家屋吹損じ川々水溢る、晝時にいたり潮引く、關東筋すべて洪水あふる、津浪の光也、此時既にしかりといへ、洲崎の地其後高浪の變計りがたしとて、西

は入船町限東は吉祥寺門前に至る迄、凡長貳百八十五間餘の家居を取はらひ畠地になし置る、此内西の付物となれり、

○九月三日、雨ふり、其夜大風雨、同四日雨小ぶりになりしかど、風猶はげしく、巳刻をろ大降りとなり、八月六日夜よりは強く、晝より晴、此節廻船三艘吹流し永代橋を突抜、一艘は橋間にかゝり、二艘は中洲まで流る、橋間にかゝりし船は、八月六日相川河岸に吹上られたるが、深みに出し兼てありしを、又々風波の爲めに深みに出たり、是ばかりはこぼれ幸といふべし、又新堀御船藏吹潰し、洲崎邊は先の嵐に残りたる人家残らず流失、八月の水より一尺餘も高し、

關東上方も大風雨にて、米價俄に騰踊しけるに、公より嚴しく命ぜられ、雨に七斗より高く賣買致す間敷とあり、御藏にて諸士へ御借米有之、白米小賣百文に九合、一兩日ほど賣りしが、一升一合にな

る、此節御仕法諸人有難がりしなり、

○九月十三日、俳人春秋庵白雄卒、五十三歳、品川海晏寺に葬す○【筈補】九月十五日、神田御祭禮、だしの外は大神樂、狛廻し、小供角力のみなり、此時落書、「御祭は目出たいひれの御吸物出し計にてみどころはなし」○九月二十七日、儒師松田拙齋卒、名長恭、麻布天眞寺に葬す○神田明神祭禮、當年より御雇こま廻し始り、享和より御樂になり、後文附祭は三化年中より踊りにかゝる、附祭は三組と成る、年番を以動じ、一ヶ所より一品づゝ出す事也しが、後年次第に超過して、品々の踊種物出を出す○十二月九日、回向院へ命ぜられ、永代寺に於て、洲崎流死の者施餓鬼修行あり○【筈補】十二月十日、行徳徳願寺にて、茨木村流死人施餓鬼あり、武州橋樹郡村方へ回向院相廻り、施餓鬼法事あり○十二月十四日、十五日、神田社年の市始る、淺草市へ降るゆゑとて、後年廿日廿一日に改む○十二月口日下谷火事○深川洲崎名物の氣そは、九月高波の後絶たり、

○寛政四年 壬子 二月閏

二月初午の日、芝日比谷稻荷祭禮、産子町々より出し練物を出す○二月七日、麴町火事○閏二月六日、詩人

安達文仲卒、名前、號清河、三の輪眞正寺に葬す○四月の頃より米價登揚

す、珂庭云、登揚の字は非なり、騰踊なるべし、此時○【筈補】四月公備より御掃米、江戶中橋米屋へ御渡有之○神田川筋川凌あり○五月十四日、新井白峨卒、六十八歳、名あり、易術○護國寺にて、秩父三十四番觀世音開帳○六月十五日、山王御祭禮附祭三組と成る、神田に同じ、され木町外二丁目より出し來り○六月餌鳥屋敷側へ町會所糶藏し大神樂の外はこれなし○六月十八日、亥刻光物を建らる、是迄は大的場なり○六月十八日、亥刻光物西南より東北へ飛、大さ笠の如し○七月二十一日、龜戸梅屋敷の梅舊根焼失するよし、江戸砂子書入といふ草紙にあり○七月二十一日、南大風已上刻、麻布筈橋より出火、龍土今井谷赤坂青山四ッ谷食違、麴町番町飯田町小石川御門、小川町三崎稻荷の社邊迄焼亡、此後番町麴町の裏に火除明地出來る、此時迄番町に天正年中の家作も有し○牛込神樂坂通西側は、山下何某殿邸あり、其餘は植木屋石屋にて在しが、此時麴町の善國寺と肥田何某の邸になれり、後又此屋敷町家に改れり○【只補】七月二十九日、三番町出火○八月十二日、晝人松林山

人卒、大川はた東○西本願寺御堂再建、紀州和歌山講中より
工八人、手馴の道具を持來足代なしに建る、珍らしき建方
也といへり、御堂間口十八間奥行廿間也、翌年九月成就す○谷中感
應寺今天五重塔、明和九年二月二十九日焼たるを今年
再建あり○十一月七日、儒師千葉芸閣卒、名之、稱茂右
衛門、千太木總
禪寺○十二月八日、浮世繪師勝川春章卒、淺草西福寺に葬
靈骨像を畫く事上手なり、門人春好春英春
常春山春徳春林春潮春玉、其餘數多あり

○十二月十八日、下總八幡八幡宮社内櫓の古樹を掘
穿けるに古鐘をえたり、高三尺渡り二尺二寸、元享元
年酉十二月十七日別當知圓と彫たり、

○寛政五年 癸丑

正月關東地震○麴町善國寺、去年火除の爲地を召上
られ、神樂坂に代地を給はりけるが、今年二月普請成
就して、二十七日毘沙門天遷座あり○二月淺草寺奥
山に、ふたゝび櫻數株を栽る○三月六日より、茅場町
薬師境内にて、房州鏡が浦西行寺西行法師像開帳○
橋場神明宮内天満宮開帳○【筈補】四月十日、淺草福
井町壹丁目にて犬子四匹生る、内一匹四足は犬にて

面は人に似たり、しやくまづして圓く、鼻高く猿の面
にも似たり、四ツ時すぎ名主濱彌次兵衛方へ町内よ
り持行、奉行所に訴出、即日御見分有之て、奉行所へ
持參の事、母犬の乳を飲せず、他の食物落雁などにて
養ひけるに、頓て斃れたりとか○五月より九月まで、
江戸霖雨大川出水○五月二十日、書家荒木吳江卒、號
東
水丸山長○【筈補】六月二十一日、築地本願寺再建上棟、
泉寺に葬○【只補】七月十六日、白き毛降る○九月
先達て魯西亞へ漂流して歸朝せし、伊勢白子の船頭
幸太夫磯吉江戸へ來る、天明二年十二月、駿河沖にて難風に逢
ひ漂流せしといふ、磯吉は今年廿八
歳也しが、歸朝の後程なく死しけり、幸太夫は今年四十
二歳、飯田町の御藥園にありて後長壽を保てりとぞ
筈庭云、此時漂流の兩人、吹上にて御覽ありしに、
官醫桂川氏と問答の書たるものあり、幸太夫と申
合にや、偽りごと多く見ゆ、

○十月二十五日、湯島松平雲州侯御別館より出火、神
田邊本町石町堺町菅屋町芝居、日本橋邊迄類焼す○
十二月柳原土手下町屋の内、須田町二丁目小柳町平

永町等北側を取拂はれ、外神田に代地を賜はり明地
と成、後に穀藏を建らる、町會所穀藏の建増なり○月日儒師原敬仲
卒、名恭胤、雙柱の二男なり、父雙柱名は胤、號尚庵、明和四年九月廿
日卒す、ともに駒込吉祥寺中洞泉寺に葬す、前に漏せし故、い
しる

○寛政六年 甲寅 十一月間

正月十日、未中刻糺町五丁目秋田屋何某といへる酒
屋より出火、烈風にて山王御社永田馬場霞が關虎御
門外櫻田邊諸侯藩邸數字類焼、幸橋御門焼、愛宕下日
蔭町新橋芝新錢座、仙臺會津家等一圓焼亡せり○正
月五日、俳人金羅卒、高輪正覺寺に葬す○【無補】正月十六日、麻
布龍土町出火、同十九日、飯倉四丁目より出火○二月
二十八日、儒師吉田子方卒、根岸善性寺に葬す○三月幸橋御門外
兼房町、和泉町、鍛冶町、備前町、伏見町、善右衛門町、
久保町、太左衛門町等の内、火除の爲町家を取拂ひ畠
地とせられ、當時の所其頃武家地にて在しを外へ移
されて、此所へ代地を給はる○川口善光寺如來開帳、
參詣群集して川口の渡し船覆り、怪我人多くあり○

四月二日、亥半刻、吉原江戸町二丁目より出火、一廓
焼亡、假宅、田町、聖天町、山○四月十七日、青山梅窓院主
著山和尚寂、詩及び書○四月廿七日、儒師菅野子徳卒、
名義直、丸山○【只補】五月、岩舟地藏尊開帳、○六月十日
儒師街萬里卒、淺草、やぐら○【筈補】當七月、日を、晝九
時頃より大風雨、下谷池之端別て風強く電光夥し、
不忍池の上真くろなる雲起り、其の中より火の玉飛
走りたり、四五丁脇に明照寺祐念寺といふ寺の屋根、
軒口より引はなし行衛不知、破目鬼瓦などは四ツ谷
在へ落たり、井の頭池などにも落たるよし、其節いづ
れの家士にか、馬上にて供八九人も連れたるが通か
かり、馬上の人行衛しれず、供人計り残りしとなり、
皆人龍の卷たるならんといひあへり○八月十九日、
國學者林諸鳥卒、稱和助、號林居士、福隱院に葬す○秋本所
三の橋、溝口内匠製造にて橋杭無くして掛る、尤奇巧
なり、文化に至りて元の
如く橋杭を立ち○十月晦日、歌人伊藤松軒卒、號倚松
梅窓院に葬す○十一月三日、子刻大地震○十一月四日、家刻藏

六居士卒、本所靈山寺に葬す○十二月二十九日、狩野永徳高信卒五十六歳、深川淨心寺に葬す○江戸地藏尊巡拜所を定む、其の場所は拙篇の歳事記にあり
○四神地名録寫本成古松軒黄微山人編輯、近郊の名所記なり○出羽國より大童山文五郎出、十一才、肥満して二十二貫有り、角力を取りしが年長して弱くなれり、巧云、四月頃のことなり○當道大記録成、寫本一冊、一つ目辨才天社、役浮島源藏著

○寛政七年 乙卯

正月九日、谷風梶之助終、四十六歳、仙臺へ葬す、江戸にて最負ありし角力取なり
篤庭云、勝川春英よく谷風小野川が肖像を書たり、其他も多かれども、わきて谷風が肖像ならでは、角力らしく思はれぬ程なりき、珍らしき力士なりといふべし、

【只補】正月十四日麻布おたんす町より出火○正月十四日、西北大風、市谷柳町より出火、類焼多し○二月十三日、書家細井竹岡卒、名庸、稱次郎兵衛、八十一歳、浅草善照寺に葬す○三月十八日より六十日、浅草寺觀世音開帳、風雷神門再建成て、三月十日二神を安置す、

篤庭云、雷神門の真中に懸たる、しん橋と書たる挑燈は、此時作る、家根屋三右衛門これが請負にて屋根を葺て、挑燈も其職人等打よりて納めしなり、只云、風雷神門は明和焼後、寛政五年より普請にかけり今年成就す

○六月七日、儒師清水江東卒、五十六歳、下谷の商家大坂屋嘉右衛門といふ人なり著述もあ
○六月十五日、夜大雷二十六ヶ所へ落ると云○七月八日、儒師市川鶴鳴卒、名匡、稱多門、五十七歳、西窪光明寺に葬す

篤庭云、市川鶴鳴は、尾張の豪家千代倉、夥しく藏書ありて、志あるものをば家に留めて書をよましむ、鶴鳴もこゝにて多く藏書を讀しとなん○本居宣長が葛花と云書はこの鶴鳴がまかのひれといふ書の返答なり、

鶴鳴二子あり、貞太郎次男新兵衛と云、次男も學才乏しからずありしが、若くして身まかれり、

○七月十三日、星月を貫く○八月七日、梅柳軒重明卒、稱徳田主水といふ、上州松井田の産、京の澄月軒の門人にし和歌に名あり、壽七十三、谷中天王寺了徳寺に葬す○八月十五日、深川八幡宮祭禮、産子町々より出し練物等を出

す○九月十日、儒師三浦瓶山卒、名衛與、稱左兵衛、本所中の郷、德音寺に葬す、男を吳山と云
○秋凶作、米穀價登揚す○九月二十一日、青山久保町熊野權現祭禮、産子町々より出し練物を出す○十月十二日、太田大洲卒、七十五歳、名澄元、本所大法寺に葬す、本草にくわしき人なり○【只補】十月中橋南大工町小兵衛店徳兵衛伴權次郎、四才にて孝經四書を誦す、町奉行所より檢使來る、

○寛政八年 丙辰

正月白牛酪賣弘の事を命じ給ふ、享保中房州道岡に白牛を法を命ぜらる、其頃僅に三頭なりしが、此時代に至り七十餘頭に至る、依て數斛の乾酪を製せしめて普く世人を救ひ給ふ、御恩澤ありがたきことにこそ、寛政壬子五月、桃井源寅白牛酪考一卷を撰し梓に行へり○【只補】二月四日快晴、夕七ツ時頃俄に空かさくもり、雨はふらず唯雷鳴の如く、辰巳の方より西方へ鳴わたる○二月より、谷中威應寺毘沙門天開帳○夏矢口新田明神開帳○芝泉岳寺釋迦八相曼荼羅開帳、義士の遺物を見せしむ、年忌の甲
○四月十二日、狂歌師桑楊庵光卒、稱岸字右衛門、駒込瑞泰寺に葬す
○六月九日、鳥越明神祭禮、神輿を渡し出し練もの等出したり、其後中絶す、

篤庭云、安永五年、操芝居さつせ座にて、戀娘昔八丈と云新浄るり大當りにて、才三さんと云文句兒童までも誦せり、おこまゆといふあめ賣出て一時はやりぬ、此節賣鳥越明神祭禮に、奴胤になりて出たり、

○六月十五日、書家澤田東江卒、六十五歳、源麟一號玉島山寺に葬す○九月本所に古銅吹立所建つ○十月四日、狐阡軒瀨名貞雄君卒、八十一歳、古賢者にて又江戸地理の書編集もあり、四谷戒行寺に葬す○十一月琉球人來聘、正使大宜見王子、副使安村親方、榮野彦輔、琉球人と稱す
○十二月六日、儒師黒澤雉岡卒、名萬新、稱右筆、八十四歳、仲

○寛政九年 丁巳 七月間

二月二十八日、狩野洞春卒、名美信、上野護國院に葬す○春三田魚籃觀世音開帳○相州江の島辨才天開帳、江戸より詣人多し○四月二十七日、畫人三輪花信齋卒、名は在榮、猿を寫り、河崎の平間寺にも猿を畫きし類ありしが今は見えず、四谷勝興寺に葬す○猿江泉養寺庭中の蓮花、牡丹芍薬に肖て咲く、見物群集せり○六月三日、狂歌師并に、戲作者葛の唐丸卒、葛屋重三郎と云繪草紙や、山谷正法寺に葬す○橘

の異品を弄ぶ事流行、橋品井橋品類考○七月六日、大雷所々に落る○七月十日、中村佛庵景連御疊大工中村彌太夫書を善くすが室その子、宗錫を伴ひ淺草寺觀世音へ詣し時、船中大川の邊にいたりし頃、水面に天満宮の木像を得て、享和元年深川法禪寺に安置す、旭天満宮と稱す

篤庭云、中村彌太夫は好事の趣太申とひとしき者なり、弄ぶ物何によらず、何傳來何人の名稱など、あらぬものをしかいひて、人を欺き虚を語りてほこる癖あり、手は書たれども文才は絶てなし、たゞ虚名を售たるのみ、此天神もさだめて古道具店にて見付たるものなるべし、爰にかく書けるも即ち欺れたるものなり、

○七月二十日、古實者眞野是翁卒、名安通、稱七郎、五十二歳、龜町心法寺に葬す○十月町火消人足の内、始て二百七十四人の頭取を命ぜらる○十月二十二日、藤堂家御藩邸向、佐久間町のこなやより出火、薬研堀の邊より大川を越、深川六間堀八名川町へ飛、海邊新田木場迄焼亡○十一月二十

尊開帳なり、银杏の木の中にこめ、桐油合羽をもて盧舎那佛を作る、らほつは蜜柑籠、白毫は銅だらひ指の爪はすげ笠にて有しと覺ゆ、合羽大佛略縁起を芝全交作れり、捧腹すべき文なり、其頃深川洲崎辨天境内にて、遠目鏡にて此の造り物を見せたるは、目がねの中に作りものありしなるべし、鯨は品川獵師其沖にて突留めたり、脊通り長さ九間一尺、高さ六尺八寸、色は青く黒かりしが、次第に黒くなれり、

○六月二十三日、醫師人見平良卒、本所本法寺中本妙院に葬す○六月二十三日、畫人梅里山人卒、名西、御瓦師なり、中の郷成就寺に葬す○七月より、深川新大橋の向に穀藏を建らる、此所の町家牛込肴町の邊にて代地を下し給ふ、今の牛込岩戸町也○九月一日、儒師吉田篁歐卒、六十八歳、谷中大雄寺に葬す○九月十一日、狩野永賢泰信卒○十月二十八日、茶人守屋宗屋卒、號月庵、西門に葬す○【無補】十月二十八日晝、青山淺河町より出火○十月二十九日、初夜過る頃より星多く飛んで、夜

二日、武器古實者柳原香山卒、名長俊、稱一學、谷中天王寺中了儀寺に葬す○【無補】十一月二十二日夜、佐久間町三丁目家主治兵衛宅より出火、同二十八日巢鴨原町より出火、十一町餘焼失す○【同補】十二月四日、山谷町より出火、同十三日内藤新宿出火、女郎屋多く焼失○十二月十八日、醫師宇田川玄隨卒、名賢、號槐園、醫頭寺中長安院に葬、男を玄眞と云○十二月二十一日、俳人妍齋津富卒、六十七歳、今戸慶養寺に葬す○東海道名所圖會六冊梓行、名家合畫○和漢年契一卷梓行、播州の人高祖著、大本小漢年代覽要一卷を梓行す、

寛政十年 戊午

改曆頒行、寛政曆と號○二月十九日、俳人小菅寶馬卒一日に五十句興行し五千堂と號、七十二歳にて終る、駒込徳性寺に葬す○【只補】三月十七日、四谷天龍寺門前より出火○四月金彫工大森英秀卒、六十九歳、高瀬の彫物人に賞せらる○【只補】四月大根畑取拂○五月朔日、品川沖より鯨上る、長九間一尺高一丈餘あり、此頃何れの寺の本尊にや、高輪如来寺に開帳ありし時、境内山の上に笠籠を以て大佛の像を造り、桐油にて包みたり、海上より遙に見えたりとぞ篤庭云、此作り物のしるし様わろし、品川海晏寺本

半ばかりに至りては、空の氣色一面に雪の降るが如く見えし也○十一月三日、夜星の飛ぶ事前の如し○【只補】十一月十二日、新大橋向深川富橋町に敵討あり、南塗師町權三郎店、山崎彦作後家みき、四十同人娘はる、七十外一人深川森下町吉兵衛店手跡指南平井仙柳、六十敵は寄合神保左京家來崎山平内、三十手疵はみき二所、はる六所、仙柳三所、平内七所○儒師岳麻谷卒、名之浩、稱大竹榮藏七十七歳、聲云、正月廿七日歿○十二月十二日、狂歌師朱樂菅江卒、六十一歳、稱山崎郷介、牛込二十騎町に住、青山曹源寺に葬す、辭世、執着の心や薬染に残るらん吉野の櫻更科の月

寛政十一年 己未

正月廿九日、三河町一丁目より出火、神田邊町屋焼亡す、此後鎌倉河岸町屋を十間通り繰下げに成る、同所河岸往還廣がる○二月十五日より、三圍稻荷開帳、奉納物品々あり、日本橋白木屋より天竺紙にて張たる牛、黒木賣の木偶を收む、開帳の飾物に美をつくすの始なり、参詣人群集することおびただ○聖堂御再建、境内廣がりて大慶落(成の字)す○湯島鳳閣寺、富山修驗願頭、青山久保町へ移る、湯島にありし龜有町、桃町へ代地を給はけしも此時なり○【只補】三月十

日、麻布新屋敷より出火○三月役行者千百年忌、勅して神變大菩薩の號を賜る○靈巖島埋立地に蝦夷地産物會所建、至○夏寺島村法泉寺鬻不動尊開帳○五月四日より、谷原村長命寺といふ山内讓木の瘤人の面に顯はる、見物多し○七月六日、夜大雷、子刻より大雹降○六月十九日、儒師佐久間文示卒、名維章、青山玉○八月青山海藏寺檀家、和泉屋權右衛門が家に一比丘尼あり、刑罪の首級六百を得て、當寺に葬り供養の塚を建る瑪庭云、土俗に刑餘の首を求め、祈願をなして之を葬り形ふ者のあるは、此の時より起れるなるべし○十一月十九日、夜四ツ時頃より大雨大雷、數か所へ落る、

寛政十二年 庚申 四月間

正月二十六日、夜谷中いろは茶屋より出火、近邊寺院多く焼る○二月廿三日、亥半刻田圃龍泉寺町より出火、吉原京町へ飛、廓中焼亡、假宅、田町、聖天町、山之宿、瓦町、新島越、山谷町、横山町○七月朔日より、護國寺にて秩父三十四番觀世音開帳、○四月廿九日、關其寧卒、六十八歳、稱源藏、思恭の養子也、小日向兩名寺に葬す○閏四

月七日、俳人山内花縣卒、六十五歳、春秋齋と號す○五月十一日、官儒服部栗齋卒、五十五歳、名保命、稱善藏○銀座常是、銀座町より蝸壳町へ移る○九月十二日、唄うたひ湖出市十郎死、谷中妙福寺に葬す○十月六日、金雕工菊岡氏祖光行卒、五十一歳○【筠補】十月九日、奥州仙臺の者徳力貫藏、八歳、淺草御藏前片町にて敵討あり○同月廿五日、書家佐久間東川卒、名茂之、本所法恩寺に葬す○十二月廿七日、書家稻葉華溪卒、五十五歳、淺草西福寺に葬す○江戸往古圖說成、寫本、大橋○今年富士山へ女人の參詣ゆるす、瑪庭云、當年庚申六十年目に付、富士山へ女の參詣を許すと云ふ○浮世繪類考成、寫本一卷、山東京傳者、証や邦教追考をあらはす、増補して三卷とす、抑浮世繪は大津又兵衛、英一、宮川長春等を始祖とし、江戸に名人多し、又天明寛政の頃より、劇人劇人の上手出て、巧を盡し、次第に美麗の物出来て、方物の第一とな○瑪庭云、浮世繪類考は、又浮世繪始末といふものは、本銀町總括屋新七がしるせるなり、それを附録にして、香花園が跋を書るは、庚申の中夏とあり、山東京傳その追考を書たるは、享和二年壬戌冬十月なり、浮世繪類考追考といへり

寛政年間記事

毎月晦日上野兩大師遷座の時、參詣群集する事、寛政の頃より始めり○此時代名家△儒家 山本北山、龜

田鵬齋、細井平洲、服部栗齋、柴野栗山、古賀精里、新井白峨、馬術に△畫家 高嵩谷、谷文晁、董九如、長谷川雪嶺、鈴木芙蓉、森蘭齋△狂歌師 唐衣橋洲、尙左堂俊滿、又浮世繪、かふくす狂歌堂眞顔、六樹園飯盛、蜀山人、芍藥亭長根△浮世繪師 鳥文齋榮之、勝川春好、同春英、九歳東洲齋寫樂、喜多川哥麿、北尾重政、同政演、京、傳、同政美、寫窪俊滿、尙古堂と號、狂歌の摺物讀本等、寫窪俊滿、狂歌師なり、多く書て行はる、歌舞妓堂艶鏡、榮松齋長喜、蘭徳齋春童、田中益信、古川三蝶、堤等琳、金長、

筠庭云、儒家には市河寛齋、葛飾健藏、柏木如亭、佐藤捨藏、尾藤良助、歴々たる名家なほ多かり、△狂歌には三陀羅法師、淺草庵市人、二世桑揚庵干則又多し△俊滿は只職人をよくつかひて、詠への摺物を請取て、巧者に注文したるものなり、政演も畫は自分には其志あるまでにて、書ことはならず、大方代筆をたのめり、俊滿は左手にて手は達者にかきたり、よきにはあらず△北齋は畫風癖あれども、其

徒のつはものなり、政美は薙髮して、狩野の姓を受けて紹眞と名乗る、これは彼等が窩嶋を出て一風をなす、上手とすべし、語りて云、北齋はとかく人の眞似をなす、何でも己が始めたることなしといへり、是は略畫式を蕙齋が著して後、北齋漫畫をかき、又紹眞が江戸一覽圖を工夫せしかば、東海道一覽の圖を錦繪にしたらしなどいへるなり、○すべて狂歌或名弘の摺物に、劇人刷工の巧を盡し、花麗を極る事、此時代より盛なり○曳尾庵の我衣に、蘭學醫の始祖とせるは、中川須庵志深かりしかど、果さず、其後奥平侯の侍醫前野良澤號蘭に半ひらけたり、其門人杉田元伯、宇田川玄隨、瑪庭云、宇田川は後の玄眞其男も、玄隨は漢學も、桂川甫周、大槻玄澤に長じたれども、玄隨は漢學も、桂川甫周、大槻玄澤に長じたれども、玄隨は漢學も、桂川甫周、大槻玄澤に長じたれどもして此道なれりといへり○淺草寺隨神門前の茶店難波屋のおきた、藥研堀同高島のおひさ、芝神明前同菊本のおはん、この三人美女の聞え有て、陰晴をいとはず此店に憩ふ人引もきらず、瑪庭云、隨神門前は見物の人、み合て、年の市の群集に似たり、お

享和二年 壬戌

二月廿五日、菅神九百年御忌○糺町平河天満宮開帳
 ○二月廿八日より、柏木村圓照寺薬師如来開帳○二
 月より四月に至り風邪流行、賤民へ御救米錢を下し
 給ふ、俗にお七風と云、八百屋お七の小唄はやりし故也○瑪庭云、小唄にあらざり、田舎風なる歌なり、くわりのいひたてを、手を打ちつ、つ句きりして、いふを、小兒が真似たるなり○三月八日より、木下川薬師如来開
 帳○同十日より、根津社地に在る所の上野尾天神開帳
 ○同十五日より、目黒祐天寺本尊開帳、靈寶を拜せし
 む○三月廿日、笠間巨山卒、道場橋の側に住せり、小川破笠が、門人半山が又弟子にして、俳諧を、好み畫をもよくす、今、年六十七歳にて終る○四月朔日より、澁谷金王八幡宮開
 帳○五月十八日、富本延壽齋死、寺に葬す○五月木の
 元才莊といふ人、焼繪を再興し會席を設く、燒繪は、ちい、て畫くなり、濃淡自在にして筆をもて畫るが如く、昔もありける伎を、ふたたび起したる由也、めづらしきも、へも、燒繪のやきえつ、絶しな、おこすわざ、たえなる、資短といへる人のすまびなりし、此才莊は風、流の人に、手跡もよくし萬の細工をなせり、根津の鷺鷥都鳥など、へ、一弦の琴を弾すさびて、あそびける、い、わくに思はしやらふ、又、板琴をきひて、も、ならぬ、一筋、才莊、一弦の琴は、い、にしへ、行平、朝臣、須磨にて作りはじめ、あそび給ひしと、すまごとい、名付、たるを、河内國金剛輪寺覺摩律師その秘曲を傳へし、連、この、雙に、授ら、れしよし也、才莊はおのれが父の友にして、文化の半途六十餘歳にし

享和三年 癸亥 正月間

て存在せしが終りを知らず、燒繪は今に此伎をなすものあり、近世は、鐵筆と號せり○瑪庭云、後文政頃白紙といふ者、燒畫をなしたり、其後、桐の箱にやき畫したる○六月霖雨、七月に至り本所深川
 邊洪水、所々橋落る、大川は兩國橋のみ通、行成る、武州權現堂堤切といふ○七月十八日、狂歌
 師唐衣橋洲卒、助、一ツ木淨土寺に葬す○七月廿三日、畫工
 董九如卒、號廣川居士、淡、草法齋寺に葬す○八月十二日、儒師高原子行
 卒、名流、橋林八、高、田寶泉寺に葬す○九月廿四日、小石川白山權現祭禮、
 産子町々出し練物出る、其後久し○十一月十九日、夜六
 時過より牛込邊燒亡○十二月五日、深夜より駒込出
 火、夜明に至る迄燒る○【只補】十二月十四十五日、富
 岡八幡市始る○同十一日、根津門前茶屋町燒亡○賤
 のをだまき成、寫本一冊、森山某の筆記にて、延享寛延以來江戸の、めし賤の緒たまき、かきつ、めて昔を今に残す言の葉
 閏正月、攝州東生郡九條村より白雉を獻ず○二月儒
 師岳東海卒、六十九歳、名、融、稱太仲○三月四日、暮六時過大地震○
 三月より、淺草玉泉寺にて、相州星降山妙純寺祖師開
 帳○【只補】三月廿四日、小石川妙清寺門前出火、○四

月より六月に至り、麻疹流行人多く死す、瑪庭云、此節落、端からはし、一面にはやるは、醫者とあんなげん、は、し、珍しかりし故人死も多かり、其後は往々ありて死するものなし○五
 月五日、黄昏西より東へ一筋の赤雲横たはる○五月
 廿八日より、下谷稻荷開帳○同日より、淺草寺中梅園
 院にて相州大山麓龍泉寺子安觀世音開帳○六月初日
 より、回向院にて、鶴木光明寺雷留觀世音開帳○同日
 より、淺草傳法院にて、信州善光寺如来開帳、光寺開帳不、當り、開帳の御手の糸こそ、狂ふら、めあたりは、つれば、なきと、聞しが○同十日より、卅日の間、本
 所一ツ目辨才天開帳○六月十一日、心學者中澤道二
 卒、七十九歳、深川、江妙壽寺に葬す○六月廿九日、國學者大塚嘉樹卒、一、即右衛門、號蒼梧、七十、三歳、淺草本覺寺に葬す○詩人永原左琴卒、八十三歳、名件與、長專院、に葬す○【只補】富夏、兩國川花火船あやまちて火を落
 し、載たる花火のこらず火移りければ、人々皆河に入
 てにげたり、其内花火玉屋が倅も俱に水に入しが溺
 れ死たり、淺草寺奥山に唐かねの地藏の船にのりた
 るがあるは、これが弔らひ供養に建たるなりとぞ、
 玉やふる花火のしかけしくじりてからくり前に水くるとは

○七月高嵩溪信宜、猩々舞の圖を畫く、淺草觀音堂の
 外陣に掲ぐ○七月朔日より、淺草寺中金藏院にて、相
 馬大圓寺釋迦如来開帳○同日より、永代寺にて、常陸
 國阿波大杉大明神開帳○七月より、東本願寺にて、水
 戸磐船願入寺如信上人像開帳、寶物多し○七月初日
 より、淺草寺内正福院にて、越後頸城郡居多社大國主
 像開帳、宗居庵日の丸の、名號を拜せしむ○八月柳原堤の側に秘藏を建ら
 る○八月谷中延命院住持日道、僧律を犯し嚴科に處
 せられしと聞えし、瑪庭云、延命院は、七面の四方、八面尻が、われ、くめん、違ふて、顔は、じうめん○
 十月初日、伊豆大島燒、二日江戸中灰降○十二月挿花
 の師笠翁齋亂鳥卒、八十八歳、翌年七月門人等淺草奥、山へ碑を立る、千陸大人の文なり○後は
 昔物語成、寫本一卷、手柄岡持、西原後江の、しへ、書て、送れ、る、草紙也、寶曆以來の風俗を、しるす○
 今年二月中旬より、淺草田圃立花候御下藩鎮守、太郎
 稻荷社利生あらたなるよしにて、江戸并近在の老若
 參詣群集する事夥しく、餘り、集しける故、後には、明日、化元年に、いたり、彌繁昌し奉納物山の如く、道路には、酒肆茶店を、列ねて、賑ひしが、一二年にして、自然に止

みたり、其時の草紙一枚繪小唄の本あまたありし、文化元年地一上へり、人畫會の時、繪をわく、願ひかくる、此くんじゆ太郎さまさまへり。

篤庭云、二月頃幕參のついでに行てみるに、いまだ淋しく、唯一人り二人り參詣なりしが、屋敷門前に山伏やうのものもらひ居て、念じ奉る太郎稻荷大明神何とやら唱へたる、いとをかしく思ひたり、社頭はさせる事なき小ほこらにて、いづこの春戸の、稻荷にも、かばかりなるはあまり寂寞たる有様なりしが、其後いよゝはやるにつけて、もとの祠を隠居様とし、太郎いなりは別に社をたつ、もとの祠も建直せしが、いとよく莊ぞんしたり、其時は新堀端本願寺の横手圍ひ込にならざれば、彼稻荷へさして行に、菊屋ばし兩方の堀端通行なりしかば、茶みせ食物店立つらね、供物の白餅そなへは火を打かけて處々に賣る、諸人は一國の人狂せるに似たり、かく盛りなるも衰ふ時あるにやと思はれしなり。

○群書類從板行、六百三十六卷、堀檢校藏板なり、此節より追々に上木成。

○享和年間記事

小金井村の櫻、寛政の頃は詠る人もなかりし由、古松軒が四神地名録に記したりしが、享和の頃より騷人墨客多く集ひて、毎春遊觀の所となれり、道しるべの冊刊行、

き、渡る天の河原、さく花の雪の中ゆく水のひとすぢ 千 隆

篤庭云、杉田の梅見に騷人の出るも同じ頃によ、煎茶の會行る○山東京傳、曲亭馬琴が讀本草紙行れて、年々數篇を梓行す、又京大坂より畫入讀本新作あまた梓行して江戸へ下せり、其餘江戸戲作者は式亭三馬、六樹園飯盛、小枝繁、峠山翁又感和亭鬼武、十返舎一九、振鷺亭、談洲樓馬馬、高井蘭山、山東京山、百芍樂亭長根、柳亭種彦、梅暮里谷峨、神屋蓬州、南仙笑楚滿人、東里山人、東西庵南北、其外多し、京大坂作者は、浦兎月、優々館、柳浪、文慶等の編多し、畫者は、石田玉山、同門人二世岡田玉山、青陽齋吾國、一峯齋馬圓、丹羽桃溪、合川珉和、松好齋半兵衛、歌川豐秀、速水春曉齋等、其外數多あり、春曉齋は畫人なれども、自ら著述のよみ本數十部あり、文化にいたり江戸の神史を、京大坂にて歌舞妓の

狂言に仕組む事行はれたり。

篤庭云、よみほん云ふもの、おかしき文章にて、ぬめりたる處は上るりに類し、古語の見ゆるはもと綾岱が西山物語を手本としたるなり、ふつゝかなる横ぐわへといへるたぐひの事多し、但しよみ本は馬琴が作時好にかなへるもの多し、柳亭云、曲亭句傳實々記にてあたりたるより、色情を常に義理づめに作れり、色慾は癡情にてさる事はあらずといへり、これ又柳亭が了簡なり、論ずるに足らず柳亭は看官におもねりて、にくまれぬ事をのみおもへり、草艸紙は京傳まされり、されど喜三二、全交、春町等が尻舞なり、後には年々淨るり狂言の様なる敵討になりたり、是已前より來る年も敵討ばかり作りて居たるものは楚滿人なりしが、遂にみな其事に成たりしかばめづらしからず、柳亭正本仕立といふを作りて、芝居狂言大帳を畫に書たる如き物として行はれたり、實をいは、聊づ、煮た

り焼たりしたる意也、其かみ草艸紙は各々新奇をのべて、喜三二が芝居三臺圖繪、長生見たい記、全交が十四傾城腹の内、鼻の下長物語など、殊に奇作と云ふべし、三馬は少し源内が句調ありて惡まれ口なり、手は達者に書き戲作者には能書なり、これもわれより生みたるはなく、多くは人の眞似をしたり、但し浮世風呂、浮世床などはいとをかし、振鷺亭は清長が弟子にて畫をかきたり、狂人にて趣向具せず、一九はたゞしやらくのものにて人愛敬あり、京傳は罪なくてよしとほめたり、膝栗毛は江戸のみならず、いづくの人にも笑はすよき趣向なり△谷峩などは二筋道のみ作なり、それも初篇は冬と夏にて二筋なるを行はれしゆへ、跡をつぎて文里が事のみになれるは、二筋の道はなくなれり△飯盛を出さば眞顔も出すべし、月の宵鄙物語其餘猶あり、

○江戸浮世繪師は、葛飾北齋辰政、始春明、宗理、群馬亭、後北齋、又爲一と改、

歌川豊國、同豊廣、蹄齋北馬、雷洲、開畫を盈齋北岱、開樓北嵩、後柳北壽、浮繪上手葵岡北溪○北尾蕙齋略畫式と號し、浮世繪の略畫を工夫せし彩色摺の粉本數篇を梓行す○浮世繪師二代の鈴木春信といひしもの、長崎に至り蘭畫を學び、後江戸に歸り世に行はれ、名を司馬江漢と改む、又銅板を日本に草創せるも此人の功也、○此頃迄山水の遠景を畫たる○享和以來、京傳の編る近世奇跡考、骨董集二部の隨筆世に行れしより、此體裁にならひて戲作者各隨筆をあらはす事始れり、然れども京傳の作に並ぶものなく、野鄙なるもの多し、
 篤庭云、さて爰に奇跡骨董の二部行はれてより、此體裁にならひて、戲作者各隨筆を出す云々といへるは、睡餘小錄、還魂紙料、用捨箱などをいへるにや、又云、然れども京傳の作に並ぶものなし云々、いと心得ず、奇跡考は古畫のみならず、新圖を作り入る、此體のもの普通の事に嗚呼たり、口の類多くあり、芝居役者遊女の一枚繪など出したるは、寸錦

雜綴などあり、珍らしき體をしらず、且其說誤り多く殊に不出來なるものなり、又骨董集は自序めくものを後にかけ、初の二冊と次とはこゝろばへかはりたる著述なり、引書には一々書名にわくを入れなどし、これはすべて古圖を出す、中にひふくめにはすべて豊廣が新畫を出す、かやうの事すべて戲作者の臭氣、書物の體裁にあらず、且これにも誤說多し、誰かこれに習ふものあらん、曲亭が燕石雜志、羨雜記などは尤も多し、柳亭が隨筆はかなざうしのみ引て作れるは、ふさはしくして誤りいと少なし、勝れりといふべし、
 ○原舟月雛人形の製を改めて、古今雛と名づけ世に行れり○享和中にや有けん、菊塙といへる人寺島村に花園を設け、四時の花を栽て遊賞の所となせり、奥州の人にして平北江戸に下り、此所に住し天保の始終菊塙始或人名つけて歸空といへり、文字をいみてかく改たりといへり、此梅園をひらきしあくるとし正月園中に小松を栽て子の日の宴を催したるをり、文人つどひきたりし時の歌に、

松も引わかなもつみてけふよりは春のこゝろをおぼえそめけり
 梅さかばつぎてもとはむ此やどの松にひかるいけふばかりか
 鶯のはつれの小松ひく袖にあるじがほにもおもふ梅が
 白 寛 不 白
 あらためてひらくやうめの花やしき

或人の説に、此地の舊名を多賀屋敷といふ、昔豪民多賀三郎兵衛、同角左衛門、同友三郎、同又三郎等の居住たる所なり、其菩提寺は白髭の法泉寺なり
 篤庭云、北平が事もと茶がらを商ひし者なり、初め大門通り横店と稱する處にすみ、それより住吉町裏屋にも居たり、好事者にて書畫をすき、大雅堂贋筆を多くなしたり、文字はなけれども諸名家に立入、なぐささるゝをおのれは得意とし、遂に梅屋敷を思ひつき、諸家に募りて梅樹の料を求め乞ひ、詩を集めて盛音集を板になして人々に呈す、各家に嘲弄されたる文などを、よきことにして驥尾の蠅とならんとす、梅屋敷こゝに於て成就す、其後こゝに道具市を立、素人奢り者ども會合す、果ては金子

の賣買杯に至り、いつも會の終りは、我娘の吉原町遊女屋に稼してあれば、夫が處に諸客を誘ふ、戯れながら道具市不正の聞へありて咎められ、入牢して過料追放さまゝなりき、
 素人道具市盛りなりしは、西河岸の菊且等存在の頃、今の長谷川町の大和菊屋かるといひしもの、伊勢町の家主にて、其宅にて月次會ありし時節、もつぱら行はれたり、彼一件ありて此事すたれたり、
 ○地染手拭行れ、手拭店多く出来る○鼈甲價次第に貴くなり、馬爪にて贖物の櫛笄を製す○蔭繪の戲、昔は黒き紙を切抜、竹串を四ツに割て矢羽の如くにさし、行燈に寫して玉藻の前の姿を九尾の狐に替らし、酒顛童子を鬼にかはらするの類にてありしが、享和中都樂といふ者、エキマン鏡といへる目鏡を種とし、ビイドロへ彩色の繪をかき、自在に働らかするの工夫をなし、寫し繪として見する、是より以來此伎行れて次第に巧みになり、其門葉も多くなれり、此都樂今年嘉永元年七月

十九歳、存生して○山谷町八百屋善四郎が料理行る、深川土橋平清、下谷龍泉寺町の駐春亭、文化年中より盛なり、

篤庭云、料理は米澤町に大坂喜八とかいひしもの評判あり、又會席料理といふ事は、薬研堀に川口忠七と云もの始む、

こゝにはしるさゞれども、食物美に至れる中に、菓子と餅とは殊にすぐれたり、煉羊羹烏羽玉などは紅屋志津麻より起り、餅はおまんずし毛拔ずしなどよかりしも、古風となりしは、深川あたけ松の餅より變じたり、てんぷらにはつ鱈まで用ひしは、木原店の吉兵衛よりはじまる、此中菓子は寛政より餘は其後なり、

○文化元年 甲子 二月十九日改元

【笥補】正月の頃、築地門跡へ京都より百五十人計り來て訴ふ、宗義の事といふ、脇坂侯掛りにて、頭取のもの入牢して事靜る○二月四日より、傳通院内福聚

院大黒天并諸尊開帳○二月十七日、晝四時頃、西南より東北へ白き旗雲出る○三月朔日より、深川八幡宮開帳○同月五日より、洲崎辨才天開帳○三月より護國寺觀世音開帳あり、四月十三日晝人北齋本堂の側に於て、百二十疊敷の繼紙へ半身の達磨を畫く○三月十五日より、回向院にて、目黒祐天寺靈寶開帳○小日向大日、妙足院大日如來開帳○三月十九日、後藤氏十四代桂乘卒、六十○四月十五日より、妻戀稻荷明神開帳○同日より、淺草清水寺觀世音開帳○四月二十日より、三日の間、十一代目中村勘三郎座にて壽狂言興行寛永元年より八十一一年めなり○【笥補】五月十六日、繪本太閤記絶版被三仰付候趣、大坂の板元に被三仰渡、江戸にては太閤記の中より抜出し候分も不殘御取上、右錦繪書たる喜多川歌麿、歌川豊國など手鎖、板元十五貫文過料の由繪雙紙屋へ申渡書付あり、これは其頃豊國大錦繪に、明智本能寺を圍む處、其外色々書て答められしに、繪本太閤記によりたる由を陳言せしかば、畫本太閤記

に災及べるなり、この絶版は惜むべし○六月朔日、夕七時俄に大雨降、霹靂大にして人々魂を飛す、此時音羽歳の女兒を空中へ卷上、○八月四日、俳人素健卒、三十五歳、直日死骸江戸川より上る、○八月二十三日、晝人高嵩谷卒、七十五歳、名一雄、號屠龍、○八月二十五日、玄々一卒、六十三歳、俳諧を好し言人也、俳家奇人談の編あり谷中長久院に葬○八月二十五日、玄々一卒、六十三歳、俳諧を好し言人也、俳家奇人談の編あり谷中長久院に葬○淺草藪の内南部駒の市、毎年ありしが當年より止む、是より後は御領主藩内へ着す○十一月二十二日、晝工佐脇嵩雪卒、名貫多、稱倉次、號中岳堂、淺草寶願寺中稱名○今年諸國豊熟也、

○文化二年 乙丑 八月閏

二月十五日より、根津權現本地十一面觀世音開帳○三月八日より、谷中一乗寺祖師開帳○同十日より、龜戸香取社境内にて、京都西鴨清涼山金毘羅權現開帳○同十二日より、回向院にて、青山善光寺如來開帳○同二十三日より、永代寺にて、玉川明神開帳○同二十八日より、龜戸東覺寺不動尊開帳○二月芝神明宮境内にて、勸進角力ありし時、同十六日八日目興行日、

水引といふ角力取嶋の者と喧嘩に及び、四ツ車一人加勢して大勢を相手にして闘争に及ぶ、此時嶋のもの共し、人集めて向ひたれども、四ツ車長き暗子を奪ひて振回しければ、誰ありてよりつく事ならず、只人家の屋上より瓦を擲るのみ○三月中旬、歌舞妓芝居棧敷にて出産の女あり、芝居主はこれを吉兆として祝ふと云○四月朔日より、南品川海雲寺千體荒神開帳○五月俳師神田庵小知、兩國橋畔の柏戸に於て、八十八齡の賀筵を設く、仙は沈瀟朝霞の氣を吸て長壽し我は

○【補】五月三日、晝家喜多川歌麿卒、五十○六月七月雨なし○六月十九日、生麥村邊の川普請ありし時、人骨出る事夥し、是古戦場の故なるべしとて、中川侯の菩提所なれば、枯骨を淺草幸龍寺へ收め墓を築しに、諸願成就するよし云ふらして、七月より參詣群集する事夥かりし、三月はかりにして○八月七日、篆刻家島冢癖卒、本所法恩、參詣自ら止たり○八月二十七日、儒師神谷東溪卒、六、田南幸龍寺に葬○【笥補】閏八月十八日、淺草第六天門前吉右衛門店七郎兵衛、兩國橋の下にて網を打、脇差の身を引

上げ訴へ出、代料被下、此脇差の銘備前長光と云、九月六日、小田切土佐守符所より、金拾兩被下
 〇【篤補】九月五日、靈岸島長崎町忠左衛門店山下飯之助遠島、同人忰式三郎、同人方に居候弟子三好忠兵衛、江戸拂、其外所拂過料等品々あり、是はもと浪人ものにて、玄關に鎗長刀具足櫃弓鐵砲飾置候事、論會學堂といふ看板を掛け、亂心又は放蕩なる息子を教訓を以て相直し、好人になさんと奇怪をいひ觸れ、自撰の鐘學經と云ふものを板にほり、弟子共によましむ、其間には劍術やはらなども教ゆ、弟子より金子を集め、本湊町に町屋敷を求め、作事して學堂を取立其頃予がしりたるもの、忰も其社中にて、又淺草田原町の袋物屋越川の忰も、そこに居たりとなり〇十月十七日、書畫鑑定河津定迪卒、池の端妙音寺に葬す、平安し人也、睡餘のみにて曳尾庵に食客たり小録の編あり〇十一月深川三十三間堂再建、翌年寅の二月射はじめ〇木曾海道名所圖會梓行、秋里龜島著、西村中和畫〇十二月二十五日、畫人井川雪下園卒、名貞、稱源兵衛、坂本長光寺に葬す〇【篤補】文化二年、月日、去子九月、魯西亞船より送り來る、奥州宮城

郡寒風澤濱長九郎忰水主左平丑四十三歳、同所善三郎忰津太夫同六十三歳、同國桃生郡深谷室濱源三郎忰水主儀平同四十三歳、同所太十郎忰水主太十三十五歳、十三年以前丑十二月二十七日、石の巻湊出船、難風にて漂流一件あり、右口書の中に先年彼地へ漂流致し、去る丑年松前へ送り來り候、生國勢州白子幸太夫と一緒に漂流致し候、同所新藏と申す者のよし、當時は魯西亞の役人と相成、名をニコライバイトルイチと相改め、妻子も有之由云々とあり、

〇文化三年 丙寅

三月より永代寺にて、成田不動尊開帳〇同月より、護國寺にて、河内の國葛井寺十一面觀世音開帳〇三月三日、江戸天火西南より東北へ飛ぶ〇三月四日、晝九ツ時芝車町より出火、坤烈風にして高輪田町の通り、三田薩州家御屋鋪、本芝邊金杉増上寺は、神隔斗神明宮并門前、宇田川町通り左右、出雲町竹川町通、數寄屋橋御門内外木挽町三十間堀材木町、京橋より日本橋迄左右四町

位づ、日本橋北は彌廣がり、常盤橋御門内外室町本町通り、西は鎌倉町より三河町雉子町佐柄木町筋遠橋際迄、東は堀留町新乗物町新材木町に至り、堺町葺屋町并芝居兩座は残る、夫より富澤町橋町邊、横山町馬喰町邊、神田川を越て西は佐久間町松永町和泉橋御徒士町通り、三味線堀廣德寺前、寺町通りより東本願寺裏通迄、東は淺草御門外より新堀通り、元鳥越東本願寺善德寺の邊迄焼亡、此間に包まれたる武家町家一字も残る事なし、翌五日の晝四時にいたりて漸く鎮れり、此時大雨降、類焼凡長貳里半幅平均七町半諸侯藩邸八十三宇、寺院六十六箇寺、名ある神社二十餘ヶ所、町數五百三十餘町と聞ゆ、又焼死溺死千二百餘人といへり、類火にあひし賤民、御救の小屋十五箇所へ建て、こゝに憩はしめ食物を給る、此餘の貧民へも米錢を給はる、此節途中に及物を以て盲人或は物もちひん突ふ、此火災の時の雜説曳尾庵の我衣にくはしくしるせり、

あさ、用事ありて神田の土手下まで行しは、まだ四ツ時分なり、風烈しく塵立ちて、日の色黄ばみたり火事遠く見ゆといへり、されど大路に灰塵吹落るゆへいそぎて歸宅し、中橋上横町へ見舞しに、取片付などもせず居るゆゑ、風つよく筋わろし、緩々物を納められよとすゝめて、濱町までかへりしに、火は増上寺に飛て山内やくると聞て、また横町へ至れば、又とび火有て、はや通り町中通りへ焼來ると云ふ、神速なりしは火の飛故なり、風はますゝはげしく砂利を飛ばし、夕方には火幾ヶ所ともなく淺草の方へ向へり、

江戸中が火燭に成田不動尊ふるはあまくにつくは寶劍

〇四月四日五日六日の間二夜三日、回向院にて此度焼死の輩供養の事を命ぜらる〇四月朔日、儒師古屋昔陽卒、名高、稱十二郎、七十三歳、音羽桂林寺に葬す〇辯秀堂何某辨才天を信じ金光明最勝王經を書寫し、清淨の地へ納んとして上へ置べき石を求しに、はからずして龜の形したる石